岐阜県教育文化財団文化財保護センター
調査報告書　第88集

深渡A地点遺跡

2004
財団法人　岐阜県教育文化財団

序

美濃加茂市は、山々の緑と清らかな水が流れる豊かな環境の中にあります。木曽川、飛騨川がつくり出した河岸段丘には、川とともに生き、この地に住んだ人々の暮らしがありました。古くから交通の要衝として、陸上では中山道の宿場町として、河川では木曽川運材の中継地点として重要な役割を担っていました。

今回実施した深渡A地点遺跡の調査は、県営一般農道整備事業に伴うもので、この道路の建設により、高生産性農業の促進と相まって、農業の近代化と農村環境の改善がいっそう進むものと考えられます。

遺跡の所在する美濃加茂市下米田町は、縄文時代から近世にいたるまでの多くの遺跡が残っている地域です。今回の調査では、中世の屋敷に伴う区画と考えられる片薬研掘りによる溝跡や土坑、近代の暗渠などの人々の生活の跡が確認できました。また、日々の生活において使用した土器・陶磁器類、金属製品、石器・石製品など多彩な遺物も出土しています。当時の人々の交流や流通を解明する上でも貴重な資料となりました。

今後、周辺地域とのかかわりが解明されていく事と思いますが、本報告書が当地の歴史研究の一助になるとともに埋蔵文化財に対する多くの方々の認識を深めるものとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び出土品の整理・報告書作成にあたりまして、多大な御支援・御協力をいただいた関係諸機関並びに関係者各位、美濃加茂市教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝申しあげます。

平成16年3月

財団法人　岐阜県教育文化財団

理事長　日　比　治　男

例　言

1　本書は、美濃加茂市下米田町西脇に所在する深渡Ａ地点遺跡（岐阜県遺跡番号21211-04435）の発掘調査報告書である。

2　本調査は、県営一般農道整備事業（牧野地区）に伴うもので、岐阜県基盤整備部中濃地域可茂農山村整備事務所から岐阜県教育委員会が委託を受けた。発掘調査及び整理作業は財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター（平成14年度までは財団法人岐阜県文化財保護センター）が実施した。

3　発掘調査は、宇野隆夫国際日本文化研究センター教授の指導のもとに、平成14年度に実施した。

4　発掘調査及び整理作業の担当などは、本書第１章第２節に一括掲載した。

5　本書の執筆及び編集は第５章を除き伊藤利巳が行った。

6　発掘調査における作業員雇用、現場管理、掘削などの業務及び空中写真測量は、㈱興栄コンサルタントに委託して行った。

7　遺物の写真撮影は、STUDIO SKY に委託して行った。

8　放射性炭素年代測定、炭化材の樹種同定、赤色顔料分析、花粉分析は㈱パレオ・ラボに委託して行った。その結果は第５章に掲載した。

9　発掘調査及び報告書の作成にあたって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略・五十音順）

泉拓良、可児光生、築樋義信、長屋幸二、藤村俊、松岡千年、間宮瑞夫、
美濃加茂市教育委員会、美濃加茂市都市計画課

10　本文中の方位は、国土座標第Ⅶ系の座標北を示している。

11　土層及び土器類の色調は、小山正忠・竹原秀雄1998『新版　標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。

12　調査記録及び出土遺物は、財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センターで保管している。

目　次

序
例言
第１章　調査の概要……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　発掘調査の経過と調査方法……2
第２章　遺跡の環境……5
　第１節　地理的環境……5
　第２節　歴史的環境……6
　第３節　中屋敷と深渡Ａ地点遺跡……8
第３章　遺構……11
　第１節　基本層序……11
　第２節　遺構の概要……12
　第３節　検出した主要遺構……14
第４章　遺物……39
　第１節　出土遺物の概要……39
　第２節　遺構内出土遺物……39
　第３節　包含層出土遺物……64
第５章　自然科学分析……79
　第１節　放射性炭素年代測定……79
　第２節　花粉化石群集……81
　第３節　山茶碗・岩石付着赤色顔料の蛍光Ｘ線分析……83
　第４節　出土木製品の樹種同定……85
第６章　まとめ・考察……87
参考文献……93
写真図版
報告書抄録

写真図版目次

図版１　調査前風景・調査区遠景・７区、１～３区、４～６区完掘状況
図版２　SD12・15・３・11完掘状況
図版３　SK70・77、ST２・３・４、P111完掘状況、SK74・81遺物出土状況
図版４　暗渠検出状況、暗渠完掘状況、暗渠内集石土坑検出状況、暗渠内遺物出土状況、石列検出状況、柱列状遺構完掘状況、SX１完掘状況
図版５　出土遺物
図版６　溝跡（SD12）出土遺物
図版７　溝跡（SD12）出土遺物
図版８　溝跡（SD12）出土遺物
図版９　暗渠（SD２）出土遺物
図版10　暗渠（SD２）出土遺物
図版11　暗渠（SD２）出土遺物
図版12　出土遺物
図版13　出土遺物
図版14　出土遺物
図版15　出土遺物
図版16　産出した花粉化石

挿図目次

第１図　調査箇所位置図……１
第２図　地区・グリッド設定図……２
第３図　美濃加茂市の河岸段丘分布図……５
第４図　調査地周辺の遺跡地図……７
第５図　調査地周辺の地割り状況図……９
第６図　基本層序……11
第７図　遺構全体図……13
第８図　溝跡実測図(1)……16
第９図　溝跡実測図(2)……17
第10図　溝跡実測図(3)……18
第11図　土坑実測図(1)……22
第12図　土坑実測図(2)……23
第13図　土坑実測図(3)……24
第14図　竪穴状遺構実測図(1)……27
第15図　竪穴状遺構実測図(2)……28
第16図　石列・柵列実測図(1)……30
第17図　柵列実測図(2)……31
第18図　溝跡・暗渠実測図……33
第19図　柱列状遺構実測図……34
第20図　小穴実測図……36
第21図　溝跡（SD12）出土遺物(1)……45
第22図　溝跡（SD12）出土遺物(2)……46
第23図　溝跡（SD12）出土遺物(3)……47
第24図　溝跡（SD12）出土遺物(4)……48
第25図　溝跡（SD12）出土遺物(5)……49
第26図　溝跡出土遺物……50
第27図　土坑出土遺物……53
第28図　竪穴状遺構・石列出土遺物……54
第29図　暗渠出土遺物(1)……59
第30図　暗渠出土遺物(2)……60
第31図　暗渠出土遺物(3)……61
第32図　暗渠出土遺物(4)……62
第33図　暗渠・小穴出土遺物……63
第34図　包含層出土遺物(1)……65
第35図　包含層出土遺物(2)……66
第36図　包含層出土遺物(3)……67
第37図　包含層出土遺物(4)……68
第38図　暗渠（近世）の花粉化石分布図……82
第39図　赤色顔料の蛍光Ｘ線スペクトル……84
第40図　赤色顔料の付着状況……84
第41図　同定された樹種の材組織……86
第42図　器種別土器組成……88
第43図　器種別土器組成（中世）……88
第44図　器種別土器組成（近世）……88
第45図　用途別陶器、磁器組成（中世・近世）…88
第46図　石器・石製品組成……88
第47図　器種別土器出土状況図……91

表目次

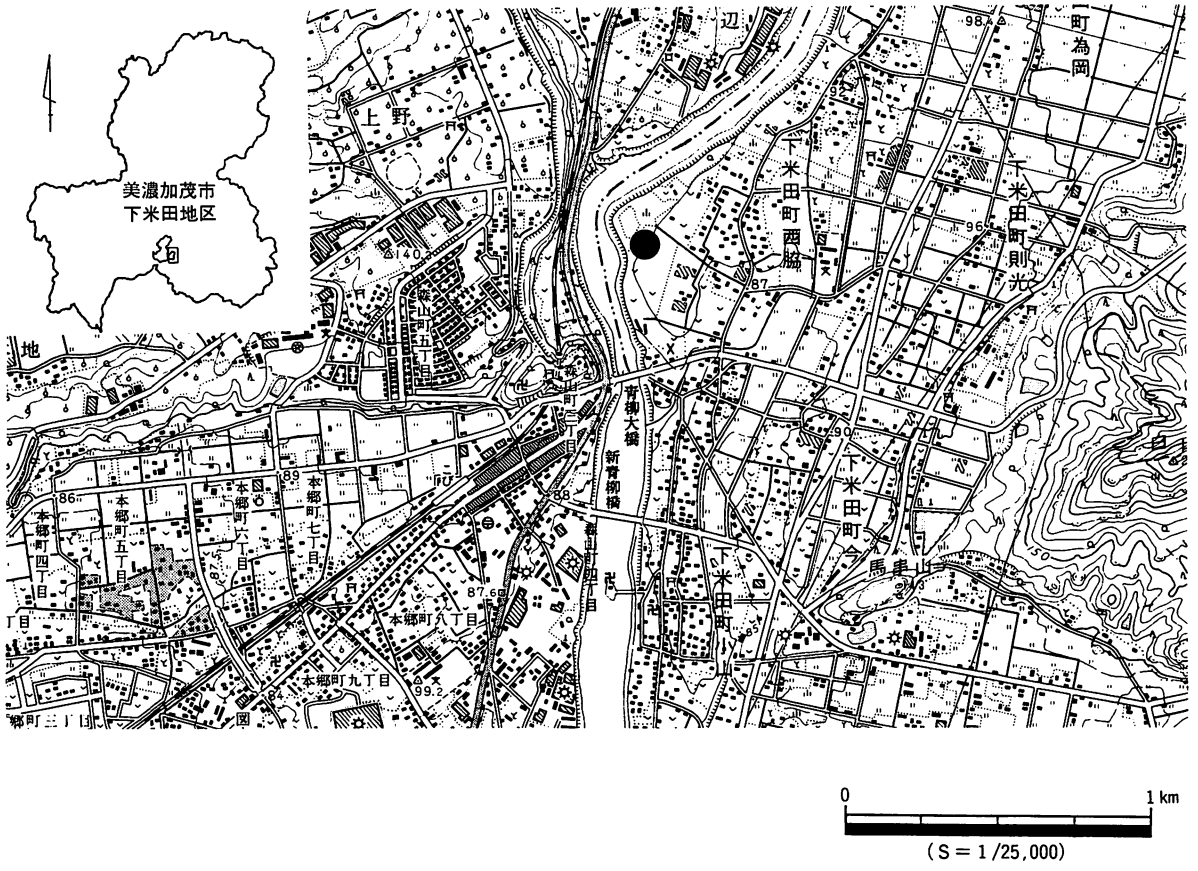
第１表　遺構検出数……12
第２表　溝跡属性一覧表……18
第３表　土坑属性一覧表……25
第４表　小穴属性一覧表(1)……37
第５表　小穴属性一覧表(2)……38
第６表　土器観察表(1)……71
第７表　土器観察表(2)……72
第８表　土器観察表(3)……73
第９表　土器観察表(4)……74
第10表　土器観察表(5)……75
第11表　土器観察表(6)……76
第12表　土製品観察表……76
第13表　石器観察表……77
第14表　有肩扇状石器観察表……77
第15表　磨石観察表……77
第16表　打欠石錘観察表……77
第17表　スクレイパー観察表……77
第18表　打製石斧観察表……77
第19表　砥石観察表……77
第20表　石臼観察表……77
第21表　釘観察表……78
第22表　金属製品観察表……78
第23表　銭貨観察表……78
第24表　放射性炭素年代測定結果……80
第25表　花粉化石産出一覧表……82
第26表　試料の詳細……83
第27表　試料から検出された元素と顔料の種類……84
第28表　深渡Ａ地点遺跡出土木製品樹種……85
第29表　器種別土器組成表……88
第30表　器種別土器組成表（中世）……88
第31表　器種別土器組成表（近世）……88
第32表　用途別陶器、磁器組成表（中世・近世）88
第33表　石器・石製品組成表……88

第１章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

深渡Ａ地点遺跡は、美濃加茂市下米田町西脇に位置する遺跡である。今回の発掘調査は、中濃地域可茂農山村整備事務所による県営一般農道整備事業に伴うものである。中濃地域可茂農山村整備事務所は平成10年度、県営一般農道整備事業に先立ち、工事予定地内の埋蔵文化財の有無及びその取り扱いについて、美濃加茂市教育委員会、岐阜県教育委員会社会教育文化課と協議を行った。道路建設予定地は、周知の埋蔵文化財包含地として岐阜県遺跡地図に記載されている深渡Ａ地点遺跡が所在することから、美濃加茂市教育委員会により範囲確認のための試掘調査が行われた。

その結果、弥生土器、須恵器、山茶碗、中近世陶器などが出土し、なおかつ遺物包含層が確認され、遺構の存在の可能性が高いと判断されたことから、本発掘調査の必要性が改めて指摘され、調査対象面積1,400㎡を平成14年度の調査範囲として確定し、本発掘調査を実施することとなった。



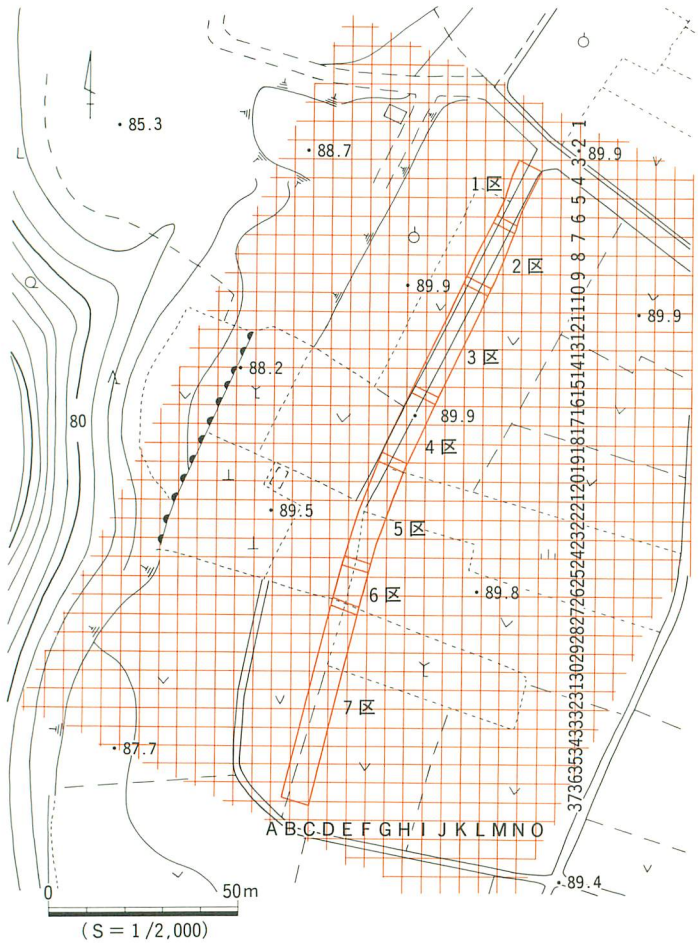
第１図　調査箇所位置図（国土地理院発行１：25,000地形図美濃加茂を使用）

第２節　発掘調査の経過と調査方法

今回の調査は県営一般農道整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査である。農道のため幅7.5ｍ、長さ180ｍの北東方向に緩やかに弧を描く非常に狭長な調査区となった。加えて、地元中屋敷地区の管理する墓地への参道を確保するため、調査区西側に仮設道を敷設した。また地元からの要望により、仮設道から調査区東側の畑地へ渡れるように幅２ｍの土橋を確保する必要があった。そのため、調査区が７地区に分かれ、北から１区、２区、３区……７区と呼称することとした。調査区が狭く、廃土置場を調査区外（北側）に確保したため、調査区の南側から調査を開始した。さらに、作物栽培の関係で５区から調査を開始し、６区、４区、３区、２区、１区、７区の順で調査を行った。

調査地内は国土座標に基づき、座標北を基準にして５ｍ×５ｍのグリッドを設定し、北から南に向かって１～37の算用数字、西から東に向かってＡ～Ｎのアルファベットを付し北西角の杭番号により呼称した。（第３図）

遺構掘削は、溝跡、暗渠、竪穴状遺構、土坑など長軸が１ｍを超えるものについては土層観察用ベルトを残しつつ、遺構の底まで掘り下げ、埋没状況を確認したあと、ベルトを除去して完掘した。これに対して、小穴など長軸が１ｍ未満のものについては半截を行い、柱痕跡の有無や埋没状況を記録した後、残りを掘り下げた。



第２図　地区・グリッド設定図

遺構名は遺構検出時に、調査区名と通し番号で表した。遺構覆土内から現代遺物が出土しない限りこの方式をとったため、最終的に撹乱坑と判断したものや、整理段階で遺構の性格を検討し遺構記号と番号をつけたために、欠番にした遺構名がある。

遺構は完掘状況をラジコンヘリコプターによる空中写真測量（図化縮尺1/50）で図化・記録し、特に礫や遺物を含む遺構、切り合いのある土坑、溝など主要な遺構については出土状況や土層堆積状況などの詳細な情報を主に1/10もしくは1/20の縮尺で手測り実測を行った。それ以外の遺構は、上端の大きさ、遺構の深さと埋土の土色を記録するに留めた。また、遺構検出作業と並行して、遺構配置を検討するための略測作業を行い1/100の縮尺で略測図を作成した。

出土遺物の取り上げ方法は、遺物包含層を人力で除去した際にはグリッド単位で行い、遺構内出土の遺物は原則として覆土の層位別に行った。ただし、個別遺構の情報を図化・記録する場合には極力トータルステーションによる出土位置の記録に努めた。

調査に先立ち平成14年５月14日に遺跡調査の説明会を地元自治会の関係者に対して実施し、遺跡調査に対する理解と啓蒙に努めた。以下、発掘調査日誌から抜粋して、週毎の調査経過を記述する。なお、調査開始の６月10日までに、仮設道の敷設、調査事務所の設置、発掘調査区及び排土置き場やその周囲の除草、表土掘削などの準備を行った。表土掘削はすべて重機で行った。

第１週（６.10～６.14）　５区、人力による包含層掘削及び遺構検出作業を実施。

第２週（６.17～６.21）　柱列状遺構の検出、実測、掘削。

第３週（６.24～６.28）　雨天のため作業はあまり進まず。

第４週（７.２～７.５）　５区溝跡(SD12)掘削、２層上面に集石を検出。６区の表土掘削を実施。

第５週（７.８～７.12）　５区溝跡（SD15）掘削、６区、人力による包含層掘削及び遺構検出作業を実施。

第６週（７.13～７.19）　台風７号接近のため作業はあまり進まず。４区の表土掘削を実施。

第７週（７.22～７.26）　６区溝跡（SD12）掘削。４区人力による包含層掘削及び遺構検出作業を実施。

第８週（７.30～８.２）　６区溝跡（SD12）の底部に集石を検出し、実測。４区では土坑、小穴の掘削を行う。

第９週（８.５～８.９）　６区溝跡（SD12）の集石をはずし遺物の取り上げ。４区溝跡（SD12、SD15）掘削。３区の表土掘削を実施。

第10週（８.12～８.16）　夏季休業。

第11週（８.19～８.23）　４区竪穴状遺構（ST３）を検出、実測し、掘削。４区内の土坑、小穴の掘削を実施。３区人力による包含層掘削及び遺構検出作業を実施。

第12週（８.26～８.30）　遺跡検討委員会を実施し、SD12と暗渠(SD２)の性格を検討する。３区、SD２の実測を行う。４区、倒木痕、土坑、小穴の掘削を行う。

第13週（９.２～９.６）　雨天のため作業はあまり進まず。２区の表土掘削を実施。

第14週（９.９～９.13）　３区、SD２の集石をはずしながら、遺物の取り上げを行う。２区、人力による包含層掘削及び遺構検出作業を実施。国際日本文化研究センター宇野隆夫教授に遺跡の性格、遺跡周辺の環境などを指導していただく。

第15週（９.17～９.20）　２区 SD２の実測を行う。３区 SD２完掘する。

第16週（９.24～９.27）　２区 SD２の実測を行う。３区小穴、土坑の掘削を実施。

第17週（９.30～10.５）　台風21号接近のため作業があまり進まず。２区 SD２の集石をはずす。

第18週（10.７～10.11）　２区SD２の集石をはずし、完掘。溝跡（SD３）を検出。１区の表土掘削の後、人力による包含層掘削及び遺構検出作業を実施。

第19週（10.15～10.18）　１区、小穴、土坑の掘削、SD２の実測。空中写真測量へむけての準備を行う。

第20週（10.21～10.26）　１～６区の空中写真測量を実施。現地説明会へ向けての準備。10.26現地

説明会を開催し、130名の参加をみた。

第21週（10.28～10.31）　2～6区補足調査の実施。7区の表土掘削を実施。

第22週（11.5～11.8）　1区SD2の集石をはずしながら遺物の取り上げ、完掘する。7区人力による包含層掘削及び遺構検出作業を実施。

第23週（11.11～11.15）　7区遺構検出作業、石列（SA1）を検出し、実測を行う。

第24週（11.18～11.22）　7区溝跡（SD12）、土坑、小穴の掘削を行う。

第25週（11.25～11.29）　7区SD12の掘削を行う。底部に集石を検出し、実測を行う。空中写真測量へむけての準備を行う。

第27週（12.2～12.5）　7区の空中写真測量を実施。補足調査の実施。

第28週（12.9～12.13）　現場撤収準備及び調査用具類の搬出。現場事務所の撤去。

整理作業は平成15年度に実施した。出土遺物と調査記録の整理作業を実施し、発掘調査報告書の編集を行った。出土遺物については、洗浄・出土地点注記・接合・復元・実測・写真撮影等を行い、調査記録については、現場で収集したデータや実測図の整合性の検討等を行った。以上の成果は本報告書に収めてある。

本発掘調査から整理作業に至る調査体制は、以下の通りである。

	平成14年度（発掘調査）	平成15年度（整理・報告書作成）
理事長	服部　卓郎	日比　治男
副理事長兼事務局長		高橋　宏之
副理事長		平光　明彦
専務理事兼事務局長	成戸　宏二	
常務理事兼センター所長		福田　安昭
常務理事兼経営部長	福田　安昭	
経営部次長兼経営課長	福田　照行	
経営課長		川瀬　崇敏
調査部長	武藤　貞昭	武藤　貞昭
調査部次長	片桐　隆彦	
担当調査課長	坂東　肇	高木　徳彦
担当調査員	伊藤　利巳	伊藤　利巳

整理作業従事者　岩田のり子　小木曽美智　山口　久子　渡邊　泉

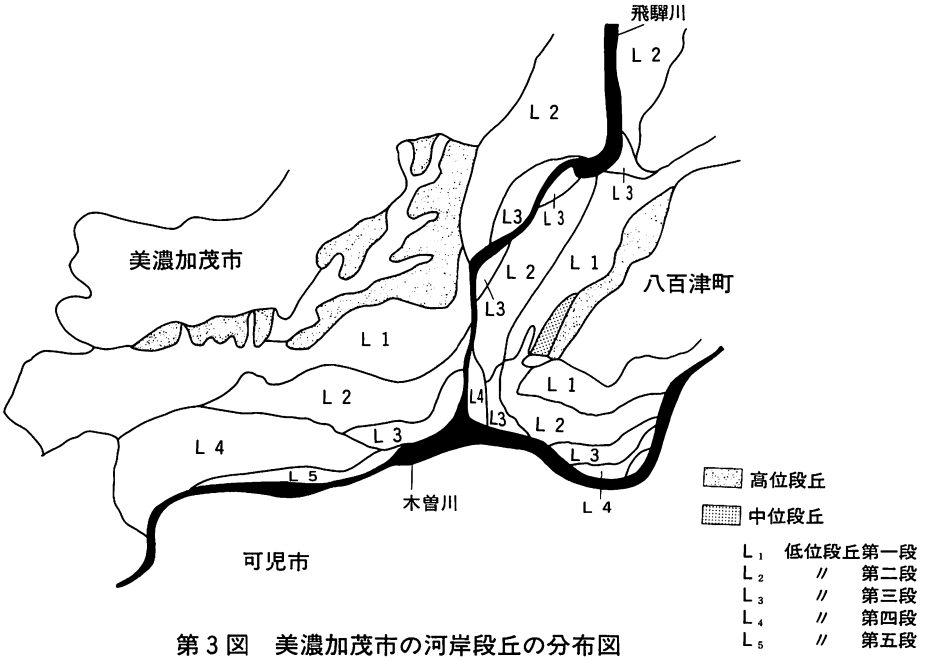
第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

深渡Ａ地点遺跡の所在する美濃加茂市とその周辺の地形は、標高300ｍ～500ｍの北部の山地、標高140ｍ～220ｍの中部丘陵地、そして飛騨川・木曽川が形成した南部の河岸段丘の平坦面に大きく分けることができる。地理的に美濃三河高原の北西寄りに位置し、北東から南西方向に緩やかに傾斜している。

地質的には、北部の伊深地区や三和地区の山地は美濃帯の那比・上麻生及び金山ユニットに属する中古生層（おもにチャート・砂岩・珪質泥岩など）からなっている。中央丘陵地の蜂屋、山之上地区は主に瑞浪層群蜂屋累層と呼ばれる新第三紀中新世の火山堆積物（溶岩・火山砕屑岩・凝灰質砂岩など）からなり、丘陵部の南端部では、同じく新第三紀中新世の瑞浪層群中村累層（礫岩･凝灰質砂岩･シルト岩など）や新第三紀鮮新世の瀬戸層群土岐砂礫層（礫・砂など）が局所的に分布する。南部の平坦面は第四紀更新世以降に、飛騨川・木曽川の堆積と浸食によって形成された河岸段丘からなる。上野地区の高位段丘面は約30万年前につくられ、風化の進んだ赤褐色のクサリ礫層からなる。加茂野地区の中位段丘面は約５万年前までにつくられ、砂岩や礫層、木曽川泥流堆積物からなる。下米田・古井・太田地区の低位段丘面は約３万年前以降に堆積した礫層とわずかの砂層で形成されている。この低位段丘面はさらに５層に細分化できる。

当遺跡は、第四紀更新世以降の飛騨川によって形成された河岸段丘の低位段丘上（Ｌ２面）[1]にあたり、遺跡のすぐ西側は約３ｍの段丘崖（Ｌ３面）[2]となって一段低くなる。最下層の礫層上には飛騨川



第３図　美濃加茂市の河岸段丘の分布図
（『大地の生いたち美濃加茂』（美濃加茂ふるさとフィルムNo５）1994より）

からの堆積層（水磨された円礫：径25㎝～50㎝）が確認できる。この層の上には黒色の砂質土が堆積しており、水捌けが非常に良い事から水田には適さず、畑地等の農作物の栽培に利用されている。これは、段丘の縁辺微高地であり、表土下0.6ｍ～１ｍで礫層に達するという地質条件のためである。

従って、古代から現代に至るまで水田耕作はわずかで畑地及び集落地が相当数占めていたものと考えられる。また、旧道（市道深渡・追上線）の西側では圃場整備が行われておらず、明治期から現在にいたるまで桑畑として利用されていた。現在でも桑の栽培は一部残っている。

注１）第３図より

２）同上

［引用・参考文献］

鹿野勘次他　1994『大地の生い立ち美濃加茂』美濃加茂市教育委員会

1980『美濃加茂市史　通史編』美濃加茂市

1995『市民のための美濃加茂の歴史』美濃加茂市教育委員会

堀正人他　2001『針田遺跡・東坪之内遺跡・田中浦遺跡』㈶岐阜県文化財保護センター

村瀬泰啓　2001『冨田清友遺跡』㈶岐阜県文化財保護センター

齋藤基生他　2002『尾崎遺跡発掘調査報告書』美濃加茂市教育委員会

第２節　歴史的環境

当遺跡が所在する美濃加茂市下米田町は、町全体が遺跡の分布地といって過言ではないほど多くの遺跡が集中するところである。改訂版岐阜県遺跡地図（岐阜県教育委員会1989）には深渡Ａ地点遺跡～深渡Ｄ地点遺跡まで４つの遺跡が掲載されており、総称して深渡遺跡群と称する場合もある。以下、当遺跡が所在する低位段丘上の、発掘調査等により詳細が明らかな遺跡を中心に概観したい。

旧石器時代の遺跡は、低位段丘上では確認されていない。しかし木曽川左岸の可児市宮之脇遺跡や川合遺跡群などではナイフ形石器などの出土が報告されている。

縄文時代の遺跡として、為岡遺跡、則光遺跡、野笹遺跡、牧野小山遺跡、中富遺跡、二ツ塚遺跡、神明遺跡、冨田清友遺跡などが挙げられる。冨田清友遺跡では早期の煙道付炉穴などが確認されている。また、牧野小山遺跡や神明遺跡では中期後半の住居跡が確認されている。

弥生時代の遺跡としては、野笹遺跡、為岡遺跡などが挙げられる。野笹遺跡からは遠賀川式の壺型土器が出土し、為岡遺跡からは14基の方形周溝墓が確認されているが、そのうち10基は弥生時代のものである。

古墳時代の遺跡として、滅失したものを含めて数基の古墳の存在が知られる。なかでも、当遺跡の北東約0.75㎞に所在する稲荷塚古墳は、この地区における中核的存在であると考えられており、この地区を基盤とした豪族の存在が推測される。

古墳時代から古代にかけての集落遺跡として今遺跡、牧野小山遺跡、針田遺跡、宮之脇遺跡、川合遺跡などが挙げられる。今遺跡では古墳時代後期から奈良時代にかけての住居跡を37軒確認している。牧野小山遺跡では４世紀末から９世紀初頭までの住居跡を確認している。針田遺跡では、７世紀後半から９世紀前半の住居跡を49軒確認し、須恵器、土師器のほか多数の製塩土器が出土している。宮之脇遺跡や川合遺跡でも、古墳時代後期から奈良時代にかけての住居跡を多く確認している。

第４図　調査地周辺の遺跡地図（国土地理院発行１：25,000地形図美濃加茂を使用）
（地図中の●は遺跡の位置を示したもので遺跡の範囲を表しているものではない。）

1　深渡Ａ地点遺跡
2　深渡Ｂ地点遺跡
3　深渡Ｃ地点遺跡
4　深渡Ｄ地点遺跡
5　中屋敷古墳
6　針田遺跡
7　東坪之内遺跡
8　田中浦遺跡
9　稲荷塚古墳
10　冨田清友遺跡
11　則光遺跡
12　光徳寺古墳
13　光徳寺北遺跡
14　追上遺跡
15　天満宮遺跡
16　為岡遺跡
17　長福北遺跡
18　長福遺跡
19　長福古墳
20　小山観音北遺跡
21　今遺跡
22　坂下１号古墳
23　坂下２号古墳
24　白山山頂１号古墳
25　白山山頂２号古墳
26　廻間１～２号古墳
27　下牧野古墳
28　牧野小山遺跡
29　岐大農場遺跡
30　川合遺跡
31　川合古墳
32　宮之脇遺跡
33　川合東遺跡
34　川合西１号古墳
35　川合西２号古墳
36　川合川端遺跡
37　赤池１～３号古墳
38　亀淵遺跡
39　野笹遺跡
40　高山代官所下川辺役所跡
41　天池古墳
42　蔵前古墳
43　小陣出遺跡
44　佐口遺跡
45　火塚古墳
46　稲場古墳
47　木ノ下古墳
48　元禅隆寺跡遺跡
49　姫塚古墳
50　二ツ塚遺跡

中世以降の遺跡では為岡遺跡、牧野小山遺跡、野笹遺跡、仲迫間遺跡などがある。為岡遺跡では14世紀の鍛治関係遺構や中世以降と推定する土坑群を確認している。牧野小山遺跡では土坑墓、配石墓を11基、溝による区画が8箇所考えられる[1]。野笹遺跡では敷石を有する溝で、配石による堰と取水溝、掘立柱建物跡3基、方形土坑などが確認されている。しかし、古代までの遺跡や資料が豊富にある一方で、中世以降の発掘調査事例は少なく、今回の調査結果が、中世以降の調査事例の一助になれば幸いである。

注1）小野木学他2002「岐阜県の中世集落」『東海の中世集落を考える』第9回東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会の中で、区画が最低でも8つあり、それらはさらに2条の溝で大きく4つに区画されているとしている。

［引用・参考文献］

村瀬泰啓　2001『冨田清友遺跡』㈶岐阜県文化財保護センター

第3節　中屋敷と深渡A地点遺跡

町の北と西側を飛騨川に、南側を木曽川に、東側を白山によって区切られた下米田町は、前述のように縄文時代から人々の暮らしがあるが、何時の時代も一つのまとまりとして独自の文化圏を形成してきたものと考える。深渡A地点遺跡は『美濃加茂市史』では縄文～弥生・古墳時代の遺跡とされているが、今回の調査ではその当時の遺構は発見できず、中世以降の遺構を多く発見した。本節では下米田町西脇地区周辺を中心に奈良時代以降の問題点を考える。

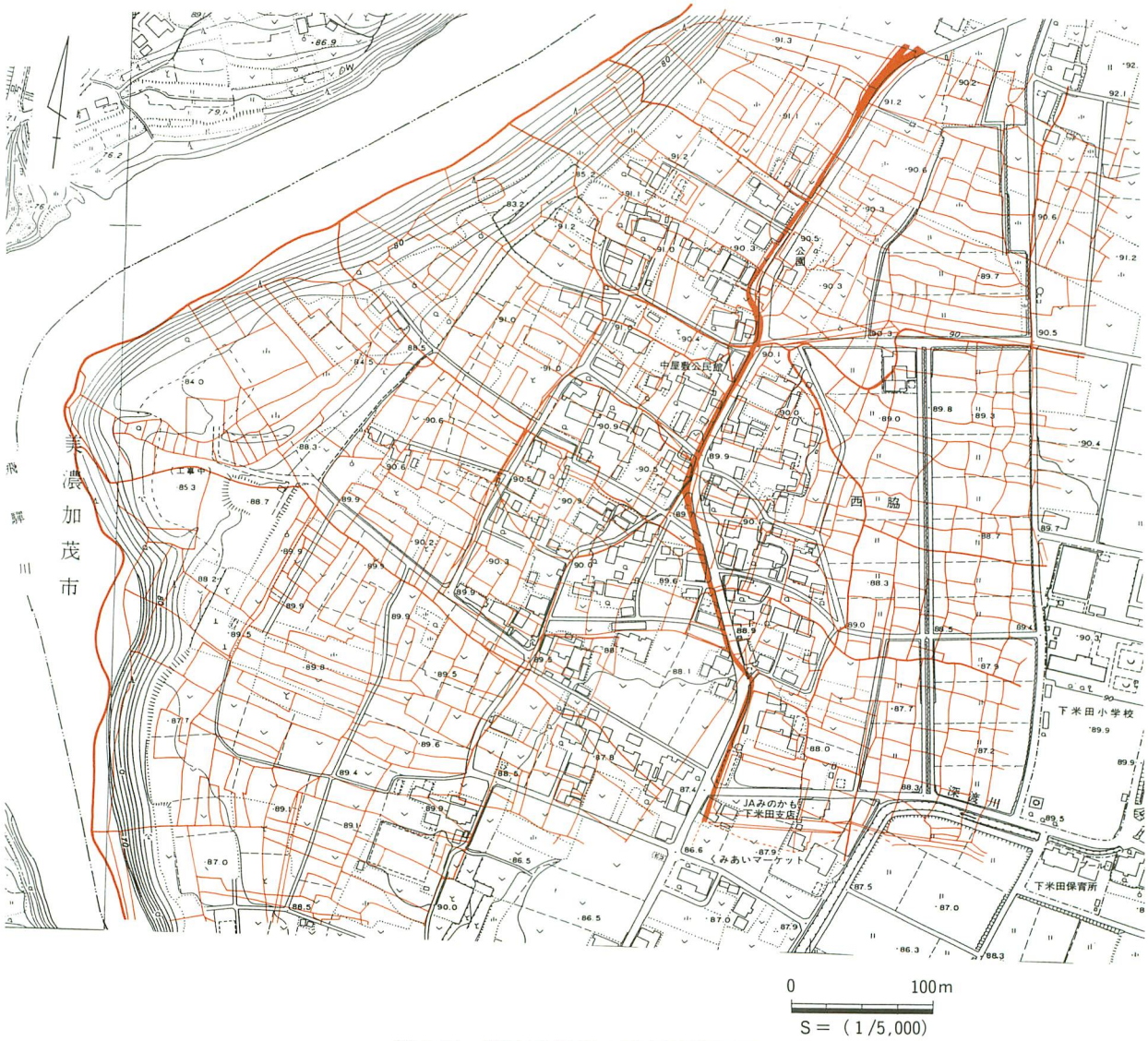
奈良時代については文献資料から同地区の歴史をほとんど知りえないが、『和名類聚抄』によると、加茂郡には「美和、生部、井門、小山、日理、志摩、米田」の各郷名が記載されている。記載順等の矛盾もあるが、おおよそ米田郷、小山郷が下米田、牧野小山に比定される[1]。また、天平勝宝二年(750)4月美濃国司解に、加茂郡小山郷の益羽ら6人の奴婢を東大寺に納進したという記録がある[2]。ここから、奈良時代に小山地区に集落群の存在と、中央とのつながりが考えられる。また、為岡・信友地区には、二反田、七反田、蜂反田の地名が残っており、条里制の跡が考えられる。式内社である中山神社が山本の諏訪神社に比定されている[3]ことから、当地域が古代において、大きな集落群で中央との関わりがあったと考えられる。

当地域には、「信友(のぶとも)」、「為岡(ためおか)」、「則光(のりみつ)」、「今(いま)」のように名からきたと考えられる地名が多い。平安期に郷が名に再編されたものと考える。平安時代に「米田荘」[4]が置かれ、当地域に比定されるが、荘園の領家は不明である。また『土岐累代記』には当地域に「西脇氏」が住していた事が知られている。

山本地内に「若名御前の墓」と伝えられる宝篋印塔があり、南北朝前期のものと考える。修験道場として安如寺（安養寺）の存在が寛文6年（1666）の鐘銘によって知る事ができる。

『濃飛両国通史』によると西脇は米田嶋の西端に立地する事からその名がついたとされるが、近世に入り、幕府直轄領となり、美濃国奉行大久保長安により支配され、後、元和元年(1615)、尾張藩付家老今尾竹腰の知行地となる。『正保郷帳』によると田178石、畑252石、山3石、人口265人であった。小字に深渡、清水、廣末、中屋敷、坪ノ内、田中前、田中浦、針田、西桜貝戸、東桜貝戸、宗軒、中田、橋上、橋下とあり、当遺跡は廣末に属する。

今渡ダム建設以前の飛騨川は遠浅で、渇水期は歩いてでも渡ることが可能だったようである[5]。当遺跡の西側には「大砂場」[6]と呼ばれる上流からの土砂が堆積する場所がかつてあった。また、当遺跡の



第５図　調査地周辺の地割り状況図

北側には「米出し場」[7]と呼ばれる所があり、飛騨川で舟が遡上できる最上流ではなかったかと思われる。ここから年貢米が舟で笠松・桑名まで送られ、その帰り舟に、様々な生活用品が太田宿、川合あたりまで運ばれたものと考える。

当遺跡が所在する廣末、中屋敷地区の明治時代に作成された地籍図がある。この地籍図は1／1,000の縮尺で字毎に分割して作成されており、そのまま繋ぎ合わせると歪みが大きくなるため、都市計画図を参照して全体図を復元し作成した。（第５図）

明治時代の土地利用の状況を見ると、当遺跡周辺はほとんど畑地であり、飛騨川に沿って、一段段丘が低くなった部分は林となる。段丘崖の湧水部分に水田がわずかにみられるが、多くは旧道（市道深渡・追上線）より東側の土地の人が言う「米田の沖」[8]にみられる。旧道の西側は河岸段丘の縁辺微高地となり、畑地が広がる。この縁辺微高地は砂質で非常に水捌けが良く、建物を建てるのに適しているため、古い時代から集落として開発が行われてきたものと考える。なお、周辺の東栃井、橋下、橋上、桜貝戸の集落も同じ河岸段丘の縁辺微高地上にある。

今回の発掘調査では中世の屋敷跡は明らかにできなかったが、当遺跡の北側に中屋敷と呼ばれる字名があり、土地利用の状況からも集落地であったことがわかる。また前述のようにこの中屋敷地区の北東500ｍに稲荷塚古墳があり、当地内にも中屋敷古墳が存在することから、中屋敷地区が西脇村の中心部として、多くの人の居住域であったと考えられる。中屋敷古墳の西側に半円形の人工的な土地区画があり、ここが、中屋敷の名の由来となる屋敷があった場所ではないかと考える。大きさは東西120ｍ、南北125ｍである。本来屋敷は方形四方が多く、屋敷地が曲線になるには地形的な制約が考えられるが、平地である中屋敷ではその制約が考えられず、屋敷主の奇抜な発想があったものと考える[9]。そしてこの屋敷の南側と南東側に屋敷森に囲まれた屋敷が数軒あり、また地籍図の区画と土地利用状況からかつて屋敷として利用されていたと考えられる区画が10ヶ所以上あることがわかる。当遺跡のある「廣末」も縁起の良い地名であり、中世の名主の屋敷または土地に相当する場所であることが多い[10]。このことから、中世の時代にこの地域で、集村型の開発が行われたものと考える。

注1）『美濃加茂市史通史編』では、小山郷はヲヤマと呼び、『濃飛両国通史』には今の山之上をあてている。地名辞書には坂祝かとある。志摩郷は地名辞書に下米田の小山（こやま）をあてているなど、諸説があり、各郷の所在地は確定していない。

2）『美濃加茂市史通史編』によると、小山郷の上連稲実（かみのむらじいなみ）から「稲700束」で買われ、東大寺に寄進されたとあるが、その後の記録はない。

3）『延喜式神名帳』（927）に加茂郡九座として県主神社、坂祝神社、大山神社、太部神社、阿夫志奈神社、神田神社、佐久太神社、多為神社、中山神社が列記してある。

4）『中右記』の承徳元年（1097）年に「美乃国米田庄住人」と出てくるのが最初である。

5）松田典夫他　1979『今遺跡発掘調査報告書』美濃加茂市教育委員会。

6）高島博他　1986『写真集・美濃加茂』内の昭和13年頃の森山から望む下米田の写真。

7）『美濃加茂市史通史編』によると、年貢米は村の中心に近い場所にある郷蔵に納められ、厳重に管理される。そして近くの川岸に運び、桑名経由で名古屋へ運んだ。米を湊から積み出すことを津出しといい、西脇、則光、信友、今の各村は西脇湊から津出しを行っていた。

8）松田典夫他　1979『今遺跡発掘調査報告書』美濃加茂市教育委員会。

9）国際日本文化研究センター宇野隆夫教授より指導を受けた。

10）当センター小野木学から助言を受けた。

［引用・参考文献］

松田典夫他　1979『今遺跡発掘調査報告書』美濃加茂市教育委員会

堀正人他　2001『針田遺跡・東坪之内遺跡・田中浦遺跡』（財）岐阜県文化財保護センター

鹿野勘次他　1980『美濃加茂市史　通史編』美濃加茂市

1995『市民のための美濃加茂の歴史』美濃加茂市教育委員会

第３章　遺　　構

第１節　基本層序

当遺跡は飛驒川が形成する河岸段丘上に位置し、畑地として利用されているため、後世の撹乱の跡も見られるが、層序は比較的安定して堆積している。調査区内は１区北端から南に向かって緩傾斜地となっている。最も高い２区で標高89.9ｍを測り、最も低い７区で標高89.0ｍを測る。基本的に３層に分層し、Ⅰ層を表土(耕作土)、Ⅱ層を遺物包含層、Ⅲ層を地山と解釈した。なお、調査に入るまでは、調査区の中央に幅３ｍの無舗装の道路が５区まで続き、その両側は畑地として利用され、一部桑畑があった。５・６区の西側は墓地と墓地の駐車場である。以下にその状況を概述する。

Ⅰ層：黒褐色砂質土（10YR3/2）

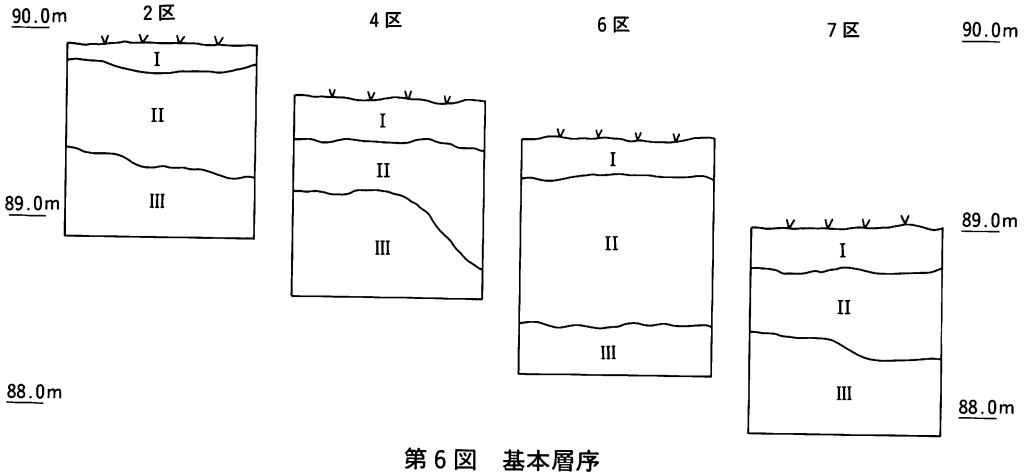
現代の畑の耕作土。調査区の全面に20cm～30cm堆積する。やや粘性はあるが、しまりはない。礫は、径１cm～５cmの円礫を全体に少し含む。北側の１、２区では径10cmほどの円礫も含まれる。炭化物や植物の根が含まれる。縄文時代から現代にかけての遺物を含む。

Ⅱ層：オリーブ褐色砂質土（2.5Y4/3）

調査区の全面に30cm～80cm堆積する。粘性はほとんどなく、所々に粘性の含まれた土がある。黒褐色砂質土や黄褐色砂質土が所々に混じったり、ブロック状に含まれたりする。全体的にしまりがない。礫は径１cm～５cmの小円礫を含む部分もある。縄文時代から現代にかけての遺物を含み、遺物包含層と考える。

Ⅲ層：黄褐色砂質土（2.5Y5/4）

調査区の全面に20cm以上堆積し、段丘堆積物の堆積層である。粘性はあまりないもののよくしまっている。遺物は確認できず、地山層と考える。なお、この地山層を１ｍ程掘り下げると径10cm～30cmの人頭大円礫を多く含む礫層となる。飛驒川の段丘堆積物と考える。



第６図　基本層序

第2節　遺構の概要

今回の調査で確認した遺構面は1面で、検出した遺構はいずれもIII層上面から掘り込まれている。遺物などから縄文時代から近代・現代まで各時期の遺構が存在していると考えるが、明確に縄文時代と断定できる遺構がなく、また、層位的に時期を区別することが困難なため、時期判定については出土遺物や遺構の切り合い関係を考慮して行った。そのため帰属時期の不明な遺構も多数存在する[1)]。

検出した遺構は、中近世・近代が主体となる。遺構の種類の内訳は柵列・石列5箇所・溝跡33条・土坑87基・竪穴状遺構4箇所・小穴201基・性格不明遺構1箇所である。(第1表)

なお、遺構名は整理段階で遺構の性格を検討し、遺構の種類ごとに下記の記号と番号を用いた。

SA（柵列・石列）……小穴あるいは土坑が一列に規則的に並ぶものと、人為的に組まれた石の列。

SD（溝跡）……細長い形状を持つもの。

SK（土坑）……小穴以外の穴で、径0.5m以上のもの。

ST（竪穴状遺構）……周囲より少し掘り窪められた、方形状の遺構。柱穴を伴わない。

SX（性格不明遺構）……形態が特殊なもの。

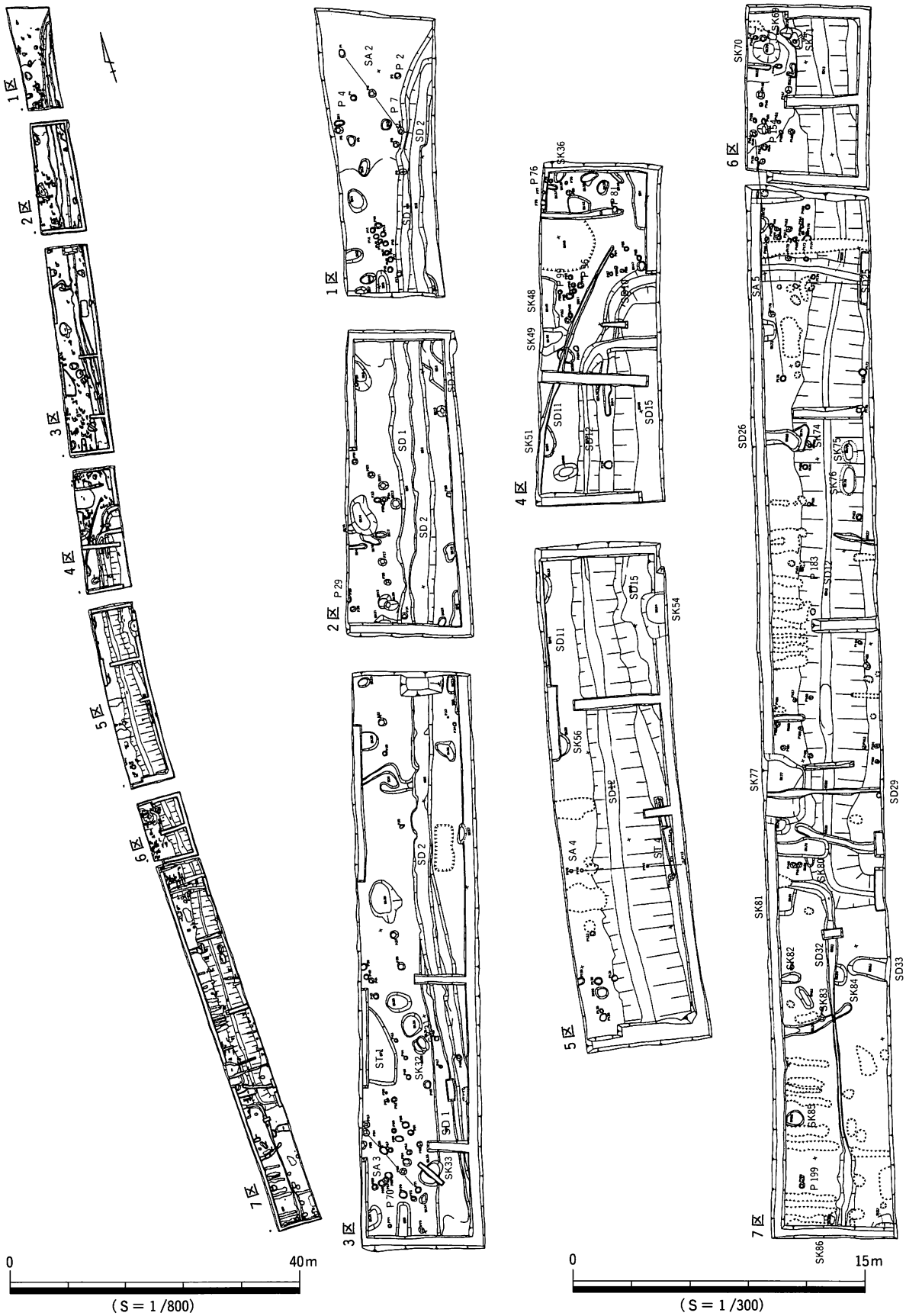
P（小穴）……径0.5m未満で平面はほぼ円か楕円を呈する穴。

注1）当遺跡では、大半の遺構において、埋土は黒褐色の砂質土であり、年代による差異は見られなかった。そのため、遺構年代の推定にあたっては遺構埋土を手がかりとすることは、一部を除いてできなかった。

第1表　遺構検出数

種別	1区	2区	3区	4区	5区	6区	7区	合計遺構数
SA	1	0	0	1	1	0	2	5
SD	3	5	6	9	9	3	11	46
SK	8	14	13	17	16	3	16	87
ST	0	0	2	1	1	0	0	4
SX	0	0	0	0	0	0	1	1
P	19	12	44	35	31	18	42	201
合計	31	31	65	63	58	24	72	344

注）SDは調査区によって重複しているものもある。


1区
2区
3区
4区
5区
6区
7区
SA 2
SA 3
SA 4
SA 5
SD 1
SD 2
SD11
SD12
SD15
SD26
SD29
SD32
SD33
SK32
SK33
SK36
SK48
SK49
SK51
SK54
SK56
SK70
SK74
SK75
SK76
SK77
SK80
SK81
SK82
SK83
SK84
SK85
SK86
P 29
P 76
P 183
P 199
0
40m
(S＝1/800)
0
15m
(S＝1/300)

第７図　遺構全体図

第3節　検出した主要遺構

検出した遺構のうち特に遺跡の性格を端的に示すものを抽出し、以下に種類別に述べる。なお遺構の長軸長・短軸長は検出した掘形の上端値、最大深度は検出面からの計測値である。

1　溝跡（SD）

溝跡は32条検出した。検出した溝跡のうち、南北方向に走る溝跡は長く、性格がわかるものが多いが、東西方向に走る溝跡は短く、また撹乱等の影響を受けているため、性格が不明なものが多い。ここでは、SD12、SD15、SD1、SD3、SD10、SD11、SD26、SD29、SD33について述べ、その他は溝跡の属性を一覧表（第2表）にまとめた。

SD12（第8図）

4区17Hグリッドから、7区33Cグリッドまで、4、5、6、7区のほぼ中央を南北に走る溝である。4区の東側から入り込み、17Gグリッド付近でほぼ90度南に向きを変える。4区検出面では幅約0.7m、深さ約0.4mであるが、徐々に広く深くなっており、5区北側では幅約2m、深さ0.8m、6区北側で幅約2.5m、深さ約1m、7区北側で幅約2.5m、深さ約1mとなり、7区33Cグリッド付近で東に90度向きを変え、調査区外に至る。

溝跡の断面形は、4区中央付近ではU字形を呈しているが、南に向かい深くなるにつれ、西側が急で東側が緩やかな片薬研掘りの形状を呈している。溝の底は平坦でない。溝の断面を観察すると、溝の底部分はよくしまっており、わずかに水が流れた形跡はある。それ以外は水が流れた形跡はなく、何度も埋まって掘り返されたような堆積をしている。1層部分は10YR3/1（黒褐色）砂質土でしばらく水が流れていた形跡がある。6区の1層底面で炭化物を検出し、年代測定を行ったところ明治時代中頃から大正時代初期の頃とわかった(第5章第1節参照)。4区でSD10を切っており、SD13、SD14とつながっている。7区では近代の溝跡と考えるSD25～30、SD32に切られている。

6区25Eグリッドから7区27Dグリッドにかけて溝の中に幅約1m、深さ約0.5mにわたり、径10cm～20cmの円礫や角礫がびっしり詰まっていた。それらの礫の間や埋土から、石臼や山茶碗、古瀬戸折縁深皿、古瀬戸擂鉢、常滑甕などの中世陶器が出土している。この溝を廃棄する際に礫と一緒に捨てられた遺物と考える。

また、5区2層内19F～20Fグリッドにかけて直径40cmのなかに径10cm～20cmの円礫や角礫が20個余り含まれた集石と直径30cmのなかに径10cm～20cmの円礫や角礫が15個余り含まれた集石が出土した。中に、打製石斧や有肩扇状石器、剥片などが含まれていたが、掘形は確認できなかったので、これも破棄された集石ではないかと考える。

遺物は縄文土器（1）、土師器、中世土師皿（2～5）、灰釉陶器（6、7）、須恵器（8、9）、山茶碗(16～26)、古瀬戸(27～45)、常滑陶器(46～51、54、55)、瀬戸美濃大窯(52、53、56～59、61)、瀬戸美濃連房(60、62～72、76)、瓦器(73)、磁器(74、75、80)、輸入磁器(77～79)、金属製品(81、82)、石臼(83、87)、磨石(84)、スクレイパー(85)、砥石(86)、有肩扇状石器(88)、剥片、RF、UF、石核、石皿、石錘、打製石斧などが出土している。

検出した溝跡の全長は89.0mにおよび、南北の端で90°東に向きを変えている。このことからこの溝

跡は、前述の中世の屋敷に伴う区画のための堀として作られ、その後、近世の頃は畑と林の区画として用いられ、何度も掘り返されながら自然堆積したものと考える。

SD15（第9図）

4区17Hグリッドから、5区21Fグリッドまで南北に走る溝跡でSD12と並行し西肩がSD12に切られる。東側は調査区外に続いている。溝跡は検出面で幅約2.5m、深さは約0.5mである。溝の断面は緩いU字形を呈しており、溝の底は平坦になっている。遺物は縄文土器、土師器、須恵器(90)、中世土師皿（89)、山茶碗（91)、古瀬戸（92～96)、常滑陶器、瀬戸美濃大窯（97)、剥片、打製石斧が出土している。この溝跡はSD12との切り合いから中世のSD12より古い時代のものと考える。

SD1（第18図）

1区北東角から4区17Hグリッドまで、調査区の東沿いを南北に走る溝跡であり、東側は排水のためのトレンチにより削られる。また、一部地山面が下がるために消滅している箇所もある。溝跡は検出面で1区南側で幅約3m、深さは約0.4m、3区南側で幅約2.1m、深さは約0.35mである。溝の断面は浅い擂鉢形をしている。溝の中央部分は後述の暗渠（SD2）によって切られる。遺物は打製石斧（206、208)、磨石（209)、打欠石錘（214)、土錘（110)、須恵器（107)、山茶碗（109)、瀬戸美濃大窯（108)、金属製品（111）が出土している。

SD3（第9図）

1区6Mグリッドから2区7Mグリッドまで走る溝跡である。1区側ではSD1と暗渠（SD2）に切られ、2区で東に向きを変え、調査区外に続いている。溝跡は検出面で幅約1.5m、深さは約0.5mである。溝の断面はU字形をしている。遺物は須恵器杯蓋、石臼(112)が出土した。SD1よりも古い時代の溝跡と考える。

SD10（第9図）

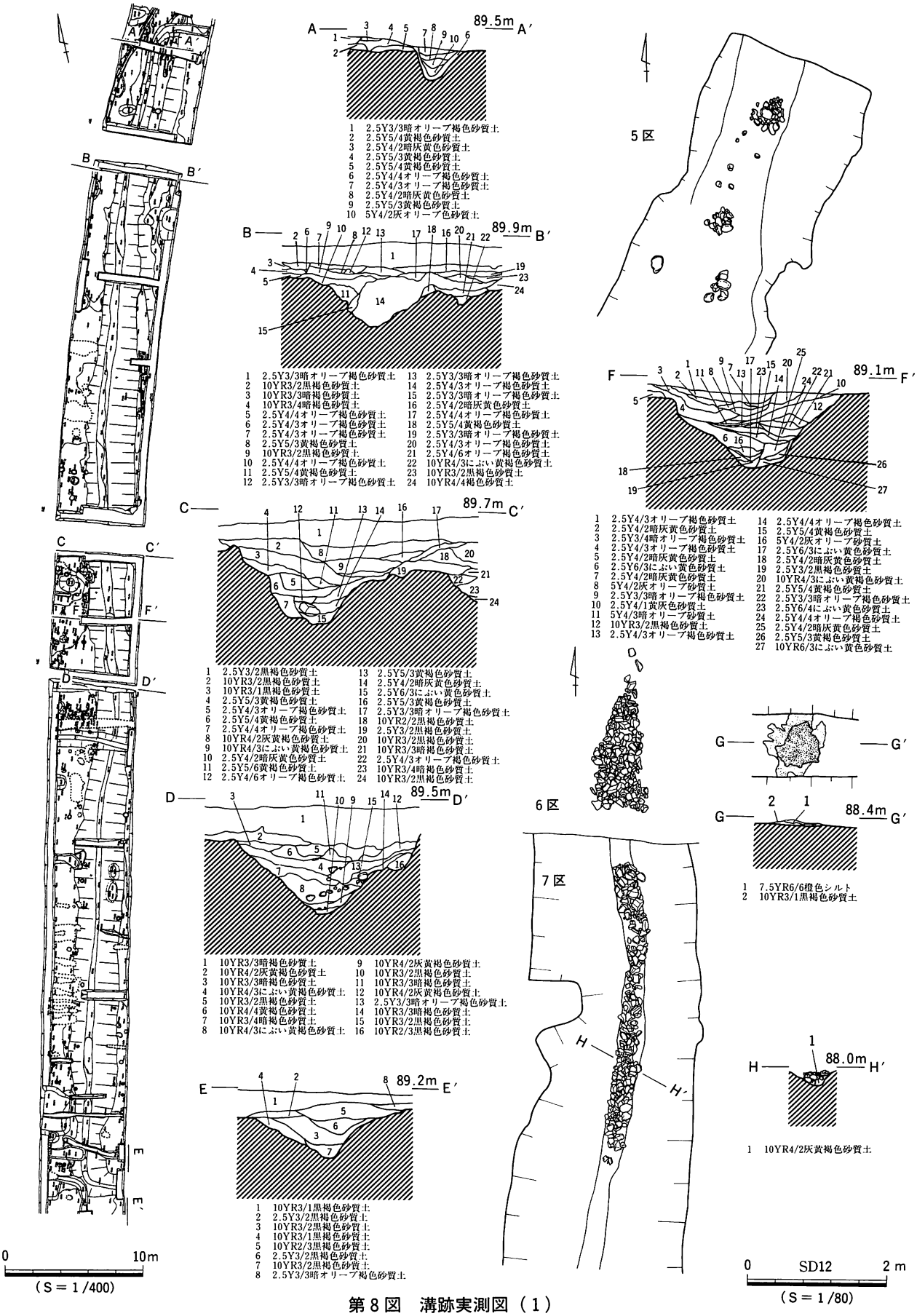
4区中央東から17Gグリッドまで、SD15と並行して流れる溝跡であり、東側は調査区外に続く。17GグリッドでSD12に切られる。溝跡は検出面で幅約0.6m、深さは約0.3mである。溝の断面はU字形をしており、東側は溝跡(SD15)の肩に切られている。遺物は剥片、縄文土器、土師器(98)、須恵器、中世土師皿（99)、山茶碗（100)、古瀬戸（101、102)、常滑陶器が出土している。

SD11（第10図）

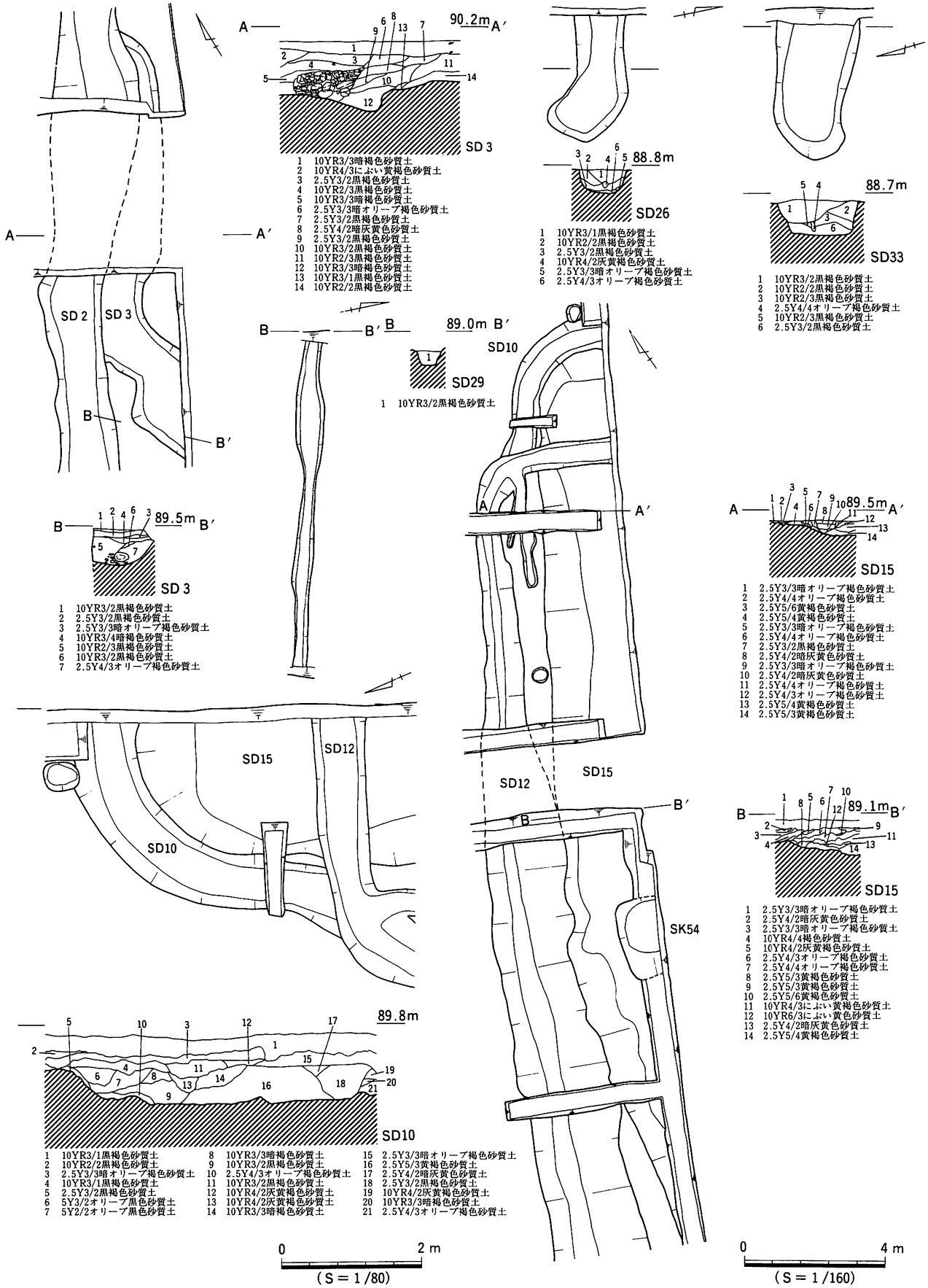
4区中央北寄り16Hグリッドから5区西端20Eグリッドまで、調査区の西沿いを南北に走る溝跡であり、西側は調査区外に続く。溝跡は4区検出面で幅約0.25m、深さは約0.15mである。溝の断面は浅い擂鉢形をしている。土坑(SK49、50、51、53)を切る。遺物は土師器、中世土師皿、山茶碗(106)、古瀬戸が出土している。

SD26（第9図）

7区中央西寄り28Cグリッド付近で、東西に走る溝跡であり、西側は調査区外に続く。溝跡は検出


A
A′
89.5m
1 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土
2 2.5Y5/4黄褐色砂質土
3 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土
4 2.5Y5/3黄褐色砂質土
5 2.5Y5/4黄褐色砂質土
6 2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土
7 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土
8 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土
9 2.5Y5/3黄褐色砂質土
10 5Y4/2灰オリーブ色砂質土
B
B′
89.9m
1 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土
2 10YR3/2黒褐色砂質土
3 10YR3/3暗褐色砂質土
4 10YR3/4暗褐色砂質土
5 2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土
6 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土
7 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土
8 2.5Y5/3黄褐色砂質土
9 10YR3/2黒褐色砂質土
10 2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土
11 2.5Y5/4黄褐色砂質土
12 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土
13 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土
14 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土
15 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土
16 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土
17 2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土
18 2.5Y5/4黄褐色砂質土
19 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土
20 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土
21 2.5Y4/6オリーブ褐色砂質土
22 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土
23 10YR3/2黒褐色砂質土
24 10YR4/4褐色砂質土
5区
F
F′
89.1m
1 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土
2 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土
3 2.5Y3/4暗オリーブ褐色砂質土
4 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土
5 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土
6 2.5Y6/3にぶい黄色砂質土
7 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土
8 5Y4/2灰オリーブ砂質土
9 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土
10 2.5Y4/1黄灰色砂質土
11 5Y4/3暗オリーブ砂質土
12 10YR3/2黒褐色砂質土
13 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土
14 2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土
15 2.5Y5/4黄褐色砂質土
16 5Y4/2灰オリーブ砂質土
17 2.5Y6/3にぶい黄色砂質土
18 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土
19 2.5Y3/2黒褐色砂質土
20 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土
21 2.5Y5/4黄褐色砂質土
22 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土
23 2.5Y6/4にぶい黄色砂質土
24 2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土
25 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土
26 2.5Y5/3黄褐色砂質土
27 10YR6/3にぶい黄色砂質土
C
C′
89.7m
1 2.5Y3/2黒褐色砂質土
2 10YR3/2黒褐色砂質土
3 10YR3/1黒褐色砂質土
4 2.5Y5/3黄褐色砂質土
5 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土
6 2.5Y5/4黄褐色砂質土
7 2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土
8 10YR4/2灰黄褐色砂質土
9 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土
10 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土
11 2.5Y5/6黄褐色砂質土
12 2.5Y4/6オリーブ褐色砂質土
13 2.5Y5/3黄褐色砂質土
14 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土
15 2.5Y6/3にぶい黄色砂質土
16 2.5Y5/3黄褐色砂質土
17 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土
18 10YR2/2黒褐色砂質土
19 2.5Y3/2黒褐色砂質土
20 10YR3/2黒褐色砂質土
21 10YR3/3暗褐色砂質土
22 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土
23 10YR3/4暗褐色砂質土
24 10YR3/2黒褐色砂質土
D
D′
89.5m
1 10YR3/3暗褐色砂質土
2 10YR4/2灰黄褐色砂質土
3 10YR3/3暗褐色砂質土
4 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土
5 10YR3/2黒褐色砂質土
6 10YR4/4黄褐色砂質土
7 10YR3/4暗褐色砂質土
8 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土
9 10YR4/2灰黄褐色砂質土
10 10YR3/2黒褐色砂質土
11 10YR3/3暗褐色砂質土
12 10YR4/2灰黄褐色砂質土
13 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土
14 10YR3/3暗褐色砂質土
15 10YR3/2黒褐色砂質土
16 10YR2/3黒褐色砂質土
E
E′
89.2m
1 10YR3/1黒褐色砂質土
2 2.5Y3/2黒褐色砂質土
3 10YR3/2黒褐色砂質土
4 10YR3/1黒褐色砂質土
5 10YR2/3黒褐色砂質土
6 2.5Y3/2黒褐色砂質土
7 10YR3/2黒褐色砂質土
8 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土
6区
D
D′
G
G′
88.4m
1 7.5YR6/6橙色シルト
2 10YR3/1黒褐色砂質土
7区
H
H′
88.0m
1 10YR4/2灰黄褐色砂質土
0　10m
(S＝1/400)
0　SD12　2m
(S＝1/80)

第8図　溝跡実測図（1）



1 10YR3/3暗褐色砂質土
2 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土
3 2.5Y3/2黒褐色砂質土
4 10YR2/3黒褐色砂質土
5 10YR3/3暗褐色砂質土
6 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土
7 2.5Y3/2黒褐色砂質土
8 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土
9 2.5Y3/2黒褐色砂質土
10 10YR3/2黒褐色砂質土
11 10YR2/3黒褐色砂質土
12 10YR3/3暗褐色砂質土
13 10YR3/1黒褐色砂質土
14 10YR2/2黒褐色砂質土

1 10YR3/1黒褐色砂質土
2 10YR2/2黒褐色砂質土
3 2.5Y3/2黒褐色砂質土
4 10YR4/2灰黄褐色砂質土
5 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土
6 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土

1 10YR3/2黒褐色砂質土
2 10YR2/2黒褐色砂質土
3 10YR2/3黒褐色砂質土
4 2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土
5 10YR2/3黒褐色砂質土
6 2.5Y3/2黒褐色砂質土

1 10YR3/2黒褐色砂質土

1 10YR3/2黒褐色砂質土
2 2.5Y3/2黒褐色砂質土
3 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土
4 10YR3/4暗褐色砂質土
5 10YR2/3黒褐色砂質土
6 10YR3/2黒褐色砂質土
7 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土

1 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土
2 2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土
3 2.5Y5/6黄褐色砂質土
4 2.5Y5/4黄褐色砂質土
5 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土
6 2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土
7 2.5Y3/2黒褐色砂質土
8 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土
9 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土
10 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土
11 2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土
12 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土
13 2.5Y5/4黄褐色砂質土
14 2.5Y5/3黄褐色砂質土

1 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土
2 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土
3 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土
4 10YR4/4褐色砂質土
5 10YR4/2灰黄褐色砂質土
6 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土
7 2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土
8 2.5Y5/3黄褐色砂質土
9 2.5Y5/3黄褐色砂質土
10 2.5Y5/6黄褐色砂質土
11 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土
12 10YR6/3にぶい黄色砂質土
13 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土
14 2.5Y5/4黄褐色砂質土

1 10YR3/1黒褐色砂質土
2 10YR2/2黒褐色砂質土
3 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土
4 10YR3/1黒褐色砂質土
5 2.5Y3/2黒褐色砂質土
6 5Y3/2オリーブ黒色砂質土
7 5Y2/2オリーブ黒色砂質土
8 10YR3/3暗褐色砂質土
9 10YR3/2黒褐色砂質土
10 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土
11 10YR3/2黒褐色砂質土
12 10YR4/2灰黄褐色砂質土
13 10YR4/2灰黄褐色砂質土
14 10YR3/3暗褐色砂質土
15 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土
16 2.5Y5/3黄褐色砂質土
17 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土
18 2.5Y3/2黒褐色砂質土
19 10YR4/2灰黄褐色砂質土
20 10YR3/3暗褐色砂質土
21 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土

第９図　溝跡実測図（２）

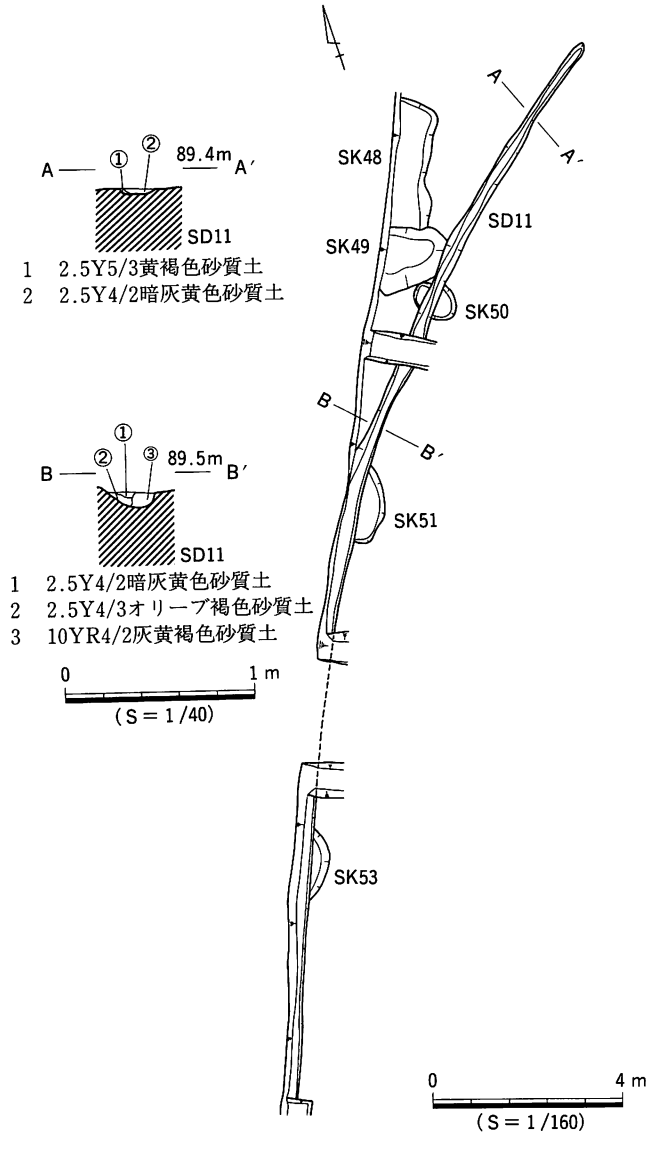
面で幅約0.7m、深さは約0.35mである。溝の断面はU字形をしている。近世墓である(SK74)と溝跡（SD12）を切る。遺物は古瀬戸（105)、山茶碗、常滑陶器が出土している。

SD29（第9図）

7区中央付近32Bグリッドから32Cグリッドまで、調査区を東西に横切る溝跡である。溝跡は検出面で幅約0.35m、深さは約0.2mである。溝の断面は浅い擂鉢形をしている。土坑(SK77)、溝跡(SD12)を切る。遺物は山茶碗（104）が出土している。

SD33（第9図）

7区南西寄り34Cグリッド付近を東西に走る溝跡で、調査区西側に続く。溝跡は検出面で幅約1.2m、深さは約0.5mである。溝跡の断面は箱形をして、底部は平坦である。遺物はUF、中世土師皿、山茶碗（103）が出土している。



第10図　溝跡実測図（3）

第2表　溝跡属性一覧表

遺構番号	グリッド	法　量（m）			方　位
		上端長軸	上端短軸	深　さ	
SD1	4N～16H	(68.5)	1.0～(3.0)	0.2～0.4	N 25°E
SD2	4N～14I	(58.0)	1.0	0.3～0.7	N 25°E
SD3	4N～7M	(13.0)	0.5	0.4～0.6	N 20°E
SD4	8K	(0.9)	0.2	0.1	N 71°W
SD5	9L～10K	(6.5)	0.2～(0.6)	0.1～0.4	N 28°E
SD6	10J	3.2	0.5	0.1	N 60°W
SD7	14H	(1.3)	0.2	0.1	N 60°W
SD8	14H	(1.8)	0.7	0.2	N150°W
SD9	15H	(4.2)	0.4	0.3	N 65°W
SD10	16H～17G	4.5	0.9	0.5	N 58°E
SD11	16H～20E	23.0	(0.1)～0.3	0.1	N 38°E
SD12	17H～33C	89.0	0.8～3.5	0.5～1.2	N 17°E
SD13	17G	1.7	0.2	0.1	N148°W
SD14	17G	3.0	0.3	0.1	N156°W
SD15	17H～21F	(24.0)	(2.4)	0.4～0.6	N 24°E
SD16	21F	1.6	0.4	0.1	N 13°E
SD17	21E～22E	0.7	0.1	0.1	N 13°E
SD18	22E	1.4	0.1	0.1	N 13°E
SD19	22E	1.0	0.1	0.1	N 13°E
SD20	22E	0.7	0.1	0.1	N 7°E
SD21	23E	2.2	0.1	0.1	N 7°E
SD22	24D	(1.2)	0.3	0.1	N 70°W
SD23	25D	1.0	0.3	0.1	N160°W
SD24	26D	(2.6)	(0.6)	0.2	N 74°W
SD25	27D	(5.5)	1.0	0.3	N 73°W
SD26	28C	(1.9)	0.7	0.4	N 73°W
SD27	29D	(2.1)	0.4	0.2	N115°E
SD28	31B	(1.6)	0.5	0.2	N 75°W
SD29	32B～32C	(5.8)	0.4	0.1	N 75°W
SD30	32B～33C	(4.2)	0.4	0.2	N 60°W
SD31	34B	(3.8)	0.5	0.1	N 84°W
SD32	33B～36B	(19.5)	0.2～0.8	0.1～0.2	N 13°E
SD33	34C	(2.0)	1.2	0.5	N110°E

２　土坑（SK）

土坑は、原則として長軸が0.5ｍ以上のものとした。全部で87基ある。土坑の中で覆土に遺物を含むものについては極力詳細図を掲載し、ほかは一覧表（第３表）にまとめる。

SK13（第11図）

２区中央付近の８Ｌグリッドに位置する。長軸長0.9ｍ、短軸長0.47ｍ、最大深度0.05ｍを測り、平面形態は楕円形である。掘形は比較的緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。暗渠（SD２）の１層上にあり、覆土は大きく２層に分かれ、上層の黄褐色砂質土内に木の実を含む炭化物を多く含む。暗渠（SD２）掘削により滅失する。出土遺物には山茶碗がある。本遺構の帰属時期は炭化物の年代測定の結果、江戸時代末期から明治時代初期である。（第５章第１節参照）

SK20（第11図）

２区南端寄りの８Ｋグリッドに位置する。長軸長0.78ｍ、短軸長0.5ｍ、最大深度0.31ｍを測り、平面形態は楕円形である。掘形は比較的緩やかであり、底面は、西側は直線的であり、東側は階段状になっている。覆土は６層に分かれる。遺構の重複関係はSK19を切っている。出土遺物はRF、縄文土器、土師器、須恵器（113）がある。本遺構の帰属時期は不明である。

SK31（第11図）

３区中央付近の13Ｉグリッドに位置する。長軸長0.8ｍ、短軸長0.6ｍ、最大深度0.23ｍを測り、平面形態は楕円形である。掘形は比較的緩やかであり、底面は擂鉢形を呈する。覆土は２層に分かれる。遺構の重複関係はSK32を切っている。出土遺物はなく、本遺構の帰属時期は不明である。

SK32（第11図）

３区北東端寄りの13Ｉグリッドに位置する。長軸長0.84ｍ、短軸長（0.17）ｍ、最大深度0.23ｍを測り、平面形態は楕円形である。掘形は比較的緩やかであり、底面は擂鉢形を呈する。覆土はほぼ単層である。遺構の重複関係はSK31に切られている。出土遺物はなく、本遺構の帰属時期は不明である。

SK33（第11図）

３区南端寄りの14Ｉグリッドに位置する。長軸長1.42ｍ、短軸長1.1ｍ、最大深度0.45ｍを測り、平面形態は不整円形である。掘形は北側は急な立ち上がりで、南側は階段状になり、底面はやや平坦である。覆土は５層に分かれる。遺構の重複関係は溝跡（SD１）を切っている。出土遺物は土師器、須恵器、山茶碗、古瀬戸がある。本遺構の帰属時期は不明である。

SK36（第11図）

４区北端寄りの15Ｈグリッドに位置する。長軸長(0.5)ｍ、短軸長0.52ｍ、最大深度0.14ｍを測り、平面形態は楕円形である。長軸方向は調査区外に続いている。掘形は比較的緩やかであり、底面は擂鉢形を呈する。覆土は４層に分かれる。出土遺物は土師器がある。本遺構の帰属時期は不明である。

SK41（第11図）

4区北西端寄りの15Hグリッドに位置する。長軸長0.51m、短軸長0.32m、最大深度0.16mを測り、平面形態は不整円形である。掘形は比較的緩やかであり、底面は平坦で浅い。覆土は大きく2層に分かれる。SK42掘削のため、滅失する。出土遺物は打製石斧、土師器である。本遺構の帰属時期は不明である。

SK44（第11図）

4区北寄りの16Hグリッドに位置する。長軸長0.94m、短軸長0.32m、最大深度0.18mを測り、平面形態は不整円形である。掘形は比較的緩やかであり、底面は平坦であるが、南東部で深くなっている。覆土は5層に分かれる。竪穴状遺構（ST3）掘削のため滅失する。出土遺物は土師器、山茶碗、剝片、RFである。本遺構の帰属時期は不明である。

SK48（第12図）

4区中央付近西端寄りの16Gグリッドに位置する。長軸長（2.7）m、短軸長（0.6）m、最大深度0.2mを測り、平面形態は不整方形である。掘形は緩やかに立ち上がり、底面は擂鉢形を呈するが、北側で緩やかに段差が付く。覆土は6層に分かれる。短軸方向は調査区外に続き、遺構の重複関係はSK49に切られる。出土遺物は土師器、中世土師皿、古瀬戸(115)である。本遺構の帰属時期は出土遺物、切り合いから中世と考える。

SK49（第12図）

4区中央付近西端寄りの17Gグリッドに位置する。長軸長（1.3）m、短軸長（1.2）m、最大深度0.56mを測り、平面形態は楕円形である。掘形は急激に立ち上がり、底面は擂鉢形を呈する。覆土は4層に分かれる。長軸方向は調査区外に続き、遺構の重複関係はSK48を切っており、溝跡（SD11）に切られる。出土遺物は縄文土器（114）、土師器、山茶碗（118）である。本遺構の帰属時期は出土遺物、切り合いから中世と考える。

SK51（第11図）

4区南西端寄りの18Gグリッドに位置する。長軸長1.64m、短軸長（0.6）m、最大深度0.4mを測り、平面形態は不整円形である。掘形は、南側は緩やかで、北側は急激に立ち上がり、底面は平坦である。覆土は5層に分かれる。短軸方向は調査区外に続き、遺構の重複関係は溝跡（SD11）に切られる。出土遺物は縄文土器、土師器、剝片である。本遺構の帰属時期は不明である。

SK54（第12図）

5区北西部の20Gグリッドに位置する。長軸長2.34m、短軸長（1.18）m、最大深度0.33mを測り、平面形態は不整方形である。掘形は緩やかであり、底面は平坦で浅い。覆土は5層に分かれる。短軸方向は調査区外に続き、遺構の重複関係は溝跡（SD15）と南北トレンチに切られる。出土遺物は土師器である。本遺構の帰属時期は不明である。

SK56（第12図）

5区中央付近西端寄りの20Eグリッドに位置する。長軸長（1.2）m、短軸長（0.5）m、最大深度0.44mを測り、平面形態は楕円形である。掘形は、北側は緩やかで、南側は急激に立ち上がり、底面は平坦である。覆土はほぼ単層である。短軸方向は南北トレンチに切られている。出土遺物は須恵器である。本遺構の帰属時期は不明である。

SK69（第12図）

6区北端寄りの24Dグリッドに位置する。長軸長0.64m、短軸長0.54m、最大深度0.2mを測り、平面形態は不整円形である。掘形は緩やかに立ち上がり、底面は擂鉢形を呈する。覆土はほぼ単層である。遺構の重複関係はSK71を切っており、撹乱に切られている。出土遺物はなく、本遺構の帰属時期は不明である。

SK70（第12図）

6区北西端寄りの24Dグリッドに位置する。長軸長1.4m、短軸長1.25m、最大深度0.65mを測り、平面形態はほぼ円形である。掘形は東側が急激に立ち上がり、底面は擂鉢形を呈しているが、東側が深くなっている。覆土は大きく3層に分かれており、1層内に径20cmの亜円礫が2点出土した。遺構の重複関係は小穴（P143）に切られる。出土遺物は打製石斧、杭である。杭は2層内からほぼ垂直に立った状態で出土し、樹種同定の結果、マツ属維管束亜属のものであった。（第5章第4節参照）本遺構の帰属時期は不明である。

SK71（第12図）

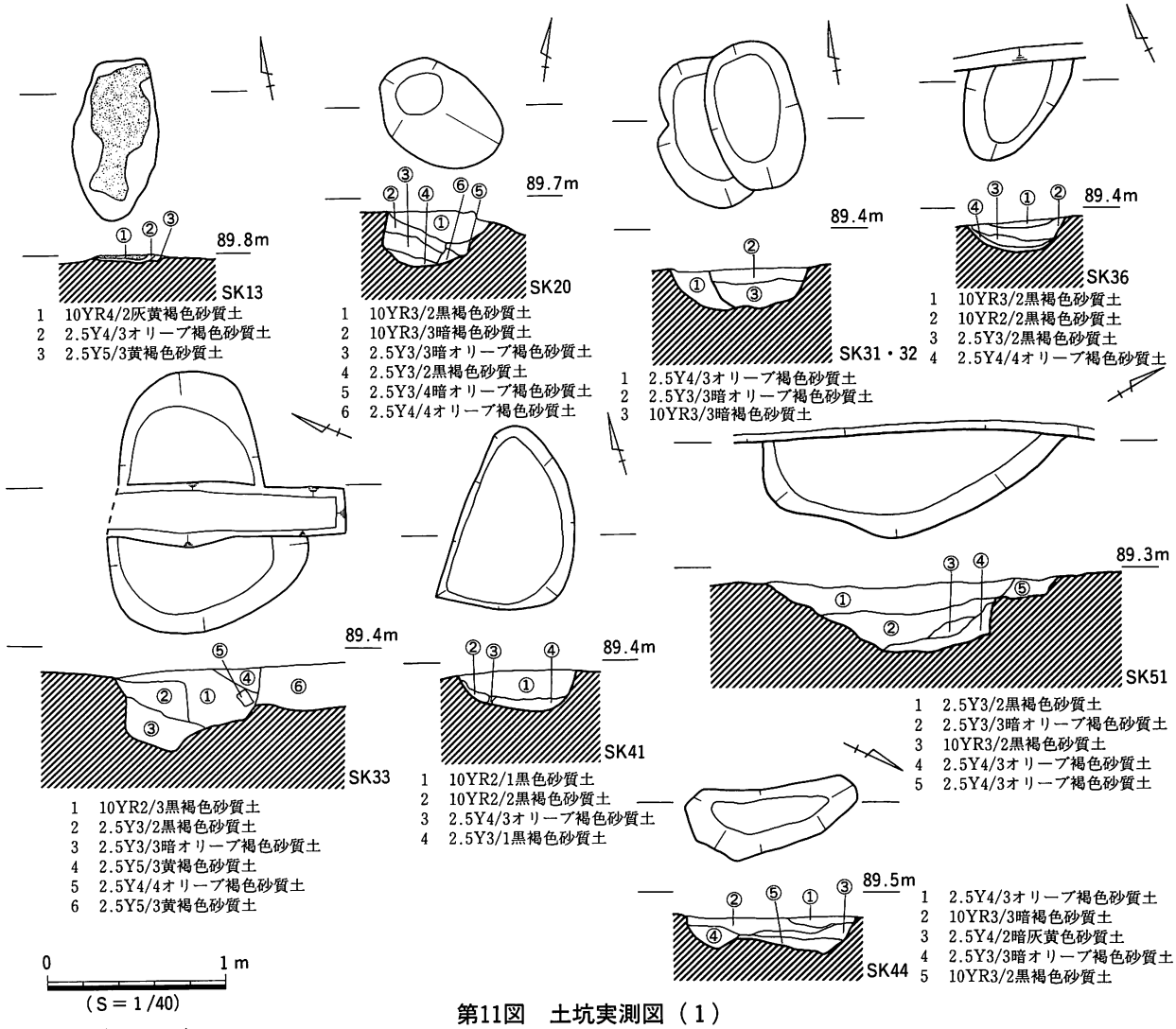
6区北端寄りの24Dグリッドに位置する。長軸長1.18m、短軸長0.75m、最大深度0.08mを測り、平面形態は不整円形である。掘形は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。覆土はほぼ単層である。遺構の重複関係はSK69、撹乱に切られ、底面で小穴（P144）を検出する。また、溝跡（SD12）を切っている。出土遺物はなく、本遺構の帰属時期は不明である。

SK74（第13図）

7区北端寄りの28Cグリッドに位置する。長軸長1.45m、短軸長0.9m、最大深度0.48mを測り、平面形態は不整方形である。掘形は急激に立ち上がり、底面は平坦である。覆土はほぼ単層である。遺構の重複関係は溝跡（SD26）に切られる。出土遺物は山茶碗、中世土師皿、古瀬戸擂鉢（120）、銭貨（124）があり、墓壙と考える。山茶碗、中世土師皿、擂鉢は掘削中に、古銭は床面上の中央やや北寄りで出土した。

古銭は寛永通宝が7枚付着しており、3枚錆で付着したものと4枚錆で付着したもの間に刀子が挟まっている。六道銭として、埋納されたものと考える。

また、溝跡（SD12）を切る形で、この土坑の西側にSK75、SK76と同じような土坑がある。出土遺物はないが、同じ性格のものと考える。本遺構の帰属時期は古銭の年代から、近世と考えられる。



第11図　土坑実測図（1）

SK77（第13図）

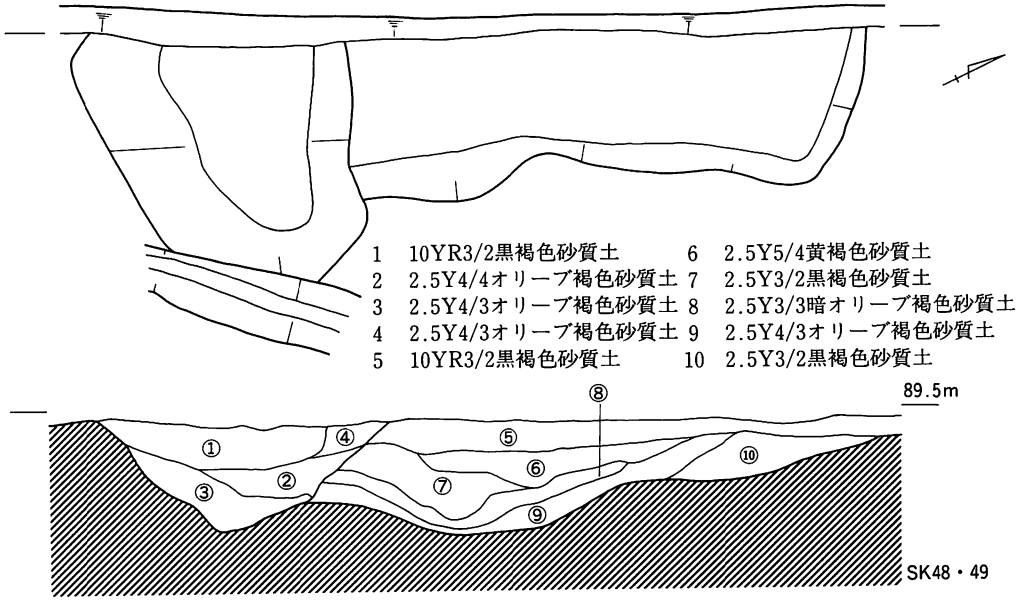
7区中央付近西端寄りの32Bグリッドに位置する。長軸長3.65m、短軸長（2.0）m、最大深度0.7mを測り、平面形態は不整方形である。掘形は急激に立ち上がり、底面は平坦である。覆土は9層に分かれる。短軸方向は調査区外に続き、遺構の重複関係はSK78と溝跡（SD29）と南北トレンチに切られる。出土遺物は土師器、中世土師皿、山茶碗(122)などがある。本遺構の帰属時期は不明である。

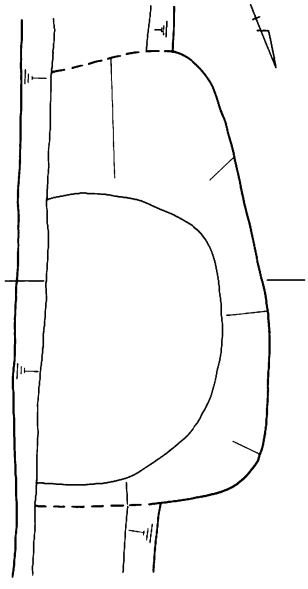
SK79（第13図）

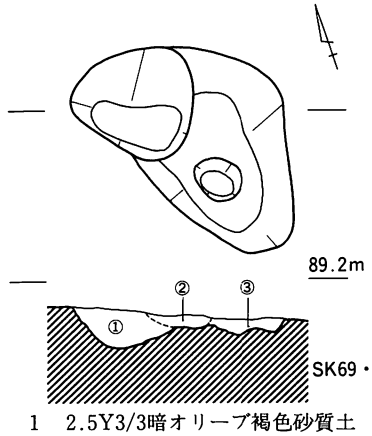
7区中央付近西端寄りの32Bグリッドに位置する。長軸長(2.62)m、短軸長1.03m、最大深度0.17mを測り平面形態は、隅丸方形で溝のような形をして調査区西側へ続く。掘形は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。覆土は単層である。遺構の重複関係はSK80を切る。出土遺物はなく、本遺構の帰属時期は不明である。

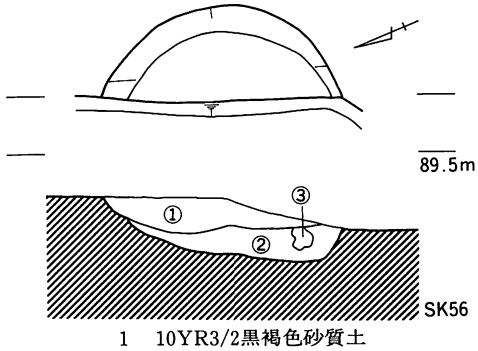
SK80（第13図）

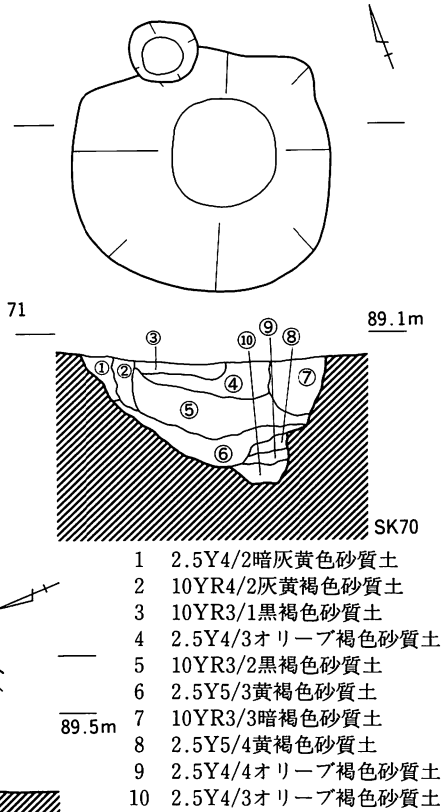
7区中央付近西端寄りの32Bグリッドに位置する。長軸長（0.5）m、短軸長0.44m、最大深度0.1mを測り、平面形態は楕円形である。掘形は比較的緩やかであり、底面は擂鉢形である。覆土はほぼ

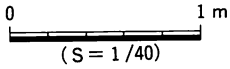

1　10YR3/2黒褐色砂質土
2　2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土
3　2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土
4　2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土
5　10YR3/2黒褐色砂質土
6　2.5Y5/4黄褐色砂質土
7　2.5Y3/2黒褐色砂質土
8　2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土
9　2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土
10　2.5Y3/2黒褐色砂質土
89.5m
SK48・49


88.6m
SK54
1　10YR4/3にぶい黄褐色砂質土
2　2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土
3　2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土
4　2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土
5　2.5Y4/2暗灰黄色砂質土

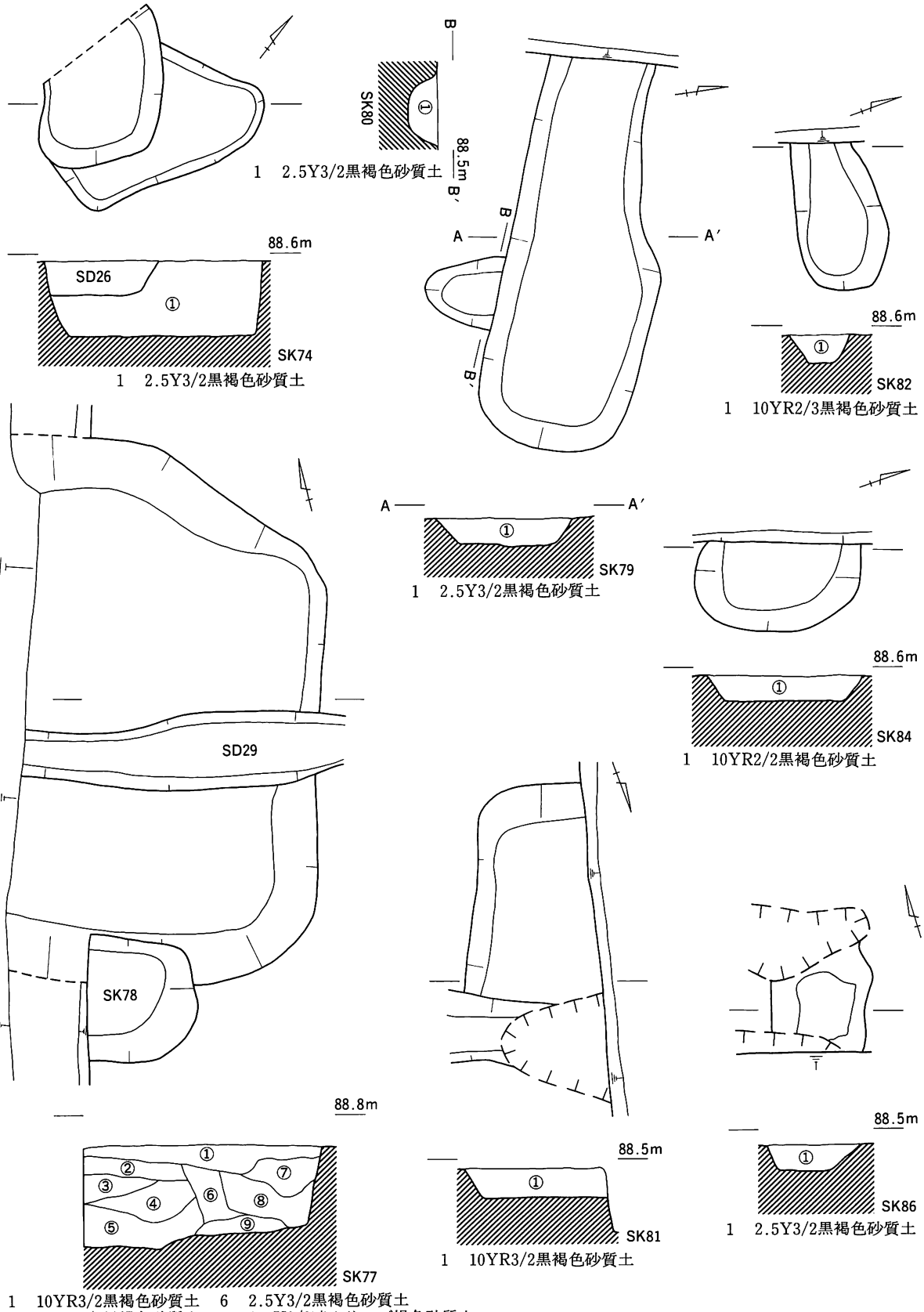

89.2m
SK69・71
1　2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土
2　10YR4/2灰黄褐色砂質土
3　2.5Y4/2暗灰黄色砂質土


89.5m
SK56
1　10YR3/2黒褐色砂質土
2　2.5Y5/4黄褐色砂質土
3　10YR3/1黒褐色砂質土


89.1m
SK70
1　2.5Y4/2暗灰黄色砂質土
2　10YR4/2灰黄褐色砂質土
3　10YR3/1黒褐色砂質土
4　2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土
5　10YR3/2黒褐色砂質土
6　2.5Y5/3黄褐色砂質土
7　10YR3/3暗褐色砂質土
8　2.5Y5/4黄褐色砂質土
9　2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土
10　2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土


0
1 m
(S＝1/40)

第12図　土坑実測図（２）


SK80
B
B′
88.5m
①
1　2.5Y3/2黒褐色砂質土
A
A′
88.6m
SD26
①
SK74
1　2.5Y3/2黒褐色砂質土
88.6m
①
SK82
1　10YR2/3黒褐色砂質土
SD29
SK78
A
A′
①
SK79
1　2.5Y3/2黒褐色砂質土
88.6m
①
SK84
1　10YR2/2黒褐色砂質土
88.8m
①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
⑨
SK77
88.5m
①
SK81
1　10YR3/2黒褐色砂質土
88.5m
①
SK86
1　2.5Y3/2黒褐色砂質土
1　10YR3/2黒褐色砂質土
2　10YR2/3黒褐色砂質土
3　10YR3/3暗褐色砂質土
4　10YR3/1黒褐色砂質土
5　10YR2/2黒褐色砂質土
6　2.5Y3/2黒褐色砂質土
7　2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土
8　10YR3/1黒褐色砂質土
9　2.5Y3/3黒褐色砂質土
0
1 m
(S＝1/40)

第13図　土坑実測図（3）

第3表　土坑属性一覧表

遺構番号	グリッド	法量（m）			出土遺物の有(○)無			備考
		上端長軸	上端短軸	深さ	土器	石器	金属・木	（切る＞切られる）
SK 1	4 M	0.54	0.28	0.19				
SK 2	4 M	0.55	0.50	0.10				
SK 3	4 M	0.86	0.52	0.09				
SK 4	5 M	1.24	0.86	0.16				
SK 5	5 L	(0.92)	0.72	0.20				調査区外に続く
SK 6	5 L	0.81	0.54	0.20				
SK 7	5 L	0.70	(0.38)	0.20				調査区外に続く
SK 8	5 M	(1.20)	0.70	0.23				＜東西 TR
SK 9	6 L	1.50	(0.70)	0.09				＞P20、調査区外に続く
SK10	7 L	0.53	(0.45)	0.09				＜南北 TR
SK11	7 L	0.50	0.42	0.23				
SK12	8 L	0.58	0.50	0.26				
SK13	8 L	0.90	0.47	0.05	○			
SK14	8 K	2.10	1.10	0.36				＞SK15、SK16
SK15	8 K	(0.50)	0.50	0.28				＜SK14
SK16	8 K	(1.16)	0.45	0.17				＜SK14
SK17	8 K	0.60	0.35	0.13				
SK18	8 L	0.90	(0.55)	0.30				＜南北 TR
SK19	8 K	0.80	(0.60)	0.18	○			＜SK20
SK20	8 K	0.78	0.50	0.31	○	○		＞SK19
SK21	9 K	1.24	(0.38)	0.23				＜SD 2 、東西 TR
SK22	9 L	(0.50)	0.38	0.12				＜東西 TR
SK23	9 J	0.64	0.45	0.13				
SK24	10K	0.91	0.39	0.09				＞SD 5
SK25	10 J	(0.90)	1.00	0.05				調査区外に続く
SK26	10K	1.20	0.90	0.10				
SK27	10K	1.06	0.44	0.27	○			＜南北 TR
SK28	12 J	2.28	1.66	0.23				
SK29	12 I	1.33	1.04	0.23				
SK30	13 I	1.28	1.10	0.29				
SK31	13 I	0.80	0.50	0.23				＞SK32
SK32	13 I	0.84	(0.17)	0.23				＜SK31
SK33	14 I	1.42	1.10	0.45	○			＞SD 1
SK34	14 I	0.68	0.40	0.15				
SK35	14H	(0.80)	1.10	0.19				調査区外に続く
SK36	15H	(0.50)	0.52	0.14	○			＜東西 TR、＞P76
SK37	15H	(0.50)	0.22	0.07				＜TR
SK38	15H	1.00	0.40	0.12				
SK39	15H	0.74	0.50	0.12				＜SK41
SK40	15H	(0.84)	0.30	0.08				＜東西 TR
SK41	15H	0.51	0.32	0.16	○	○		
SK42	15H	(1.13)	0.90	0.16				＜SK41、SD 9
SK43	15H	0.41	0.32	0.12	○			
SK44	16H	0.94	0.32	0.18	○	○		
SK45	16H	0.50	0.30	0.05				＜撹乱
SK46	16G	(1.36)	1.76	0.20	○			＞ST 3 、SK48、＜P89、P91、P94、調査区外に続く
SK47	16H	0.50	0.41	0.10				
SK48	16G	(2.70)	(0.60)	0.44	○			＜SK46、SK49、調査区外に続く
SK49	17G	(1.30)	(1.20)	0.56	○			
SK50	17G	0.96	0.60	0.14				＜SD11
SK51	18G	1.64	(0.60)	0.40	○	○		＜SD11、調査区外に続く
SK52	18F	1.30	0.80	0.33				
SK53	19F	(1.54)	(0.40)	0.19				＜SD11、調査区外に続く
SK54	20G	2.34	(1.18)	0.33	○			＜南北 TR、調査区外に続く
SK55	20G	0.52	(0.28)	0.32				＜TR
SK56	20E	(1.20)	(0.50)	0.44	○			＜TR、調査区外に続く
SK57	21E	0.58	0.38	0.10				
SK58	21E	0.90	0.35	0.25	○	○		
SK59	22F	0.67	0.32	0.21		○	○	
SK60	22E	0.66	0.35	0.22	○			
SK61	22E	0.70	0.32	0.15				
SK62	22E	0.74	0.46	0.13				＜P141
SK63	22E	0.52	0.38	0.21	○			
SK64	23E	0.62	0.28	0.21	○			
SK65	23E	0.66	0.32	0.26	○		○	
SK66	23E	0.52	0.32	0.15				
SK67	23E	0.50	0.35	0.07				
SK68	23D	0.68	0.62	0.10				
SK69	24D	0.64	0.54	0.20				
SK70	24D	1.40	1.25	0.65		○	○	＜P143
SK71	24D	1.18	(0.75)	0.08				＜SK69、P145、P144を底部で検出
SK72	26D	0.85	(0.38)	0.22				＜南北 TR
SK73	29C	1.15	(0.64)	0.25				＜南北 TR
SK74	28C	1.45	0.90	0.48	○		○	＜SD26
SK75	29D	1.20	1.25	0.50				
SK76	29D	1.50	1.00	0.40				
SK77	32B	3.65	(2.00)	0.70	○		○	＜SK78、SD29、南北TR
SK78	32B	(0.74)	0.70	0.21				＞SD29、＜南北 TR
SK79	32B	(2.62)	1.03	0.17				＜南北 TR
SK80	32B	(0.50)	0.44	0.10	○			＞SD12、＜SK79
SK81	33B	(1.46)	(0.81)	0.22	○			＜SD32、南北 TR
SK82	34B	(1.00)	0.56	0.20	○			＜南北 TR
SK83	34B	1.30	0.45	0.21		○		
SK84	34B	1.10	(0.62)	0.17	○			＜SD32
SK85	35A	0.92	0.80	0.10				
SK86	36A	(0.60)	(0.56)	0.16	○			＜南北 TR、撹乱
SK87	36B	0.92	(0.26)	0.22				＜東西 TR

単層である。遺構の重複関係は長軸方向がSK79に切られ、溝跡（SD12）を切っている。出土遺物は土師器、山茶碗、古瀬戸（121）などがある。本遺構の帰属時期は不明である。

SK81（第13図）

7区中央付近西端寄りの33Bグリッドに位置する。長軸長（1.46）m、短軸長（0.81）m、最大深度0.22mを測り、平面形態は隅丸方形である。掘形は急激に立ち上がり、底面は平坦である。覆土はほぼ単層である。遺構の重複関係は長軸方向は溝跡（SD32）と攪乱に切られ、短軸方向は南北トレンチに切られる。出土遺物は土師器、土師器皿、山茶碗（117）、瀬戸美濃連房などがある。本遺構の帰属時期は不明である。

SK82（第13図）

7区南西寄りの34Bグリッドに位置する。長軸長（1.0）m、短軸長0.56m、最大深度0.2mを測り、平面形態は楕円形である。掘形の立ち上がりは急で、底面は平坦である。覆土はほぼ単層である。長軸方向が南北トレンチに切られる。出土遺物は山茶碗がある。本遺構の帰属時期は不明である。

SK84（第13図）

7区南寄りの中央部34Bグリッドに位置する。長軸長1.1m、短軸長（0.62）m、最大深度0.17mを測り、平面形態は楕円形である。掘形は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。覆土はほぼ単層である。遺構の重複関係は溝跡（SD32）に切られる。出土遺物は土師器皿（116）がある。本遺構の帰属時期は不明である。

SK86（第13図）

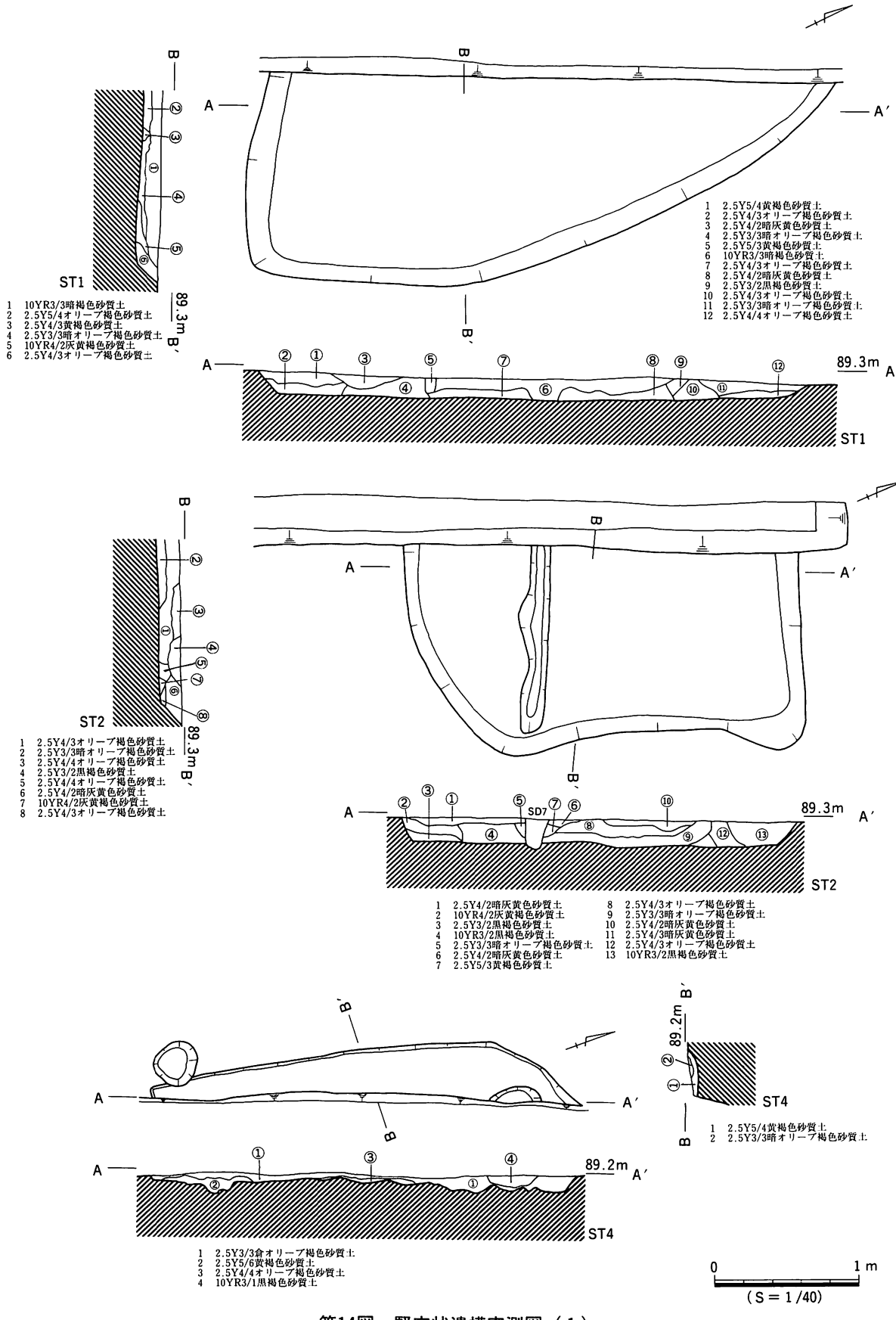
7区南端寄りの36Aグリッドに位置する。長軸長(0.6)m、短軸長0.56m、最大深度0.16mを測り、平面形態は隅丸方形である。掘形は比較的緩やかで、底面は平坦である。覆土はほぼ単層である。出土遺物は須恵器、山茶碗（119）などがある。本遺構の帰属時期は不明である。

3　竪穴状遺構（ST）

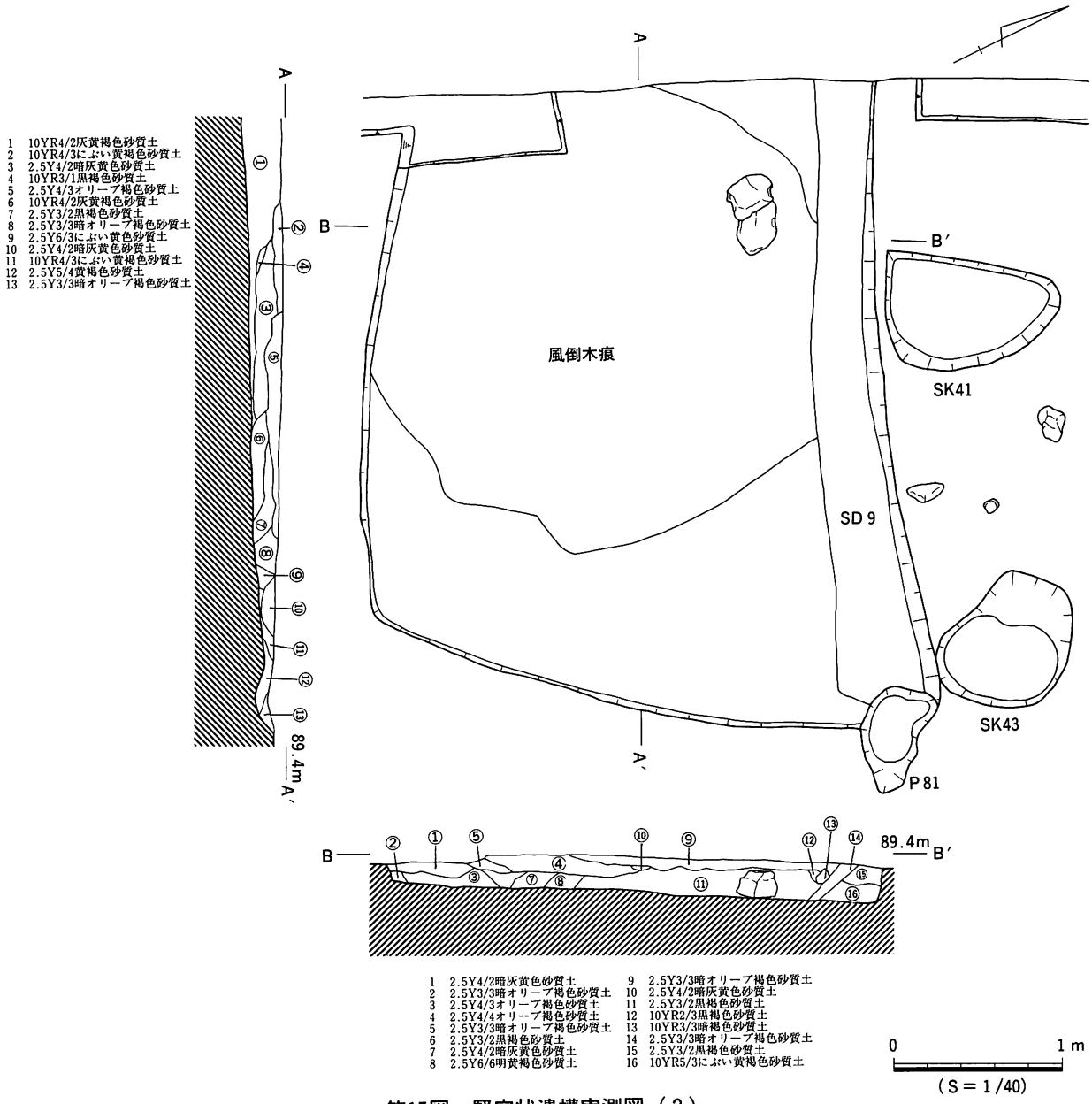
周囲より少し掘り窪められた方形状の遺構で、柱穴を伴わないものを竪穴状遺構とした。3区で2基、4区で1基、5区で1基の計4基検出した。

ST 1（第14図）

3区中央付近西側の12Ⅰ～13Ⅰグリッドに位置する。西側で調査区外に続く。平面形態は北側にひずむ五角形のような形状である。長軸長3.9m、短軸長（1.44）mで、長軸方向はN－22°－Eである。検出面から床面までの深さは0.16mを測る。埋土は大きく2層に分かれ、上面は暗褐色砂質土、下面はオリーブ褐色砂質土である。壁面の立ち上がりはそれほど急ではない。床面は平坦であるが、壁溝や柱穴は確認できなかった。出土遺物はなく、本遺構の帰属時期は不明である。



第14図　竪穴状遺構実測図（１）



第15図　竪穴状遺構実測図（2）

ST 2 （第14図）

3区南西端の14Hグリッドに位置する。西側で調査区外に続く。遺構の重複関係は溝跡（SD 7）に切られ、土坑（SK35）を切る。平面形態は不整方形である。長軸長2.72m、短軸長（1.3）mで、長軸方向はN－26°－Wである。検出面から床面までの深さは0.18mを測る。埋土は大きく2層に分かれ、上面はオリーブ褐色砂質土、下面は暗オリーブ褐色砂質土である。壁面の立ち上がりはそれほど急ではない。床面は平坦であるが、壁溝や柱穴は確認できなかった。出土遺物はなく、本遺構の帰属時期は不明である。

ST 3 （第15図）

4区北西側の15H～16Hグリッドに位置する。西側で調査区外に続く。遺構の重複関係は土坑、小穴攪乱坑に切られ、床面で溝跡（SD 9）を検出する。平面形態は正方形に近い形状である。長軸長（3.

8)ｍ、短軸長3.1ｍで、長軸方向はＮ－30°－Ｅである。検出面から床面までの深さは0.2ｍを測る。埋土は大きく２層に分かれ、上面はオリーブ褐色砂質土、下面は黒褐色砂質土である。壁面の立ち上がりはそれほど急ではない。床面は平坦であるが、壁溝や柱穴は確認できなかった。また床面中央部から南端にかけて下層に風倒木痕を確認する。

出土遺物は打製石斧、剥片、不明石製品、縄文土器(126)、土師器、須恵器(127、128)、山茶碗(130)、古瀬戸(129)である。土器は全て小片である。なお、下層の風倒木痕内から剥片、弥生土器、土師器、中世土師皿、山茶碗が出土している。本遺構の帰属時期は口縁部や底部の残る遺物は少ないが、出土した遺物から中世と考えられる。

ST４（第14図）

５区中央付近東端寄りの22Ｆグリッドに位置する。東側を南北トレンチにより切られ、調査区外に続く。遺構の重複関係は溝跡（SD16)、小穴（Ｐ114）に切られ、床面で小穴（Ｐ112）を検出する。平面形態はほぼ正方形に近い形状と考える。長軸長2.9ｍ、短軸長（0.3）ｍで、長軸方向はＮ－15°－Ｅである。検出面から床面までの深さは0.04ｍ～0.12ｍを測る。埋土は大きく２層に分かれ、上面は暗オリーブ褐色砂質土、下面は黄褐色砂質土である。壁面の立ち上がりは、南側は緩やかで北側は急である。床面は中央が浅く、両端に行くに従い深くなる。壁溝や柱穴は確認できなかった。また南北トレンチ内に小穴（Ｐ113）を検出するが、近代の柵列（ＳＡ５）につながるものと考える。

出土遺物は縄文土器（131、132)、常滑陶器１点（133)、石核（134）である。土器は全て小片である。本遺構の帰属時期は口縁部や底部の残る遺物は少ないが、出土した遺物と遺構との切り合いから中世後期と考えられる。

４　柵列・石列（ＳＡ）

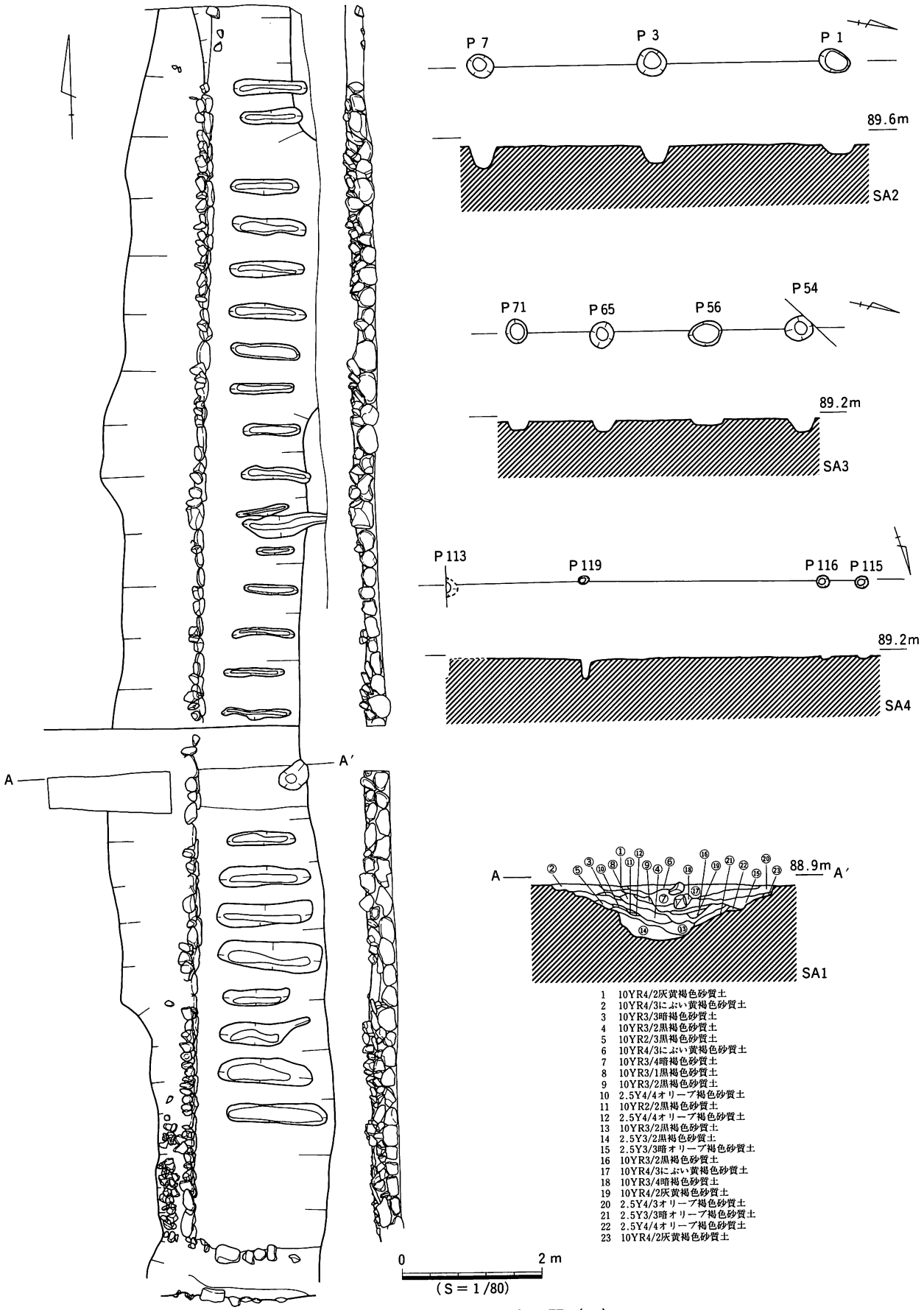
小穴あるいは土坑が一列に規則的に並ぶものを柵列、人為的に組まれたまれた石の列を石列とした。７区で石列が１箇所、柵列が１区、３区、５区で各１箇所、６区から７区にかけて１箇所の４箇所確認した。

石列（ＳＡ１）（第16図）

７区北寄りの26Ｄ～30Ｄグリッドに位置する。溝跡（SD12）の１層を除去中に円礫が並ぶため、精査を進めると、南北方向に石列を検出し、30Ｄグリッド付近で東に向きを変え東西方向に広がる石列を検出する。南北方向は長軸長16.6ｍ、短軸長0.24ｍ、溝跡２層上面からの高さは0.25ｍ～0.45ｍを測り、径５㎝～50㎝の自然礫約160個（円礫約140・角礫20）を直線的に２段に配置する。充塡礫は南北方向の石列と東西方向の石列が直行する30Ｃグリッド付近の長軸長1.8ｍ、短軸長0.52ｍの範囲で径５㎝～15㎝の自然礫36個を数えただけであった。東西方向は長軸長1.6ｍ、短軸長0.3ｍ、溝跡２層上面からの高さは約0.24ｍを測り、径５㎝～35㎝の自然礫９個（円礫９）を直線的に配置する。

南北方向の石列は東向きに面をそろえ、東西方向は北向きに面がそろっている。それぞれの反対側は暗褐色砂質土により充塡されている。

出土遺物には石臼片、土師器、中世土師皿、山茶碗（135)、瀬戸美濃大窯、瀬戸美濃連房（136)、



第16図　石列・柵列実測図（1）

染付磁器などがある。明治時代、土地区画の境を示す際に石を積んだと言われる[1]ことから、溝跡（SD12）によって窪んだ場所に石を積んで、土を充塡して畑や墓地の区画に利用したのではないかと考える。本遺構の帰属時期は近代である。

柵列（SA２）（第16図）

１区北寄りの３Ｎ～４Ｍグリッドにかけて位置する３基の柱穴列である。柱穴の間隔は約2.5ｍで、それぞれの長径は0.4ｍ前後の柱穴である。深さは0.12ｍ～0.36ｍである。遺物はＰ７から山茶碗が出土している。本遺構の帰属時期は不明である。

柵列（SA３）（第16図）

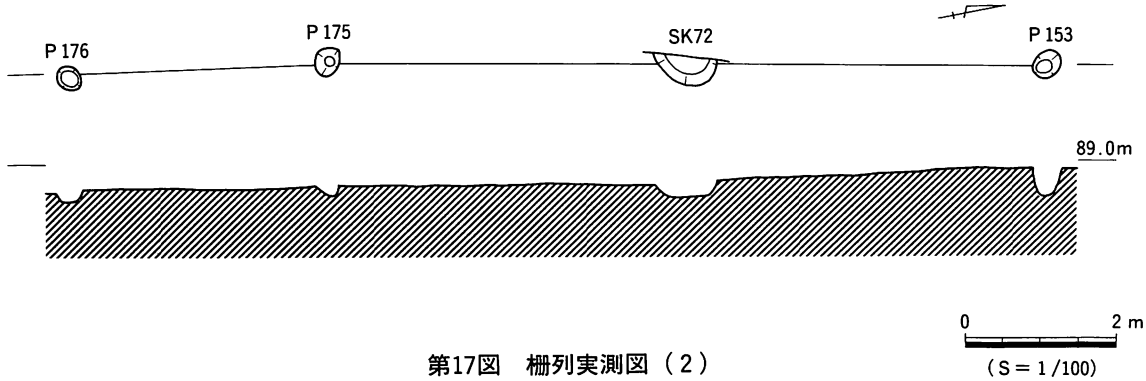
３区南西寄りの13Ｉ～14Ｉグリッドにかけて位置する４基の柱穴列である。柱穴の間隔は約1.3ｍで、それぞれの長径は0.32ｍ～0.4ｍの柱穴である。深さは0.11ｍ～0.33ｍである。遺物はいずれの柱穴からも出土しておらず、本遺構の帰属時期は不明である。

柵列（SA４）（第16図）

５区中央部の21Ｅ～21Ｆグリッドにかけて位置する４基の柱穴列である。攪乱や溝跡（SD12）に切られているため、他の柱穴は確認できず柱穴の間隔が0.6ｍ～3.4ｍとばらつきがある。それぞれの長径は0.14ｍ～0.33ｍの柱穴である。深さは0.04ｍ～0.24ｍである。遺物はいずれの柱穴からも出土していないが、遺構の重複関係から考えて近代の遺構である。

柵列（SA５）（第17図）

６区南西寄りの25Ｄグリッド～７区北西よりの28Ｃグリッドに位置する４基の柱穴列である。柱穴の間隔は、１箇所が3.5ｍで、２箇所が4.5ｍである。それぞれの長径は0.31ｍ～0.85ｍの柱穴である。深さは0.22ｍ～0.31ｍである。遺物等はいずれの柱穴からも出土しておらず、本遺構の帰属時期は不明である。



第17図　柵列実測図（２）

５　暗渠（SD２）（第18図）

１区北東角から３区15Ｉグリッドまで、前述のSD１の中央部を切る形で南北に走る溝で、中に径10cm～20cmの小円礫がびっしり詰まっていた。暗渠は幅0.8～1.5ｍ、深さは約0.55ｍで断面形は箱形に

なっており、底は平坦である。1区では底部に地山の下の河岸段丘の礫層も一部表れている。また、溝跡（SD3）を切っている。3区の南東部の13Iグリッドで溝内に礫が詰まっている状態が終わり、そこから南は溝跡となっている。

3区で、この暗渠内の礫を除去していくと、溝内に長軸長1.2m～1.8m、短軸長0.8m、深さ0.25m～0.55mの土坑が0.3m間隔で11基並んでおり、径10cm～20cmの小円礫がびっしり詰まっていた。かつて畑地等を開墾する際に、石を集めて穴を掘って捨てたと言われる[2]。このことから、この土坑は東側の畑を開墾する際に集められた石を捨てた跡であり、それが、等間隔で長くつながったために、その後暗渠として掘削する際にこの土坑を利用し、土坑と土坑の間の土を除去して一つの溝としたのではないかと考えられる。さらに飛驒川もしくは当遺跡周辺から円礫を運び、溝内に充塡したのであろう。

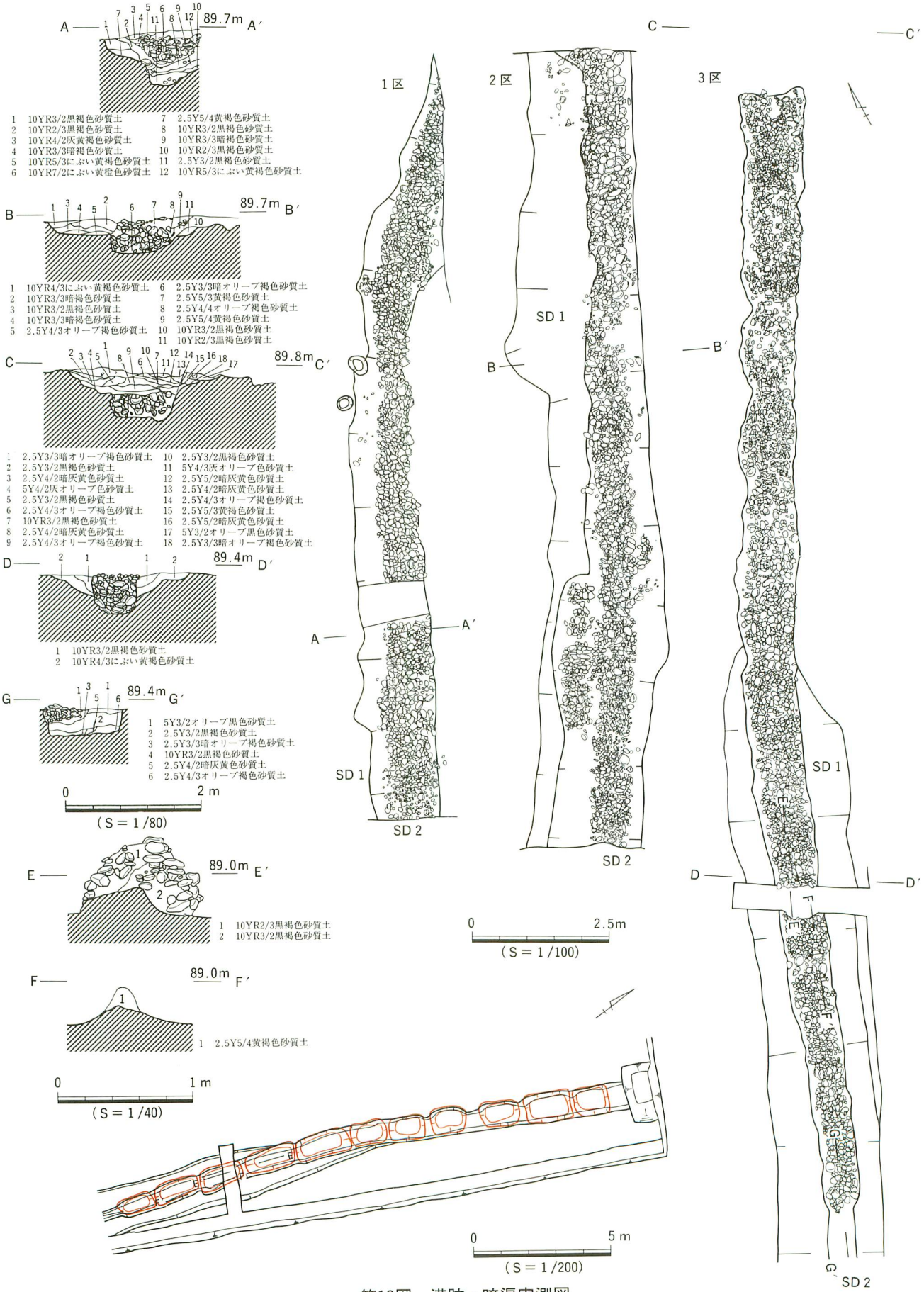
出土遺物は、打製石斧（207）、砥石（210～213、215）、剥片、磨石、打欠石錘、縄文土器、弥生土器（137、138）、土師器（139～143）、中世土師皿（144）、須恵器（145～154、156、157）、山茶碗（155、158～170）、古瀬戸（175～182）、瀬戸美濃大窯（183～189）、瀬戸美濃連房（190～201、205）、常滑陶器（172～174）、染付磁器（202～204）等が出土している。特に3区11Jグリッドで出土した山茶碗と近くにあった径10cmの円礫（171）にはベンガラが付着している（第5章第3節参照）。これら遺物のほとんどが暗渠内の円礫の隙間から出土した。縄文時代の土掘り具である打製石斧が15点出土し、須恵器は8世紀後半から9世紀初頭にかけてのものが多い。また、中世陶器や近世陶器が須恵器や土師器と上下関係なしに出土していることから、この円礫を採取した場所に須恵器や土師器を使用した遺跡や遺構があり、その場所から持ち込まれたものと考える。

本遺構の帰属時期は出土遺物と、2区でこの暗渠1層上で検出した土坑（SK13）内の炭化物を放射性炭素年代測定をした結果、江戸時代後半から明治時代にかけてのものと考えられる。（第5章第1節参照）

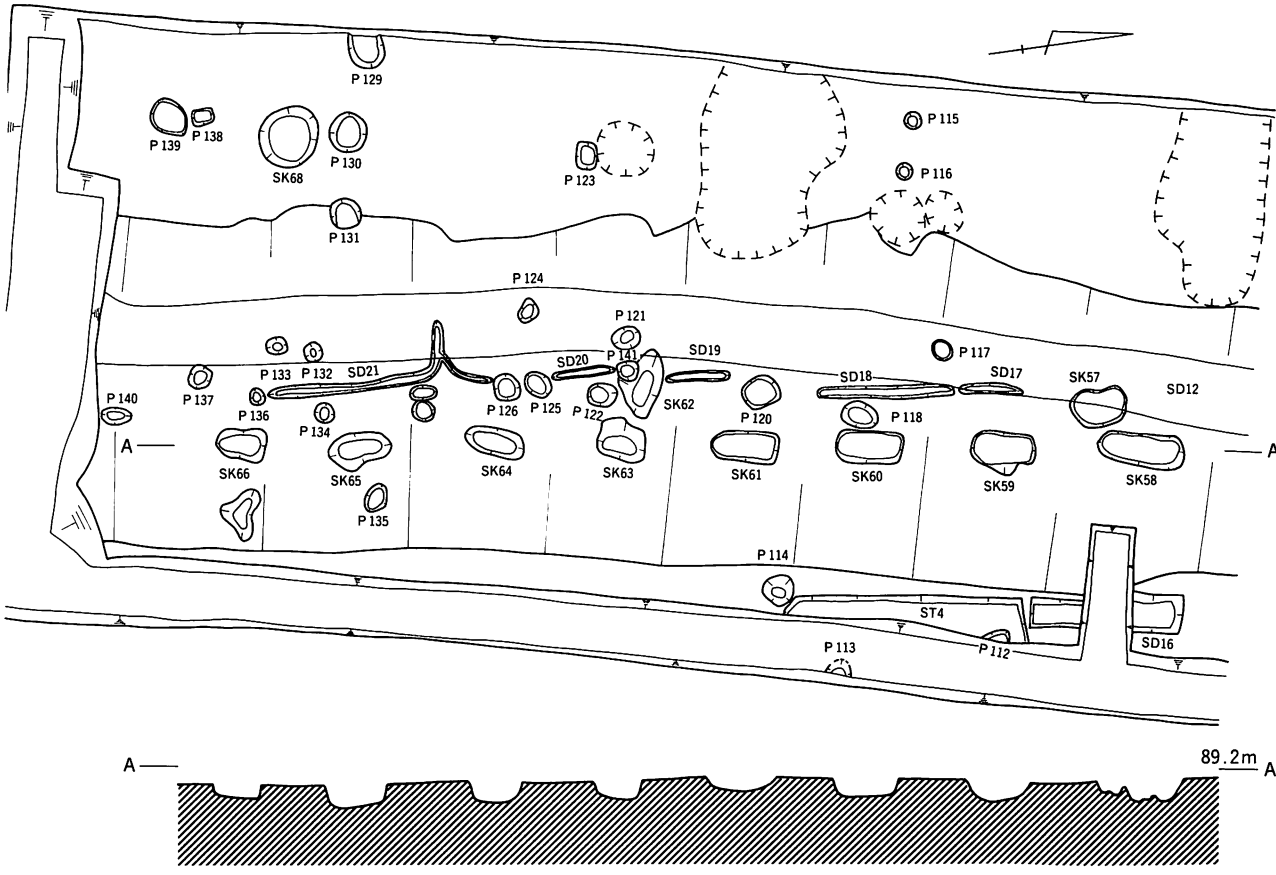
近くに為岡遺跡があるが、そこで検出された1号暗渠と非常に酷似している[3]。為岡遺跡と同じく河岸段丘の縁辺であり、地山が砂質土であり、自然の状態でも非常に排水がよいように思われるが、なぜここに暗渠が必要であったのかを考えると、地下水位が時には非常に高くなることや、ここで栽培されていた農作物と何らかの関係があったのかもしれない。1区のすぐ北側には現在も使用されている井戸があるが水面までは3mほどである。調査区の北西側に段丘崖があり、当調査区より約3m低い段丘面となっており、明治時代の土地利用図によると、水田として利用されていた。現在でも段丘崖から湧き出した水が流れている。

6　柱列状遺構（第19図）

5区南寄りの21F～23Eグリッドにかけての溝跡（SD12）の1層上面に検出した。8基の柱穴列である。柱穴の間隔が0.6m～0.7mである。それぞれの長軸長は0.52m～0.90m、短軸長は0.28m～0.35mで平面形態はほとんどが隅丸方形の柱穴である。最大深度は0.15m～0.26mである。掘形の立ち上がりは急であり、底面は平坦であるものが多いが、一部凸凹状のものがある。覆土はほぼ単層である。この柱穴の軸と並行して0.5m東側に溝跡と小穴がある。柱穴と溝跡は切り合わず、溝跡から遺物が出土していないので、直接の関係は不明だが、同じ溝跡（SD12）の1層上面に検出した事から考えると同時期のものと推測できる。遺物はSK58から剥片、土師器、山茶碗、磁器、SK59から打製石斧、



第18図　溝跡・暗渠実測図



第19図　柱列状遺構実測図

SK60から山茶碗、瀬戸美濃連房、SK63から山茶碗、古瀬戸、SK64から須恵器、SK65から須恵器、山茶碗、磁器が出土している。この遺構の帰属時期は溝跡（SD12）の1層上面であり、土坑覆土が表土であることから、近代以降のものである。

為岡遺跡では5本の同様な遺構を検出し、柱列状遺構として報告されている[4]。当遺構もこれに酷似している。明治時代の土地利用図によると、この溝跡が畑と林の地境になっており、東に畑が広がっている。その地割りと方向が共通することから、建物や柱の掘形ではなく、畑の栽培作物などと関係があるものと考える。

7　その他の遺構

性格不明遺構（SX 1）（第16図）

7区北東寄りの28D～29Dグリッドにかけての溝跡（SD12）の2層上面で検出した溝状の遺構である。石列（SA 1）の東側である。22条の溝状の遺構が東西方向に並行しているのを検出した。それぞれの溝跡の長軸長は0.84m～1.5mであり、短軸長は0.11m～0.4mである。最大深度は0.02m～0.1mである。溝の覆土は単層であり、粗砂を多く含む。溝の掘形はいずれも緩やかで、底面は平坦である。出土遺物は中世土師皿、山茶碗、瀬戸美濃連房である。この遺構の時期は石列（SA 1）と同じ面で検出されていることから同時期と考え、近代である。しかし、石列との関係は不明である。

この遺構の性格は、前述のように溝跡（SD12）が地境になっており、東側は現在、桑畑として利用されているので、耕作に関係しているものかもしれない。

小穴（Ｐ）

Ｐ２（第20図）

１区北東側４Ｎグリッドに位置する。出土遺物に山茶碗（221）がある。

Ｐ４・７（第20図）

１区北西側４Ｍグリッドに位置する。出土遺物にＰ４から須恵器（216）が、Ｐ７から山茶碗（219）がある。

Ｐ29

２区南西角８Ｍグリッドに位置する。西側は調査区外に続く。出土遺物に土師器がある。

Ｐ70

３区南側14Ｉグリッドに位置する。出土遺物に山茶碗がある。

Ｐ76

４区北西角16Ｇグリッドに位置する。出土遺物に土師器がある。

Ｐ81（第20図）

４区北西角16Ｈグリッドに位置する。包含層掘削の後、柱根として検出した。遺構の重複関係は溝跡（SD９）を切っている。１片が約５㎝で、長さ40㎝程のしっかりした角材で、端部は２側面が削られ杭状になっている。樹種同定の結果タウンというムクロジ科の東南アジアからの外来種であることがわかった。（第５章第４節参照）。木製品以外の出土遺物はない。本遺構の帰属時期は、遺構の重複関係から近世の遺構ではないかと考える。

Ｐ93

４区西側16Ｇグリッドに位置する。竪穴状遺構（ＳＴ３）の覆土上で検出する。出土遺物に須恵器（217）、山茶碗がある。

Ｐ96・99

４区西側中央付近16Ｇグリッドに位置する。出土遺物にＰ99から土師器が、Ｐ96から瀬戸美濃連房（224）がある。

Ｐ108

４区南東側18Ｇグリッドに位置する。溝跡（SD15）の埋土上面で検出をする。出土遺物に瀬戸美濃大窯、瀬戸美濃連房がある。

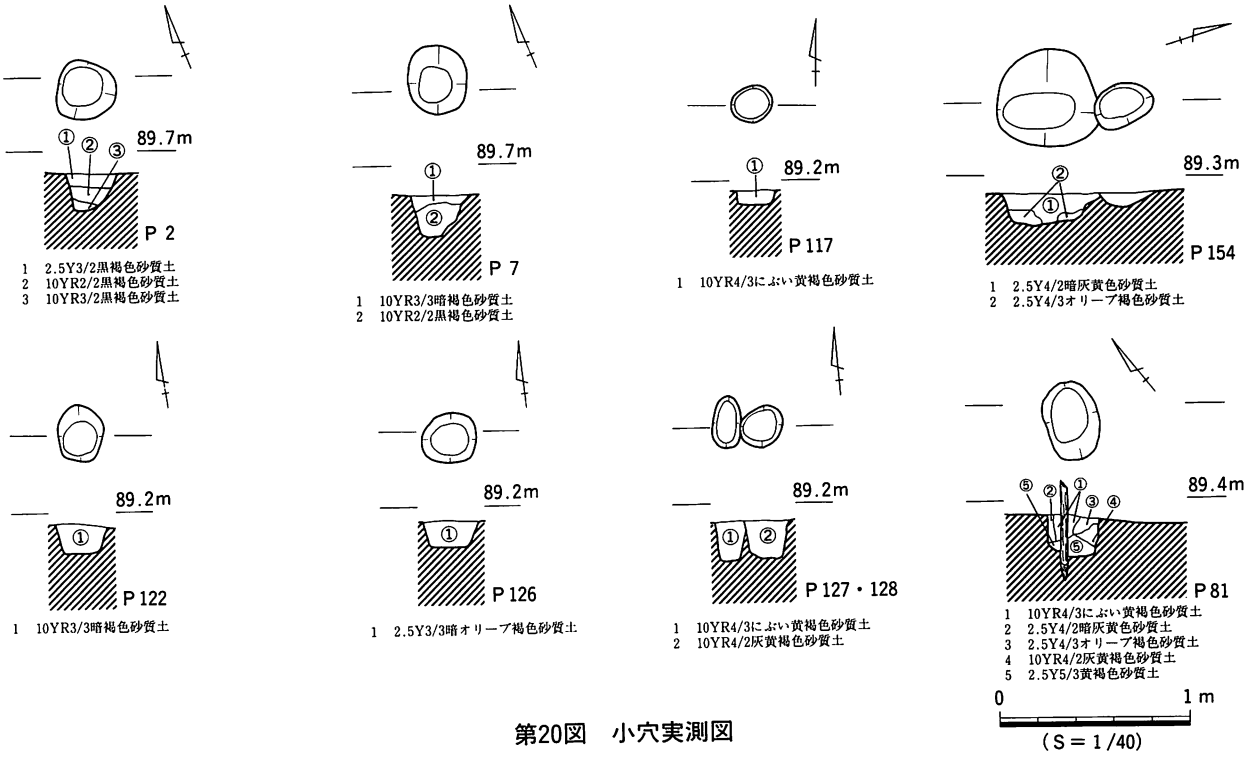
Ｐ110

４区南東側18Ｇグリッドに位置する。溝跡（SD15）の埋土上面で検出をする。出土遺物に土師器がある。

Ｐ111

５区北側20Ｆグリッドに位置する。溝跡（SD12）の埋土上面で検出する。出土遺物に常滑陶器（225）がある。

Ｐ117（第20図）・118・122（第20図）・126（第20図）・127（第20図）・128（第20図）



第20図　小穴実測図

5区南側22E～23Eグリッドに位置する。溝跡（SD12）の埋土上面で検出をし、前述の柱列状遺構の溝跡に伴うものである。出土遺物はP117から山茶碗（220）が、P118から山茶碗（222）が、P122から中世土師皿が、P126から山茶碗（218）がある。

P154（第20図）

6区南西側25Dグリッドに位置する。出土遺物に土師器甕がある。

P183

7区中央付近30Cグリッドに位置する。出土遺物に山茶碗がある。

P199

7区南西側36Aグリッドに位置する。出土遺物に山茶碗、瀬戸美濃連房小杯（223）がある。

P201

7区中央付近30Cグリッドに位置する。溝（SD12）の埋土上で検出する。出土遺物に土師器、土師器皿、山茶碗がある。

注1）美濃加茂市文化審議委員　間宮瑞夫氏の御教示による。

2）同上

3）為岡遺跡の暗渠については、渡辺博人他　1995『為岡遺跡発掘調査報告書』美濃加茂市教育委員会に報告されている。また、当遺跡の暗渠（SD2）については、美濃加茂市教育委員会の可児光生氏と藤村俊氏に遺構を実見して頂き、御指導を受けた。

4）為岡遺跡の柱列状遺構については、渡辺博人他　1995『為岡遺跡発掘調査報告書』美濃加茂市教育委員会に報告されている。また、当遺跡の柱列状遺構については、美濃加茂市教育委員会の可児光生氏に遺構を実見して頂き、御指導を受けた。

第4表　小穴属性一覧表(1)

遺構番号	グリッド	法量(cm) 長軸	短軸	深さ	出土遺物の有(○)無 土器	石器	金属・木	備考（切る＞切られる）
P 1	3M	44	30	12				
P 2	4N	31	31	20	○			
P 3	4M	40	40	36				
P 4	4M	30	30	9	○			
P 5	4M	44	38	10				
P 6	4M	52	46	11				
P 7	4M	38	30	27	○			
P 8	4M	32	32	15				
P 9	5M	37	30	38				＞SD 1
P10	5M	40	30	28				
P11	5M	28	28	27				
P12	5M	32	25	26				
P13	5M	30	30	27				
P14	5M	28	25	29				
P15	5M	30	28	25				
P16	5M	25	25	31				
P17	5M	28	28	32				
P18	5M	32	28	27				
P19	5M	32	32	25				＞SD 1
P20	6L	20	20	10				＜SK 9
P21	7L	33	30	17				
P22	7L	38	31	16				
P23	8L	35	31	14				＞P25
P24	8L	32	24	4				＞P25
P25	8L	(40)	(22)	11				＜P23、P24
P26	8L	(26)	28	24				＜南北 TR
P27	8K	44	36	20				
P28	8K	36	32	22				
P29	8K	42	(18)	25	○			調査区外に続く
P30	8K	28	28	8				
P31	9K	32	32	7				
P32	10J	40	40	18				
P33	10K	12	12	5				
P34	10K	20	20	8				
P35	10J	27	27	10				
P36	10J	30	18	7				
P37	12J	46	42	24				
P38	12J	44	38	23				
P39	12I	40	35	3				調査区外に続く
P40	12I	28	26	8				
P41	12I	28	28	8				
P42	12I	30	30	12				
P43	13I	24	20	8				
P44	13I	22	22	7				
P45	13I	30	26	23				
P46	13I	24	24	6				
P47	13I	19	16	10				
P48	13J	34	26	8				
P49	13I	44	44	15				
P50	13I	18	18	15				
P51	13I	24	12	6				
P52	13I	38	26	10				
P53	13H	38	34	17				
P54	13H	40	36	33				
P55	13H	(29)	41	20				調査区外に続く
P56	14I	50	46	21				
P57	14I	24	24	12				
P58	13I	27	27	5				
P59	13I	44	30	27				
P60	13I	38	38	13				
P61	14I	34	30	7				
P62	14I	30	30	20				
P63	14I	30	30	12				
P64	14I	42	42	24				
P65	14H	32	32	11				
P66	14H	44	(37)	12				＜P67
P67	14H	29	29	10				＞P66、P68
P68	14H	40	(30)	11				＜P67
P69	14H	33	33	12				
P70	14I	47	47	18	○			
P71	14H	34	32	12				
P72	14I	32	26	10				
P73	14H	35	35	10				
P74	14H	20	20	7				
P75	14H	40	30	12				
P76	15H	40	26	9	○			＜SK36
P77	15H	18	18	13				
P78	15H	(30)	30	17				調査区外に続く
P79	15H	16	16	23				
P80	15H	26	26	10				＜SK41
P81	15H	44	24	29			○	＞SD 9
P82	16H	23	23	9				
P83	16H	24	24	13				
P84	16H	26	26	3				
P85	16H	30	26	10				
P86	16H	20	18	7				
P87	16H	24	20	8				
P88	16H	24	18	13				
P89	16G	28	28	4				
P90	16G	30	30	18				
P91	16G	18	18	3				
P92	16G	25	25	10		○		＜P93
P93	16G	30	30	4	○			
P94	16G	30	30	6		○		
P95	16G	25	25	11				
P96	16G	30	30	12	○			
P97	16G	26	26	3				
P98	16G	39	39	6		○		
P99	16G	24	24	13	○			
P100	16G	20	20	7				＜P101
P101	16G	32	32	10				＞P100

第5表　小穴属性一覧表(2)

遺構番号	グリッド	法量(cm) 長軸	短軸	深さ	出土遺物の有(○)無 土器	石器	金属・木	備考(切る＞切られる)
P102	16G	30	20	8				
P103	16G	45	35	6				
P104	17G	29	24	7				
P105	17G	31	31	12				
P106	17G	30	30	15				
P107	18G	26	26	6				
P108	18G	21	21	4	○			
P109	18G	36	36	3				
P110	18G	48	44	17	○			
P111	19F	50	36	20	○			
P112	21F	(20)	(9)	7				＜南北 TR
P113	22F	21	(16)	(10)				調査区外に続く
P114	22F	30	30	12				
P115	22E	18	18	5				
P116	22E	14	14	4				
P117	22E	21	21	5	○			
P118	22E	38	28	14	○			
P119	22E	14	14	24				
P120	22E	39	38	16				
P121	22E	30	26	19				
P122	22E	30	25	15	○			
P123	22E	28	22	15				
P124	22E	29	24	4				
P125	22E	29	25	9				
P126	23E	22	22	13	○			
P127	23E	34	18	21				＜P128
P128	23E	24	24	20				＞P127
P129	23D	(35)	36	6				調査区外に続く
P130	23E	40	40	8				
P131	23E	32	32	18				
P132	23E	22	19	21				
P133	23E	22	20	20				
P134	23E	22	22	14				
P135	23E	32	24	13				
P136	23E	18	15	16				
P137	23E	29	29	14				
P138	23D	24	17	4				
P139	23D	46	35	5				
P140	23E	35	19	7				
P141	22E	23	23	6				＞SK62
P142	24D	28	21	13				
P143	24D	34	34	6				＞SK62
P144	24D	26	20	10				P130の底部で検出
P145	24D	42	35	7				＞SK71、SK69
P146	24D	38	24	4				
P147	25D	34	34	10				
P148	25D	48	42	38				
P149	25D	21	21	20				
P150	25D	26	20	11				
P151	25D	34	22	8				＞P154
P152	25D	18	18	10				
P153	25D	41	36	31				
P154	25D	54	56	17	○			＜P151
P155	25D	24	18	5				
P156	25D	36	26	13				
P157	25D	29	29	31				
P158	25D	18	18	9				
P159	25D	28	28	16				
P160	26D	25	25	10				
P161	26D	30	20	10				
P162	26D	26	22	5				
P163	26D	32	26	8				
P164	26D	18	18	10				
P165	26D	30	24	10				
P166	26D	25	25	22				
P167	26D	(20)	18	8				＜撹乱
P168	26D	28	(20)	8				＜撹乱
P169	26D	20	14	12				
P170	26D	22	18	3				
P171	26D	42	(24)	12				＜撹乱
P172	27D	32	28	8				
P173	27D	24	27	12				
P174	27D	25	22	15				
P175	29C	32	42	25				
P176	28C	36	30	24				
P177	28D	38	38	27				
P178	29D	46	34	31				
P179	28C	38	23	12				
P180	29C	29	29	45				
P181	29C	20	20	5				
P182	29D	36	30	27				
P183	30C	26	26	31	○			
P184	31C	25	18	14				
P185	31D	38	32	10				
P186	31C	20	10	26				
P187	31C	23	22	43				
P188	31C	24	22	22		○		
P189	31B	30	28	13				
P190	31C	27	22	25				
P191	31B	29	26	10				
P192	32C	28	26	13				
P193	31C	24	20	10				
P194	31C	28	22	12				
P195	32C	24	20	15				
P196	32B	32	30	16				
P197	32B	25	26	13				
P198	34B	38	38	13				＞SD31
P199	36A	32	28	34	○			
P200	28C	26	26	12				
P201	30C	31	31	53	○			

第４章　遺　　物

第１節　出土遺物の概要

出土遺物は中近世・近代の土器・陶磁器が大半であるが、縄文時代の土掘り具である打製石斧が比較的多く出土しているのが特徴である。その他に、少量の縄文土器、弥生土器等の土器類、土製品、石器・石製品、金属製品・銭貨などが出土した。数量の内訳は接合前破片数（１㎝以上）で土器・陶磁器2,611点、土製品５点、石器・石製品165点、金属製品32点、銭貨７点、木製品14点である。出土した土器･陶磁器の種別は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、中世土師皿、山茶碗、輸入磁器、古瀬戸、瀬戸美濃大窯、瀬戸美濃連房、常滑陶器、磁器、瓦器で、この他に分類不能の土器や陶器が若干ある。時期によって量の多寡はあるものの縄文時代から明治時代までほぼ連綿と各時代の遺物が確認できる。

原則として遺物の種類や性格などが明確で図示に耐えうるものは全て掲載した。掲載点数は295点に及ぶ。掲載した遺物のうち遺構内出土遺物については下記に記し、その他は観察内容を一覧表にまとめた[1)]。（第６～23表）

第２節　遺構内出土遺物

１　溝跡（SD）

SD12

縄文土器（第21図-１）

１は深鉢の体部である。外面は撚糸文が施される。縄文中期前葉船元１か２期と考えられる。

中世土師皿（第21図-２～５）

２～５は薄手の土師質の皿であり、うち３、４は小皿である。２、３は轆轤で仕上げたものである。４は内面横ナデにより調整され、外面は指頭圧痕が認められる。５はやや厚手で、直線的に口縁が開いている。内面横ナデにより調整され、外面は指頭圧痕が認められる。外面口縁部に煤が付着している。

灰釉陶器（第21図-６、７）

６は瓶子の頸部である。内面に自然釉が付着している。７は碗の底部である。内外面ともに回転ナデにより調整され、内面に自然釉が付着している。折戸53号窯式と考えられる。

須恵器（第21図-８、９）

８は壺の口縁部である。回転ナデにより調整され、自然釉が付着している。８世紀末と考えられる。９は杯身の底部である。底部は回転ヘラ削り、その他は回転ナデにより調整され、貼り付け高台である。内面は摩滅が激しい。８世紀前半と考えられる。

山茶碗（第21図-10～26）

10は均質手の無高台碗の底部である。体部内外面は回転ナデにより調整され、底部外面に回転糸切痕、底部内面に磨消痕が認められる。内外面に少量の自然釉が付着している。11は均質手の碗の底部

である。体部内外面は回転ナデにより調整され、底部外面は回転糸切痕が認められる。逆三角形の大きめの高台が貼り付けられ、内面はかなり摩滅が認められる。12は均質手の皿の底部である。体部内外面は回転ナデにより調整され、底部外面は回転糸切痕が認められる。13は均質手の碗の底部である。体部内外面は回転ナデにより調整され、底部外面に回転糸切痕と板目状圧痕、高台端部と底部内面に籾殻痕、底部内面に磨消痕が認められる。内面に自然釉が付着している。14は均質手の無高台碗の底部である。体部内外面は回転ナデにより調整され、底部外面は回転糸切痕が認められる。15は均質手の碗の口縁部である。口縁部は直線的に開き、体部内外面は回転ナデにより調整される。16は均質手の無高台碗の底部である。体部内外面は回転ナデにより調整され、底部外面に回転糸切痕、底部端部と底部内面に籾殻痕が認められる。17は均質手の碗の底部である。体部内外面は回転ナデにより調整され、底部外面に回転糸切痕、内面に磨消痕が認められる。貼付高台であり、高台端部に籾殻痕が認められる。内面に自然釉が付着している。18は均質手の無高台碗の底部である。体部内外面は回転ナデにより調整され、底部外面に回転糸切痕、底部内面に磨消痕が認められる。口縁部内面に自然釉が付着している。19は均質手の碗の底部である。体部内外面は回転ナデにより調整され、底部外面に回転糸切痕、高台端部と底部内面に籾殻痕、底部内面に磨消痕が認められる。内面に自然釉がわずかに付着し、内面籾殻痕に煤が多く付着している。20は均質手の碗の底部である。体部内外面は回転ナデにより調整され、底部外面に回転糸切痕、高台端部と底部内面に籾殻痕が認められる。内面に自然釉がわずかに付着している。21は均質手の碗の口縁部である。器壁は薄く、口縁外部がやや凹んでいる。体部内外面は回転ナデにより調整されている。口縁部から内面に自然釉が付着している。22は均質手の碗の底部である。体部内外面は回転ナデにより調整され、底部外面は回転糸切痕が認められる。細い紐状の高台が貼り付けられている。内面はやや摩滅が認められる。23は均質手の碗の底部である。体部内外面は回転ナデにより調整され、底部外面に回転糸切痕、高台端部と底部内面に籾殻痕が認められる。内面に自然釉がわずかに付着している。24は均質手の無高台碗の底部である。体部内外面は回転ナデにより調整され、底部外面に回転糸切痕が認められる。25は均質手の碗の底部である。体部内外面は回転ナデにより調整され、底部外面は回転糸切痕が認められる。26は均質手の碗の底部である。器壁は厚く体部内外面は回転ナデにより調整され、底部外面に回転糸切痕、高台端部、底部内面に籾殻痕が認められる。底部外面に高台が貼り付けられている。

古瀬戸（第21図-27～30、第22図-31～44、第23図-45-１、２、３）

27は洗の口縁部である。内外面ともに回転ナデにより調整され、灰釉が施されている。古瀬戸前期と考えられる。28は桶の口縁部である。内外面に鉄釉が施され、内面には煤が付着している。体部に二条の沈線が施される。30は釜の底部である。内面に回転ナデにより、同心円状の溝がつけられる。29、31、34、37は折縁深皿の底部である。外面底部周辺は回転ヘラ削りで、内面は回転ナデで調整され、指押さえで脚がつけられる。底部は露胎し、内面は灰釉が施される。４つとも古瀬戸後期と考えられる。29、31、37は、脚が、底部から体部にかけて取り付けられているが、34は、体部に取り付けられている。31は、脚部が大きく、外面は指押さえ、内面はヘラ押さえされている。37は脚が３脚つくと考えられる。32は水注の注口部である。外面は削りにより調整され、灰釉が施される。古瀬戸前期と考えられる。33、36は擂鉢である。内外面に錆釉が施され、33は底部に回転糸切痕があり、擂目は一単位８条、幅2.2cmを測る。36は口縁部であり縁帯が内側に折返される。35は壺の口縁部分である。

内外面ともに回転ナデにより調整され、灰釉が施されている。古瀬戸中期と考えられる。38、39は縁釉小皿の底部である。底部に回転糸切痕があり、回転ナデにより調整される。錆釉が施され、38には底部外面に輪ドチ痕がある。古瀬戸後期と考えられる。40は瓶子III類の頸部である。内外面に鉄釉が施され、外面に沈線が１条ある。41は壺か瓶子の底部と考える。内外面に灰釉が施される。底部周辺は回転ヘラ削りにより調整される。42は広口壺の口縁部である。43は壺の体部である。内外面に灰釉が施される。44は鉢の体部である。45-１、２、３は祖母懐壺である。接合はできないが、同一個体と考える。内外面に鉄釉が施され、底部は回転ヘラ削り、その他は回転ナデにより調整される。体部外面に耳が４基つけられる。古瀬戸後期と考えられる。

常滑陶器（第23図-46～51、第24図-54、55）

46は甕の体部であり、外面は縦方向に板ナデで、内面は横方向に板ナデ後ハケで調整されている。47～50は甕の口縁部である。47は内外面とも回転ナデにより調整され、鉄釉が施されている。48、50は頸部が縁帯と密着し、縁帯上部が折り返しの部分より上位に位置する。49は口縁は外反しており、自然釉が付着している。内面に指押さえ痕がある51は壺の口縁部である。外面は回転ナデで、内面は板ナデ、指押さえ痕、輪積み痕がある。54、55は甕の底部である。底部は砂敷で内外面に板ナデで調整がある。46、47、54は近世常滑陶器（赤物）である。

瀬戸美濃（大窯）（第23図-52、53、第24図-56～59、61）

52は灯明皿である。底部外面は回転ヘラ削りにより作られ、内面は回転ナデの後、コテの押佐により同心円状に３条溝が入る。内外面共に錆釉が施される。53は菊皿の口縁部である。56は桶の底部である。底部外面は回転ヘラ削りにより調整され、２条の沈線がある。底部外面と内面に煤が付着している。体部外面には鉄釉が施され、底部は露胎である。57は丸皿の底部であり、内外面に灰釉が施され、内外面に釉溜まりがある。58、61は擂鉢の底部である。共に内面の摩耗はかなり激しい。58は器壁が厚手であり、擂目一単位12条、幅2.8cmを測る。底部は回転糸切痕があり、内外面に錆釉が施される。61は擂目一単位９条、幅2.2cmを測る。底部は回転糸切痕があり、内外面に錆釉が施される。59は加工円盤である。削出高台で内面に鉄釉が施される。天目茶碗の底部を加工したものである。

瀬戸美濃（連房）（第24図-60、62～72、第25図-76）

60は加工円盤である。底部は回転ヘラ削りで、内面には梅小花の染付がある。丸碗を加工したものと考えられる。62は重ね物である。外面底部周辺を回転ヘラ削りで、その他を回転ナデにより調整し、内外面の口縁部に灰釉が施される。63は桶の体部である。回転ナデで調整され、外面に沈線が１条あり、指つまみの後指押さえによる耳が１基付いている。内外面鉄釉が施される。64は瓶掛火鉢の底部である。底部は台脚であり、体部は外反して立ち上がる。底部外面は回転ヘラ削り、内面は回転ナデにより調整され、外面には緑釉が施されている。65は腰錆湯呑の底部である。削出高台で、露胎しており、外面と高台内部に鉄釉が、内面には灰釉が施されている。66は灯明皿（受皿）である。体部下方外面は回転ヘラ削りにより調整され、底部周辺を除き錆釉が施される。内面突出部は口縁部より低く、桟部切れ込み部に指押さえ痕がある。67は丸碗の底部である。削出高台で、回転ナデにより調整され、内外面に灰釉が施される。68は香炉の底部である。指つまみの後指押さえによる脚部が１基付いている。回転ナデにより調整され、内面は灰釉が施され、円錐ピン痕がある。69は壺の口縁部である。回転ナデにより調整され、内外面に鉄釉が施される。70は志野織部の大皿の底部であり、削出高

台で、底部外面周辺は回転ヘラ削りである。内面は底部に鉄絵による模様が描かれ、長石釉が施される。円錐ピン痕がある。71は小杯（せんじ）である。削出高台で、底部外面周辺は回転ヘラ削りであり、その他は回転ナデで調整される。底部は露胎し、内面と口縁部外面は長石釉が施される。72は平碗の体部である。回転ナデにより調整され、内外面に透明釉を施し、外面には鉄絵で模様が描かれている。76は箱形湯呑の体部である。外面に呉須絵による菊花文が描かれている。

瓦器（第24図-73）

73は風炉の体部の飾り窓部分と考える。外面は回転ナデにより調整され、内面は縦方向にハケ目調整された後、指押さえがある。

磁器（第25図-74、75、80）

74は端反碗の口縁部であり、内外面に呉須絵による染付が施される。75は染付丸碗の口縁部である。回転ナデにより調整され、内外面に呉須絵で模様が施されている。80は銅板プリントによる染付をした丸碗である。

輸入磁器（第25図-77～79）

77は白磁碗口縁部であり、口縁部は折り返して密着している。内外面ともに回転ナデ調整が認められる。78は青磁碗口縁部である。ヘラ状工具により、蓮弁文が施されている。79は白磁碗の口縁部である。内面は剝離しており、外面は回転ナデ調整が認められ、太宰府分類白磁碗Ⅳ類と考えられる。

金属製品（第25図-81、82）

81は鉄製の釘である。先端部でほぼ直角に曲がっている。82は鉄製の草刈り鎌である。先端部は欠損している。鎌の刃部は直線的である。持ち手部は木製であり、２つに割ったところに刃部を差し込み、留め金で締めてある。

石器・石製品（第25図-83～88）

83は石臼である。84は磨石である。85はスクレイパーである。86は方形の手持ち砥石であり、仕上げ砥と考えられる。87は茶臼の下臼部分と考える。88は有肩扇状石器である。欠損したあと、刃部を再加工した痕がみられる。

SD15

中世土師皿（第26図-89）

89は薄手の土師質の皿である。横ナデで調整され、内外面に指押さえ痕が認められる。口縁部はややつまみ上げられており、京都系と考えられる。

須恵器（第26図-90）

90は高杯の底部である。内外面ともに回転ナデにより調整され、脚部内面はヘラ状のもので押さえた痕が認められる。外面は摩滅が激しい。

山茶碗（第26図-91）

91は均質手の碗の底部である。体部内外面は回転ナデにより調整され、底部外面は回転糸切痕が認められる。内面の摩滅が激しく、底部にわずかに煤が付着している。

古瀬戸（第26図-92～96）

92、95は平碗の口縁部である。内外面とも回転ナデにより調整され、灰釉が施されている。93は天

目茶碗の口縁部である。やや外に開いており、口縁部は凹んでおり、外反する。回転ナデにより調整され、内外面に鉄釉が施される。94、96は擂鉢の口縁部である。内外面とも回転ナデ調整で、錆釉が施されている。94は縁帯が内面の低い位置にあり口縁の先端よりも低くなっている。96は縁帯が口縁部内側にあり、口縁先端よりも上位にある。

瀬戸美濃（大窯）（第26図-97）

97は灯明皿の底部である。体部内外面は回転ナデにより調整され、底部外面に回転糸切り痕、体部内面には同心円状に6条の溝がつくられ、さらにコテの押佐による小突線が6本認められる。無釉である。

SD10

土師器（第26図-98）

98は高杯の脚部である。内外面とも摩滅がかなり激しく、内面の脚の中心部分には指押さえ痕がある。松河戸様式と考える。

中世土師皿（第26図-99）

99は薄手の土師質の皿の底部である。横ナデで調整される。京都系と考えられる。

山茶碗（第26図-100）

100は均質手の皿である。器高が低く、底部と体部外面の境が凹み、内面中央部が凹んでいる。内外面ともに回転ナデで調整され、底部は回転糸切痕が認められる。

古瀬戸（第26図-101、102）

101は縁釉小皿の口縁部である。少し外反しており、内外面とも回転ナデにより調整され、口縁部内外面に灰釉が施される。102は折縁深皿の口縁部である。口縁部が外反し、縁帯が口縁先端より上位にくる。内外面とも回転ナデにより調整され、内外面に灰釉が施される。

SD33

山茶碗（第26図-103）

103は均質手の碗の底部である。体部内外面は回転ナデにより調整され、底部外面に回転糸切痕と板目状圧痕、高台端部に籾殻痕が認められる。内面はやや摩滅しており、自然釉がわずかに付着している。

SD29

山茶碗（第26図-104）

104は均質手の皿である。器壁はやや厚く、口縁部は直線的に開いており、内外面ともに回転ナデで調整で、底部は回転糸切痕が認められる。口縁端部に少量の自然釉が付着し、内面はやや摩滅している。

SD26

古瀬戸（第26図-105）

105は卸皿の口縁部である。内外面とも摩滅が激しく、縁帯が内側につき、口縁先端よりも上位にくる。内外面とも回転ナデにより、調整され、灰釉が施されている。

SD11

山茶碗（第26図-106）

106は均質手の碗の口縁部である。器壁は薄く、直線上に立ち上がり口縁部がわずかに凹む。内外面ともに回転ナデで調整されている。

SD 1

須恵器（第26図-107）

107は杯身の底部である。底部外面は板ナデであり、その他は回転ナデである。高台はやや外反した削出高台である。内面は摩滅している。

瀬戸美濃（大窯）（第26図-108）

108は志野丸皿の口縁部である。外面体部は回転ヘラ削りで、外面口縁部から内面は回転ナデにより調整される。内外面に長石釉が施される。

山茶碗（第26図-109）

109は均質手の碗の底部である。高台は欠損しており内面の摩滅は激しい。体部内外面は回転ナデにより調整され、底部外面に回転糸切痕が認められる。内面に自然釉がわずかに付着している。

土製品（第26図-110）

110は土錘である。中央部に最大径を持ち、端部は面取りが施されている。

石器・石製品（第32図-206、208、209、第33図-214）

206、208は打製石斧である。206は中央部で、208は先端部で折損している。209は磨石である。214は打欠石錘である。

金属製品（第26図-111）

111は鍬か鋤の一部である。

SD 3

石器・石製品（第26図-112）

112は石臼である。

2　土坑（SK）

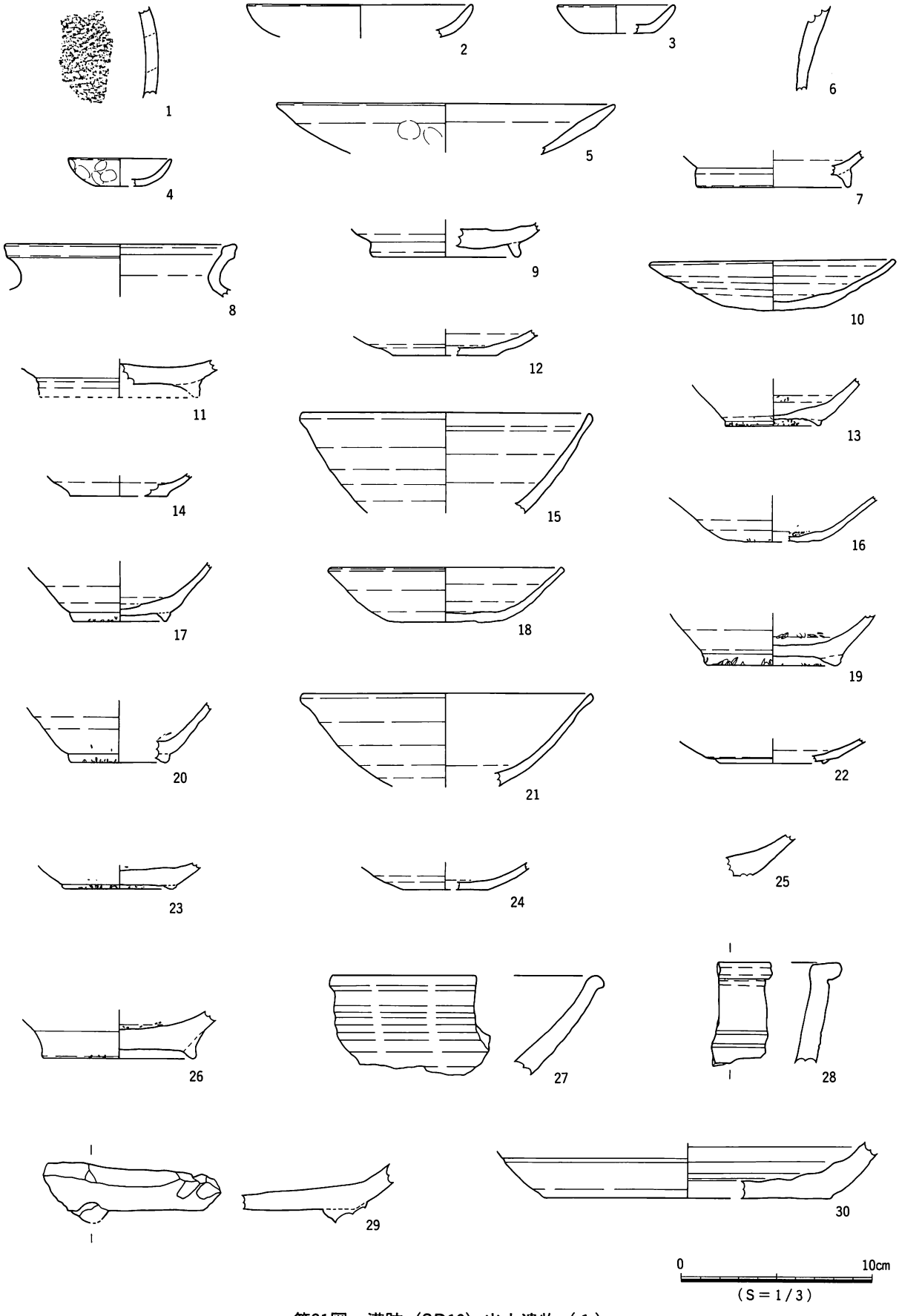
SK20

須恵器（第27図-113）

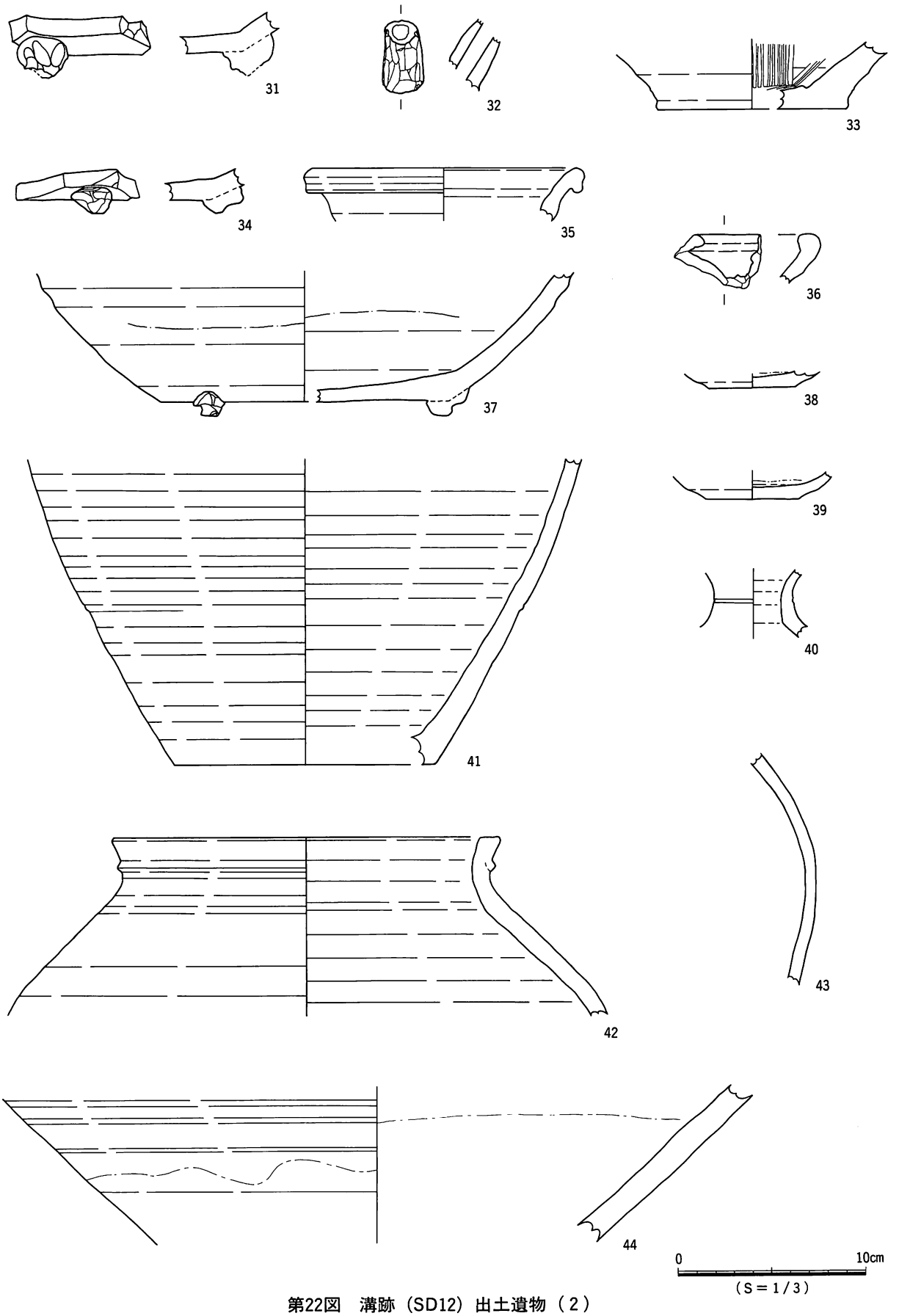
113は杯蓋である。摘み部周辺回転ヘラ削りで、その他は回転ナデで調整される。

SK49

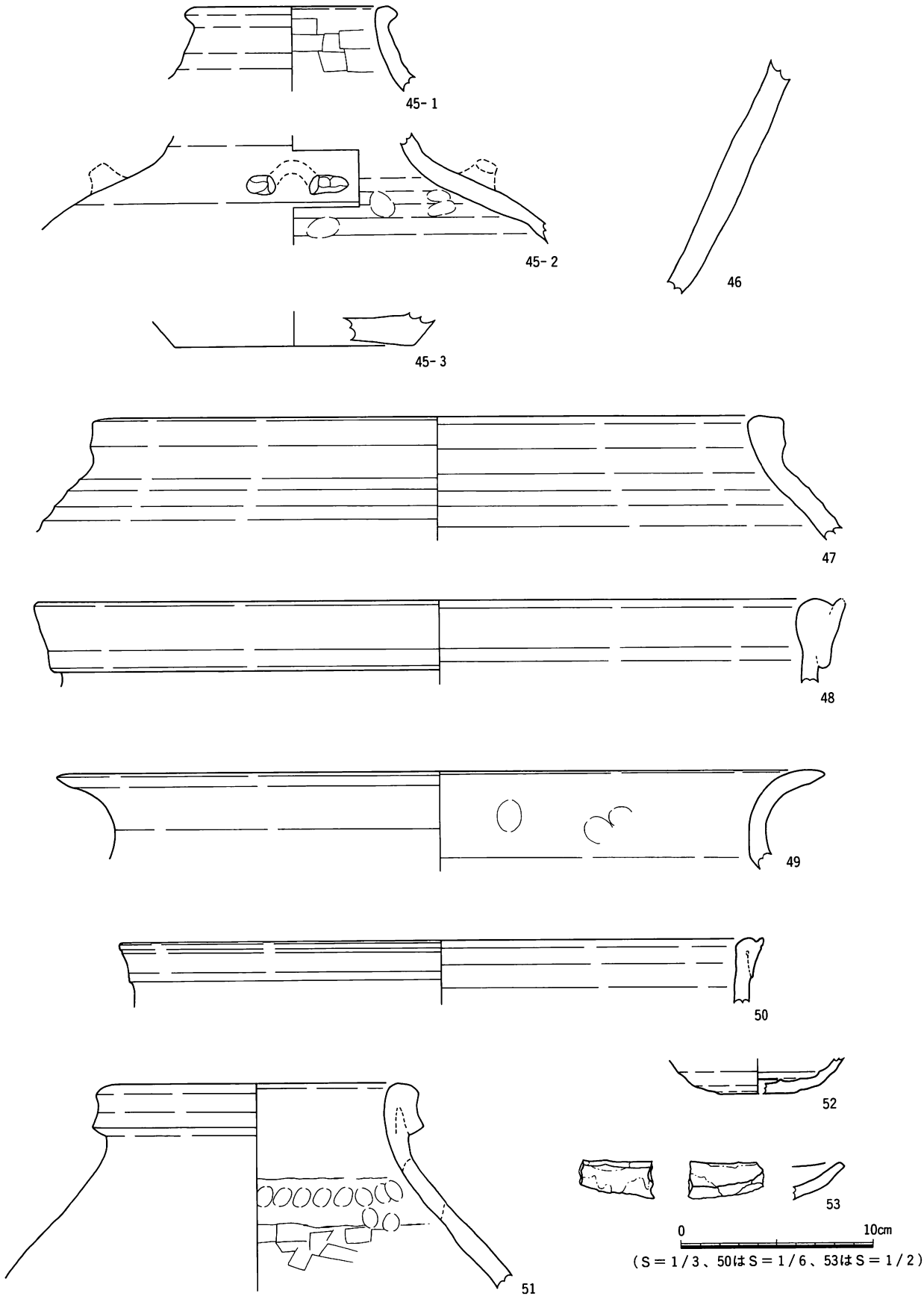
縄文土器（第27図-114）



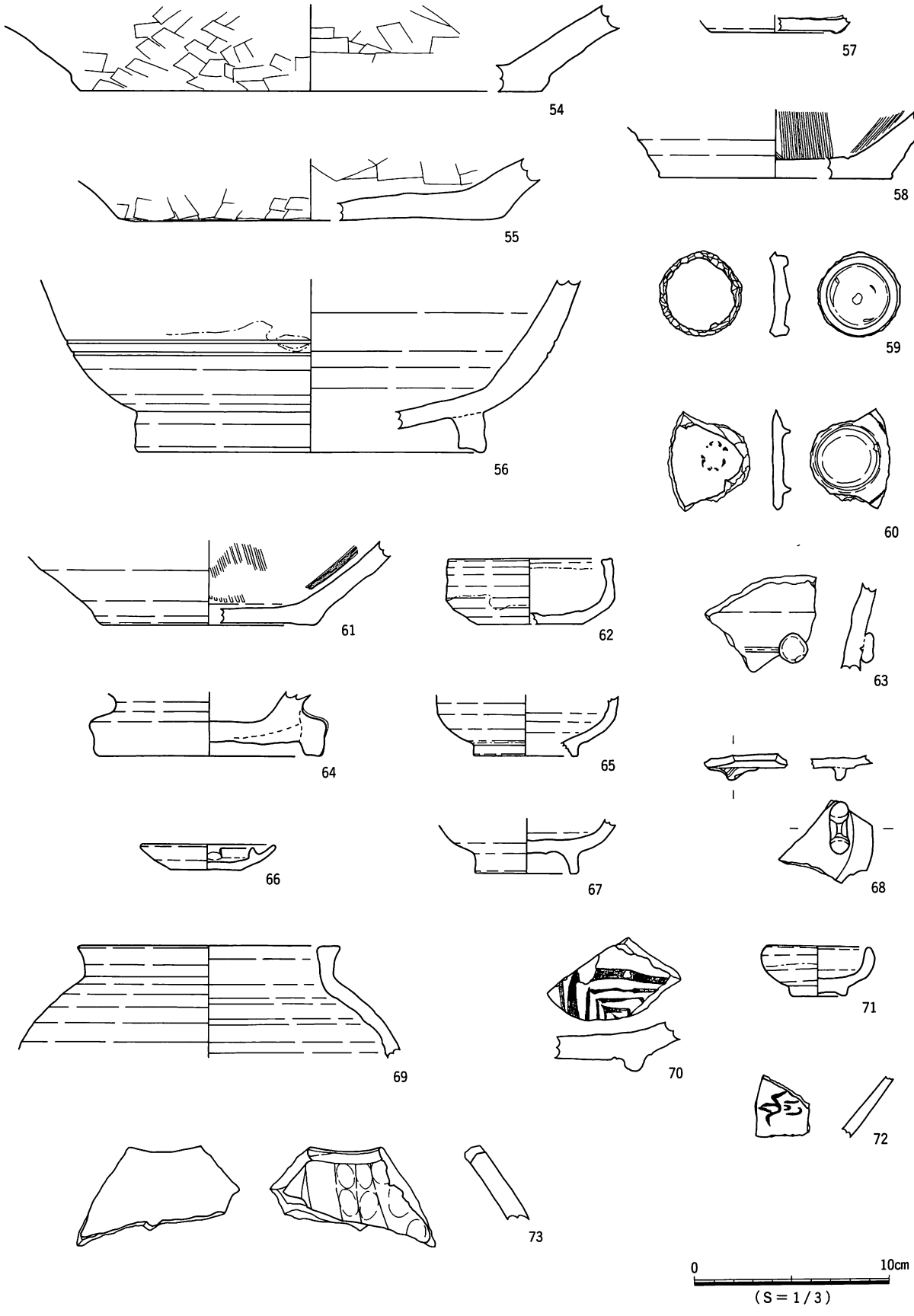
第21図　溝跡（SD12）出土遺物（１）



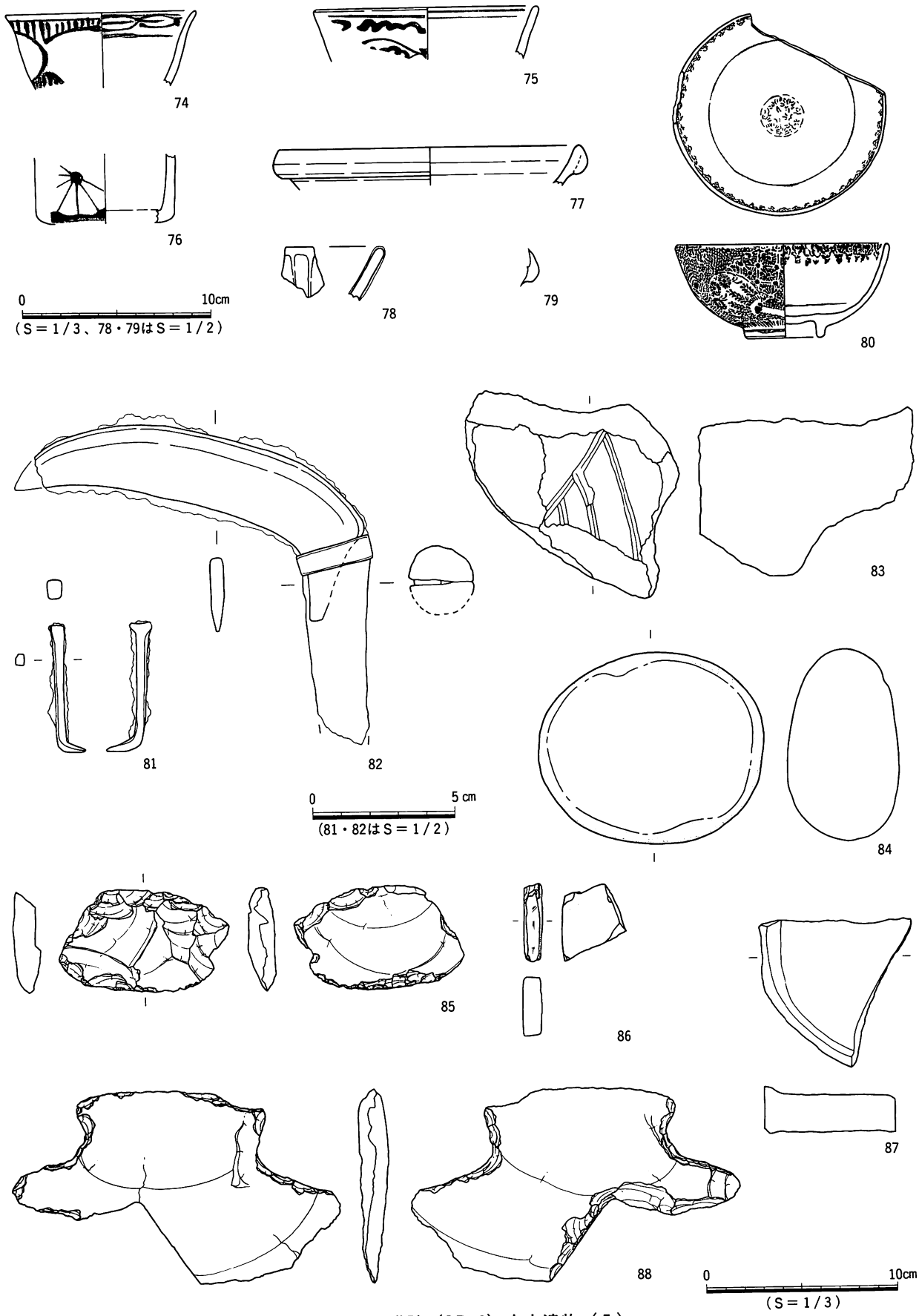
第22図　溝跡（SD12）出土遺物（2）



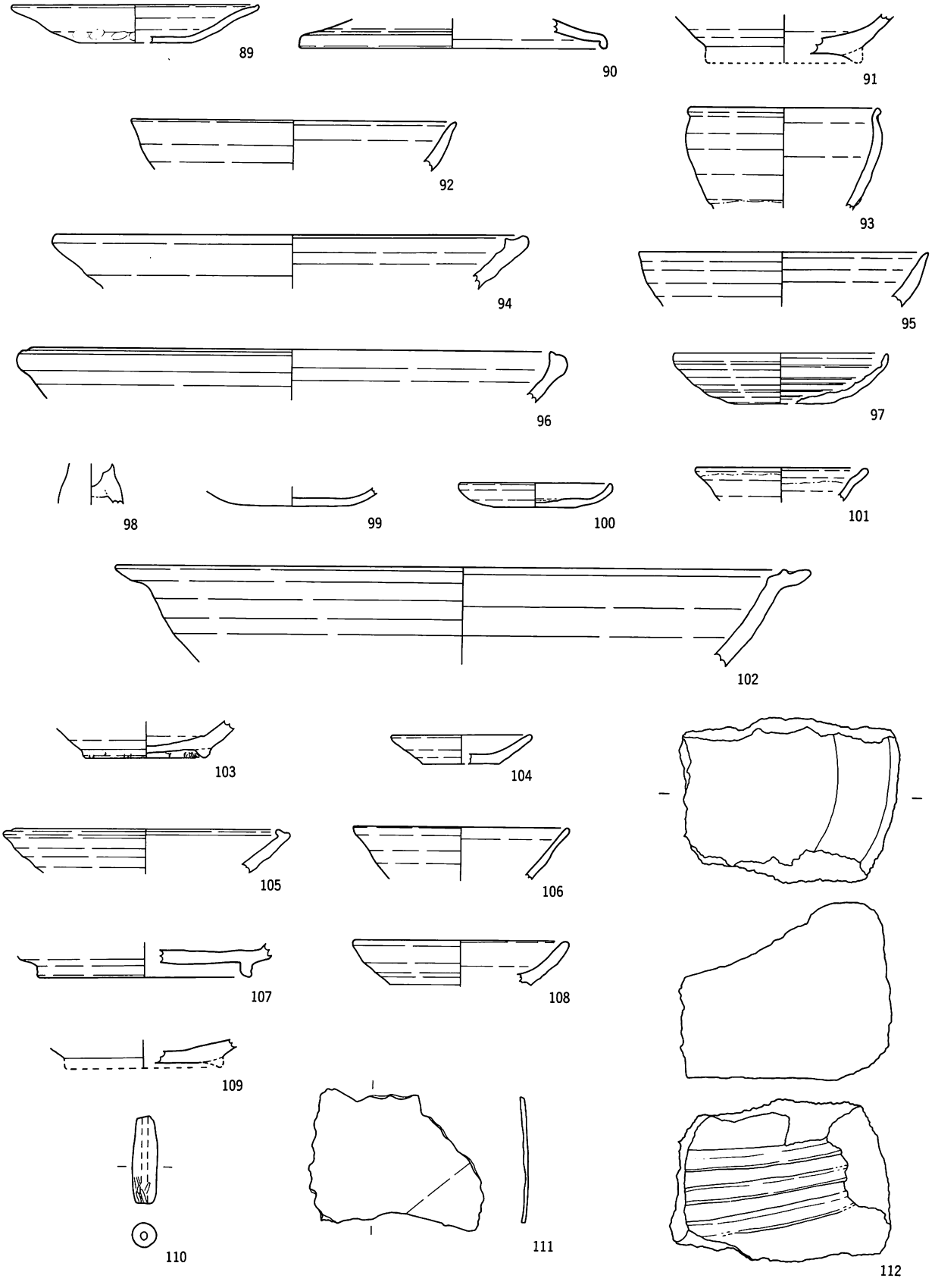
第23図　溝跡（SD12）出土遺物（３）



第24図　溝跡（SD12）出土遺物（4）



第25図　溝跡（SD12）出土遺物（５）


89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
0　10cm
(S＝1/3)
0　5 cm
(111はS＝1/2)

第26図　溝跡出土遺物

114は深鉢である。破片が小さいため、詳細は不明であるが、内外面は指ナデにより調整され、ヘラ状工具による沈線が１条、管状工具による刺突が５箇所認められる。縄文中期末と考えられる。

山茶碗（第27図-118）

118は均質手の碗の底部である。体部内外面は回転ナデにより調整され、逆三角形の高台であり、高台端部に籾殻痕がわずかに認められる。内外面ともにかなり摩滅しており、内面に煤がわずかに付着している。

SK48

古瀬戸（第27図-115）

115は瓶子の肩部である。回転ナデにより調整され、外面に灰釉が施される。

SK84

土師器（第27図-116）

116は土師質の皿の口縁部である。内面横ナデにより調整され、外面は指頭圧痕が認められる。

SK81

山茶碗（第27図-117）

117は均質手の碗である。器壁は薄く、直線的に開き、体部内外面は回転ナデにより調整され、底部外面に回転糸切り痕、高台端部と底部内面に籾殻痕、底部内面に磨消痕が認められる。外面口縁部から内面全体に自然釉が付着している。

SK86

山茶碗（第27図-119）

119は均質手の碗の口縁部である。器壁は薄く、直線的に開いている。体部内外面は回転ナデにより調整されている。

SK74

古瀬戸（第27図-120）

120は擂鉢の口縁部である。体部外面は回転ヘラ削りであり、口縁部から内面にかけて回転ナデにより調整される。擂目は一単位15条、幅3.8cmを測る。口縁部は縁帯が内側に作られ、口縁端部より下位にくる。注口部は指押さえにより、縁帯をつぶし、口縁部を外反させて作られている。内外面に錆釉が施されている。

金属製品（第27図-124）

124は、古銭（寛永通宝）７枚と刀子である。124-Ａは寛永通宝の四ツ宝銭で一部欠損している。124-Ｂは寛永通宝の水戸銭である（古寛永銭）。124-Ｃは寛永通宝が２枚重なっている。124-Ｄは寛永通宝の重揮通無背銭（石ノ巻）である。124-Ｅは、寛永通宝が２枚重なっているが、１枚は重揮通無背銭（石ノ巻）である。

SK80

古瀬戸（第27図-121）

121は縁釉小皿の口縁部である。内外面とも回転ナデにより調整され、灰釉が施されている。

SK77

山茶碗（第27図-122）

122は均質手の碗の底部である。体部内外面は回転ナデにより調整され、底部外面に回転糸切痕と板目状圧痕、高台端部と底部内面に籾殻痕、底部内面に磨消痕が認められる。内面に自然釉がわずかに付着している。

SK83

石器・石製品（第27図-123）

123はスクレイパーである。折損した打製石斧を再加工したものと考えられる。

SK59

金属製品（第27図-125）

125は鉄製の釘である。先端部は欠損している。

3　竪穴状遺構（ST）

ST 3

縄文土器（第28図-126）

126は深鉢の体部である。外面に渦巻き状の沈線があり、その周囲に市松状で楕円形に押型文が施されている。縄文後期中葉の北白川上層3式併行と考えられる。

須恵器（第28図-127、128）

127は無台杯身の底部である。底部は指ナデであるが粘土紐を輪積みした痕が残る。体部内外面は回転ナデにより調整されている。128は杯蓋の口縁部である。体部内外面は回転ナデにより調整されている。口縁端部は少し外反し、折り返されている。

古瀬戸（第28図-129）

129は平碗の体部である。内外面とも回転ナデにより調整され、灰釉が施されている。

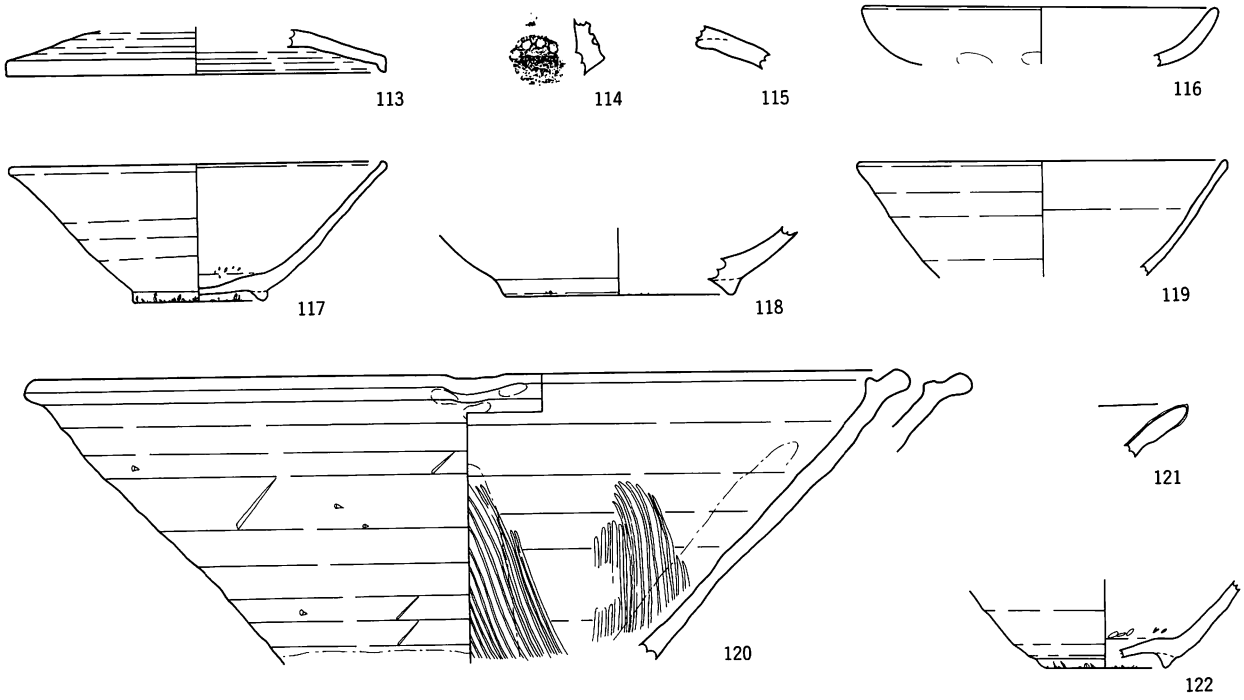
山茶碗（第28図-130）

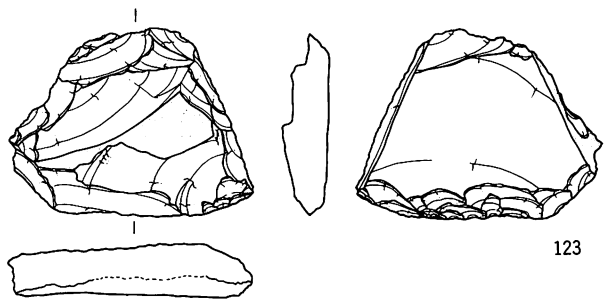
130は均質手の碗の底部である。器壁は厚手で、体部内外面は回転ナデにより調整され、底部外面に回転糸切痕、高台端部と底部内面に籾殻痕が認められる。内面はかなり摩滅している。

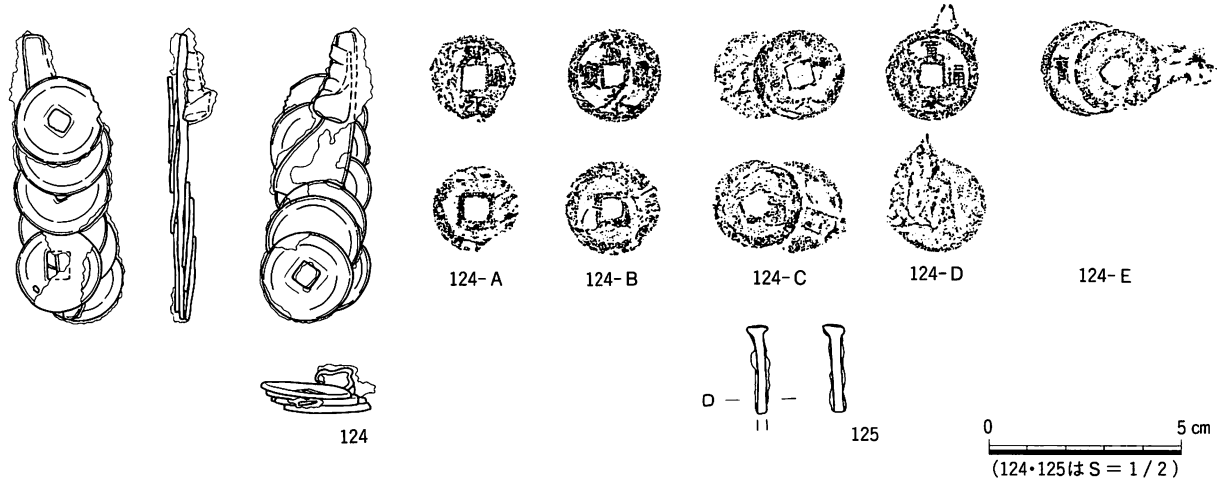
ST 4

縄文土器（第28図-131、132）

131、132は深鉢の体部である。破片が小さいため詳細は不明であるが、131はやや内湾した器形をしており、外面は紐状工具による斜方向線文の押型文が施され、横方向の沈線が引かれた後にS字状に


113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
0
10cm
（S＝1/3、121はS＝1/2）


123


124-A
124-B
124-C
124-D
124-E
124
D
D
125
0
5 cm
（124・125はS＝1/2）

第27図　土坑出土遺物

沈線が入る。外面に煤が付着しており、後期中葉の堀之内2式及び加曽利B1式併行と考えられる。132は無文である。指ナデ、指押さえ痕が内面に認められる。後期中葉と考えられる。

常滑（第28図-133）

133は甕の体部である。内面に指押さえ痕が認められる。

石器・石製品（第28図-134）

134は下呂石の石核である。

4　柵列・石列（SA）

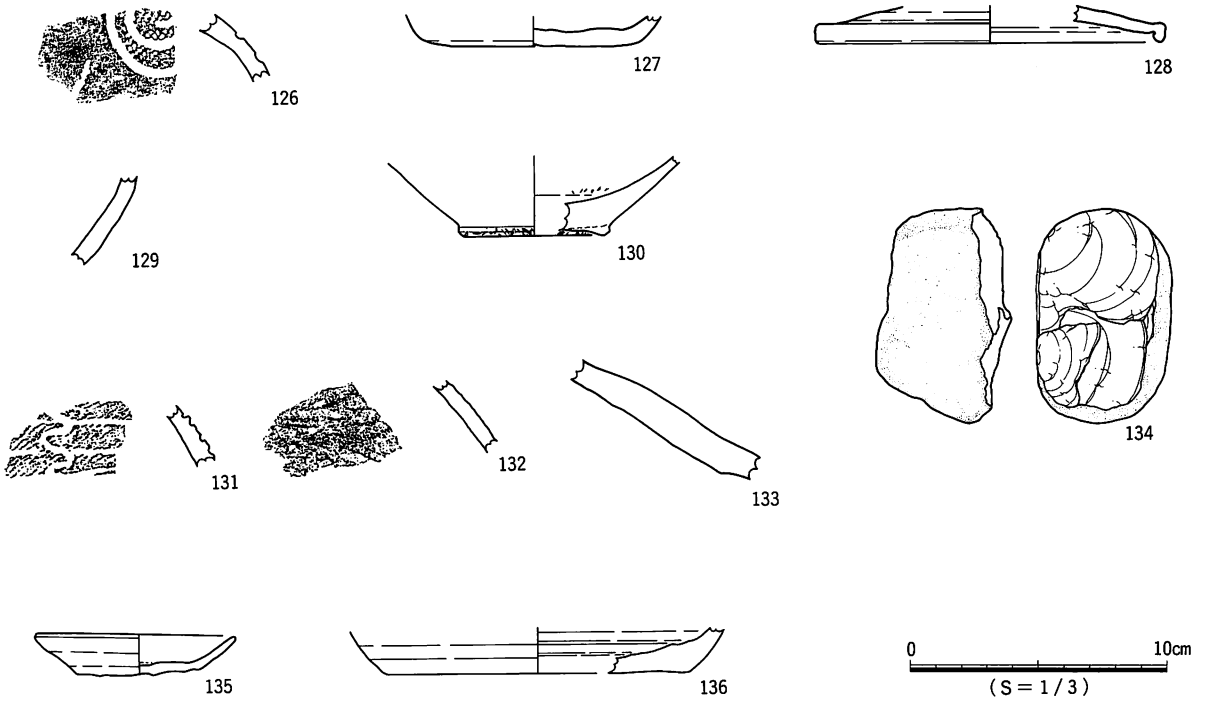
SA 1

山茶碗（第28図-135）

135は均質手の皿である。器壁は薄く、直線的に開き、体部内外面は回転ナデにより調整され、底部外面に回転糸切痕と板目状圧痕、底部内面に磨消痕が認められる。

瀬戸美濃（連房）（第28図-136）

136は灯明皿（受皿）の底部である。底部外面は回転ヘラ削り、内面は回転ナデにより調整され、内面は同心円状に3条の溝が認められる。内外面共に錆釉が施されている。



第28図　竪穴状遺構・石列出土遺物

5　暗渠（SD 2）

弥生土器（第29図-137、138）

137は浅鉢の口縁部である。器壁は厚手で、少し内湾している。内外面とも指ナデで、口縁部内面はヘラ削りで調整されている。138は壺の体部である。破片が小さいので詳細はわからないが、指ナデで調整され、外面には6条の沈線がある。

土師器（第29図-139～143）

139は羽釜の取手部である。体部内外面は指ナデにより調整され、端部はわずかに凹んでいる。外面に煤が付着している。140は壺の体部である。体部内外面は指ナデにより調整されているが、外面は摩滅が激しくほとんど剝離している。一部赤彩が認められる。141は壺の口縁部である。頸部から直線的にハの字に開き、外面は指ナデ、内面は横ハケ調整で、口縁部に指押さえ痕が認められる。かなり摩滅しており、外面口縁部に煤が付着している。142は羽釜の耳部である。外面はハケ削りで調整し、管状工具で穴を開け、指押さえ痕が認められる。内面にも指押さえ痕が認められる。外面に煤が付着している。143は甕の口縁部である。器壁は薄く直線的に立ち上がり、口縁部は少し内側に押さえられ、面取りが認められる。体部内外面は指ナデにより調整されている。

中世土師皿（第29図-144）

144は土師質の皿の底部である。轆轤成形でほぼ真円であり、体部内外面は回転ナデにより調整され、底部外面に回転糸切痕が認められる。

須恵器（第29図-145～154、第30図-156、157）

145は杯蓋の摘み部である。摘み部外面は指ナデ、周辺部はヘラ削り、内面は指押さえ後指ナデで調整されている。内面中央部にヘラ書きによる刻印が認められる。146は鉢の底部である。体部内外面は回転ナデにより調整され、底部外面周辺は板削りによる板押さえ圧痕が認められる。147は瓶子の底部である。体部内外面は回転ナデにより調整され、底部外面に回転糸切痕が認められる。外面と内面底部に自然釉が付着している。148は無台杯身の底部である。体部内外面は回転ナデにより調整され、底部外面は渦巻き状の粘土紐を板状工具で削った痕が認められる。外面はかなり摩滅している。149は杯身の底部である。体部内外面は回転ナデ、底部外面は回転ヘラ削りにより調整され、内面は平坦で中心に向かって下がっている。150は鉢の口縁部である。内外面回転ナデにより調整され、口縁部上部がやや凹んでいる。美濃須衛と考えられる。151は甕の頸部である。体部内外面は回転ナデにより調整され、内外面に自然釉が付着している。152は杯蓋の口縁部である。摘み部周辺は回転ヘラ削り、その他は回転ナデにより調整されている。153、154は杯身の底部である。体部内外面は回転ナデ、底部外面は回転ヘラ削りにより調整され、内面腰部がわずかに凹んでいる。156は器種不明の製品である。157は長頸壺の口縁部である。体部内外面は回転ナデにより調整され、外反している。口縁部は縁帯が作られ、やや凹んでいる。頸部と胴部を張り合わせた痕が認められる。外面は自然釉が付着している。

山茶碗（第29図-155、第30図-158～170）

155は荒肌手の碗の底部である。器壁は厚く、体部内外面は回転ナデにより調整され、底部外面に回転糸切痕が認められる。底部内面に自然釉が付着している。尾張第5型式と考える。158は均質手の無高台碗の底部である。体部内外面は回転ナデにより調整され、底部外面に回転糸切痕が認められる。159は均質手の碗の底部である。器壁は厚く、体部内外面は回転ナデにより調整され、底部外面に回転糸切痕が認められる。底部内面に自然釉が付着している。160、161、164は均質手の無高台碗である。体部内外面は回転ナデにより調整され、底部外面に回転糸切痕が認められる。器壁は薄く、口縁部はやや外反し、面取りが認められる。164は内外面底部に籾殻痕が多く認められる。162は均質手の碗である。器壁は薄く、腰部は丸みを帯るが直線的に開き、口縁端部に面取りが認められる。体部内外面は回転ナデにより調整され、紐状の高台が貼り付けられ、高台端部、底部内面に籾殻痕がわずかに認

められる。163は均質手の碗の底部である。器壁は厚く、体部内外面は回転ナデにより調整され、底部外面に回転糸切痕、底部内外面に煤が付着し、高台は欠損している。165は均質手の碗の底部である。器壁は薄く、体部は直線的に開き外面がわずかに凹んでいる。体部内外面は回転ナデにより調整され、底部外面に回転糸切痕、高台端部と底部内面に籾殻痕が認められる。内面はやや摩滅し、少量の自然釉が付着している。166は均質手の碗の底部である。器壁は薄く、紐状の小さな高台が貼り付けられている。体部内外面は回転ナデにより調整され、内面は摩滅している。167、168、169は均質手の碗の底部である。器壁は厚く、体部内外面は回転ナデにより調整され、底部外面に回転糸切痕、高台端部に籾殻痕が認められる。内面がかなり摩滅している。170は均質手の無高台碗の底部である。器壁は厚く、体部内外面は回転ナデにより調整され、底部外面に回転糸切痕、底部腰部に指押さえ痕が認められる。底部内面から腰部にかけて赤彩が確認できる。自然科学分析の結果ベンガラが認められた（第5章第3節参照）。全体の1/3で破断しているが、破断面にもベンガラが付着している。破断面が擦れていることから砥石として転用されていたのではないかと考えられる。

常滑陶器（第30図-172、173、第31図-174）

172は近世常滑陶器（赤物）の甕の口縁部である。縁帯が内側に引き出され、口縁端部と同じ高さにあり、口縁部が凹んでいる。体部内外面は回転ナデにより調整され、内面には指押さえ痕が認められる。173は甕の口縁部である。縁帯が折り返され頸部に密着している。体部内外面は回転ナデにより調整され、内面には指押さえ痕が認められる。174は片口鉢の口縁部である。器壁は厚く、直線的に開いている。体部内外面は回転ナデにより調整され、内外面に指押さえ痕が認められる。口縁端部はやや外反し、外側に凹みがあり、内側はヘラ状工具により、花弁状に削りが入る。

古瀬戸（第31図-175～182）

175は尊式花瓶の口縁部である。体部から口縁部にかけて外反しラッパ状に開いている。外面は回転指ナデで、内面は回転ヘラ削りで調整され、外面と内面口縁部に灰釉が施されている。176は水注の取手部である。粘土紐を指ナデによって調整したもので、外面に煤が付着している。177、178は縁釉小皿の底部である。体部内外面は回転ナデにより調整され、底部外面に回転糸切痕が認められる。177は内面に灰釉が施され底部内面に磨消痕、トチン痕が認められる。178は摩滅がはげしい。179は折縁小皿である。器壁は薄く、直線的に立ち上がり、口縁部で外反させている。体部内外面は回転ナデ、底部内面は回転ヘラ削りにより調整され、底部外面に回転糸切痕が認められる。口縁部内外面に灰釉が施されている。180は平碗の底部である。体部内面は回転ナデ、体部外面は回転ヘラ削り、削出高台により調整され、内面に灰釉が施され、内面底部に円錐ピン痕が認められる。181は平碗の口縁部である。外面底部周辺は回転ヘラ削り、その他は回転ナデにより調整され、内外面に灰釉が施される。182は折縁深皿の底部である。体部内面は回転ナデ、底部から体部外面は回転ヘラ削りにより調整され、底部外面に指摘みの後指押さえによる脚が3脚認められる。内外面に灰釉が施されている。

瀬戸美濃（大窯）（第31図-183～189）

183は擂鉢の底部である。体部内外面は回転ナデにより調整され、底部外面に回転糸切痕が認められる。内面の擂目は一単位16条、幅3㎝を測る。内外面に錆釉が施されている。184は丸皿の口縁部である。器壁は厚手でやや内湾して立ち上がる。体部外面は回転ヘラ削りで、内面は回転ナデにより調整され、内外面に灰釉が施されている。185は鉢の底部である。外面底部周辺は回転ヘラ削り、内面は回

転ナデにより調整され、内外面に鉄釉が施されている。186は加工円盤である。外面は削出高台で、内面は回転ナデで調整され、内外面に鉄釉が施されている。天目茶碗を加工した製品と考えられる。187は天目茶碗の口縁部である。体部内外面は回転ナデにより調整され、腰部から開きながら口縁に向かって胴部が丸く張り、口縁部をくびらせて縁反りをしている。内外面に鉄釉を施し、外面底部は露胎している。188は内禿皿の底部から口縁部である。底部は回転ヘラ削りで削出高台、外面口縁部から内面は回転ナデで調整されている。内外面全体に錆釉が施され、口縁部には飴釉の重ね掛けが施されている。189は桶の底部である。体部内外面は回転ナデにより調整され、外面体部に鉄釉が施され、底部は露胎しているが、底部内外面に自然釉が付着している。

瀬戸美濃（連房）（第31図-190～194、第32図-195～201、205）

190は尾呂茶碗の口縁部である。体部内外面は回転ナデにより調整され、直線的に立ち上がり、口縁部は尖っている。体部内外面は鉄釉が、口縁部内外面は飴釉が施されている。191は菊皿の底部である。削出高台で、底部外面周辺は回転ヘラ削り、体部内面は回転ナデにより調整され、内面は型打ちにより菊花を表している。内面はかなり摩滅が激しいが、内面に灰釉が施され、外面底部は露胎している。192は筒形碗の底部である。削出高台で、体部内外面は回転ナデにより調整されている。内外面に灰釉が施され、底部は露胎している。193は志野織部の丸皿の底部である。体部内外面は回転ナデにより調整され、底部外面に回転糸切痕、円錐ピン痕が認められる。内外面には長石釉が施され、内面に一部灰釉がみられる。194は志野鉄絵皿の底部である。底部外面周辺は回転ヘラ削り、内面は回転ナデにより調整されている。底部外面に円錐ピン、底部内面に円錐ピン痕が認められる。内外面には長石釉が施され、底部内面に鉄絵による模様が描かれている。195は掛分茶碗である。腰部は丸みをおび口縁部にかけ直線的に立ち上がる。口縁部は尖っている。体部内外面は回転ナデにより調整され、体部内外面に灰釉が、口縁部内外面に鉄釉が施され、底部外面は露胎している。196は片口鉢の口縁部である。縁帯を折り返して口縁部に密着させ、体部内外面は回転ナデにより調整されている。内外面に灰釉が施されている。197は重ね物の底部である。底部外面周辺は回転ヘラ削り、体部内面は回転ナデにより調整され、体部は垂直に立ち上がる。外面にうのふ釉が施され、底部は露胎している。内面底部に輪ドチ痕が認められる。198は蓋物蓋の口縁部である。体部内外面は回転ヘラ削りにより調整され、口縁部は折り返して蓋の取り付け部が作られている。外面上部に鉄釉が施されている。199は丸碗の底部である。削出高台で、体部内外面は回転ナデにより調整されている。内面に鉄釉が施され、底部外面は露胎している。200は擂鉢の口縁部である。体部内外面は回転ヘラ削りにより調整され、内側に少し縁帯を引き出している。内外面に鉄釉が施されている。201は卸皿の底部である。外面は回転ナデで調整されている。内面は擂目である。小破片のため単位を測ることができない。内外面に鉄釉が施されている。205は片口鉢の注口部である。体部外面は回転ヘラ削り、体部内面は回転ナデにより調整され、注口部を貼り合わせている。内外面に灰釉が施されている。

磁器（第32図-202～204）

202は広東碗の底部である。体部内外面は回転ナデにより調整され、削出高台が認められる。内外面に呉須絵による染付が施され、底部内面には梅小花文様がある。203は箱形湯呑の口縁部である。体部内外面は回転ナデにより調整され、内外面に呉須絵による染付が施されている。204は花瓶の底部である。体部内外面は回転ナデにより調整されている。注口部から、上方に口縁部が続くものと考えられ

るが欠損している。体部外面に瑠璃釉、底部外面に透明釉が施されている。

石器・石製品（第30図-171、第32図-207、210、第33図-211～213、215）

171はベンガラが付着した円礫である。山茶碗（170）と同一箇所から出土したが、使用痕のない自然礫であり、意図的に使用されたものとは考えにくい（第5章第3節参照）。207は打製石斧である。桂花木を加工して作られている。210、211、213、215は砥石である。210は大型であるものの、研磨面が2面あり、手持砥石として使用されたのではないかと考えられる。211は置砥石である。213は研磨面が4面あるが、被熱して折損している。212は砥石の未製品と考えられる。

6　小穴

P 4

須恵器（第33図-216）

216は、杯身の底部である。底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデにより調整されている。8世紀後半と考えられる。

P 93

須恵器（第33図-217）

217は、杯身の口縁部である。内外面とも回転ナデで調整されている。内面はかなり摩滅している。

P 126

山茶碗（第33図-218）

218は均質手の碗の口縁部である。器壁は薄くやや外反している。体部内外面は回転ナデにより調整されている。口縁部内外面に自然釉が付着している。

P 7

山茶碗（第33図-219）

219は、均質手の皿である。薄手で器高が低く、体部は丸みをおびている。体部内外面は回転ナデにより調整され、底部外面は回転糸切痕が認められる。

P 117

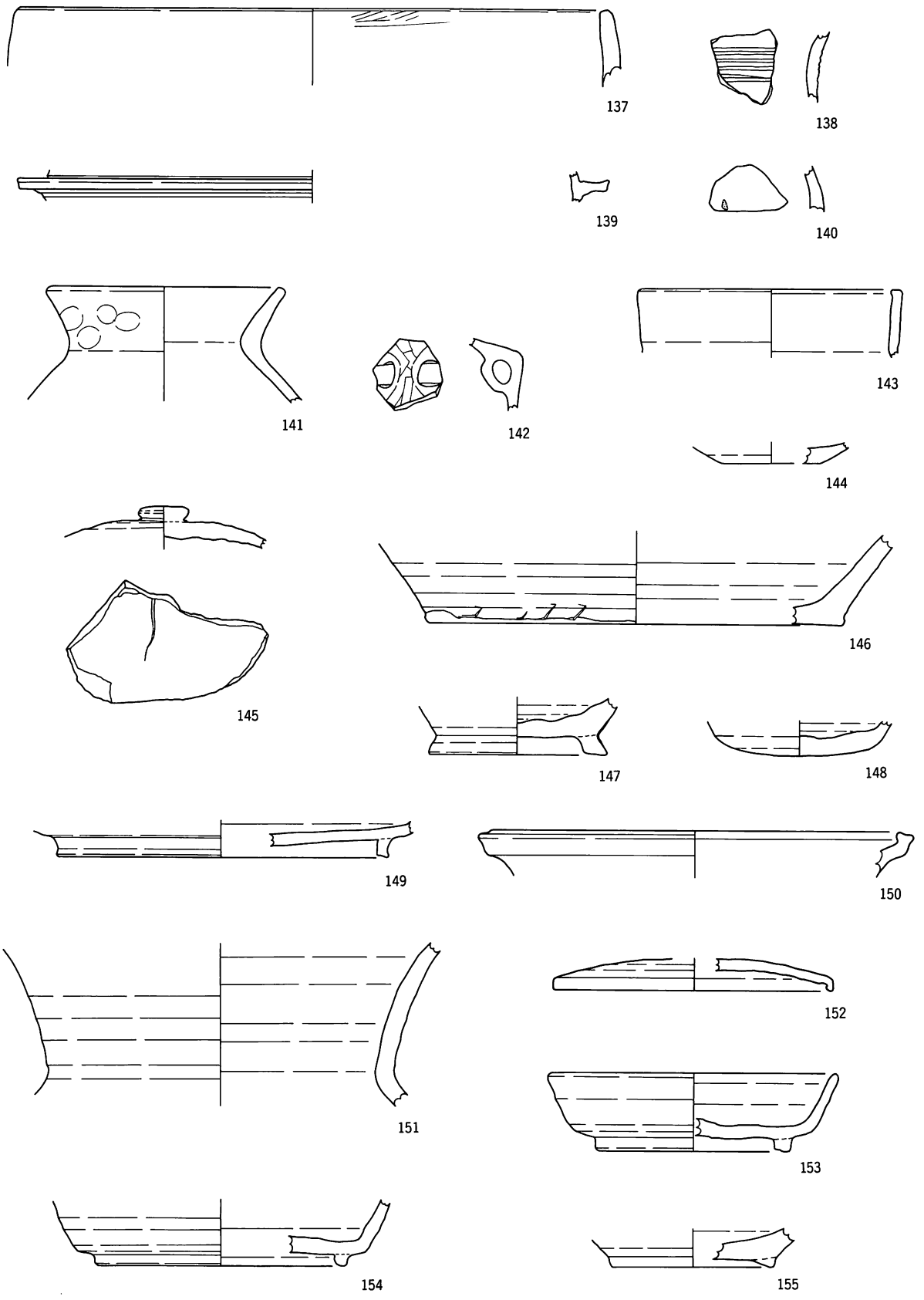
山茶碗（第33図-220）

220は均質手の碗の底部である。体部内外面は回転ナデにより調整され、底部外面に回転糸切痕、高台端部に籾殻痕が認められる。内面はやや摩滅している。

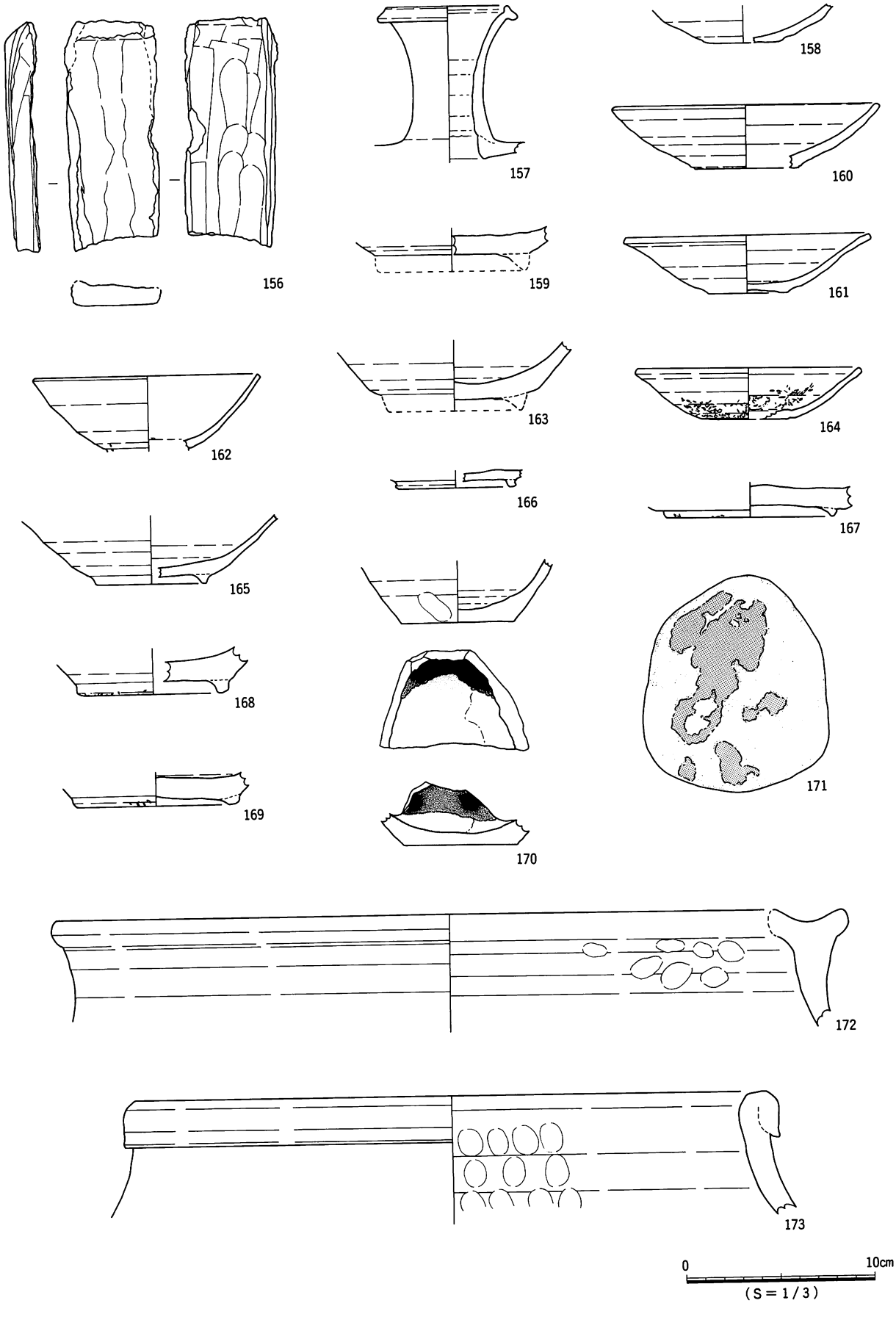
P 2

山茶碗（第33図-221）

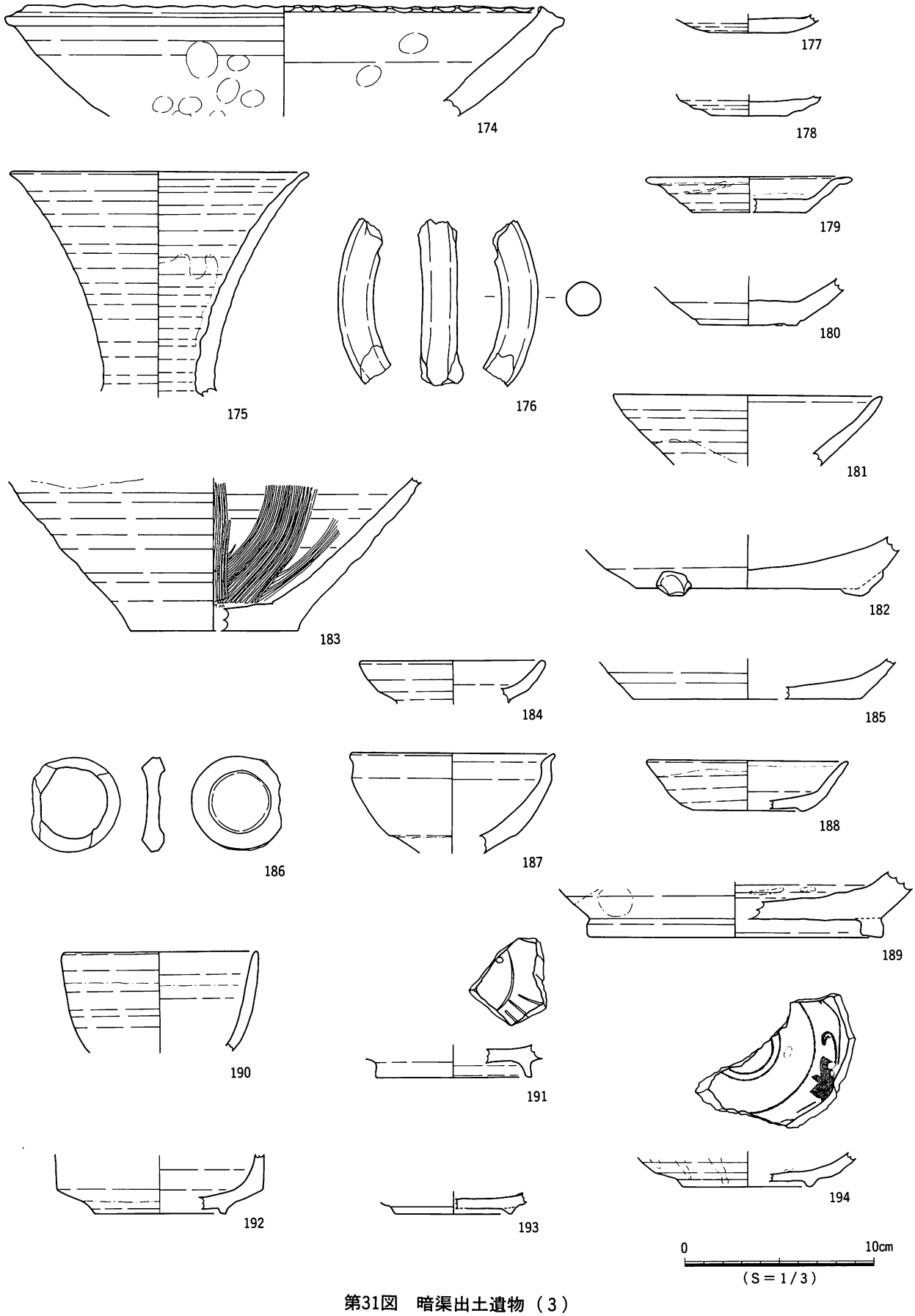
221は、荒肌手の碗の底部である。底部内外面は回転ナデにより調整されている。内面はかなり摩滅している。



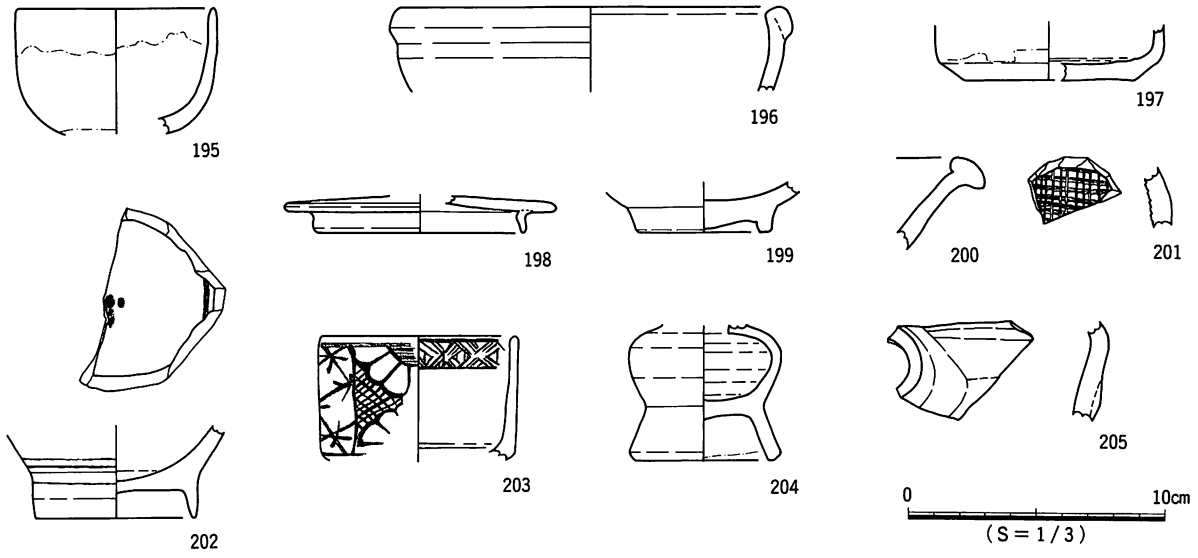
第29図　暗渠出土遺物（１）

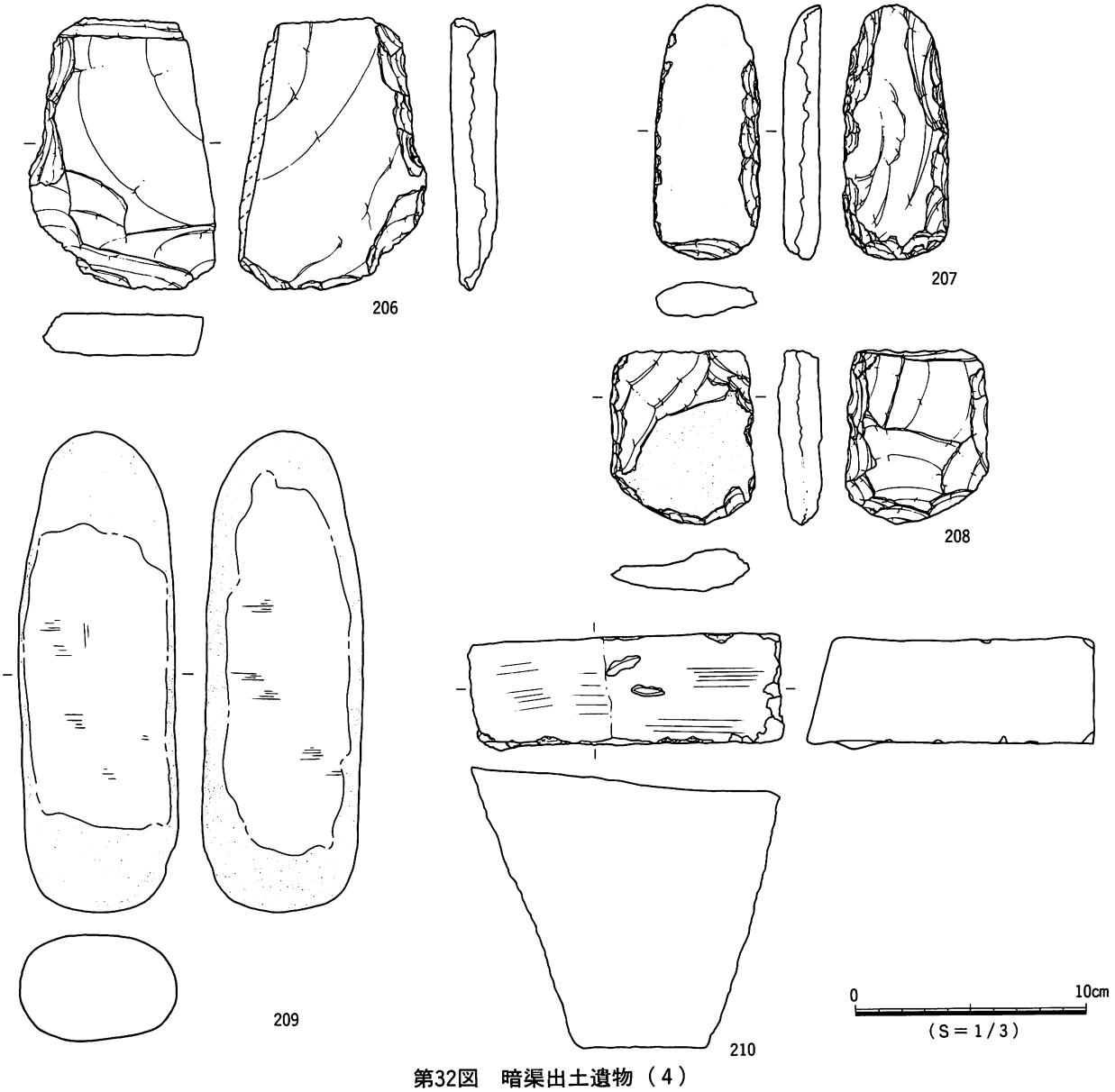


第30図　暗渠出土遺物（2）

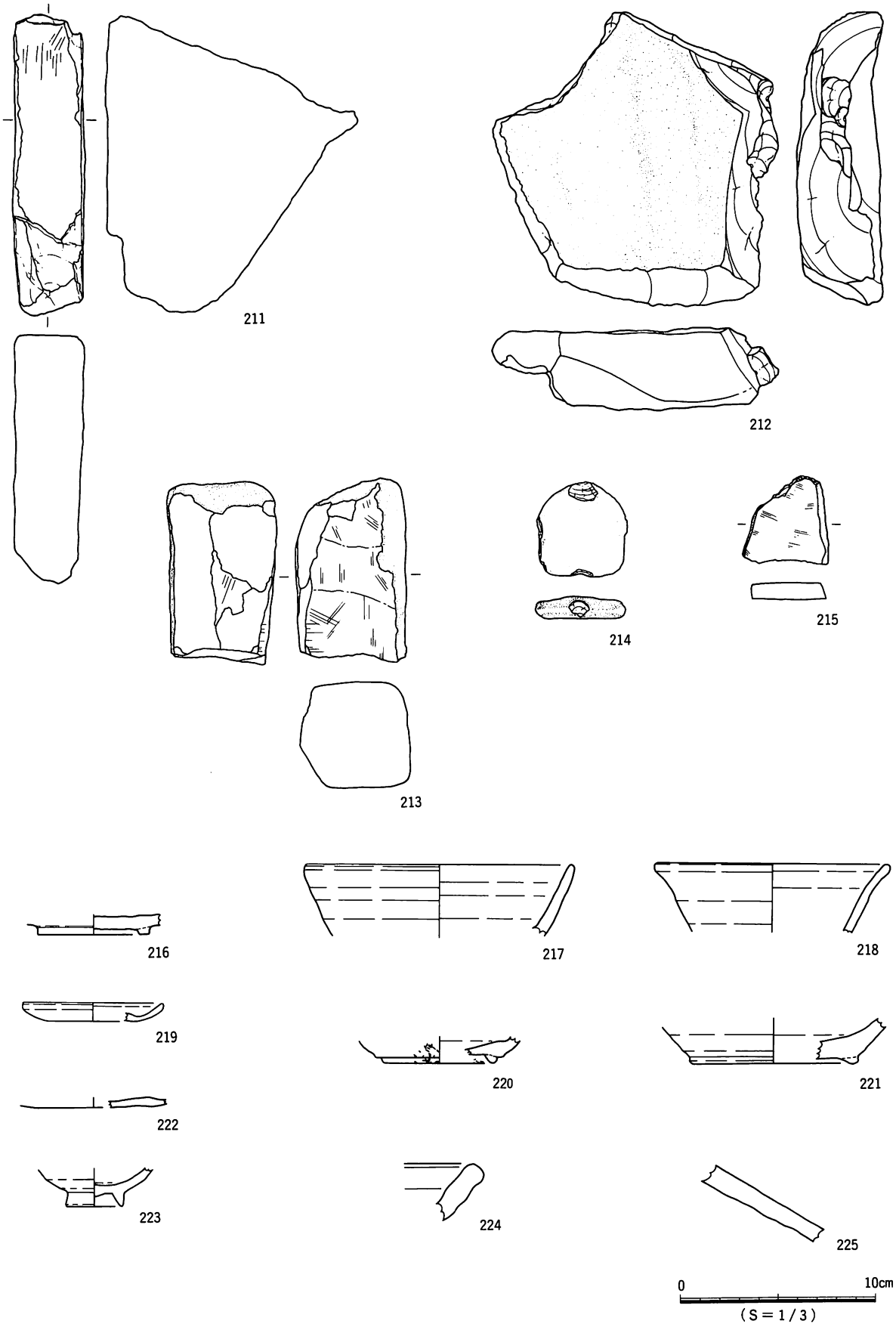


第31図　暗渠出土遺物（３）





第32図　暗渠出土遺物（4）



第33図　暗渠・小穴出土遺物

P118

山茶碗（第33図-222）

222は均質手の皿の底部である。器壁は薄く器高は低く、扁平で腰部が凹んでいる。体部内外面は回転ナデにより調整され、底部外面に回転糸切痕が認められる。

P199

瀬戸美濃（連房）（第33図-223）

223は小杯の底部である。削出高台で器壁は薄く、底部外面周辺は回転ヘラ削り、内面は回転ナデで調整されている。高台部は露胎し、内面は灰釉が施されている。

P96

瀬戸美濃（連房）（第33図-224）

224は、擂鉢の口縁部である。内外面共に回転ナデで調整され、錆釉が施されている。

P111

常滑陶器（第33図-225）

225は近世常滑陶器（赤物）の甕の体部である。内面に板ナデや指押さえ痕が認められる。

第3節　包含層出土遺物

前節までに遺構と遺構内出土遺物について図示し説明したが、本節では包含層から出土した遺物（撹乱、トレンチ掘削を含む）を一括して述べる。各遺物の説明については種類別に略述するにとどめ、詳細は観察表を参照されたい。（第6～23表）

縄文土器（第34図-226～228）

深鉢（226～228）

弥生土器（第34図-236）

壺（236）

土師器（第34図-229、230、234、235）

高杯の脚部（229）　羽釜の耳部（230）　壺の底部（234）　皿の口縁部（235）

土製品（第34図-231～233）

土鈴の頸部（231）　土錘（232、233）

須恵器（第34図-237～240）

杯身（237）　壺の底部（238）　杯身の底部（239）　高杯の脚部（240）

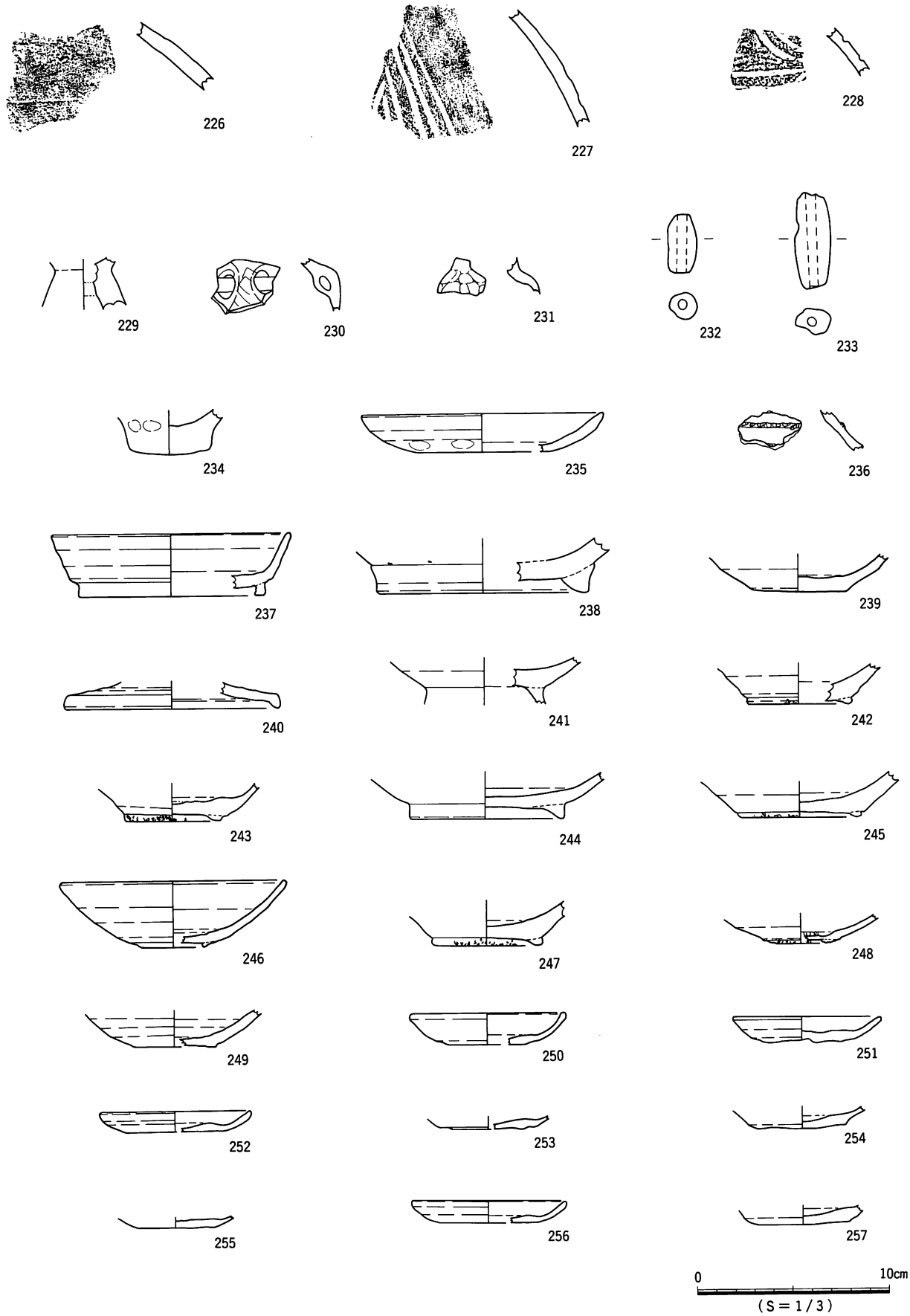
灰釉陶器（第34図-241）

碗の底部（241）

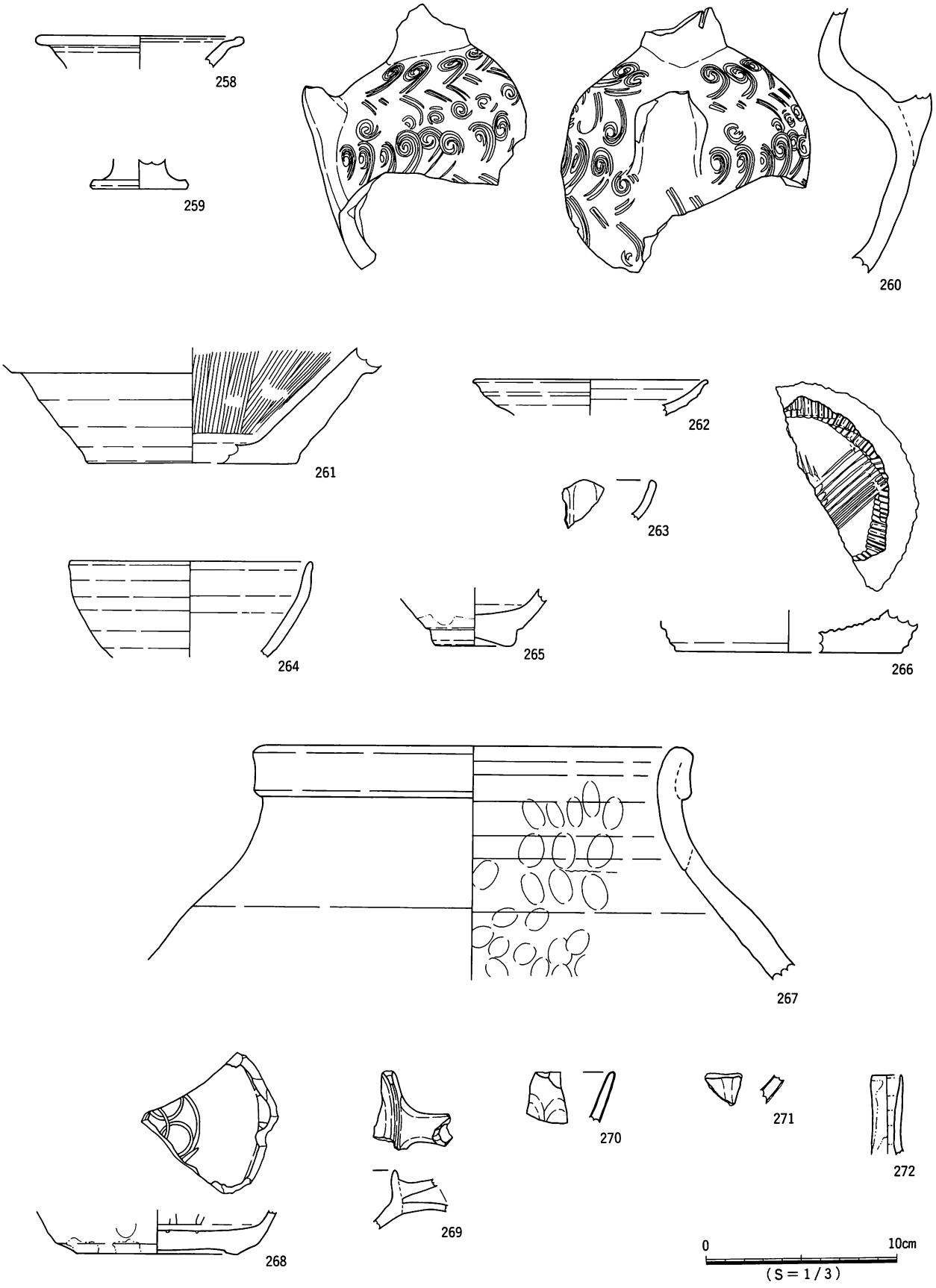
山茶碗（第34図-242～257）

碗の底部（242～249）　皿の底部（250、252～257）　皿（251）

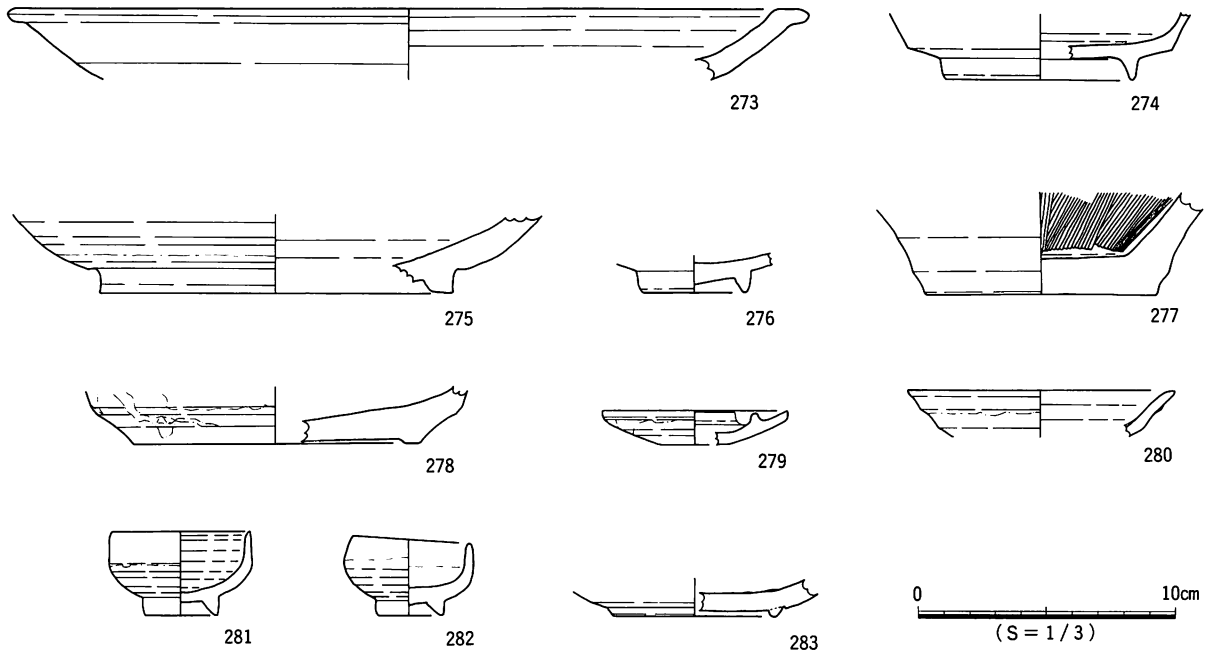
古瀬戸（第35図-258～261）

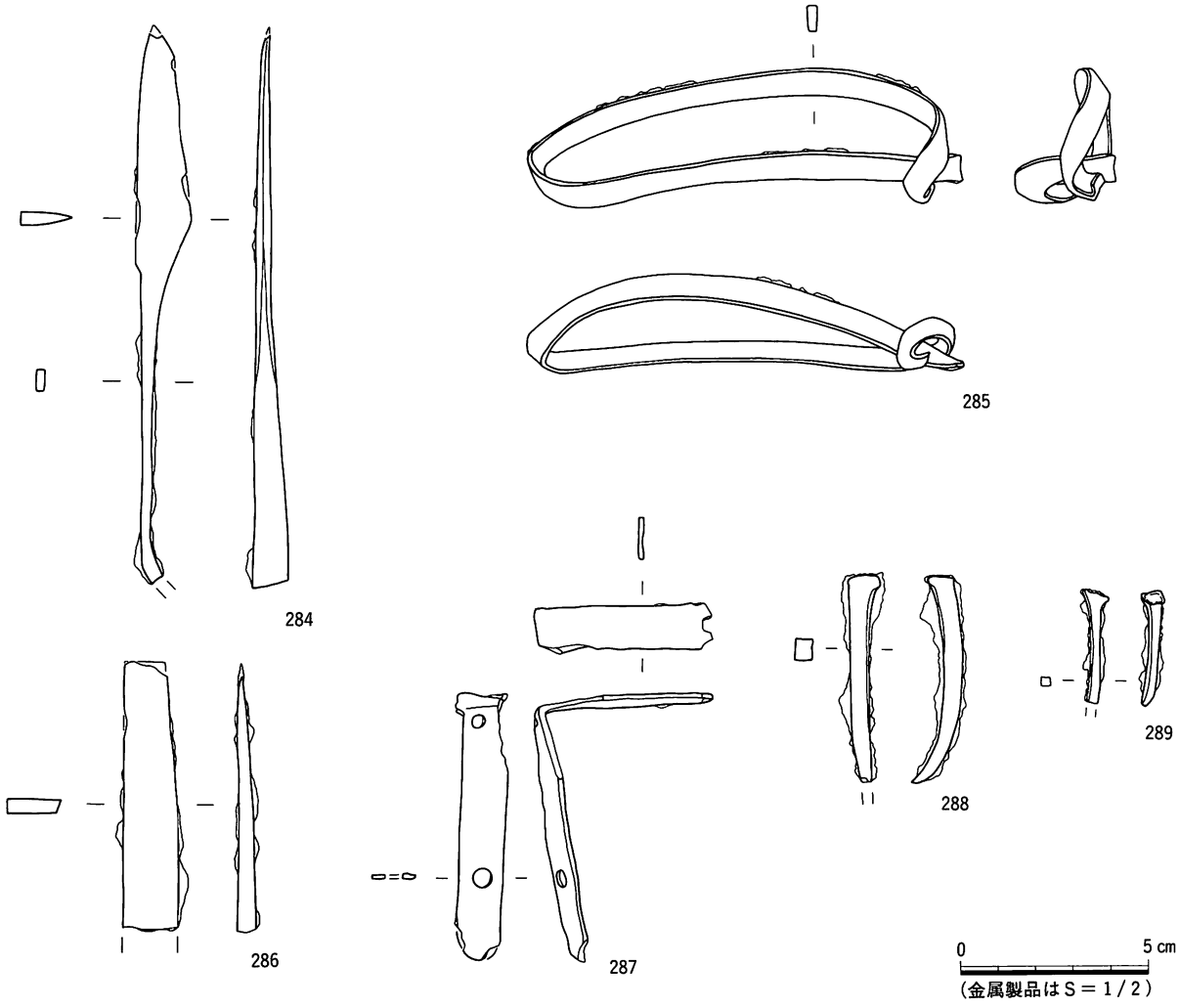


第34図　包含層出土遺物（１）

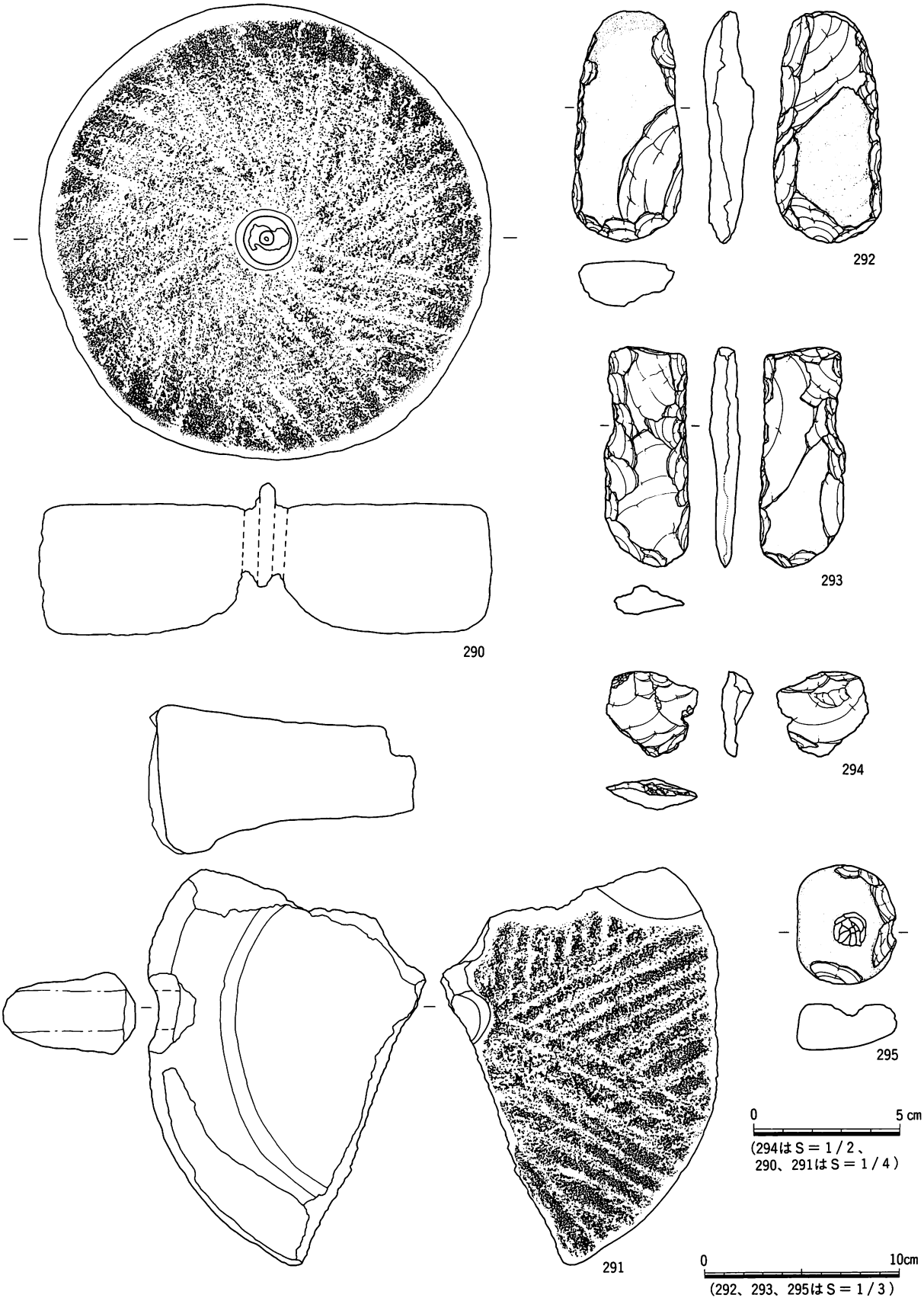


第35図　包含層出土遺物（2）





第36図　包含層出土遺物（３）



第37図　包含層出土遺物（4）

折縁皿の口縁部（258）　仏供の底部（259）　水注の体部（260）　擂鉢の底部（261）

瀬戸美濃（大窯）（第35図-262～266）

志野丸皿の口縁部（262）　菊皿の口縁部（263）　天目茶碗の口縁部（264）　天目茶碗の底部（265）　擂鉢の底部（266）

常滑陶器（第35図-267）

甕の口縁部（267）

瀬戸美濃（連房）（第35図-268、269、第36図-273～283）

香炉の底部（268）　十能の取手部（269）　皿の口縁部（273）　糸目形碗の底部（274）　片口鉢の底部（275、278）　丸碗の底部（276）　擂鉢の底部（277）　灯明皿の底部（279）　縁釉小皿の口縁部（280）　小杯（281、282）　志野織部の丸皿の底部（283）

磁器（第35図-272）

御神酒入れの注口部（272）

輸入磁器（第35図-270、271）

青磁碗の口縁部（270）　青磁碗の体部（271）

金属製品（第36図-284～289）

鉄製の握り鋏（284）　環状金属製品（285）　鉄製の鑿（286）　鉄製の飾り金具（287）　鉄製の釘（288、289）

石器・石製品（第37図-290～295）

石臼（下臼）（290）　石臼（上臼）（291）　打製石斧（292、293）　RF（294）　凹石（295）

注1）本書で使用する遺物の分類・年代観は以下の通りである。

縄文土器については、奈良大学教授　泉拓良氏の御教示による。

弥生土器、土師器については、岐阜県立多治見工業高等学校教諭　松岡千年氏から助言を受けた。また以下の文献を参照した。

赤塚次郎他　1990『廻間遺跡』㈶愛知県埋蔵文化財センター
1992『山中遺跡』㈶愛知県埋蔵文化財センター
1994『松河戸遺跡』㈶愛知県埋蔵文化財センター

北村和宏　1996「尾張の羽釜」『第4回考古学フォーラム　鍋と窯　そのデザイン』東海考古学フォーラム実行委員会

須恵器については、当センター近藤大典から助言を受けた。また、以下の文献を参照した。

藤田英博他　2000『船山北古墳群・船山北古窯跡群・船山北遺跡』㈶岐阜県文化財保護センター

成瀬正勝　2000『砂行遺跡』㈶岐阜県文化財保護センター

山茶碗、中世土師皿については、当センター小野木学、長谷川幸志から助言を受けた。また、以下の文献を参照した。

井川祥子　1997「15世紀後半から16世紀前葉の土師器皿―中濃地域を中心として―」『美濃の考古学』第2号　美濃の考古学刊行会

小野木学　1995『下巾上遺跡』㈶岐阜県文化財保護センター
1997「美濃地方における中世前期の土師器皿の様相」『美濃の考古学』第2号　美濃の考古学刊行会

古瀬戸の器種分類については、『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界～その生産と流通～』（財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター、1996年）における分類を参考とした。また、器種の判別については当センター小野木学、長谷川幸志から助言を受けた。

瀬戸美濃大窯の器種分類については『瀬戸市史　陶磁史篇一』（瀬戸市史編纂委員会、1998年）、藤沢良祐　1986「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ（瀬戸市歴史民俗資料館）における分類を参考とした。また、器種の判別については当センター小野木学、長谷川幸志から助言を受けた。

瀬戸美濃連房の器種の判別については当センター小野木学、長谷川幸志から助言を受けた。また、以下の文献を参照した。

藤沢良祐他　2002『㈶瀬戸市埋蔵文化財センター企画展　江戸時代の瀬戸窯』㈶瀬戸市埋蔵文化財センター

1998『瀬戸市史　陶磁史篇一～六』瀬戸市

1987「本業焼の研究(1)～(3)」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅵ～Ⅷ　瀬戸市歴史民俗資料館

井上喜久男　1992『尾張陶磁』ニュー・サイエンス社

常滑陶器の器種の判別については、中野晴久　1997「瓷器系中世陶器の生産」『㈶瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要第5輯』㈶瀬戸市埋蔵文化財センターを参照した。

輸入磁器、磁器については、当センター小野木学から助言を受けた。

瓦器については「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民族博物館研究報告19集』（菅原正明、1989年）を参照した。

石器･石製品については、岐阜県博物館学芸主事　長屋幸二氏、岐阜県教育委員会文化課　三島誠氏、当センター長谷川幸志から助言を受けた。また、下記の文献を参照した。

髙橋順之　1994『伊吹町内遺跡発掘調査Ⅱ』伊吹町教育委員会

三輪茂雄　1978『石臼探訪』産業技術センター

小林正春　1991「石器の終わる時」『季刊考古学第35号』雄山閣出版

平林彰他　1993『北村遺跡』㈶長野県埋蔵文化財センター

金属製品については、当センター長谷川幸志から、銭貨については当センター山内裕行から助言を受けた。また、以下の文献を参照した。

北陸中世考古学研究会　1998『北陸中世の金属器―生産と流通―』第11回北陸中世考古学研究会

第６表　土器観察表(1)

掲載番号	実測	グリッド	遺構番号	器種	部位	法量(cm) 口径	器高	底径	最大幅	残存率(X/12)	口縁破片部数	破辺数合計	成形・調整	釉薬	備考	時期・産地	挿図図版	写真図版
1	31	25E	SD12	縄文土器	深鉢　体部	-	-	-	-	-	-	1	内面・ナデ　指頭圧痕 外面・撚糸文			中期前葉船元１か２	21	6
2	22	26D	SD12	土師器皿	皿　体部	(12.0)	(1.8)	-	-	0.8	1	1	内外面・ナデ　ロクロ成型				21	6
3	16	24E	SD12	土師器皿	小皿　口縁部	(6.1)	(1.5)	(4.0)	-	0.8	1	1	内外面・ナデ　ロクロ成型				21	6
4	17	24E～25E	SD12	土師器皿	小皿　口縁部	(5.6)	(1.5)	(3.0)	-	2	1	1	内外面・ナデ　外面・指頭圧痕			中世Ａ２ｂ	21	6
5	23	27D	SD12	土師器皿	皿　口縁部	(17.8)	(2.6)	-	-	0.8	1	1	内外面・ナデ　外面・指頭圧痕		外面口縁部煤付着		21	6
6	33	20F	SD12	灰釉陶器	瓶子　頸部	-	-	-	-	-	-	1	内外面・回転ナデ	内面自然釉付着			21	6
7	256	20F	SD12	灰釉陶器	碗　底部	-	-	(8.0)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　貼付高台	内面に少量の自然釉付着		Ｏ-53窯式 10世紀後半	21	6
8	58	26E	SD12	須恵器	壺　口縁部	(12.4)	-	-	-	1.0	1	1	内外面・回転ナデ	外面口縁部から体部にかけて自然釉あり		８世紀末	21	6
9	59	27D	SD12	須恵器	杯身　底部	-	-	(7.6)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　底部・回転ヘラ削り　貼付高台		内面激しく摩耗	８世紀前半	21	6
10	232	26F	SD12	山茶碗	碗　口縁～底部	12.9	2.7	5.4	-	5.0	3	3	内面・回転ナデ　磨消痕　外面・回転ナデ　回転糸切痕	内外面に少量の自然釉付着　内面に釉だまり		第11型式 (脇之島)	21	11
11	220	21F	SD12	山茶碗	碗　底部	-	-	(8.3)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　回転糸切痕貼付高台		内面激しく摩耗	第３型式 (西坂)	21	6
12	233	26E	SD12	山茶碗	皿　底部	-	-	(5.5)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　回転糸切痕			第11型式 (脇之島)	21	6
13	235	26F	SD12	山茶碗	碗　底部	-	-	(5.0)	-	-	-	2	内面・回転ナデ　磨消痕　外面・回転ナデ　底部・板目状圧痕回転糸切痕　貼付高台	内面に自然釉	内外面擬殻痕	第７型式 (明和)	21	6
14	224	20F	SD12	山茶碗	碗　底部	-	-	(5.2)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　回転糸切痕	内面に少量の自然釉		第11型式 (脇之島)	21	-
15	251	26D	SD12	山茶碗	碗　口縁部	(15.3)	-	-	-	0.9	1	1	内外面・回転ナデ			第６型式 (白土原)	21	6
16	250	26D	SD12	山茶碗	碗　底部	-	-	(5.1)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　回転糸切痕	内面に少量の自然釉付着	内外面擬殻痕	第11型式 (脇之島)	21	6
17	231	24E～25E	SD12	山茶碗	碗　底部	-	-	(5.0)	-	-	-	1	内面・回転ナデ　磨消痕　外面・回転ナデ　回転糸切痕　貼付高台	内面に自然釉	外面擬殻痕	第７型式 (明和)	21	6
18	234	26E	SD12	山茶碗	碗　口縁～底部	(12.5)	2.9	(5.4)	-	1.4	2	5	内面・回転ナデ　磨消痕　外面・回転ナデ　回転糸切痕	内面口縁部に自然釉付着		第11型式 (脇之島)	21	6
19	246	32C	SD12	山茶碗	碗　底部	-	-	(6.8)	-	-	-	1	内面・回転ナデ　磨消痕　外面・回転ナデ　回転糸切痕　貼付高台	内面に少量の自然釉付着	内外面擬殻痕　内面底部に多量の煤付着	第５型式 (丸石・窯洞)	21	6
20	241	33C	SD12	山茶碗	碗　底部	-	-	(5.1)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　貼付高台回転糸切痕	内面に少量の自然釉付着	内外面擬殻痕	第６型式 (白土原)	21	6
21	249	30C	SD12	山茶碗	碗　口縁部	(15.4)	-	-	-	0.9	1	1	内外面・回転ナデ	内面口縁部に自然釉付着		第７型式 (明和)	21	6
22	223	20F	SD12	山茶碗	碗　底部	-	-	(5.5)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　回転糸切痕貼付高台		内面やや摩耗	第10型式 (大洞東)	21	6
23	247	30C	SD12	山茶碗	碗　底部	-	-	(5.7)	-	-	-	1	内面・回転ナデ　外面・回転ナデ磨消痕　回転糸切痕　貼付高台	内面に少量の自然釉付着	内外面擬殻痕	第５型式 (丸石・窯洞)	21	-
24	248	30C	SD12	山茶碗	碗　底部	-	-	(4.4)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　回転糸切痕			第11型式 (脇之島)	21	6
25	222	20F	SD12	山茶碗	碗　底部	-	-	-	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　回転糸切痕			第５型式 (丸石・窯洞)	21	-
26	252	26D	SD12	山茶碗	碗　底部	-	-	(7.9)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　回転糸切痕貼付高台		内外面擬殻痕　内面激しく摩耗	第４型式 (谷迫間)	21	6
27	143	26F	SD12	古瀬戸	洗　口縁部	-	-	-	-	1.0	1	1	内外面・回転ナデ	内外面灰釉		古瀬戸前期 13世紀初め	21	7
28	173	26D	SD12	古瀬戸	桶　口縁部	-	-	-	-	1.0	1	1	内面・回転ナデ　外面・回転ナデ沈線２本あり	内外面鉄釉	内面煤付着	古瀬戸後期 15世紀	21	8
29	184	26D	SD12	古瀬戸	折縁深皿　底部	-	-	(12.0)	-	-	-	1	内面・回転ナデ　外面・回転ヘラ削り　脚部指おさえ	内面灰釉わずかに付着　外面露胎		古瀬戸後期 15世紀	21	-
30	156	33C	SD12	古瀬戸	釜　底部	-	-	(15.1)	-	-	-	1	内面・回転ナデ　同心円状の溝５条あり　外面・回転ナデ　底部・回転糸切痕	内外面鉄釉		古瀬戸後Ⅳ期 15世紀後半	21	8
31	177	26D	SD12	古瀬戸	折縁深皿　底部	-	-	-	-	-	-	1	内面・回転ナデ　外面・底部周辺回転ヘラ削り　脚部・指押さえ後ヘラ押さえ痕あり	内面・灰釉　底部外面、脚部露胎	輪ドチ痕	古瀬戸後期 15世紀	22	7
32	34	26D	SD12	古瀬戸	水注　注口部	-	-	-	-	-	-	1	内外面・ケズリ　外面・指頭圧痕あり	上部自然釉付着		古瀬戸前期 13世紀	22	7
33	174	26D	SD12	古瀬戸	擂鉢　底部	-	-	(10.0)	-	-	-	1	内面・擂目(１単位８条の溝、幅2.2cm)　外面・回転ナデ　底部・回転糸切痕	内外面錆釉	内面激しく摩耗　内面煤付着	古瀬戸後期 15世紀	22	8
34	157	33C	SD12	古瀬戸	折縁深皿　底部	-	-	-	-	-	-	1	内面・回転ナデ　外面・回転ヘラ削り　指つまみによる脚	内面灰釉　外面、底部、脚部露胎		古瀬戸後Ⅱ期 15世紀初め	22	7
35	161	26D	SD12	古瀬戸	壺　口縁部	(15.8)	-	-	-	2.0	2	2	内外面・回転ナデ	口縁部内外面に灰釉		古瀬戸中期 14世紀中頃	22	7
36	172	27D	SD12	古瀬戸	擂鉢　口縁部	-	-	-	-	1.0	1	1	内外面・回転ナデ	内外面錆釉		古瀬戸後Ⅳ新期 15世紀後半	22	8
37	230	25D	SD12	古瀬戸	折縁深皿　底部	-	-	(15.5)	-	-	-	2	内面・回転ナデ　外面・回転ナデ底部、底部周辺回転ヘラ削り指つまみ後指押さえの脚３箇所(？)	内外面灰釉　底部に露胎		古瀬戸後期 15世紀	22	5
38	135	24E～26E	SD12	古瀬戸	緑釉小皿　底部	-	-	(4.6)	-	-	-	1	内面・回転ナデ　外面・回転ヘラ削り　底部・回転糸切痕	内外面錆釉	底部外面に輪ドチ痕	古瀬戸後期 15世紀	22	7
39	162	26D	SD12	古瀬戸	緑釉小皿　底部	-	-	(5.0)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　底部・回転糸切痕	内面体部錆釉、底部朱が付着　外面露胎		古瀬戸後Ⅲ期 15世紀中頃	22	7
40	165	26D	SD12	古瀬戸	瓶子Ⅲ類　頸部	-	-	-	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　外面沈線１条	内外面鉄釉		古瀬戸後期 15世紀	22	7
41	138	26F	SD12	古瀬戸	壺か瓶子　底部	-	-	(14.0)	-	-	-	10	内面・回転ナデ　外面・回転ナデ下部回転ヘラ削り	内外面灰釉		古瀬戸後期 15世紀	22	5
42	169	26D	SD12	古瀬戸	広口壺　口縁部	(19.9)	-	-	-	1.5	1	11	内面・回転ナデ　外面・口縁部回転ナデ　体部回転ヘラ削り	無釉		古瀬戸後期 15世紀	22	7
43	178	26D	SD12	古瀬戸	壺　体部	-	-	-	-	-	-	8	内外面・回転ナデ	内外面灰釉	四、三耳壺？		22	7
44	182	26D	SD12	古瀬戸	鉢　体部	-	-	-	-	-	-	3	内面・ナデ　外面・ナデ　底部周辺回転ヘラ削り	内外面灰釉　内面下部自然釉　外面下部露胎		古瀬戸後期 15世紀	22	7
45-1	142-1	26E	SD12	古瀬戸	茶壺(祖母懐壺) 口縁部	(11.1)	-	-	-	2.5	1	1	内面・回転ナデ後ハケ調整　外面・回転ナデ	外面鉄釉(ハケ塗り)		古瀬戸後期 15世紀	23	7

第7表　土器観察表(2)

掲載番号	実測	グリッド	遺構番号	器種	部位	法量(cm) 口径	器高	底径	最大幅	残存率(X/12)	口縁破片部数	破辺数合計	成形・調整	釉薬	備考	時期・産地	挿図図版	写真図版
45-2	142-2	26E	SD12	古瀬戸	茶壺(祖母懐壺)体部	-	-	-	-	-	-	1	内面・回転ナデ指頭圧痕有り 外面・回転ナデ後ヘラ削り	外面鉄釉	耳4箇所有り	古瀬戸後期15世紀	23	7
45-3	142-3	26E	SD12	古瀬戸	茶壺(祖母懐壺)底部	-	-	(12.5)	-	-	-	1	内面・ナデ　外面・回転ヘラ削り			古瀬戸後期15世紀	23	7
46	181	27D	SD12	常滑陶器	甕　体部	-	-	-	-	-	-	3	内面・横方向の板ナデ後ハケ、指頭圧痕 外面・縦方向の板ナデ、指ナデ		赤物	江戸時代	23	7
47	122	21F	SD12	常滑陶器	甕　口縁部	(36.0)	-	-	-	1.0	1	1	内外面・回転ナデ	内外面鉄釉	赤物	江戸時代	23	7
48	144	26F	SD12	常滑陶器	甕　口縁部	(42.2)	-	-	-	1.0	1	1	内外面・回転ナデ			中野11型式16世紀前半	23	7
49	153	33B	SD12	常滑陶器	甕　頸部	(40.0)	-	-	-	0.2	1	1	内面・回転ナデ　指押さえ　板ナデ　外面・ナデ	外面自然釉付着		中野4型式13世紀初め	23	7
50	139	26F	SD12	常滑陶器	甕　口縁部	(67.0)	-	-	-	0.7	1	2	内外面・回転ナデ			中野10型式15世紀末	23	7
51	179	27D	SD12	常滑陶器	甕　口縁部	(17.0)	-	-	-	2.7	1	1	内面・板ナデ指押さえ痕　輪積み痕　外面・回転ナデ	口縁部自然釉付着		中野9型式15世紀末	23	7
52	150	28D	SD12	瀬戸美濃大窯	灯明皿　底部	-	-	(4.1)	-	-	-	1	内面・回転ナデ　同心円状の溝3条あり　外面・回転ナデ　底部・回転ヘラ削り	内外面錆釉	小突線3本	大窯後期16世紀	23	8
53	125	20F	SD12	瀬戸美濃大窯	菊皿　口縁部	(12.5)	-	-	-	1.0	1	1	内外面・ナデ	灰釉の上に緑釉の掛け釉		大窯後期16世紀後半	23	8
54	180	27D	SD12	常滑陶器	甕　底部	-	-	(24.0)	-	-	-	1	内面・横板ナデ 板ハケ調整 外面・横板ナデ ハケ調整底部砂擦		赤物	江戸時代	24	7
55	183	26D	SD12	常滑陶器	甕　体部	-	-	(20.0)	-	-	-	1	内面・ナデ　外面・ナデ　底部砂擦		外面に媒付着	15世紀	24	7
56	136	26E	SD12	瀬戸美濃大窯	桶　体部	-	-	(18.1)	-	-	-	4	内面・回転ナデ　外面・回転ナデ沈線2本有り　底部・ヘラ削り	外面鉄釉　底部に露胎	内外面底部に少量の媒付着	15世紀末～16世紀前半	24	8
57	126	19F	SD12	瀬戸美濃大窯	丸皿　底部	(6.6)	-	-	-	-	-	1	内外面・回転ナデ	内外面灰釉		大窯3　16世紀後半	24	8
58	141	26E	SD12	瀬戸美濃大窯	擂鉢　底部	-	-	(11.9)	-	-	-	1	内面・擂目(1単位12条の溝　幅2.8cm)　外面・回転ナデ　底部・回転糸切痕	内外面錆釉	内面激し摩耗	16世紀	24	8
59	123	21F	SD12	瀬戸美濃大窯	加工円盤(天目茶碗)	-	1.0	4.0	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　削出高台	内面鉄釉　底部外面露胎		不明	24	5
60	127	19F	SD12	瀬戸美濃連房	加工円盤(染付丸碗)	-	0.9	(3.5)	-	-	-	1	内外面・ナデ　底部回転ヘラ削り	染付　内面梅小花文		19世紀初め	24	8
61	140	26F	SD12	瀬戸美濃大窯	擂鉢　底部	-	-	(11.0)	-	-	-	1	内面・ナデ　擂目(1単位9条の溝、幅2.2cm)　外面・回転ナデ　底部・回転糸切痕	内外面錆釉	内面激し摩耗	不明	24	8
62	129	19F	SD12	瀬戸美濃連房	重ね物　口縁～底部	(8.6)	3.5	(5.2)	-	3.0	1	1	内面・回転ナデ　外面・口縁部回転ナデ　底部周辺回転ヘラ削り	内外面口縁部灰釉		19世紀	24	8
63	164	26D	SD12	瀬戸美濃連房	桶　体部	-	-	-	-	-	-	2	内面・ナデ 外面・回転ナデ 回転ヘラ削り 指つまみによる耳あり	内外面鉄釉			24	8
64	124	21F	SD12	瀬戸美濃連房	瓶掛火鉢　底部	-	-	(11.5)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　底部・回転ヘラ削り	外面・緑釉		9小期　19世紀前半	24	5
65	131	20F	SD12	瀬戸美濃連房	腰錆湯呑　底部	-	-	(5.4)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　削出高台	底部露胎(一部鉄釉の流れ)　底部外面、高台内側に鉄釉・内面灰釉		18～19世紀	24	8
66	155	33C	SD12	瀬戸美濃連房	灯明皿(受皿)口縁～底部	(7.0)	1.3	(3.6)	-	1.0	1	1	内面・回転ナデ 指押さえ痕 外面・回転ナデ 底部周辺ヘラ削り	内外面錆釉		9小期　19世紀前半	24	8
67	170	27D	SD12	瀬戸美濃連房	丸碗　底部	-	-	5.4	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　削出高台	内外面灰釉(底部内外面も)		5小期　17世紀末	24	5
68	168	28D	SD12	瀬戸美濃連房	香炉　底部	-	-	-	-	-	-	2	内外面・回転ナデ　脚部・指つまみ後指押さえ	内面灰釉　底部外面露胎	内面に円錐ピン痕	5小期　17世紀末	24	8
69	185	26D	SD12	瀬戸美濃連房	鉄釉　壺　口縁部	(13.5)	-	-	-	2.0	1	1	内外面・回転ナデ	内外面鉄釉		17～18世紀	24	8
70	121	23E	SD12	瀬戸美濃連房	志野織部　大皿底部	-	-	-	-	-	-	1	内面・回転ナデ　外面・回転ヘラ削り　削出高台	内外面長石釉　内面鉄絵ハケ描き	内面に円錐ピン痕	17世紀	24	8
71	166	31C	SD12	瀬戸美濃連房	小杯(せんじ)	5.1	2.6	2.9	-	12.0	1	1	内面・ナデ　外面・口縁部回転ナデ　底部周辺回転ヘラ削り　削出高台	口縁部内外面長石釉底部露胎		8小期　18世紀末	24	5
72	163	30C	SD12	瀬戸美濃連房	平碗　体部	-	-	-	-	-	-	1	内外面・回転ナデ	内外面透明釉　外面鉄絵		不明	24	8
73	176	26D	SD12	瓦器	風炉　体部	-	-	-	-	-	-	1	内面・縦方向のハケ調整　指頭圧痕　外面・回転ナデ			不明	24	8
74	171	27D	SD12	磁器	端反碗　口縁部	(10.2)	-	-	-	2.0	1	1	内外面・回転ナデ	染付　内外面呉須絵		9小期　19世紀前半	25	6
75	105	18G	SD12	磁器	染付丸碗　口縁部	(12.0)	-	-	-	1.0	1	1	内外面・回転ナデ	染付　内外面呉須絵		9小期　19世紀前半	25	6
76	160	30C	SD12	連房	箱形湯呑　体部	-	-	-	-	-	-	1	内外面・回転ナデ	染付　外面菊花文		10～11小期19世紀中頃	25	6
77	128	19F	SD12	輸入磁器	白磁碗　口縁部	(16.0)	-	-	-	1.0	1	1	内外面・回転ナデ	内外面白磁釉		12世紀	25	6
78	151	27E	SD12	輸入磁器	青磁碗　口縁部	-	-	-	-	1.0	1	1	外面・連弁文	青磁釉		15～16世紀	25	6
79	154	32C	SD12	輸入磁器	白磁碗　口縁部	-	-	-	-	1.0	1	1	外面・回転ナデ	白磁釉		白磁碗IV類　12世紀末～13世紀初め	25	6
80	137	24E	SD12	磁器	銅板染付碗	11.3	5.1	3.8	-	9.0	4	4	内外面・回転ナデ	銅板プリント		明治以降	25	5
89	13	17H	SD15	土師器皿	皿　口縁～底部	(12.9)	(2.0)	(6.0)	-	2	1	1	内外面・ナデ　指頭圧痕			京都系、15世紀後半	26	11
90	57	20F	SD15	須恵器	高杯　底部	-	-	(16.1)	-	1.0	-	1	内外面・回転ナデ　脚部端部に折り返しあり		内面激しく摩耗		26	-
91	225	19G	SD15	山茶碗	碗　底部	-	-	-	-	-	-	1	内外面・回転ナデ 回転糸切痕 貼付高台		内面底部にわずかに媒付着　内面激しく摩耗	第5型式(丸石・窯洞)	26	-
92	258	20F	SD15	古瀬戸	平碗　口縁部	(17.0)	-	-	-	1.0	1	1	内外面・回転ナデ	内外面灰釉		古瀬戸後期15世紀	26	13
93	132	20F	SD15	古瀬戸	天目茶碗　口縁部	(10.0)	-	-	(10.2)	1.0	1	1	内外面・回転ナデ	内外面・鉄釉　底部外面に露胎		古瀬戸後IV新期15世紀後半	26	12
94	133	20F	SD15	古瀬戸	擂鉢　口縁部	(24.6)	-	-	-	1.0	1	1	内外面・回転ナデ	内外面錆釉		古瀬戸後IV古期15世紀後半	26	13
95	130	19F	SD15	古瀬戸	平碗　口縁部	(15.0)	-	-	-	1.0	1	1	内外面・回転ナデ	内外面灰釉		古瀬戸後III期15世紀中頃	26	13
96	134	20F	SD15	古瀬戸	擂鉢　口縁部	(27.0)	-	-	-	1.0	1	1	内外面・回転ナデ	内外面錆釉		古瀬戸後II期15世紀初め	26	13
97	120	20F	SD15	瀬戸美濃大窯	灯明皿　底部	(11.0)	2.6	-	-	1.0	1	1	内面・回転ナデ　6条の同心円の溝あり　外面・回転ナデ　底部・回転糸切痕	無釉	小突線6本	大窯3　16世紀後半	26	12

第８表　土器観察表(3)

掲載番号	実測	グリッド	遺構番号	器種	部位	法量(cm) 口径	器高	底径	最大幅	残存率(X/12)	口縁破片部数	破辺数合計	成形・調整	釉薬	備考	時期・産地	挿図図版	写真図版
98	11	18F	SD10	土師器	高杯　脚部	-	-	-	-	-	-	1	内外面・ナデ　内面・指頭圧痕		激しく摩耗	松河戸様式	26	11
99	12	17G	SD10	土師器皿	皿　底部	-	-	(5.5)	-	-	-	1	内外面・ナデ			京都系、15世紀後半	26	11
100	211	18F	SD10	山茶碗	皿　口縁～底部	(8.0)	(1.3)	(4.2)	-	2.6	2	4	内外面・回転ナデ　回転糸切痕			第８型式（大畑大洞古）	26	12
101	107	17H	SD10	古瀬戸	緑釉小皿　口縁部	(9.0)	-	-	-	1.0	1	1	内外面・回転ナデ	口縁部内外面灰釉		古瀬戸後Ⅲ期15世紀中頃	26	13
102	108	17G	SD10	古瀬戸	折縁深皿　口縁部	(36.0)	-	-	-	1.0	1	1	内外面・回転ナデ	内外面灰釉		古瀬戸後Ⅱ期14世紀末～15世紀初め	26	13
103	239	34C	SD33	山茶碗	碗　底部	-	-	(6.2)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ・板目状圧痕　回転糸切痕　貼付高台	内面に少量の自然釉付着	内外面糊殻痕　内面やや摩耗	第６型式（白土原）	26	12
104	242	32B	SD29	山茶碗	皿　口縁～底部	(7.4)	(1.6)	(4.0)	-	2.0	1	1	内外面・回転ナデ　回転糸切痕	内面に少量の自然釉付着	内面やや摩耗	明和以降	26	12
105	175	28C	SD26	古瀬戸	卸皿　口縁部	(15.0)	-	-	-	0.7	1	1	内外面・回転ナデ	内外面灰釉	内外面激しく摩耗	古瀬戸後Ⅳ古期15世紀後半	26	13
106	219	19F	SD11	山茶碗	碗　口縁部	(11.2)	-	-	-	0.9	1	1	内外面・回転ナデ			不明(明和？)	26	12
107	51	14I	SD1	須恵器	杯身　底部	-	-	(10.8)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　底部・板ナデ削出高台		内面に使用痕有り	8世紀後半	26	12
108	77	4N	SD1	瀬戸美濃大窯	志野丸皿　口縁部	(11.5)	-	-	-	2.0	1	1	内面・回転ナデ　外面・回転ヘラ削り	内外面長石釉		17世紀	26	12
109	206	14I	SD1	山茶碗	碗　底部	-	-	(8.3)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　回転糸切痕　貼付高台	内面全体に少量の自然釉	内面激しく摩耗	第５型式（丸石・窯洞）	26	-
113	40	9K	SK20	須恵器	杯蓋　口縁部	(15.0)	-	-	-	1.0	-	1	内外面・回転ナデ　摘み部周辺回転ヘラ削り			不明	27	12
114	25	16G	SK49	縄文土器	深鉢　体部	-	-	-	-	-	-	1	内面・ナデ　外面・ナデ沈線　管状工具による刺突			中期末	27	11
115	109	15H	SK48	古瀬戸	瓶子　肩部	-	-	-	-	-	-	1	内外面・回転ナデ	外面灰釉		不明	27	-
116	21	34B	SK84	土師器皿	皿　口縁部	(13.7)	(2.2)	-	-	0.5	1	1	内外面・ナデ　指頭圧痕		内面煤付着	中世	27	11
117	240	33B	SK81	山茶碗	碗　口縁～底部	(14.8)	(5.3)	(5.1)	-	4.5	3	5	内面・回転ナデ　磨消痕　外面・回転ナデ回転糸切痕　貼付高台	内面全体から外面口縁部に自然釉付着	内外面糊殻痕	第７型式（明和）	27	11
118	210	17G	SK49	山茶碗	碗　底部	-	-	(8.7)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ		糊殻痕　内面に少量の煤付着　内外面激しく摩耗	第３型式（西坂）	27	12
119	243	36B	SK86	山茶碗	碗　口縁部	(14.4)	-	-	-	0.7	1	1	内外面・回転ナデ			明和以降	27	12
120	187	28C	SK74	古瀬戸	擂鉢　口縁部	(34.6)	-	-	-	6.0	2	3	内面・回転ナデ　擂目（１単位15条の溝、幅3.8cm）　注口部指押さえ　外面・回転ヘラ削り　口縁部回転ナデ	内外面錆釉		古瀬戸後Ⅳ期15世紀後半	27	5
121	158	33B	SK80	古瀬戸	緑釉小皿　口縁部	-	-	-	-	1.0	1	1	内外面・回転ナデ	内外面、口縁部灰釉		古瀬戸後期15世紀	27	-
122	245	32B	SK77	山茶碗	碗　底部	-	-	(4.6)	-	-	-	1	内面・回転ナデ　磨消痕有り　外面・回転ナデ　底部・板目状圧痕　貼付高台	内面に少量の自然釉付着	糊殻痕有り	第７型式（明和）	27	12
126	26	15H	ST3	縄文土器	深鉢　体部	-	-	-	-	-	-	1	内面・ナデ　外面・ナデ　沈線　（渦巻状）　押型文(市松状、楕円形)			後期中葉　北白川上層３式併行	28	11
127	53	15H	ST3	須恵器	無台杯身　底部	-	-	(6.6)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　底部・静止指ナデ(輪積痕あり)			8世紀後半	28	12
128	55	15H	ST3	須恵器	杯蓋　口縁部	(13.6)	-	-	-	2.0	-	1	内外面・回転ナデ　口縁端部・折り返し			8世紀後半	28	12
129	110	15H	ST3	古瀬戸	平碗　体部	-	-	-	-	-	-	1	内外面・回転ナデ	内外面灰釉		不明	28	-
130	212	15H	ST3	山茶碗	碗　底部	-	-	(5.5)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　回転糸切痕　貼付高台		糊殻痕有り　内面激しく摩耗	第５型式（丸石・窯洞）	28	-
131	30	22F	ST4	縄文土器	深鉢　体部	-	-	-	-	-	-	1	内面・ナデ　指頭圧痕　外面・沈線(横方向のちＳ字状)　押型文(斜方向線文)		外面に煤付着	後期中葉（堀之内２式及び加曽利Ｂ１式併行）	28	11
132	29	22F	ST4	縄文土器	深鉢　体部	-	-	-	-	-	-	1	内面・指ナデ　指頭圧痕　外面・指ナデ無文			後期中葉	28	11
133	115	21F	ST4	常滑陶器	甕　体部	-	-	-	-	-	-	1	内面・回転ナデ　指頭圧痕　外面・回転ナデ			15～16世紀	28	13
135	244	29C	SA1	山茶碗	皿	8.0	1.8	4.9	-	12.0	1	1	内面・回転ナデ　磨消痕有り　外面・回転ナデ　底部・回転糸切痕　板目状圧痕			明和以降	28	11
136	159	26D	SA1	瀬戸美濃遺房	灯明皿（受皿）底部	-	-	(12.0)	-	1.0	1	1	内面・回転ナデ底面に同心円状の３条の溝　外面・回転ヘラ削り	内外面錆釉		17世紀	28	13
137	254	8L	SD2	弥生土器	浅鉢　口縁部	(30.0)	-	-	-	0.7	2	3	内外面・ナデ　内面口縁部へ削り波状文有り　外面に列点文有り			弥生前期	29	9
138	253	4N	SD2	弥生土器	壺　体部	-	-	-	-	-	-	1	内外面・ナデ　６条の沈線有り			弥生中期	29	9
139	3	6L	SD2	土師器	羽釜　取っ手部	-	-	-	(30.1)	-	-	2	内外面・ナデ		外面に煤付着	A-３類16世紀後半	29	9
140	4	7L	SD2	土師器	壺　体部	-	-	-	-	-	-	1	内外面・ナデ	外面に少量の赤彩あり	激しく摩耗	時期不明	29	9
141	7	7N	SD2	土師器	壺　口縁部	(12.2)	-	-	-	3	1	3	内面・ハケ調整　外面・ナデ　口縁部指頭圧痕あり		口縁外面部に煤付着激しく摩耗	時期不明	29	9
142	6	7L	SD2	土師器	羽釜　耳部	-	-	-	-	-	-	1	内外面・ハケ目　指頭痕　管状工具により耳部の穴をあける		外面に煤付着	中世	29	9
143	1	5M	SD2	土師器	甕　口縁部	(13.1)	-	-	-	1.5	1	1	内外面・ナデ			不明	29	9
144	5	8L	SD2	土師器皿	皿　底部	-	-	(5.0)	-	-	-	2	内外面・回転ナデ　回転糸切痕			不明	29	9
145	41	8L	SD2	須恵器	杯蓋　摘み部	-	-	-	-	-	-	1	内面・指押さえ後指ナデ　外面・削りナデ		内面に線刻有り（中央部）	8世紀後半	29	9
146	49	11J	SD2	須恵器	鉢　底部	-	-	(20.7)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　底部・板押さえ圧痕			不明	29	9
147	44	8L	SD2	須恵器	瓶子　底部	-	-	(9.1)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　底部・回転糸切痕　貼付高台	内外面、底部に自然釉あり		8世紀後半	29	9
148	39	8L	SD2	須恵器	無台杯身　底部	-	-	(7.0)	-	-	-	2	内面・回転ナデ　外面・回転ナデ板削り		外面激しく摩耗	8世紀前半	29	9
149	45	12J	SD2	須恵器	有台杯身　底部	-	-	(17.0)	-	-	-	2	内外面・回転ナデ　底部・回転ヘラ削り　貼付高台			8世紀後半	29	9
150	37	4N	SD2	須恵器	鉢　口縁部	(22.0)	-	-	-	1.0	1	1	内外面・回転ナデ			美濃須衛第２小期８世紀中頃	29	9
151	42	8L	SD2	須恵器	甕　頸部	-	-	-	-	-	-	2	内外面・回転ナデ	内外面自然釉付着		不明	29	9
152	48	11J	SD2	須恵器	杯蓋　口縁部	(14.0)	-	-	-	2.0	2	4	内面・回転ナデ　外面・回転ヘラ削り後先端部回転ナデ			8世紀末から9世紀初め	29	9
153	47	11J	SD2	須恵器	杯身　口縁～底部	(14.7)	4.0	(9.8)	-	4.0	5	5	内外面・回転ナデ　底部・ヘラ削り　貼付高台			8世紀末から9世紀初め	29	11
154	43	9M	SD2	須恵器	杯身　底部	-	-	(12.6)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　底部・回転ヘラ削り　貼付高台			8世紀後半	29	9
155	192	5M	SD2	山茶碗	碗　底部	-	-	(8.1)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　貼付高台　回転糸切痕	内面自然釉		尾張系第５型式	29	9

第9表　土器観察表(4)

掲載番号	実測	グリッド	遺構番号	器種	部位	法量(cm) 口径	器高	底径	最大幅	残存率(X/12)	口縁破片部数	破辺数合計	成形・調整	釉薬	備考	時期・産地	挿図図版	写真図版
156	50	13 J	SD 2	須恵器	器種不明	-	-	-	-	-	-	1					30	9
157	46	12 J	SD 2	須恵器	長頸壺　口縁部	(7.6)	-	-	-	6.0	4	8	内外面・回転ナデ	外面に自然釉あり		9世紀前半	30	11
158	199	9 M	SD 2	山茶碗	碗　底部	-	-	(4.0)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　回転糸切痕		内面にやや摩耗	第11型式(脇之畠)	30	9
159	191	4 N	SD 2	山茶碗	碗　底部	-	-	(8.2)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　貼付高台回転糸切痕	内面自然釉	内面激しく摩耗	第4型式(谷迫間)	30	9
160	197	7 L	SD 2	山茶碗	碗　口縁～底部	(14.2)	(3.4)	(5.4)	-	1.0	1	1	内外面・回転ナデ　回転糸切痕			第11型式(脇之畠)	30	-
161	193	4 N	SD 2	山茶碗	碗　口縁～底部	(13.1)	(3.1)	(4.2)	-	1.4	1	2	内外面・回転ナデ　回転糸切痕			第11型式(脇之畠)	30	9
162	204	10K	SD 2	山茶碗	碗　口縁部	(12.3)	-	-	-	1.6	1	1	内外面・回転ナデ　貼付高台		内外面擬殻痕	第10型式(大洞東)	30	9
163	203	10K	SD 2	山茶碗	碗　底部	-	-	(7.1)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　回転糸切痕貼付高台		内外面に少量の媒付着	第5型式(丸石・窯洞)	30	9
164	200	7 N	SD 2	山茶碗	碗　口縁～底部	(12.1)	(3.3)	(4.1)	-	2.2	2	2	内外面・回転ナデ　回転糸切痕		内外面擬殻痕　底部に使途不明の段が有り	第11型式(脇之畠)	30	9
165	202	10K	SD 2	山茶碗	碗　底部	-	-	(6.0)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　回転糸切痕貼付高台	内面全体に少量の自然釉	内面やや摩耗　内外面擬殻痕	第6型式(白土原)	30	9
166	198	8 L	SD 2	山茶碗	碗　底部	-	-	(6.2)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　貼付高台		内面摩耗	第8型式(大畑大洞古)	30	9
167	194	4 N	SD 2	山茶碗	碗　底部	-	-	(8.9)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　回転糸切痕貼付高台		内面激しく摩耗　外面擬殻痕	第5型式(丸石・窯洞)	30	9
168	201	12 J	SD 2	山茶碗	碗　底部	-	-	(7.5)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　回転糸切痕貼付高台		内面激しく摩耗　外面擬殻痕	第4型式(谷迫間)	30	9
169	196	8 L	SD 2	山茶碗	碗　底部	-	-	(8.4)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　底部・回転糸切痕　貼付高台		内面激しく摩耗　外面擬殻痕	第5型式(丸石・窯洞)	30	9
170	205	11 J	SD 2	山茶碗	碗　底部	-	-	(6.2)	-	-	-	1	内面・回転ナデ　外面・回転ナデ指圧痕　回転糸切痕	内面に赤彩(ベンガラ)	砥石に転用?	第5型式(丸石・窯洞)	30	9
172	71	5 N	SD 2	常滑陶器	甕　口縁部	(42.0)	-	-	-	1.0	1	1	内面・回転ナデ　指頭圧痕外面・回転ナデ		赤物	江戸時代	30	10
173	98	12 J	SD 2	常滑陶器	甕　口縁部	(35.3)	-	-	-	1.0	1	1	内面・回転横ナデ　指頭圧痕外面・回転横ナデ	口縁部から体部に焼成時の窯内物付着		15世紀	30	10
174	85	7 L	SD 2	常滑陶器	片口鉢　口縁部	(30.0)	-	-	-	1.8	2	2	内外面・回転ナデ　指頭痕圧　口縁部ヘラ状工具による刻みあり			15世紀後半	31	11
175	99	13 J	SD 2	古瀬戸	尊式花瓶　口縁部	(16.0)	-	-	-	6.0	6	12	内面・回転ヘラ削り外面・回転ナデ	内外面灰釉　内面つけかけ		14世紀～15世紀初め	31	5
176	95	10K	SD 2	古瀬戸	水注　取手部	-	-	-	-	-	-	1	外面・ナデ		外面に媒付着	古瀬戸後Ⅰ期14世紀末	31	10
177	69	5 M	SD 2	古瀬戸	緑釉小皿　底部	-	-	(5.0)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　底部・回転糸切痕　底部内面磨消痕	内外面灰釉	内面に輪トチン痕	古瀬戸	31	10
178	75	5 M	SD 2	古瀬戸	緑釉小皿　底部	-	-	(4.0)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　底部・糸切痕		内面激しく摩耗	古瀬戸後Ⅳ期15世紀後半	31	-
179	74	5 M	SD 2	古瀬戸	折縁小皿　口縁～底部	(11.4)	(1.6)	(6.0)	-	-	1	1	内面・回転ナデ底部回転ヘラ削り　外面・回転ナデ　底部回転糸切痕	口縁部内外面灰釉		古瀬戸中期14世紀中頃	31	10
180	70	5 M	SD 2	古瀬戸	平碗　底部	-	-	(5.2)	-	-	-	1	内面・回転ナデ　外面・回転ヘラ削り　削出高台	内面灰釉	内面に円錐ピン痕	古瀬戸後Ⅳ古期15世紀後半	31	10
181	76	5 M	SD 2	古瀬戸	平碗　口縁部	(14.2)	-	-	-	2.0	1	1	内面・回転ナデ　外面・口縁部にかけて回転ナデ　底部周辺回転ヘラ削り	内外面灰釉		古瀬戸後Ⅳ古期15世紀後半	31	10
182	90	7 L	SD 2	古瀬戸	折縁深皿　底部	-	-	(11.8)	-	-	-	3	内面・回転ナデ　外面・回転ヘラ削り　指つまみ後指押さえの脚有り(3脚)	内外面灰釉少量付着		古瀬戸後Ⅰ期14世紀末	31	11
183	86	8 L	SD 2	瀬戸美濃大窯	擂鉢　底部	-	-	(8.9)	-	-	2	4	内面・回転ナデ　擂り目(1単位16条の溝、幅3cm)　外面・回転ナデ　底部・回転糸切痕	内外面錆釉		16世紀	31	10
184	100	10K	SD 2	瀬戸美濃大窯	丸皿　口縁部	(10.0)	-	-	-	1.0	1	1	内面・回転ナデ　外面・回転ヘラ削り	内外面灰釉		16世紀	31	-
185	68	4 N	SD 2	瀬戸美濃大窯	鉢　底部	-	-	(12.0)	-	-	-	1	内面・回転指ナデ　外面・回転ヘラ削り	内外面鉄釉		15～16世紀	31	10
186	84	8 L	SD 2	瀬戸美濃大窯	加工円盤(天目茶碗)	-	-	5.0	-	-	-	1	内面・回転ナデ　外面・削出高台	内外面鉄釉		16世紀	31	10
187	87	8 L	SD 2	瀬戸美濃大窯	天目茶碗　口縁部	(10.8)	(1.7)	-	-	2.2	2	3	内外面・回転ナデ	内外面鉄釉　底部外面露胎		大窯3　16世紀後半	31	5
188	82	8 L	SD 2	瀬戸美濃大窯	内禿皿　口縁～底部	(10.8)	2.7	(6.1)	-	-	3	5	内面・回転ナデ　外面・口縁部にかけて回転ナデ　底部回転ヘラ削り　削出高台	内外面錆釉　口縁内外部飴釉		大窯4　16世紀末	31	5
189	102	11 J	SD 2	瀬戸美濃大窯	桶　底部	-	-	(15.5)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　貼付高台	外面鉄釉　底部露胎自然釉付着		15世紀	31	10
190	63	4 N	SD 2	瀬戸美濃連房	尾呂茶碗　口縁部	(10.5)	-	-	-	1.0	1	1	内外面・回転ナデ	体部内外面・鉄釉口縁部内外面・飴釉		5～6小期17世紀末～18世紀初め	31	10
191	72	5 N	SD 2	瀬戸美濃連房	菊皿　底部	-	-	(8.4)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　底部・回転ヘラ削り　削出高台	内面灰釉　菊花文底部露胎	内面激しく摩耗	17世紀	31	10
192	62	3 N	SD 2	瀬戸美濃連房	筒形碗　底部	-	-	(7.0)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　削出高台	内外面に灰釉　底部露胎		8小期　18世紀末	31	10
193	103	13 I	SD 2	瀬戸美濃連房	志野織部　丸皿底部	-	-	(6.2)	-	-	-	2	内外面・回転ナデ　底部・糸切痕	内外面長石釉　内面一部灰釉	内面に円錐ピン痕	5小期　17世紀末	31	10
194	94	11 J	SD 2	瀬戸美濃連房	志野鉄絵皿　底部	-	-	(7.0)	-	-	-	1	内面・回転ナデ　外面・回転ヘラ削り　貼付高台	内外面長石釉　内面底部鉄絵で模様	底部内面に円錐ピン痕、外面に円錐ピン	17世紀	31	5
195	92	7 L	SD 2	瀬戸美濃連房	掛分茶碗　口縁部	(7.7)	(5.0)	-	-	-	1	1	内外面・回転ナデ	口縁部内外面鉄釉体部内外面灰釉　底部内面灰釉外面露胎		18世紀後半	32	10
196	97	10K	SD 2	瀬戸美濃連房	片口鉢　口縁部	(16.0)	-	-	-	1	1	1	内外面・回転ナデ	内外面灰釉			32	10
197	91	9 L	SD 2	瀬戸美濃連房	重ね物　底部	-	-	(6.8)	-	-	-	1	内面・回転ナデ　外面・回転ナデ　底部・回転ヘラ削り	外面うのふ釉　底部露胎	内面底部輪ドチ痕	17～18世紀	32	10
198	96	10K	SD 2	瀬戸美濃連房	蓋物蓋　口縁部	(10.8)	-	(8.1)	-	1.0	2	2	内外面・回転ヘラ削り	外面鉄釉	口縁内面部に媒付着	18世紀後半	32	10
199	88	9 L	SD 2	瀬戸美濃連房	丸碗　底部	-	-	5.4	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　削出高台	内面鉄釉　底部外面露胎		3小期　17世紀後半	32	10
200	78	5 N	SD 2	瀬戸美濃連房	擂鉢　口縁部	(32.0)	-	-	-	1.0	1	1	内外面・回転ヘラ削り	内外面鉄釉		9小期　19世紀前半	32	10
201	89	6 L	SD 2	瀬戸美濃連房	卸皿　底部	-	-	-	-	-	-	1	内面・擂目　外面・回転ナデ	内外面鉄釉		不明	32	10
202	61	4 N	SD 2	磁器	広東碗　底部	-	-	(6.4)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　削出高台	内面・染付梅小花文様　底部・高台部外面染付線		9小期　19世紀初め	32	10

第10表　土器観察表(5)

掲載番号	実測	グリッド	遺構番号	器種	部位	法量(cm) 口径	器高	底径	最大幅	残存率(X/12)	口縁破片数	破辺数合計	成形・調整	釉薬	備考	時期・産地	挿図図版	写真図版
203	101	12 J	SD 2	磁器	箱形湯呑　口縁部	(7.9)	-	-	-	3.0	1	1	内外面・回転ナデ	透明釉　染付・内面呉須絵	外面菊紋斜格子　かすり模様	9小期 19世紀前半	32	5
204	73	4 N	SD 2	磁器	花瓶　口縁～底部	-	-	(6.0)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　削出高台	外面瑠璃釉　底部透明釉		19世紀	32	5
205	83	8 L	SD 2	瀬戸美濃連房	片口鉢　注口部	-	-	-	-	-	-	1	内面・回転ナデ　外面・ヘラ削り	内外面灰釉		17～18世紀	32	10
216	36	4 M	P 4	須恵器	有台杯身　底部	-	-	(5.8)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　底部・回転ヘラ削り　貼付高台			8世紀後半	33	12
217	54	16H	P93	須恵器	杯身　口縁部	(14.0)	-	-	-	1.0	1	1	内外面・回転ナデ		内面激しく摩耗	8世紀後半	33	12
218	217	23E	P126	山茶碗	碗　口縁部	(12.2)	-	-	-	0.8	1	1	内外面・回転ナデ	内外面・口縁部に自然釉		不明(明和?)	33	-
219	190	4 M	P 7	山茶碗	皿　口縁～底部	(7.4)	(1.0)	(4.6)	(7.4)	1.8	1	1	内外面・回転ナデ　回転糸切痕			第11型式 (脇之島)	33	12
220	218	22E	P117	山茶碗	碗　底部	-	-	(5.3)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　回転糸切痕　貼付高台		外面擦殻痕有　内面やや摩耗	第8型式 (大畑大洞古)	33	-
221	188	4 N	P 2	山茶碗	碗　底部	-	-	(8.2)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　貼付高台		内面激しく摩耗	尾張第5型式	33	12
222	216	22F	P118	山茶碗	皿　底部	-	-	(6.0)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　回転糸切痕			大洞東以降	33	-
223	152	36A	P199	瀬戸美濃連房	小杯　底部	-	-	(2.9)	-	-	-	2	内面・回転ナデ　外面・底部周辺回転ヘラ削り　削出高台	内面灰釉　外面露胎		7～8小期 18世紀後半	33	13
224	106	16G	P96	瀬戸美濃連房	擂鉢　口縁部	-	-	-	-	-	1	1	内外面・回転ナデ	内外面錆釉		第8小期 18世紀末	33	13
225	119	20F	P111	常滑陶器	甕　体部	-	-	-	-	-	-	1	内面・板ナデ指頭圧痕　外面・回転ナデのちハケ		赤物	江戸時代	33	13
226	24	9 K	包含層	縄文土器	深鉢　体部	-	-	-	-	-	-	2	内面・ナデ　指頭圧痕　外面・ナデ無文板状のもので押さえた跡一部押型文(市松状、楕円形)			後期中葉	34	11
227	27	-	包含層	縄文土器	深鉢　体部	-	-	-	-	-	-	1	内面・ナデ　指頭圧痕 外面・ナデ　沈線(斜方向)		外面に煤付着	後期中葉 堀之内2式	34	11
228	28	22F	包含層	縄文土器	深鉢　体部	-	-	-	-	-	-	1	内面・ナデ　外面・沈線 押型文(市松状、楕円形)		外面に煤付着	後期中葉　北白川上層3式	34	11
229	10	18G	包含層	土師器	高杯　脚部	-	-	-	-	-	-	1	内面・指頭痕　外面・ナデ		激しく摩耗	廻間様式	34	11
230	2	8 L	包含層	土師器	羽釜　耳部	-	-	-	-	-	-	1	内外面・指圧痕　外面・ハケ目　管状工具により耳部の穴をあける		外面に多量の煤付着	15～16世紀	34	11
234	14	23D	包含層	土師器	壺　底部	-	-	4.3	-	-	-	1	内外面・ナデ　外面・指頭圧痕		外面に煤付着	時期不明	34	11
235	20	33C	包含層	土師器皿	皿　口縁～底部	(13.7)	(2.1)	(6.3)	-	1.5	2	2	内外面・指ナデ　外面・指頭痕				34	11
236	255	15H	包含層	弥生土器	壺　体部	-	-	-	-	-	-	1	内外面・横方向のナデ 突帯上にヘラによる刻み			前期か中期	34	11
237	35	-	南北TR	須恵器	杯身　口縁～底部	(12.6)	3.3	(9.8)	-	3.0	2	2	内外面・回転横ナデ 貼付高台　高台内側板ナデ			8世紀中ごろ	34	12
238	52	-	南北TR	須恵器	壺　底部	-	-	(10.8)	-	-	-	1	内面・板ナデ　外面・回転ヘラ削り　回転ナデ　貼付高台			不明	34	12
239	38	-	包含層	須恵器	杯身　底部	-	-	(5.0)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　底部・回転糸切痕		内面にわずかに煤付着	9世紀前半	34	12
240	56	20F	包含層	須恵器	高杯　脚部	-	-	(11.2)	-	-	-	1	内面・回転ナデ　外面・回転ナデヘラ削り 脚部端部に折り返し有り			不明	34	12
241	32	23D	包含層	灰釉陶器	碗　底部	-	-	-	(9.4)	-	-	1	内外面・回転ナデ　貼付高台		内側に摩耗あり	丸石2　11世紀	34	-
242	189	4 M	木の根	山茶碗	碗　底部	-	-	(5.4)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　貼付高台		外面擦殻痕	第6型式 (白土原)	34	-
243	209	15H	包含層	山茶碗	碗　底部	-	-	(5.0)	-	-	-	1	内面・回転ナデ磨消痕 外面・回転ナデ　回転糸切痕 貼付高台	内面全体に少量の自然釉	内外面擦殻痕	第7型式 (明和)	34	12
244	213	23E	包含層	山茶碗	碗　底部	-	-	(7.7)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　回転糸切痕 貼付高台	内面に自然釉		第4型式 (谷迫間)	34	12
245	236	36B	包含層	山茶碗	碗　底部	-	-	(6.0)	-	-	-	1	内面・回転ナデ　磨消痕 外面・回転ナデ　底部　指頭圧痕　貼付高台		外側擦殻痕　内面やや摩耗	第5型式 (丸石・窯洞)	34	12
246	221	20G	南北TR	山茶碗	碗　口縁～底部	(12.0)	(3.5)	(3.3)	-	0.4	1	3	内外面・回転ナデ　回転糸切痕 貼付高台	内面に自然釉		第10型式 (大洞東)	34	12
247	215	23E	TR 4	山茶碗	碗　底部	-	-	(5.6)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　回転糸切痕 貼付高台		外面擦殻痕　内面やや摩耗	第5型式 (丸石・窯洞)	34	12
248	229	25D	撹乱	山茶碗	碗　底部	-	-	(2.6)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　回転糸切痕 貼付高台		外面擦殻痕	第10型式 (大洞東)	34	-
249	195	7 L	包含層	山茶碗	碗　底部	-	-	4.2	-	-	-	3	内外面・回転ナデ　回転糸切痕			第11型式 (脇之島)	34	12
250	228	25E	包含層	山茶碗	皿　口縁～底部	(8.2)	(2.3)	(4.1)	-	1.0	1	1	内外面・回転ナデ　回転糸切痕			第11型式 (脇之島)	34	12
251	238	29C	包含層	山茶碗	皿	7.9	1.4	4.4	-	12.0	2	2	内面・回転ナデ　磨消痕有り 外面・ナデ回転糸切痕　板目状圧痕			第7型式 (明和)	34	11
252	207	-	包含層	山茶碗	皿　口縁～底部	(8.0)	(1.1)	(5.2)	-	3.2	3	3	内外面・回転ナデ　回転糸切痕			明和以降	34	12
253	226	24E	包含層	山茶碗	皿　底部	-	-	(3.9)	-	-	-	1	内面・回転ナデ　磨消痕 外面・回転ナデ　回転糸切痕			第11型式 (脇之島)	34	-
254	208	16H	包含層	山茶碗	皿　底部	-	-	4.6	-	-	-	2	内面・回転ナデ　磨消痕 外面・回転ナデ　底部・板押さえ痕　回転糸切痕		外面底部煤付着	明和以降	34	12
255	227	25E	包含層	山茶碗	皿　底部	-	-	(4.0)	-	-	-	1	内面・回転ナデ　磨消痕 外面・回転ナデ　回転糸切痕			明和以降	34	-
256	237	30C	包含層	山茶碗	皿　口縁～底部	(8.1)	(1.2)	(5.1)	-	0.7	1	1	内外面・回転ナデ回転糸切痕	内面に少量の自然釉付着		第10型式 (大洞東)	34	12
257	214	22E	包含層	山茶碗	皿　底部	-	-	(4.9)	-	-	-	1	内面・回転ナデ　磨消痕 外面・回転ナデ　回転糸切痕			明和以降	34	12
258	118	20F	包含層	古瀬戸	折縁皿　口縁部	(11.0)	-	-	-	1.0	1	1	内外面・回転ナデ	内外面灰釉		古瀬戸後Ⅰ期 14世紀末	35	13
259	167	30C	撹乱	古瀬戸	仏供　底部	-	-	(5.0)	-	-	-	1	外面・回転ナデ　回転糸切痕	脚部灰釉　底部露胎		古瀬戸中期 14世紀中頃	35	13
260	259	35A	撹乱	古瀬戸	水注　体部	-	-	-	(13.0)	-	-	1	内面・指ナデ　指頭痕 外面・指ナデ	外面に灰釉　ワラビ唐草印花文様		古瀬戸中期 14世紀中頃	35	5
261	79	7 L	包含層	古瀬戸	擂鉢　底部	-	-	(11.2)	-	-	-	2	内面・回転ナデ　擂目(1単位15条の溝、幅3.5cm)　外面・回転ナデ　底部・回転糸切痕	内外面錆釉	内外面激しく摩耗	古瀬戸後期 15世紀	35	13
262	67		南TR	瀬戸美濃大窯	志野丸皿　口縁部	(12.5)	-	-	-	3.0	1	1	内外面・回転ナデ	内外面灰釉		17世紀前半	35	12

第11表　土器観察表(6)

掲載番号	実測	グリッド	遺構番号	器種	部位	法量(cm) 口径	器高	底径	最大幅	残存率(X/12)	口縁破片部数	破辺数合計	成形・調整	釉薬	備考	時期・産地	挿図図版	写真図版
263	186	28D	TR3	瀬戸美濃大窯	菊皿　口縁部	-	-	-	-	1.0	1	1	内外面・回転ナデ	内外面長石釉		大窯4　16世紀末～17世紀初め	35	12
264	116	20F	包含層	瀬戸美濃大窯	天目茶碗　口縁部	(13.0)	-	-	-	1.0	1	1	内外面・回転ナデ	内外面鉄釉　底部に露胎		大窯3　16世紀後半	35	12
265	64		南TR	瀬戸美濃大窯	天目茶碗　底部	-	-	(4.4)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　内反り高台	内外面・鉄釉とうのふ釉の重ねかけ		大窯2　16世紀中頃	35	12
266	81	6L	北TR	瀬戸美濃大窯	擂鉢　底部	-	-	(11.7)	-	-	-	1	内面・擂目(1単位10条の溝、幅2.7cm)　底部擂目あり　外面・回転ナデ　底部・回転糸切痕	内外面鉄釉		16世紀	35	13
267	104	16H	包含層	常滑陶器	甕　口縁部	(23.2)	-	-	-	2.0	2	4	内面・回転横ナデ　指頭圧痕輪積み痕有り 外面・回転横ナデ	内外面口縁部に自然釉		15世紀後半	35	5
268	149	26E	包含層	瀬戸美濃連房	香炉　底部	-	-	(8.4)	-	-	-	1	内面・回転ナデ　外面・底部周辺回転ヘラ削り　削出高台	内外面鉄釉　高台部露胎	内面底部に文様	8小期　18世紀末	35	5
269	257	23E	包含層	瀬戸美濃連房	十能　取手部	-	-	-	-	-	-	1	内外面・回転ナデ 取っ手部貼り付け	内面口縁部、取っ手部鉄釉　外面部露胎	多量の煤付着	18～19世紀	35	13
270	148	28D	包含層	輸入磁器	青磁碗　口縁部	-	-	-	-	1.0	1	1	内外面・回転ナデ	内外面青磁釉　外面に　連弁文		15世紀	35	13
271	146	31C	包含層	輸入磁器	青磁碗　体部	-	-	-	-	-	-	1	内外面・回転ナデ	内外面青磁釉		15世紀	35	13
272	145	36B	包含層	磁器	御神酒入れ　注口部	1.0	(4.3)	-	-	-	1	1	内外面・回転ナデ	内外面瑠璃釉		明治以降	35	13
273	66		南TR	瀬戸美濃連房	皿　口縁部	(31.4)	-	-	-	1	1	1	内面・回転ナデ　外面・口縁部回転ナデ　体部回転ヘラ削り	内外面灰釉		17世紀頃	36	13
274	114	22E	包含層	瀬戸美濃連房	糸目形碗　底部	-	-	(7.4)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　底部・ヘラ削り　削出高台	内外面灰釉		18世紀	36	13
275	60		南北TR	瀬戸美濃連房	片口鉢　底部	-	-	(13.8)	-	-	-	1	内面・ナデ　外面・回転ナデ　底部・外面周辺回転ヘラ削り　削出高台	内外面に灰釉	内面にトチン痕有り	7～8小期 18世紀末	36	13
276	147	34B	包含層	瀬戸美濃連房	丸碗　底部	-	-	(4.0)	-	-	-	1	内外面・回転ナデ　削出高台	内外面灰釉		18世紀	36	13
277	80	6L	北TR	瀬戸美濃連房	擂鉢　底部	-		(9.0)	-	-	-	1	内面・擂目(1単位19条の溝、幅2.5cm)　底部にも擂目あり　外面・回転ナデ　底部・回転糸切痕	内外面錆釉		17～18世紀	36	13
278	65		南TR	瀬戸美濃連房	片口鉢　底部	-	-	(11.2)	-	-	-	1	内面・ナデ　外面・回転ヘラナデ　底部・板ナデ　削出高台	内外面・錆釉の上に緑釉の重ねかけ　底部・錆釉		4小期　17世紀後半	36	13
279	112	23E	包含層	瀬戸美濃連房	灯明皿　底部	(7.2)	(1.4)	-	-	-	1	1	内面・ナデ　外面・回転ヘラ削り	内面灰釉		10小期　19世紀中頃	36	5
280	117	20F	包含層	瀬戸美濃連房	緑釉小皿　口縁部	(10.4)	-	-	-	2.0	1	1	内外面・回転ナデ	内外面口縁部灰釉 外面・釉の下側に鉄分の赤い沈着線あり	外面底部煤付着		36	13
281	113	22E	包含層	瀬戸美濃連房	小杯　口縁～底部	(5.5)	(3.1)	(2.9)	(5.6)	2.0	1	1	内面・回転ナデ　外面・口縁部回転ナデ　底部周辺回転ヘラ削り　削出高台	内面、外面口縁部長石釉　高台に露胎		7～8小期 18世紀後半	36	13
282	111	22F	包含層	瀬戸美濃連房	小杯　口縁～底部	4.7	3.1	2.7	-	11.0	1	1	内面・回転ナデ　外面・口縁部周辺ナデ　底部周辺回転ヘラ削り　削出高台	内面全体と口縁部外面に灰釉　口縁部内面に灰釉化粧がけ		7～8小期 18世紀後半	36	5
283	93		包含層	瀬戸美濃連房	志野織部　丸皿底部	-	-	(6.4)	-	-	-	1	内面・回転ナデ　外面・回転ヘラ削り　貼付高台	内外面長石釉　内面灰釉による釉だまり有り		17世紀前半	36	12

第12表　土製品観察表

掲載番号	実測番号	グリッド	遺構番号	器種	部位	法量(cm) 全長	小径	大径	口径	質量(g)	口縁破片部数	破辺数合計	成形・調整	釉薬	備考	時期・産地	挿図図版	写真図版
110	8	14I	SD01	土師器	土錘	4.6	0.9	1.3	3.5	8.6	-	1	端部面取り　体部外面削り		完形		26	11
231	19	29C	包含層	土師器	土鈴　頸部	-	-	-	-	4.5	-	1	外面・指頭圧痕			時期不明	34	11
232	18	30C	包含層	土師器	土錘	3.2	0.9	1.5	5.0	5.4	-	1	端部面取り		折損(上部)		34	11
233	15		包含層	土師器	土錘	5.1	0.5	1.4	1.0	12.1	-	1	端部面取り		完形		34	11

第13表　石器観察表

掲載番号	実測番号	グリッド	遺構番号	内　容	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	質量(g)	依存状況	備　考	挿図図版	写真図版
134	16	22F	ST4	石核	下呂石	8.4	5.3	5.2	296.1			28	14
171	11	11J	SD2	円礫	濃飛流紋岩	12.6	9.9		930.0		自然石、ベンガラ付着	30	—
294	14	15H	包含層	RF	チャート	3.1	2.9	1.1	62.0	完形	リタッチ2箇所あり	37	14
295	18	23E	包含層	凹石	砂岩	6.2	5.1	2.3	94.6	完形		37	14

第14表　有肩扇状石器観察表

掲載番号	実測番号	グリッド	遺構番号	内　容	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	質量(g)	依存状況	刃部数	平面形	調　整	備　考	挿図図版	写真図版
88	19	19F	SD12	有肩扇状石器	ホルンフェルス	17.2	10.3	15.0	194.5	折損	2	バチ形	有り	刃部折損部再加工痕有り	25	14

第15表　磨石観察表

掲載番号	実測番号	グリッド	遺構番号	内　容	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	質量(g)	研磨面	依存状況	備　考	挿図図版	写真図版
84	17	23E	SD12	磨石	濃飛流紋岩	11.7	10.2	5.8	1,020.0	1面	完形		25	14
209	4	7N	SD1	磨石	濃飛流紋岩	21.1	7.1	4.7	1,210.0	2面	完形		32	14

第16表　打欠石錘観察表

掲載番号	実測番号	グリッド	遺構番号	内　容	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	質量(g)	打欠下部(cm)	打欠間(cm)	依存状況	備　考	挿図図版	写真図版
214	5	7L	SD1	打欠石錘	砂岩	4.9	4.7	1.2	41.9	0.45	4.4	完形		33	14

第17表　スクレイパー観察表

掲載番号	実測番号	グリッド	遺構番号	内　容	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	質量(g)	依存状況	刃部数	平面形	調　整	備　考	挿図図版	写真図版
85	23	26D	SD12	スクレイパー	頁岩	9.0	5.4	1.4	70.2	完形	1	楕円形	あり		25	14
123	24	34B	SK83	スクレイパー	結晶片岩	9.4	7.6	2.0	166.9	完形	1	三角形	あり	打製石斧の再加工品	27	14

第18表　打製石斧観察表

掲載番号	実測番号	グリッド	遺構番号	内　容	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	質量(g)	依存状況	刃部摩耗	自然面の有無	挿図図版	写真図版
206	7	7L	SD1	打製石斧	ホルンフェルス	11.8	8.2	1.8	295.4	折損	なし	無	32	14
207	1	5M	SD2	打製石斧	桂花木	11.1	4.6	1.5	122.6	完形	なし	有り	32	14
208	6	7L	SD1	打製石斧	ホルンフェルス	7.6	6.2	1.9	118.9	折損	有り	有り	32	14
292	25	26D	撹乱	打製石斧	ホルンフェルス	19.0	5.6	2.6	174.1	完形	有り	有り	37	14
293	12		包含層	打製石斧	ホルンフェルス	11.3	4.4	1.6	90.7	完形	有り	有り	37	14

第19表　砥石観察表

掲載番号	実測番号	グリッド	遺構番号	内　容	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	質量(g)	研磨面	依存状況	使用法	形　状	溝	用　途	挿図図版	写真図版
86	26	30C	SD12	砥石	砂岩	4.1	3.1	9.5	18.7	1面	完形	手持ち	方形	無し	仕上げ砥	25	14
210	8	7L	SD2	砥石	砂岩	13.7	5.0	12.4	1,230.0	2面	完形	手持ち	方形	無し	仕上げ砥　，	32	14
211	9	7L	SD2	砥石	砂岩	15.8	4.7	12.8	960.0	2面	折損	置き	方形	無し	仕上げ砥、横面に炭化物付着、赤化	33	14
212	10	7N	SD2	砥石	砂岩	15.2	14.8	4.3	1,120.0		折損				砥石の未製品	33	—
213	2	3N	SD2	砥石	砂岩	10.6	5.7	5.1	508.1	4面	折損	置き	柱状	無し	仕上げ砥。被熱して折損。	33	14
215	13	10K	SD2	砥石	濃飛流紋岩	4.5	4.4	0.9	28.1	1面	折損	手持ち	方形	無し	仕上げ砥	33	14

第20表　石臼観察表

掲載番号	実測番号	グリッド	遺構番号	内　容	石　材	臼径(cm)	縁径(cm)	器高(cm)	質量(g)	依存状況	部位	芯棒孔	溝	備　考	挿図図版	写真図版
83	20	26F	SD12	石臼	安山岩	—	—	10.9	1,250.0	折損	下臼	無	有り(本数不明)	粉引き臼	25	14
87	21	30C	SD12	石臼	砂岩	—	—	2.4	167.8	折損	上臼	—	—	茶臼	25	14
112	3	7M	SD3	石臼	花崗岩	(32.0)	—	9.3	1,230.0	折損	上臼	無	3条	粉引き臼	26	14
290	15	21F	南北TR	石臼	花崗岩	31.4	—	10.3	16,000.0	完形	下臼	有り			37	15
291	27		表採	石臼	花崗岩	(40.0)	(26.0)	10.5	6,320.0	折損	上臼	有り	無	粉引き臼　たが締め式心棒受け有り	37	15

第21表　釘観察表

掲載番号	実測番号	グリッド	遺構番号	層位	内　容	長さ(cm)	頭部径(cm)	脚部厚さ(cm)	質量(g)	残存状態	備　考	挿図図版	写真図版
81	8	25E	SD12	2層	釘	4.5	0.7	0.3	3.5	完存		25	15
125	5	22F	SK59	1層	釘	2.3	0.6	0.3	0.9	欠損		27	15
288	2	23E	包含層	II層	釘	5.4	0.8	0.5	6.4	完存		36	15
289	3	22E	包含層	II層	釘	(3.5)	(0.7)	0.3	1.6	釘先欠損		36	15

第22表　金属製品観察表

掲載番号	実測番号	グリッド	遺構番号	層位	内　容	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	質量(g)	残存状態	備　考	挿図図版	写真図版
82	9	26F	SD12	3層	鎌	11.7	4.7	0.5	66.5	折損	柄部分の木片部残存柄と刃の留め具残存	25	15
111	1	5M	SD1	3層	鍬か鋤	—	—	0.2	25.9	一部		26	15
284	7	25D	撹乱	1層	握り鋏	14.2	1.3	0.4	19.1	折損		36	—
285	10	31C	包含層	II層	環状金属製品	11.7	3.7	0.3	33.1	完存		36	15
286	6	24D	包含層	II層	鏃	(7.3)	1.5	0.6	27.6	折損		36	15
287	4	22E	包含層	II層	飾り金具	—	1.2	0.2	9.7	折損		36	15

第23表　銭貨観察表

掲載番号	実測番号	グリッド	遺構番号	層位	内　容	銭径(cm)	内径(cm)	銭厚(cm)	質量(cm)	残存状態	材質、初鋳年他	挿図図版	写真図版
124	11	28C	SK74	1層	古銭、刀子	7.7	2.9	1.3	13.8			27	15
124-A	11	28C	SK74	1層	古銭	2.3	0.5	0.1	1.9	折損	寛永通宝　四ッ宝銭　銅銭(1708)	27	15
124-B	11	28C	SK74	1層	古銭	2.5	0.5	0.1	3.5	完形	寛永通宝　水戸銭　銅銭(1635)　(古寛永銭)	27	15
124-C	11	28C	SK74	1層	古銭、刀子	2.4 2.4	0.6 0.6	0.1 0.1	4.5	完形	2枚重なり、質量に刀子分も含む。寛永通宝	27	—
124-D	11	28C	SK74	1層	古銭、刀子	2.5	0.5	0.1	3.7	完形	質量に刀子分も含む。寛永通宝重揮通無背銭(石ノ巻)　銅銭(1728)	27	—
124-E	11	28C	SK74	1層	古銭、刀子	2.2 2.5	0.5 0.5	0.1 0.1	5.6	完形	2枚重なり、質量に刀子分も含む。寛永通宝　重揮通無背銭(石ノ巻) 銅銭(1728)	27	—

第5章　自然科学分析

第1節　放射性炭素年代測定

山形　秀樹（パレオ・ラボ）

1．はじめに

深渡A地点遺跡より検出された炭化物の加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を実施した。

2．試料と方法

試料は、2区暗渠（SD2）1層内から採取した炭化球果（マツ属複維管束亜属）1点、6区溝跡（SD12）1層内焼土から採取した草本炭化物1点の併せて2点である。

これら試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨（グラファイト）に調整した後、加速器質量分析計（AMS）にて測定した。測定された^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した^{14}C濃度を用いて^{14}C年代を算出した。

3．結果

表24に、各試料の同位体分別効果の補正値（基準値－25.0‰）、同位体分別効果による測定誤差を補正した^{14}C年代、^{14}C年代を暦年代に較正した年代を示す。

^{14}C年代値（yrBP）の算出は、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±1σ）は、計数値の標準偏差σに基づいて算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。これは、試料の^{14}C年代が、その^{14}C年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、および半減期の違い（^{14}Cの半減期5,730±40年）を較正し、より正確な年代を求めるために、^{14}C年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と^{14}C年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて^{14}C年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて^{14}C年代を暦年代に較正した年代を算出する。

^{14}C年代を暦年代に較正した年代の算出にCALIB 4.3（CALIB 3.0のバージョンアップ版）を使用した。なお、暦年代較正値は^{14}C年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、1σ暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の

百分率の値はその1σ暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。1σ暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

第24表　放射性炭素年代測定結果

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}C_{PDB}$ (‰)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1724 (AMS)	炭化球果 (マツ属複維管束亜属) 2区土坑 SK 13内	−25.5	110±25	cal AD 1700 cal AD 1720 cal AD 1815 cal AD 1830 cal AD 1880 cal AD 1915 cal AD 1950	cal AD 1695−1725 (29.7%) cal AD 1810−1890 (63.0%)
PLD-1725 (AMS)	草本炭化物 6区溝跡 SD12 1層内焼土	−28.8	75±25	cal AD 1950	cal AD 1700−1720 (23.5%) cal AD 1815−1830 (17.1%) cal AD 1880−1915 (53.7%)

4．考察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行なった。暦年代較正した1σ暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

引用文献

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の^{14}C 年代、p. 3-20.

Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended ^{14}C Database and Revised CALIB 3.0 ^{14}C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p. 215-230.

Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J. W., Burr, G. S., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, F. G., v. d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998) INTCAL 98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p. 1041-1083.

第２節　花粉化石群集

新山　雅広（パレオ・ラボ）

１．試料

花粉化石群集の検討は、近世の暗渠（礫下）および中世の溝（最下層）埋土より採取された２試料について行った。近世の暗渠（試料１）は砂混じりシルト質粘土、中世の溝（試料２）は砂を主体とした堆積物である。

２．方法

花粉化石の抽出は、試料約２～３ｇを10％水酸化カリウム処理（湯煎約15分）による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理（約30分）による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理（氷酢酸による脱水、濃硫酸１に対して無水酢酸９の混液で湯煎約５分）の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離（臭化亜鉛を比重2.1に調整）による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に撹拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定・計数した。その計数結果をもとにして、各分類群の出現率を樹木花粉は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉およびシダ植物胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

３．花粉化石群集の記載

同定された分類群数は、樹木花粉13、草本花粉８、形態分類で示したシダ植物胞子２である。以下に、各試料の花粉化石群集を記載する。

［近世の暗渠・礫下（試料１）の花粉化石群集］

樹木花粉の占める割合は60％程度である。その中で、マツ属（不明）が30％程度と最も高率である。マツ属（不明）は、状態が非常に悪く、複維管束亜属か単維管束亜属か区別し得なかったが、大半ないし全てが複維管束亜属と予想される。このマツ属（不明）を含めると、複維管束亜属は40％程度を占めることになる。次いで、スギ属、コナラ亜属、クリ属の順に高率である。草本花粉は、イネ科が20％程度で最も高率であり、アブラナ科、ヨモギ属、タンポポ亜科が若干目立つ。他は、ソバ属、アリノトウグサ属などが１％以下で出現する。

［中世の溝・最下層（試料２）の花粉化石群集］

十分な花粉化石が産出せず、花粉化石分布図として示すことができなかった。樹木花粉では、マツ属複維管束亜属、マツ属(不明)、スギ属、コナラ亜属などが産出し、草本花粉ではイネ科のみが産出した。

４．考察

近世の遺跡周辺には、マツ属複維管束亜属、スギ属といった針葉樹の卓越する森林が成立していた

と予想される。また、落葉広葉樹のコナラ亜属、クリ属も主要な要素であり、虫媒花のクリ属は遺跡付近に多くみられたであろう。常緑については、シイノキ属が僅かに混じる程度で、殆どみられないような状況であったと考えられる。付近では、ソバ属の出現からソバ栽培が行われていたと考えられ、有用植物を多く含むアブラナ科（ナタネ）なども栽培されていた可能性がある。また、アリノトウグサ属、ヨモギ属、タンポポ亜科などが生育するような人の干渉を強く受けた日当たりの良い草地がみられたであろう。多産するイネ科については、属まで絞り込むことは困難であるが、ススキやシバなどの草地優占種である可能性が考えられる。

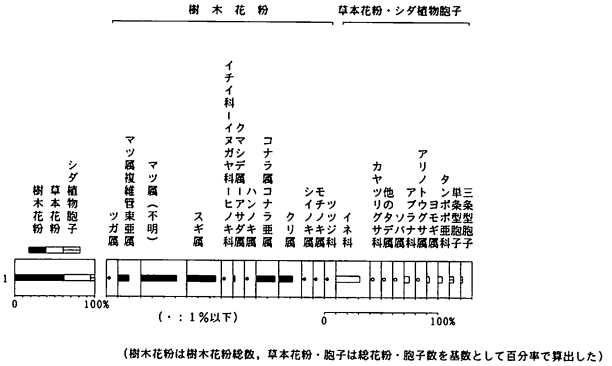
なお、暗渠の堆積物（試料１）は、花粉化石の産出個数は豊富であったが、保存状態については、ほぼ全てが極めて悪かった。このことから、暗渠は基本的には水付きであったものの、あまり安定した滞水環境ではなく、幾分乾き気味になることも頻繁にあったのではないかと思われる。中世の溝(試料２）については、十分な花粉化石が産出しなかったが、砂が卓越する堆積物であり、花粉化石が流出してしまったことが予想される。中世の古植生については推定することができなかったが、樹木花粉では、マツ属複維管束亜属、マツ属(不明)、スギ属、コナラ亜属が比較的多く得られており、主要な森林要素については近世と大きくは変わりがなかった可能性が考えられる。

第25表　花粉化石産出一覧表

和名	学名	1	2
樹木			
ツガ属	*Tsuga*	1	-
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	21	3
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	67	4
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	-	1
スギ属	*Cryptomeria*	54	3
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.- C.	1	-
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	4	-
ハンノキ属	*Alnus*	1	-
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	36	6
クリ属	*Castanea*	26	1
シイノキ属	*Castanopsis*	1	-
モチノキ属	*Ilex*	1	-
ツツジ科	Ericaceae	1	-
草本			
イネ科	Gramineae	73	3
カヤツリグサ科	Cyperaceae	1	-
他のタデ属	other Polygonum	1	-
ソバ属	*Fagopyrum*	1	-
アブラナ科	Cruciferae	16	-
アリノトウグサ属	*Haloragis*	1	-
ヨモギ属	*Artemisia*	8	-
タンポポ亜科	Liguliflorae	13	-
シダ植物			
単条型胞子	Monolete spore	13	6
三条型胞子	Trilete spore	6	4
樹木花粉	Arboreal pollen	214	18
草本花粉	Nonarboreal pollen	114	3
シダ植物胞子	Spores	19	10
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	347	31
不明花粉	Unknown pollen	28	3

T．－C．はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

試料１：暗渠（近世）　試料２：溝最下層（中世）



（樹木花粉は樹木花粉総数，草本花粉・胞子は総花粉・胞子数を基数として百分率で算出した）

第38図　暗渠（近世）の花粉化石分布図

第3節　山茶碗・岩石付着赤色顔料の蛍光X線分析

小村美代子（パレオ・ラボ）

1．はじめに

ここでは、山茶碗内部に付着する赤色顔料と、この山茶碗の脇から検出された岩石に付着する赤色顔料の蛍光X線分析を行い、赤色顔料の成分について検討した。

2．試料と方法

試料は山茶碗内部に付着する赤色顔料と、この山茶碗の脇から検出された岩石に付着する赤色顔料の2点である。試料の詳細については第26表に示す。山茶碗に付着する赤色顔料は、内面の側面に赤黒くはっきりと付着しており、内面底部や破断面にもうっすらと赤色が確認される。岩石に付着する赤色顔料は、岩石を構成する鉱物等に由来する物質ではなく、大きく斑状に付着した状態を示す（写真1参照）。なお、岩石は濃飛流紋岩の円礫である。

測定試料は、各試料の赤色部にセロハンテープを押し付けて赤色顔料を採取した。各赤色顔料の採取箇所は写真1で○印で示す。ただし測定試料は、純粋に赤色顔料のみではなく、セロハンテープに赤色顔料と共に付着した胎土や土壌等も僅かに含まれる。

分析はセイコー電子工業（株）製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA－2001Lである。装置の仕様は、X線発生部の管球のターゲットはロジウム(Rh)、ベリリウム(Be)窓、X線検出器はSi(Li)半導体検出器である。測定条件は、測定時間300秒、照射径10㎜、電流63μA、電圧50kV、試料室内は真空である。

第26表　試料の詳細

遺物番号	グリッド	遺構層位	遺　物
170	11J	3区暗渠 SD2　2層	山茶碗
171	11J	3区暗渠 SD2　2層	岩石（濃飛流紋岩）

3．分析結果

第39図には蛍光X線スペクトル図、第27表には、蛍光X線分析で検出された赤色顔料に関係する元素やその他検出された元素などを示す。検出された元素は、鉄(Fe)、アルミニウム(Al)、ケイ素(Si)、イオウ（S）、カリウム（K）、カルシウム（Ca）、チタン（Ti）、亜鉛（Zn）がある。

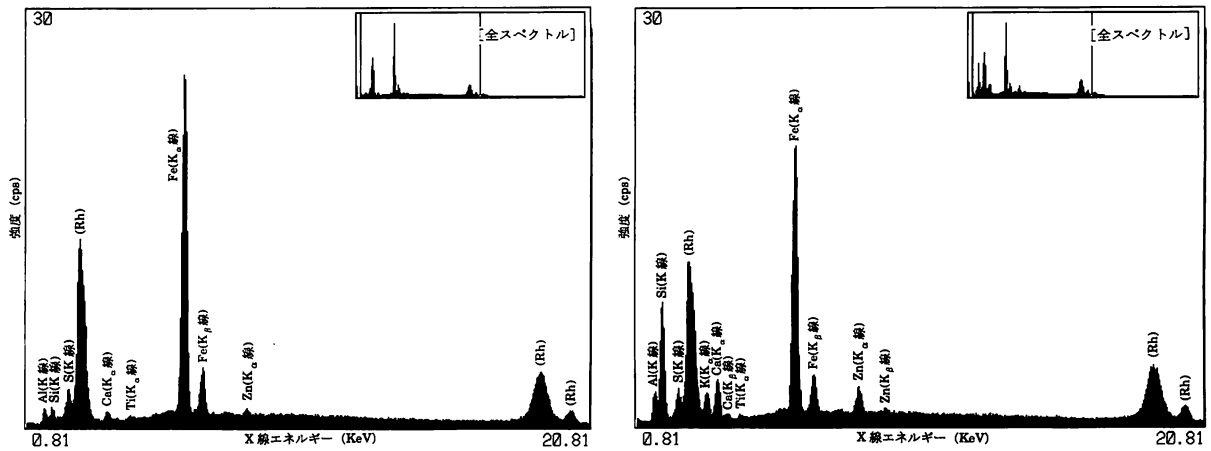
なお、ロジウム（Rh）のピークはX線発生部の管球（ロジウム）に由来するものであり、試料に含まれる元素とは関係がない。また、イオウ（S）はセロハンテープにも含まれる元素でこれも試料とは関係がない。

山茶碗と岩石付着赤色顔料からは共に鉄（Fe）が高く検出され水銀（Hg）は検出されなかったことから、これら赤色顔料は鉄が主成分であることが確認された。山茶碗付着赤色顔料は意図的に使用された付着状況からベンガラと考えられる。岩石付着赤色顔料は付着状況から意図的に使用されたのか判断ができない為、表2の顔料同定の欄にはカッコ表示でベンガラと記載した。

第27表　試料から検出された元素と顔料の種類

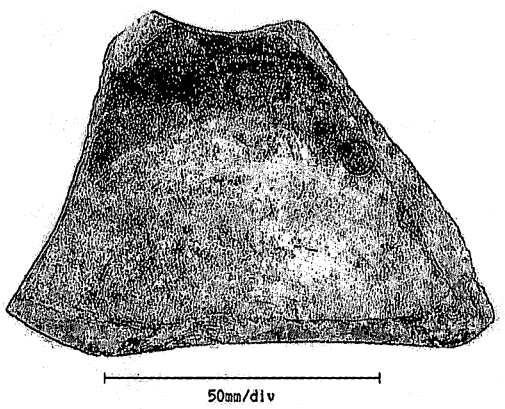
遺物番号	遺　　物	Hg	Fe	顔料同定	その他検出された元素
170	山茶碗	—	○	ベンガラ	Al、Si、S、Ca、Ti、Zn
171	岩石（濃飛流紋岩）	—	○	（ベンガラ）	Al、Si、S、K、Ca、Ti、Zn

［元素記号］Al：アルミニウム、Si：ケイ素、S：イオウ、K：カリウム、Ca：カルシウム、Ti：チタン、Fe：鉄、Zn：亜鉛、Hg：水銀
［記号］　○：検出、—：未検出

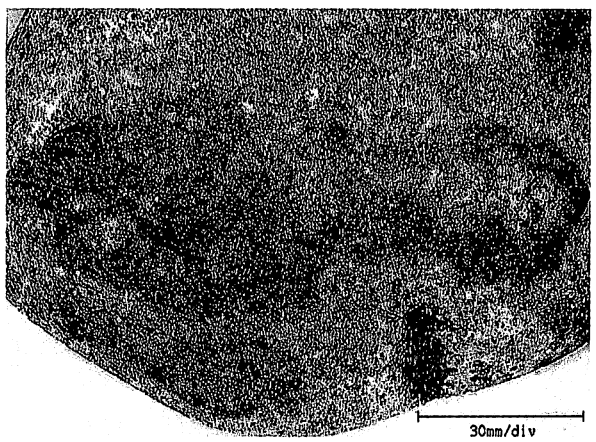


第39図　赤色顔料の蛍光X線スペクトル図

［元素記号］Al：アルミニウム、Si：ケイ素、S：イオウ、K：カリウム、Ca：カルシウム、Ti：チタン、Fe：鉄、Zn：亜鉛、Rh：ロジウム（X線管球より）



遺物番号170
山茶碗付着赤色顔料



遺物番号171
岩石付着赤色顔料

第40図　赤色顔料の付着状況
（○印：赤色顔料採取部）

第4節　出土木製品の樹種同定

植田　弥生（パレオ・ラボ）

1．はじめに

ここでは、中世～近世と推定される遺構から出土した杭状木材2点の樹種同定結果を報告する。なお、内1点は日本産の材では無かったため、森林総合研究所の緒方健博士と能城修一博士に鑑定して頂いた。ここに記して感謝申し上げます。なお、樹種記載などに不具合があれば、その文責は植田にあることを明記しておきます。

2．試料と方法

材の3方向を見定めて剃刀を用いて薄い切片を剝ぎ取り、スライドガラスに並べ、ガムクロラールで封入し、永久プレパラート（材組織標本）を作製した。そして光学顕微鏡を用いてこの材組織を40～400倍に拡大して観察を行った。材組織標本はパレオ・ラボに保管されている。

3．結果

同定結果の一覧を、第28表に示した。

試料1の杭？は、かなり腐朽が進行し材の中心部が残った状態の材で、マツ属維管束亜属であった。

試料2は、一辺が約5cmの角材で、一端部は2側面が削られ杭状になっておりその先端部は尖らず平坦に切られている。杭状の角材は斜め取りで、材は非常に硬く、腐朽した様子は見られなかった。日本産の材組織とは異なる特徴が多く、森林総合研究所の緒方健博士と能城修一博士に鑑定して頂いた結果、東南アジアに分布するムクロジ科のタウンという南洋材であった。

第28表　深渡A地点遺跡出土木製品樹種

樹種試料	グリット	遺構・層位	樹　　種
1	24D	6区 SK70　2層内	マツ属維管束亜属
2	15H	4区P81　小穴内	タウン

以下に同定された樹種の材組織を記載する。

マツ属複維管束亜属　*Pinus* subgen. *Diploxylon*　マツ科　写真2　1a-1d（樹種試料1）

非常に材組織の保存が悪いが、樹脂道はかろうじて認められ、分野壁孔は窓状、放射仮道管がありその内壁には山形の肥厚が認められた。

タウン（Taun）　*Pometia pinnata* Forst.　ムクロジ科　写真2　2a-2c（樹種試料2）

厚壁の中型～大型の管孔が単独または2～3個が放射方向に複合してやや疎らに分布し、年輪界は不明瞭な散孔材である。軸方向柔組織は顕著で、周囲状や幅の細い帯状柔組織が多い。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔である。放射組織は異性、1～2細胞幅、褐色の着色物質に染まっており、結晶細胞が非常に多い。

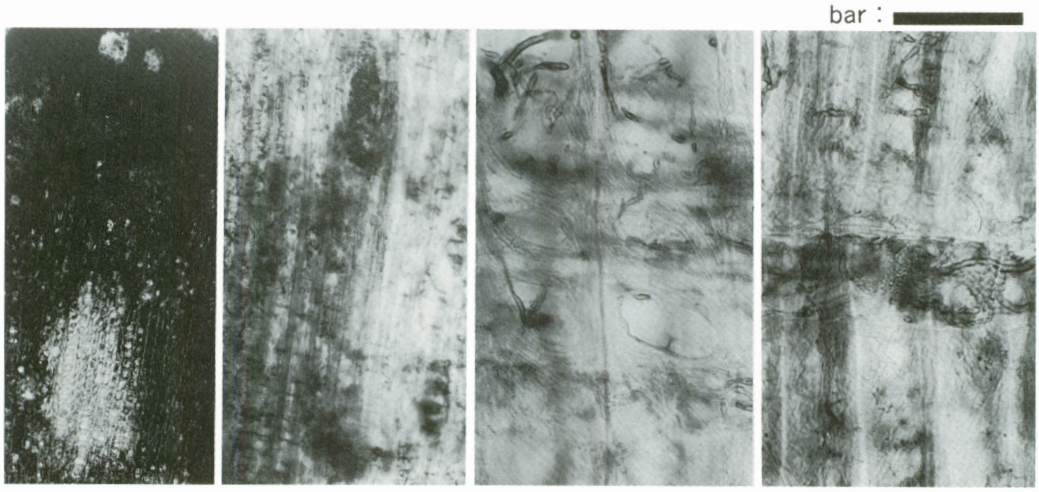
セイロン、タイ～ヴェトナム、台湾、東南アジア一帯～ニューギニア～トンガ諸島、サモア諸島の広範囲に分布する、重要な木材資源植物である。

4．まとめ

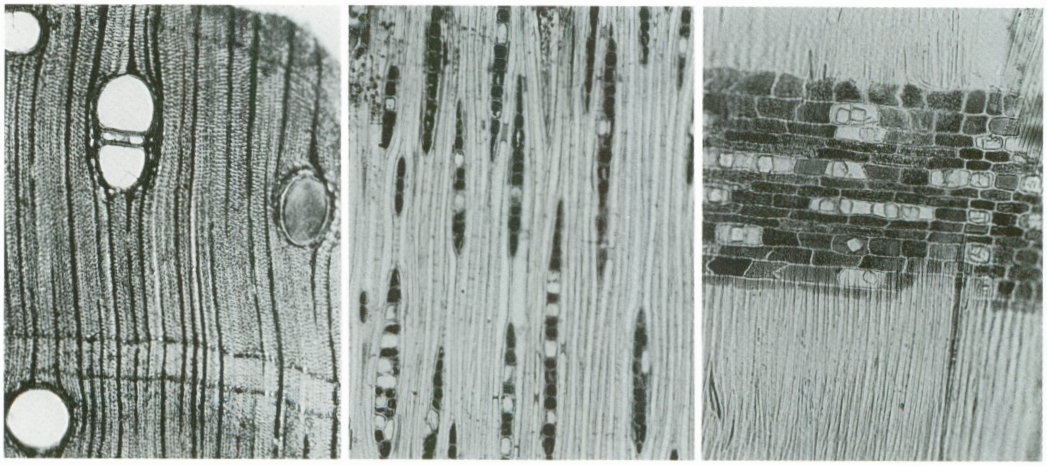
出土した杭？2点は、マツ属維管束亜属と外国産の樹種タウンであった。マツ属維管束亜属は、中世以降では杭材に非常によく利用されている樹種であり、遺跡周囲からも入手容易な樹種である。近世と考えられる遺構から出土したタウンは、どのような経緯で当遺跡にもたらされたかは不明であり、今後の興味深い問題を提起していると思われる。

参考文献

緒方　健、(1985)、南洋材の識別、71、社団法人日本木材加工技術協会。
臺灣木本植物圖誌　Vol. II (1962)、912、國立臺灣大學。



1a：横断面　1b：接線断面　1c：放射断面　1d：放射断面
1a-1d：マツ属複維管束亜属（樹種試料1）　1a, bar：0.5mm　1b, bar：0.2mm　1c-1d, bar：0.05mm



2a：横断面　2b：接線断面　2c：放射断面
2a-2d：タウン（樹種試料2）　1a, bar：0.5mm　1b-1c, bar：0.2mm

第41図　同定された樹種の材組織

第6章　まとめ・考察

1　出土遺物について

深渡A地点遺跡では、土器・陶磁器2,611点（接合前の破片数）、土製品5点、石器・石製品165点、金属製品32点、銭貨7点、木製品14点が出土した。

土器・陶磁器類は中近世・近代の土器・陶磁器が大半であるが、少量ながら、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器が出土しており、縄文時代から明治時代までの出土遺物がほぼ連綿と確認できる。破片数の比率（接合前）は、縄文土器（1.5%）、弥生土器（0.2%）、土師器（23.1%）、須恵器（7.5%）、灰釉陶器（0.1%）、山茶碗（39.6%）、陶器・磁器（28.0%）である。この中で土師器のうち約51%は、中世土師皿である[1)]。

陶器、磁器類の内訳は古瀬戸（19.0%）、常滑陶器（24.3%）、瀬戸美濃大窯（20.7%）、瀬戸美濃連房（20.2%）、磁器（9.8%）、輸入磁器（1.0%）、その他（5.0%）である。中世土師皿、山茶碗、古瀬戸、瀬戸美濃大窯など中世の時代の土器が68.6%を占め、瀬戸美濃連房、磁器など近世の時代の土器が11.1%を占める。このことから、中世に、当遺跡の周辺に居住域があったのではないかと考えられる[2)]。

次に、陶器、磁器類を用途別に中世と近世に分けて分類すると、中世では貯蔵具が38.1%と一番多く、次いで供膳具が37.4%である。貯蔵具の中には常滑陶器の甕が多く占められている。調理具は17.3%で擂鉢などが多くある。この3つで全体の92.8%を占めることから、ここからも居住域があったのではないかと考えられる。近世では供膳具が51.2%と一番多く、次いで貯蔵具が15.3%である。その他として茶道具（2.8%）、灯火具（1.0%）、火具（1.0%）など生活に関連した道具類が見られる他、神仏具（4.2%）が含まれているのも特徴的である。これは当遺跡のすぐ西側に現在でも墓地があり、遺跡内に近世墓も確認できることとの関連によるものであろう。

石器・石製品は165点出土した。打製石斧が62点（37.6%）と一番多く、ついで剥片（19.4%）、RF（11.5%）である。この他に少量であるが、磨石、石皿、スクレイパー、石核、UFなどがあり、縄文時代の遺物と考えられる。また、弥生時代の収穫具である有肩扇状石器も1点出土している[3)]。この他に、中世以降のものと考えられる砥石（10.3%）や石臼（4.8%）も出土している。

石材は泥岩、砂岩、頁岩、チャート、下呂石、濃飛流紋岩、安山岩、花崗岩、粘板岩、ホルンフェルスである。ほとんどの石器素材が円礫を加工したものであり、飛騨川もしくは近辺の河川の河原、段丘堆積礫から素材を調達したことがわかる。器種別に見ると、打製石斧は泥岩、粘板岩が多く、頁岩、ホルンフェルス、安山岩なども使われている。剥片、RF、UFには、チャート（32.1%）や下呂石（37.5%）の他、泥岩、頁岩、粘板岩も使われている。下呂石の比率が高いのは飛騨川流域で上流から運ばれた川原石を利用したものと考える[4)]。石臼・砥石には砂岩、安山岩、花崗岩が使われている。

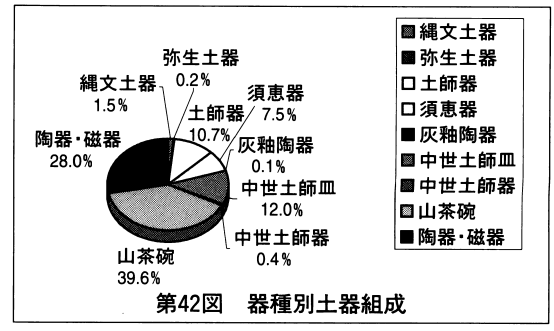
金属製品は32点出土した。このうち、15点（46.8%）は釘であった。この他に、握り鋏、鑿、刀子、鍬、鎌、環状金属製品などがある。

2　遺物の出土状況と遺構について

第44図は包含層及び遺構出土の接合前破片を器種別に分類し、地区別に点数を示したものである。排水溝掘削の際に出土したものなど出土位置が明確でないものは含まれていない。

第29表　器種別土器組成表

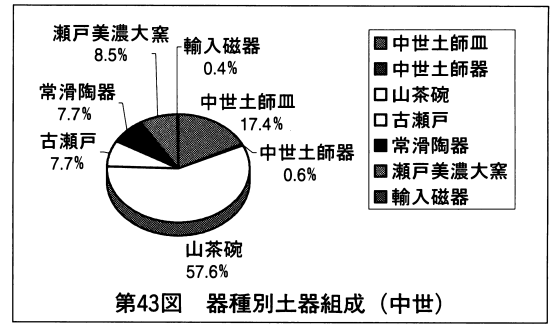
	口縁部残存率(X/12)	破片数	比　率
縄文土器	1.0	38	1.5%
弥生土器	0.7	5	0.2%
土師器	8.7	279	10.7%
須恵器	30.2	196	7.5%
灰釉陶器	0.0	3	0.1%
中世土師皿	78.8	313	12.0%
中世土師器	0.0	11	0.4%
山茶碗	242.9	1034	39.6%
陶器・磁器	186.0	732	28.0%
	548.3	2611	100.0%



第42図　器種別土器組成

第30表　器種別土器組成表（中世）

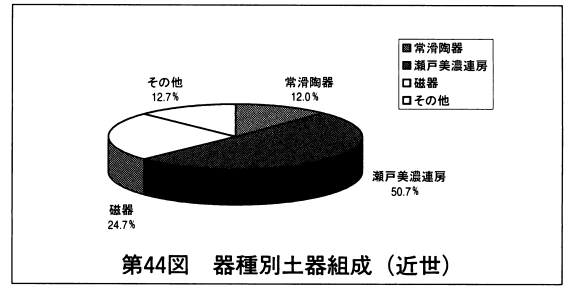
	口縁部残存率(X/12)	破片数	比　率
中世土師皿	78.8	313	17.4%
中世土師器	0.0	11	0.6%
山茶碗	242.9	1034	57.6%
古瀬戸	41.0	139	7.7%
常滑陶器	0.0	139	7.7%
瀬戸美濃大窯	31.1	152	8.5%
輸入磁器	4.0	7	0.4%
	397.8	1795	100.0%



第43図　器種別土器組成（中世）

第31表　器種別土器組成表（近世）

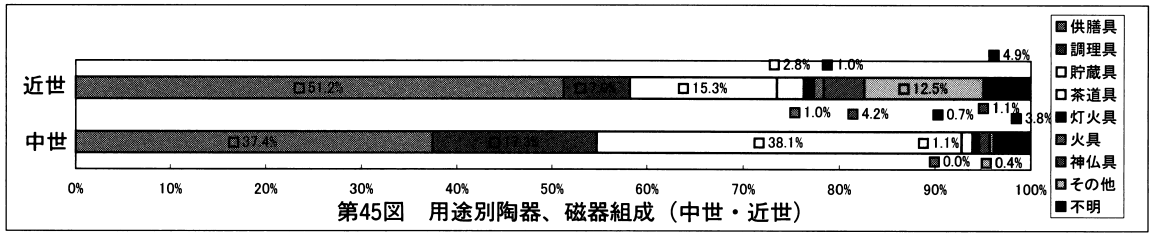
	口縁部残存率(X/12)	破片数	比　率
常滑陶器	0	35	12.0%
瀬戸美濃連房	50.9	148	50.7%
磁器	59	72	24.7%
その他	0	37	12.7%
	109.9	292	100.0%



第44図　器種別土器組成（近世）

第32表　用途別陶器、磁器組成表（中世・近世）

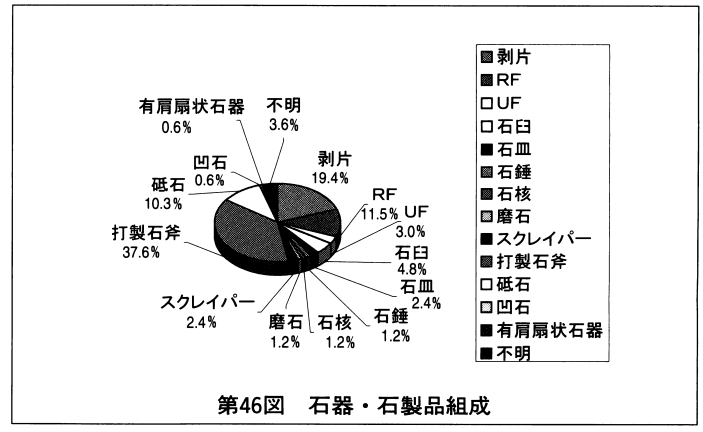
	中　世		近　世	
	破片数	比　率	破片数	比　率
供膳具	167	37.4%	147	51.2%
調理具	77	17.3%	20	7.0%
貯蔵具	170	38.1%	44	15.3%
茶道具	5	1.1%	8	2.8%
灯火具	3	0.7%	3	1.0%
火具	0	0.0%	3	1.0%
神仏具	5	1.1%	12	4.2%
その他	2	0.4%	36	12.5%
不明	17	3.8%	14	4.9%
	446	100.0%	287	100.0%



第45図　用途別陶器、磁器組成（中世・近世）

第33表　石器・石製品の組成表

	破片数	比　率
剥片	32	19.4%
RF	19	11.5%
UF	5	3.0%
石臼	8	4.8%
石皿	4	2.4%
石錘	2	1.2%
石核	2	1.2%
磨石	2	1.2%
スクレイパー	4	2.4%
打製石斧	62	37.6%
砥石	17	10.3%
凹石	1	0.6%
有肩扇状石器	1	0.6%
不明	6	3.6%
	165	100.0%



第46図　石器・石製品組成

縄文土器は22E～22Fグリッドと15H～17Gグリッドと７L～９Kグリッドにかけて分布しており、ほぼ同じ場所に打製石斧や剥片、RF、UFも分布している。今回の調査では明確な縄文時代の遺構は確認できなかったものの、この分布から、何らかの遺構が存在した可能性がある。７L～９Kグリッドは２区のピットや土坑が集中している場所で、SK19、SK20の土坑から縄文土器が出土している。15H～17Gグリッドは４区の竪穴状遺構（ST３）の付近である。剥片石器は17Gグリッド付近のSD12の溝内から多く出土している。22E～22Fグリッドは５区の竪穴状遺構（ST４）の周辺であり、このST４は、調査区内で縄文土器（28、29、30）が一番多く出土している場所である。

遺跡の周辺は現在でも自然薯がたくさん取れる場所として知られており[5]、水場からは遠いため住居としての生活区域を考えるのには無理があるが、打製石斧の出土割合が多いことから考えて、根菜類の採集地であった可能性が考えられる。

須恵器は全体的に分布しているが、特に多く見られるのが、７L～12Jグリッド付近と16H～20Fグリッドにかけてである。７L～12Jグリッドは２区から３区にかけてであり、特に暗渠（SD２）内の礫の間から多く出土している。16H～20Fグリッドは４区から５区にかけてであり、溝跡（SD10、SD12、SD15）内からの出土が見られる他、包含層からの出土も多い。

土師器は須恵器と分布傾向が似ており、特に分布が集中している場所として７L～９Kグリッド、15H～17Gグリッド、20F、25Eグリッドにかけてである。７L～９Kグリッドは２区の暗渠（SD２）内の礫の間から特に多く出土している。溝跡（SD１）や包含層からの出土も多く見られる。15H～20Fグリッドは４区の溝跡（SD10、SD11、SD12、SD15）のほか、竪穴状遺構（ST３）や土坑や小穴などから出土している。また、包含層からの出土数が特に多い。20F～25Eグリッドは５区から６区にかけての、特に溝跡（SD12）からの出土がほとんどである。包含層からの出土も多い。

山茶碗はほぼ全体に分布しており、特に分布が集中している範囲は７L～９Kグリッド、14H～15Gグリッド、17H～21Fグリッド、22E～27Dグリッド、27D～33Bグリッド、35A～36Bにかけてである。土師器の分布範囲と共通するところが多いが、特に溝跡（SD12）からの出土と、関連する包含層からの出土が非常に多くなっている。溝跡（SD32）並びにその包含層からの出土も多く、土師器・須恵器の分布と違う特徴として、調査区の南部である７区からの出土が多い。

中世土師皿の分布傾向は山茶碗と似ており、一部２区の７L～９Kグリッドの暗渠内に見られるが、ほとんどが、４区～７区の溝跡（SD12）内か、その包含層から出土している。特に６区25E～26Eグリッドの溝跡内からの出土数が特に多い。また、山茶碗と同じく調査区南部からの出土割合が多い。

陶器・磁器類もほぼ全体に分布しているが、特に分布が集中している範囲として、４N～５Mグリッド、６L～８Lグリッド、10K～11Kグリッド、17H～21Fグリッド、22E～30Cグリッドにかけてである。土師器や山茶碗と集中する場所で共通するところが多いことがわかる。中でも25E～26Dグリッドにかけて、溝跡（SD12）内に集石があり、その礫の隙間から古瀬戸期や大窯期の中世陶器が出土している。また、陶器・磁器類の分布の特徴として、１区から２区にかけての暗渠（SD２）内の礫石の隙間より多く出土している。中でも、近世常滑陶器の量が多いことが特徴的である。

以上のことから、溝跡（SD12）の成立及び廃絶について考える。溝跡（SD12）は、中世に作られた溝と考えられ、山茶碗や中世土師皿の割合が多いことから、居住域の存在が推測でき、居住域の区画のために作られたものと考える。そして、居住域が変わり、溝が廃棄される。その後、畑として開墾

していく中で、暗渠部分と同様に出てきた石などを捨てる場所として使われ、非常に柔らかな砂質のため、大雨などで一気に埋まったものと考えられる。

3　考察

今渡ダム建設以前の飛驒川は、流量が少ない川であり、木曽川との合流付近には広い河原があり、渇水期に歩いて渡ることもできた[6]。当遺跡の西側で南西方向から南に向きを変えるため、対岸の川辺町側では流量も多く、水深も深くなっているが、下米田町側では、流量が少なく、上流からの堆積物による「大砂場」と呼ばれる砂場ができている。江戸時代には、洪水の後、ここで木っ端を拾い集めたという記録がある[7]。また、養蚕の道具などをここで洗ったり、水深が浅いので、下流から登ってきた船にこの大砂場で綱を付け、北側の「米出し場」まで船頭らが引いて登ったと言われる[8]。

当遺跡の北側にこの砂場へ降りる石段があり、その道は、当遺跡の南にある小山観音から続く古道と交差し、中屋敷の集落へ続いていく。この道は、廣末と中屋敷の字境の道でもあり、戦後に舗装拡張工事をした際に須恵器などが出土した。このことから、交通、産業、生活面で飛驒川を利用する道として使われていたことがわかる。

当遺跡は「廣末」という小字名がある。廣末は末廣に通じ、縁起の良い地名として多くの場所で使われており、中世の名主クラスの館があった可能性がある。今回検出した溝跡（SD12）は南北両端で90度東に向きを変え、調査区外に続いている。この溝跡を屋敷の区画溝として考えた場合、南北89m、東西を前述の古道までとすると約75mの方形区画になると推定される。

当遺跡の西側に中屋敷集落の墓がある。中屋敷集落から見ると南西方向にあたり、裏鬼門の方角である。また、当遺跡を境にして西側は一段段丘が下がり、畑として開墾される前は、林であった。以上のことから、溝跡（SD12）は、中世では、居住域と墓や林を区画するための溝として作られ、後に畑として開墾された際には、その区画のために使われたものではないかと考える。針田遺跡にも中世の区画溝と考えられる溝跡があり、この周辺にはかなり大きな居住域があったものと考えられる[9]。

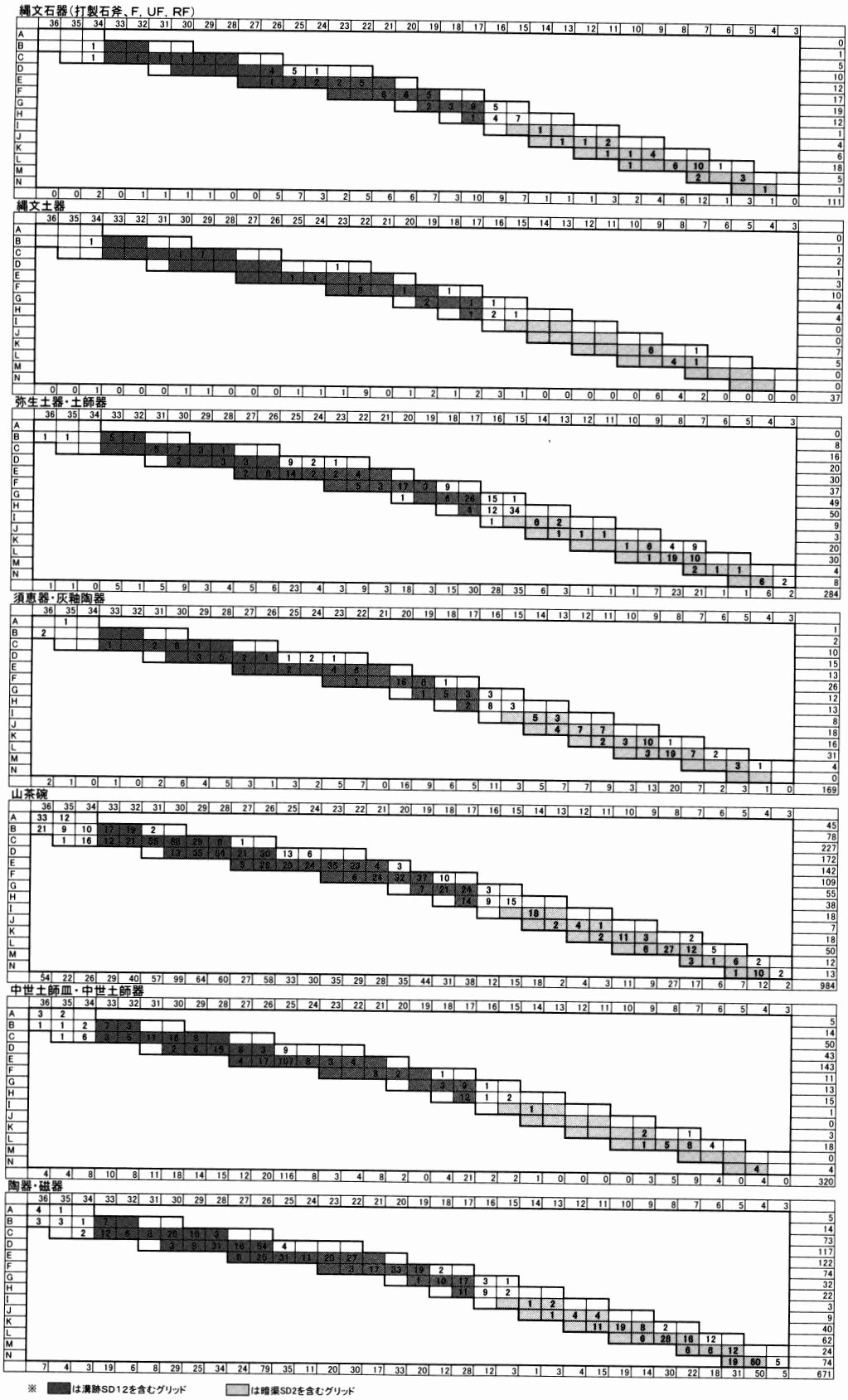
暗渠（SD２）は、今回の調査で溝跡（SD12やSD15）に合流するものかどうかはわからなかったが、かつてここも、林と畑を区画するための溝（SD１）があった。その溝が埋まった後に穴を掘り、畑の開墾や拡張の際に出てきた石が捨てられた。そのような場所が、連続して掘られたため、溝状に繋がり、後には暗渠として利用されたのではないかと考えられる[10]。

深渡Ａ地点遺跡は、縄文～弥生時代の遺跡として遺跡地図には登録されているが、今回の調査地点は、遺跡の中心部分からは北寄りの離れた場所にあたり、むしろ廣末・中屋敷の集落に関連する、中世～近世の遺構や遺物が確認できたのではないかと考えられる。

注１）　中世土師皿の出土割合は出土土器全体の12.0%、中世土器の中で17.4%を占める。『下巾上遺跡』（小野木1995）で、中世土師皿の比率から階層性を想定することが可能であると述べられており、当遺跡の中世土師皿の出土割合は比較的高い方である。このことからも中世集落の存在が考えられる。

２）計量方法は、口縁部計測法、破片数計測法を使用した。宇野隆夫　1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗資料館研究報告』第40集を参照した。

３）『野笹遺跡Ⅰ』（千藤2000）で２点出土しているが使用痕がなく、用途は不明とされているが、小林正春　1991「石



第47図　器種別土器・石器出土状況図（破片数は出土地点不明を除く）

器の終わる時」『季刊考古学第35号』雄山閣出版では収穫具との位置づけがなされている。

4）『野笹遺跡Ⅰ』（千藤2000）では、石核の94.3%、剥片の86.0%が下呂石である。

5）美濃加茂市文化審議委員　間宮瑞夫氏の御教示による。

6）松田典夫他　1979『今遺跡』美濃加茂市教育委員会。

7）齋藤基生他　1995『市民のための美濃加茂の歴史』美濃加茂市。

8）美濃加茂市文化審議委員　間宮瑞夫氏の御教示による。

9）堀正人他　2001『針田遺跡・東坪之内遺跡・田中浦遺跡』㈶岐阜県文化財保護センター。

10）美濃加茂市内の遺跡で石組遺構が確認されたのは、為岡遺跡、今遺跡、木ノ下遺跡、佐口遺跡などがあるが、石組みの性格が明確になっているものは少ない。当遺跡のSD２の石組みは為岡遺跡の暗渠に近いものと考えられる。

参考文献

青木　修　1995『暁窯跡』㈶瀬戸市埋蔵文化財センター。

赤塚次郎他　1990『廻間遺跡』㈶愛知県埋蔵文化財センター。
1992『山中遺跡』㈶愛知県埋蔵文化財センター。
1994『松河戸遺跡』㈶愛知県埋蔵文化財センター。

浅野哲男他　2002『徳山陣屋跡』㈶岐阜県文化財保護センター。

井川祥子　1997「15世紀後半から16世紀前葉の土師器皿―中濃地域を中心として―」『美濃の考古学』第2号　美濃の考古学刊行会。

石黒立人他　1994『朝日遺跡Ⅴ』㈶愛知県埋蔵文化財センター。

井上喜久男　1992『尾張陶磁』ニュー・サイエンス社。

宇野隆夫　1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗資料館研究報告』第40集。

大橋弘志他　1998『西屋敷遺跡』㈶岐阜県文化財保護センター。

小野正敏　1982「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会。
2002『図解・日本の中世遺跡』東京大学出版会。

小野木学他　1997『堀田城之内』㈶岐阜県文化財保護センター。
1995『下巾上遺跡』㈶岐阜県文化財保護センター。
1997「美濃地方における中世前期の土師器皿の様相」『美濃の考古学』第2号美濃の考古学刊行会。

河合君近他　2002『国指定史跡　小長曽陶器窯跡』㈶瀬戸市埋蔵文化財センター。

北村和宏　1996「尾張の羽釜」『第4回考古学フォーラム　鍋と窯　そのデザイン』東海考古学フォーラム実行委員会。

岐阜県教育委員会　1990『改訂版岐阜県遺跡地図』。

小谷和彦他　1997『山手宮前遺跡』㈶岐阜県文化財保護センター。

小淵忠司　2001『佐口遺跡』㈶岐阜県文化財保護センター。

齋藤基生他　1993『土の中からのメッセージ　美濃加茂ふるさとファイルNo.5』美濃加茂市教育委員会。
1995『市民のための美濃加茂の歴史』美濃加茂市。
1999『木ノ下遺跡発掘調査報告書』美濃加茂市教育委員会。

佐野康雄他　1993『尾崎遺跡』㈶岐阜県文化財保護センター。

鹿野勘次他　1994『大地の生い立ち美濃加茂』美濃加茂市教育委員会。
1980『美濃加茂市史　通史編、資料編』美濃加茂市。

鈴木正貴他　1995『清洲城下町遺跡Ⅴ』㈶愛知県埋蔵文化財センター。

千藤克彦他　2000『野笹遺跡Ⅰ』㈶岐阜県文化財保護センター。

田口昭二　1983『考古学ライブラリー17　美濃焼』ニュー・サイエンス社。
2001『美濃焼とは　古代から江戸時代まで』。

高橋順之　1994『伊吹町内遺跡発掘調査Ⅱ』伊吹町教育委員会。

永井久美雄　1994『中世の出土銭―出土銭の調査と分類―』兵庫埋蔵銭調査会。

中野晴久　1997「瓷器系中世陶器の生産」『㈶瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要第5輯』㈶瀬戸市埋蔵文化財センター。

長屋幸二　1995『西乙原遺跡・勝更白山神社周辺遺跡』㈶岐阜県文化財保護センター。

楢崎彰一他　1990『尾呂』瀬戸市教育委員会。

服部郁　1994「近世瀬戸窯における磁器生産の開始と展開」『㈶瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要第2輯』㈶瀬戸市埋蔵文化財センター。

林順一　2002『第14回土岐市織部の日特別展　美濃桃山陶』土岐市美濃陶磁歴史館。

平林彰他　1993『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11―明科町内―』㈶長野県埋蔵文化財センター。

藤沢良祐他　2002『㈶瀬戸市埋蔵文化財センター企画展　江戸時代の瀬戸窯』　㈶瀬戸市埋蔵文化財センター。

1998『瀬戸市史　陶磁史篇一～六』瀬戸市。

1997「中世瀬戸窯の動態」『㈶瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要第5輯』㈶瀬戸市埋蔵文化財センター。

1986「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ　瀬戸市歴史民俗資料館。

1987「本業焼の研究(1)～(3)」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅵ～Ⅷ　瀬戸市歴史民俗資料館。

藤田英博他　2000『船山北古墳群・船山北古窯跡群・船山北遺跡』㈶岐阜県文化財保護センター。

北陸中世考古学研究会　1998『北陸中世の金属器―生産と流通―』第11回北陸中世考古学研究会。

堀田一浩　2002『野笹遺跡II・赤池4号古墳』㈶岐阜県文化財保護センター。

堀正人他　2001『針田遺跡・東坪之内遺跡・田中浦遺跡』㈶岐阜県文化財保護センター。

松田典夫他　1979『今遺跡』美濃加茂市教育委員会。

三輪茂雄　1978『石臼探訪』産業技術センター。

三輪晃三他　2000『南整理遺跡』㈶岐阜県文化財保護センター。

村瀬泰啓　1999『諸洞遺跡・大坪遺跡』㈶岐阜県文化財保護センター。

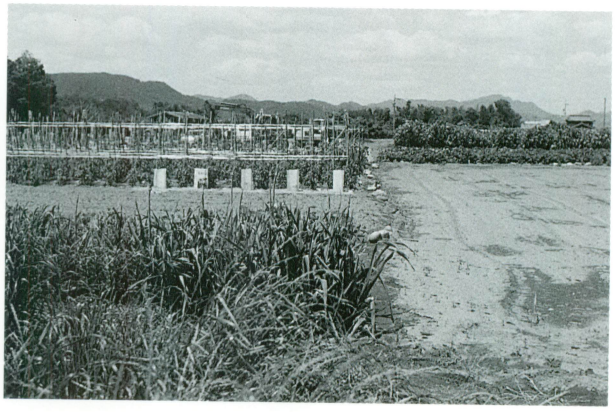
2001『冨田清友遺跡』㈶岐阜県文化財保護センター。

森田勉　1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会。

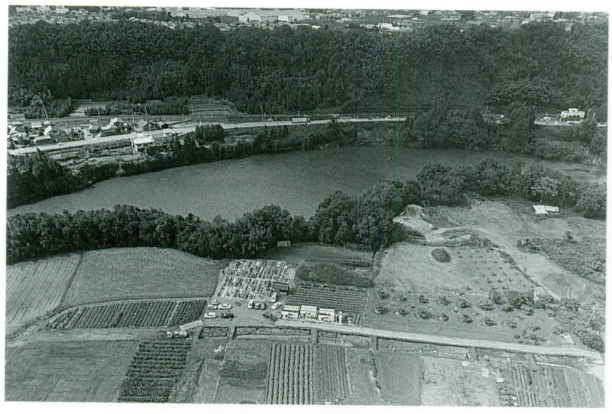
渡辺博人他　1995『為岡遺跡発掘調査報告書』美濃加茂市教育委員会。

写真図版

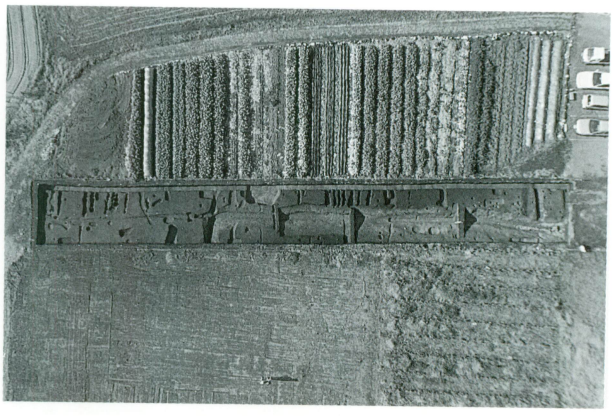
調査前風景（北から）



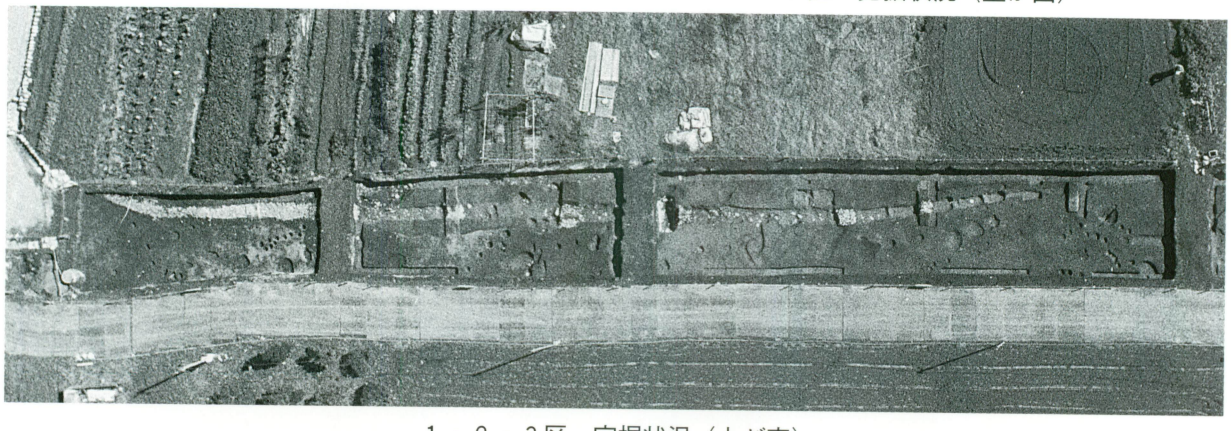
調査前風景（南から）



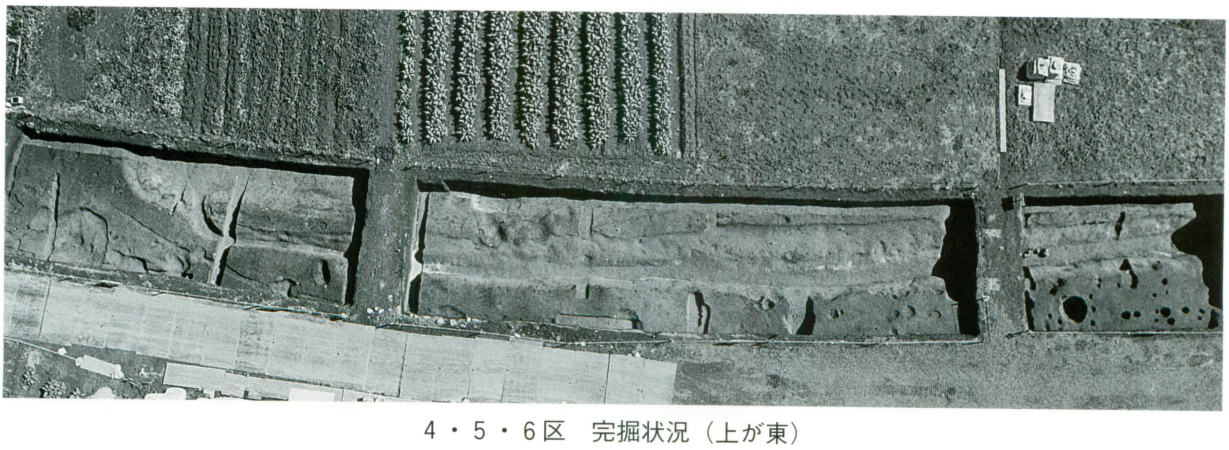
調査区遠景（東から）



7区　完掘状況（上が西）

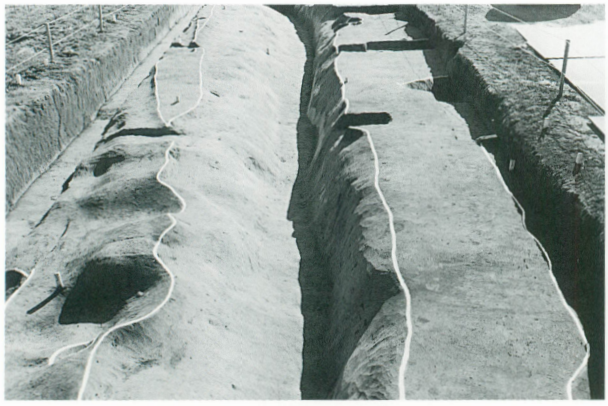


1・2・3区　完掘状況（上が東）



4・5・6区　完掘状況（上が東）

図版 2



5 区　SD12 完掘状況（北から）

6 区　SD12 完掘状況（南から）

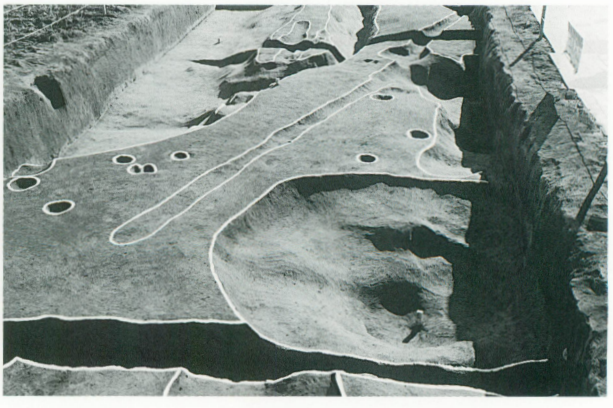
7 区　SD12 内集石検出状況（南東から）

7 区　SD12 完掘状況（上が西）

4 区　SD15 完掘状況（南から）

5 区　SD15 完掘状況（北から）

2 区　SD 3 完掘状況（南から）

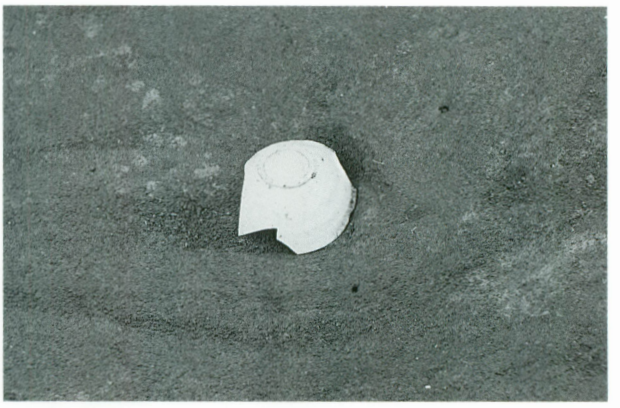


4 区　SD11 完掘状況（北から）

6 区　SK70 完掘状況（南から）

7 区　SK74 内遺物出土状況

7 区　SK77 完掘状況（北から）

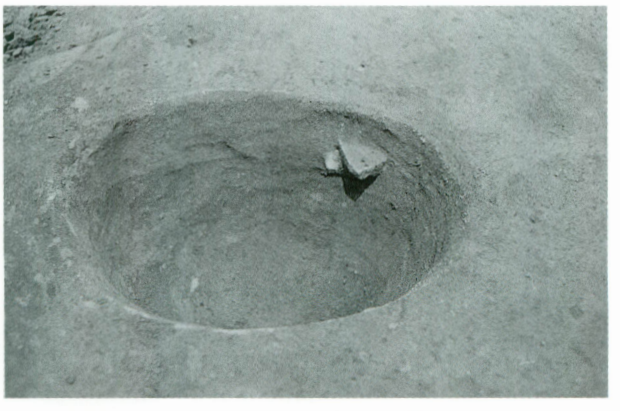


7 区　SK81 内遺物出土状況

3 区　ST 2 完掘状況（西から）

4 区　ST 3 完掘状況（南から）

5 区　ST 4 完掘状況（北から）



5 区　P111 完掘状況

図版 4

1区　暗渠検出状況（北から）

2区　暗渠完掘状況（北から）

3区　暗渠検出状況（北から）

3区　暗渠内集石土坑検出状況（南から）

暗渠内遺物出土状況

7区　石列検出状況（南東から）

5区　柱列状遺構完掘状況（南から）

7区　SX 1完掘状況（北から）

279

71

282

64

188

67

187

80

204

268

59

203

260

194

267

175

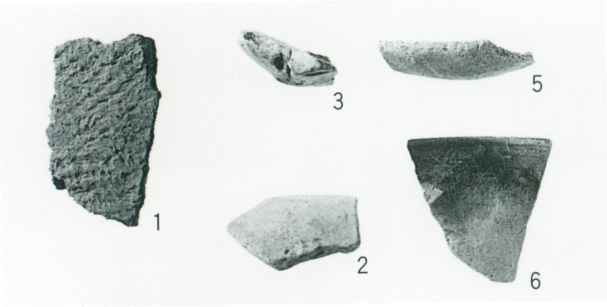
120

37

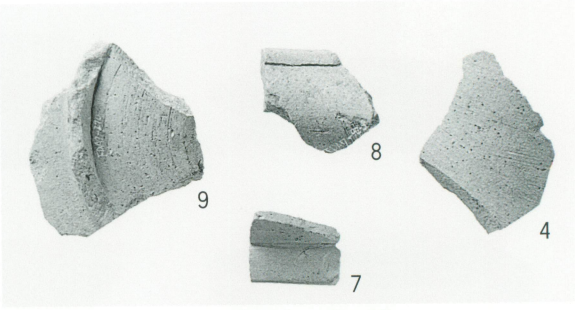
41

出　土　遺　物

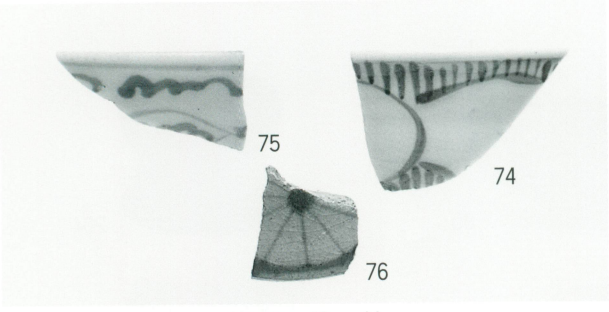
図版 6



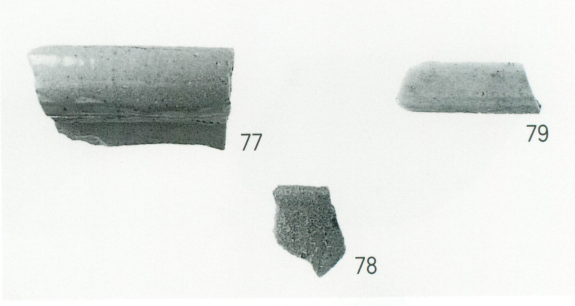
SD12　縄文土器・土師器



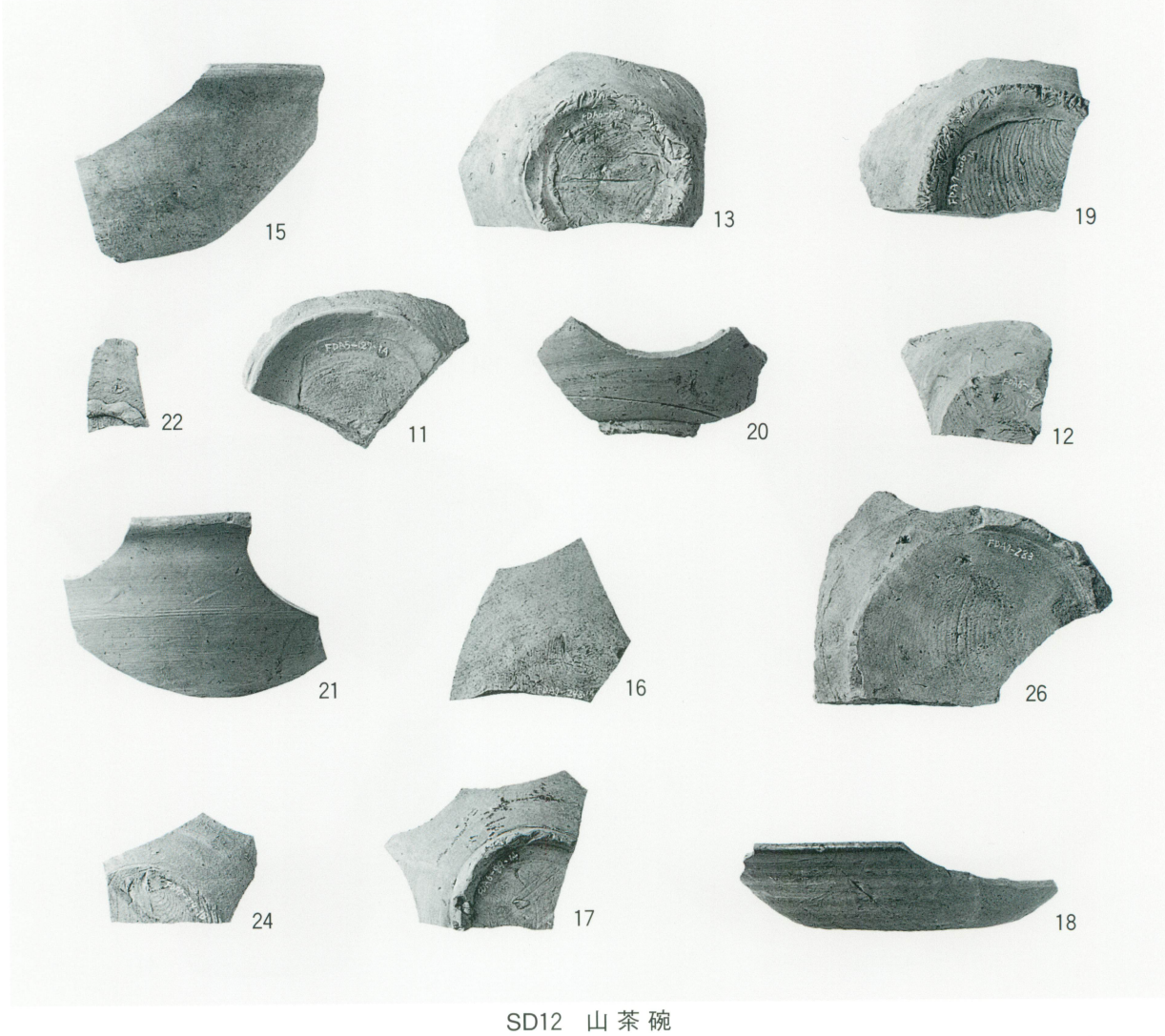
SD12　須　恵　器



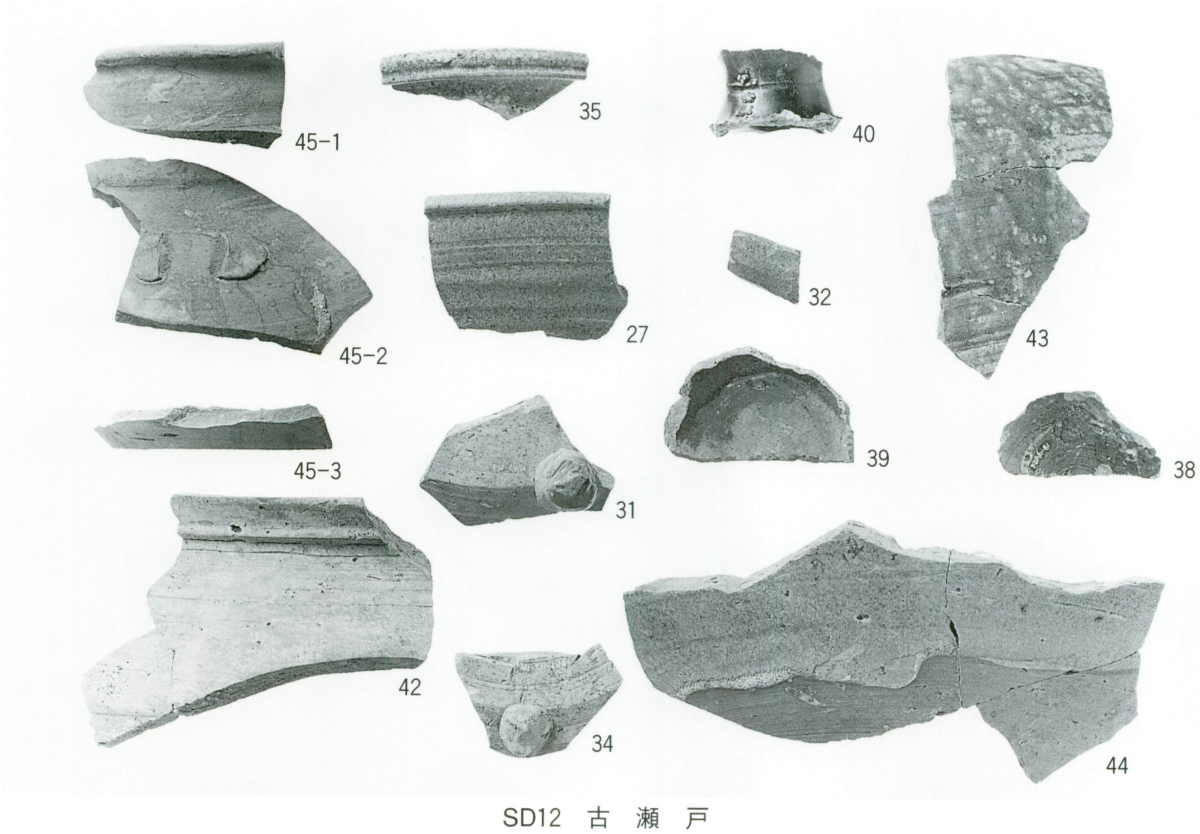
SD12　染　付



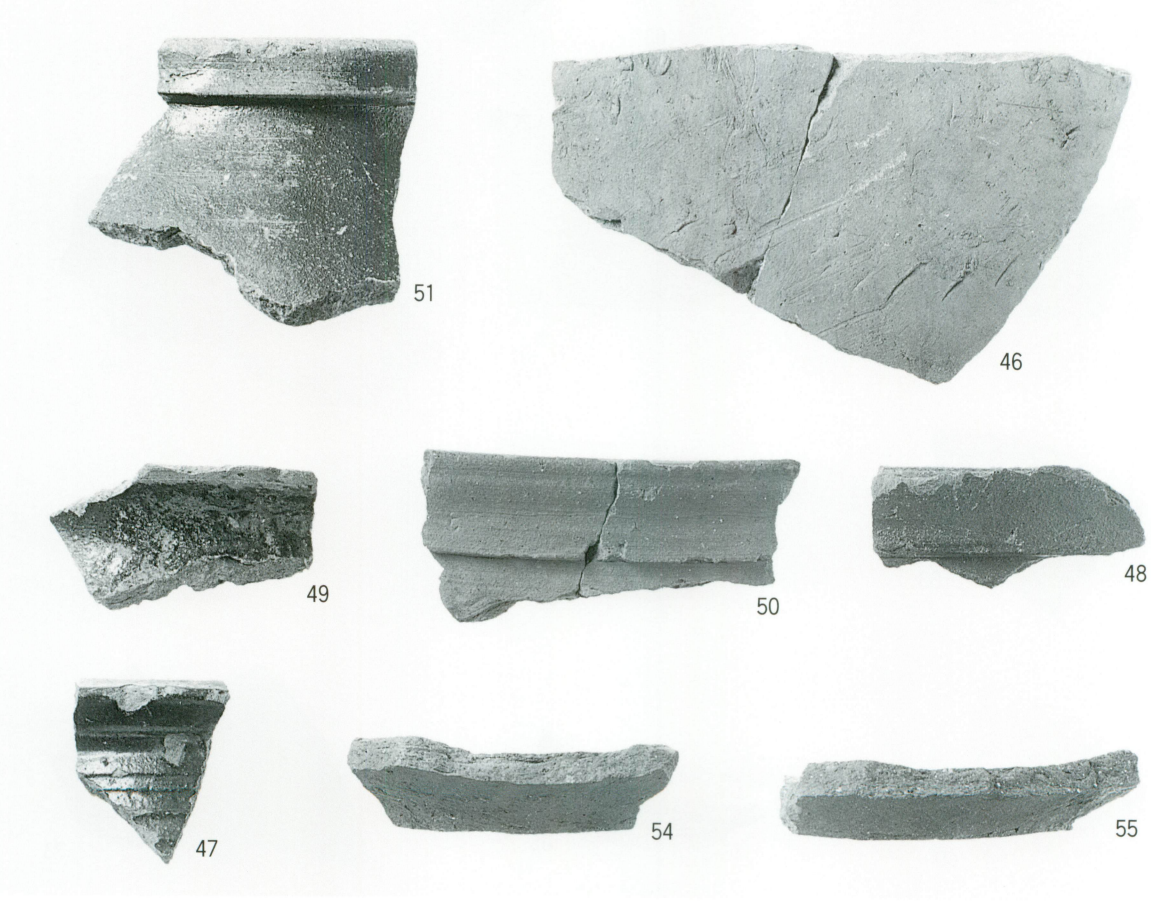
SD12　輸 入 磁 器



SD12　山 茶 碗



SD12　古　瀬　戸

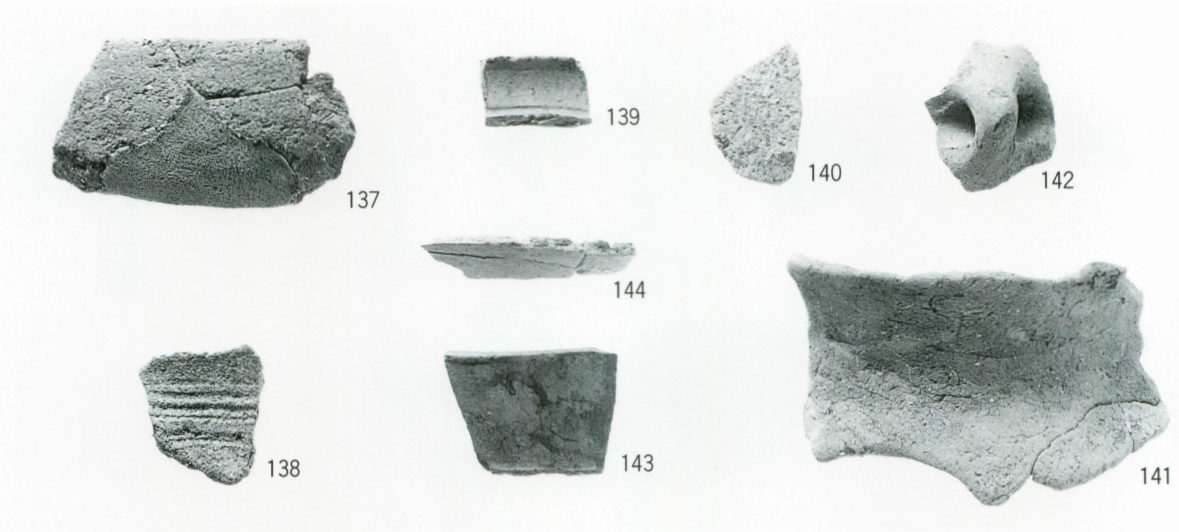


SD12　常 滑 陶 器

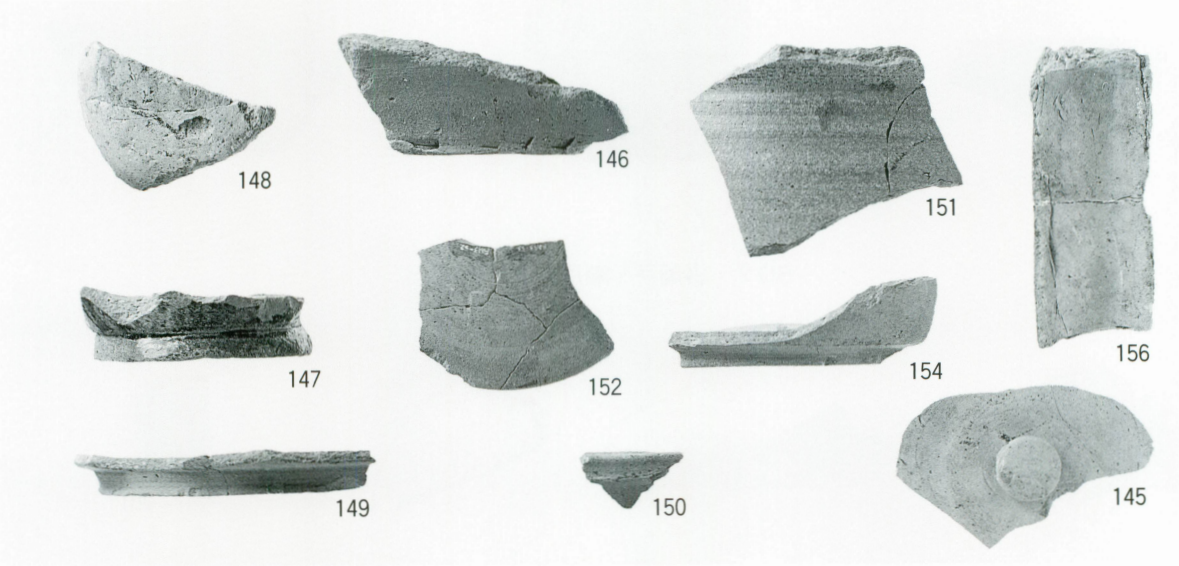
図版 8

SD12　瀬戸美濃（大窯）

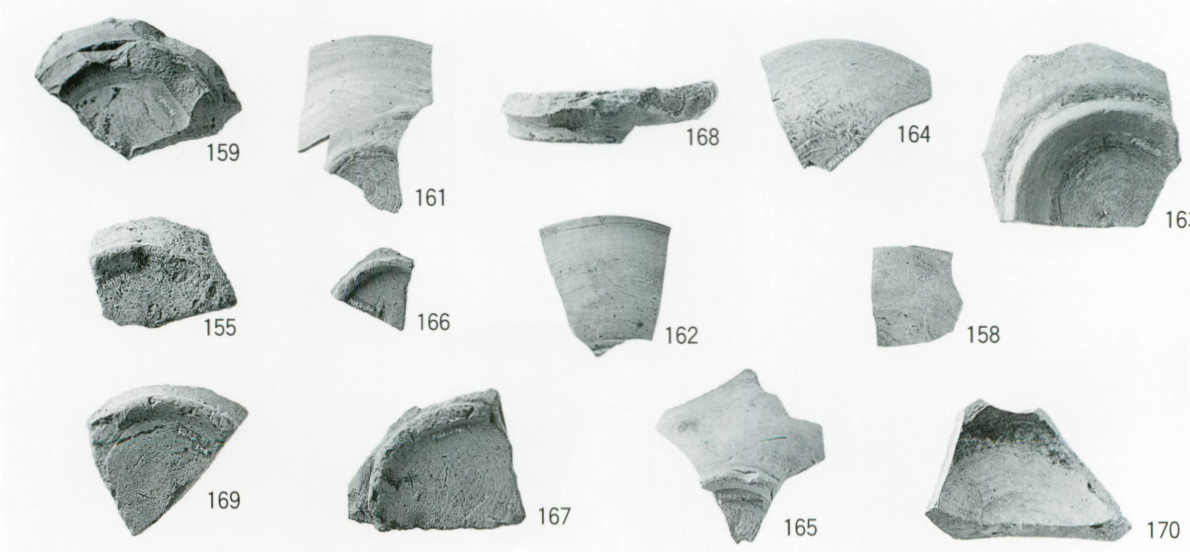
SD12　瀬戸美濃（連房）



SD 2　弥生土器・土師器



SD 2　須　恵　器



SD 2　山　茶　碗

図版 10

SD 2　古瀬戸・瀬戸美濃（大窯）

SD 2　瀬戸美濃（連房）

10

135

182

153

251

89

157

117

174

227

228

132

226

126

131

114

縄文土器

234

236

230

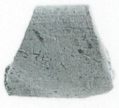
232

235

229

110

233


116

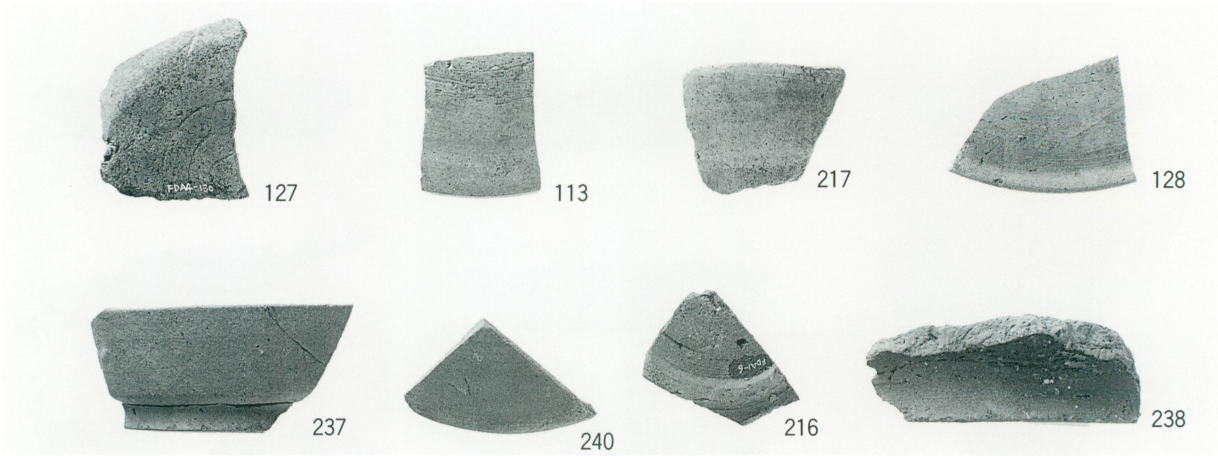
99

98

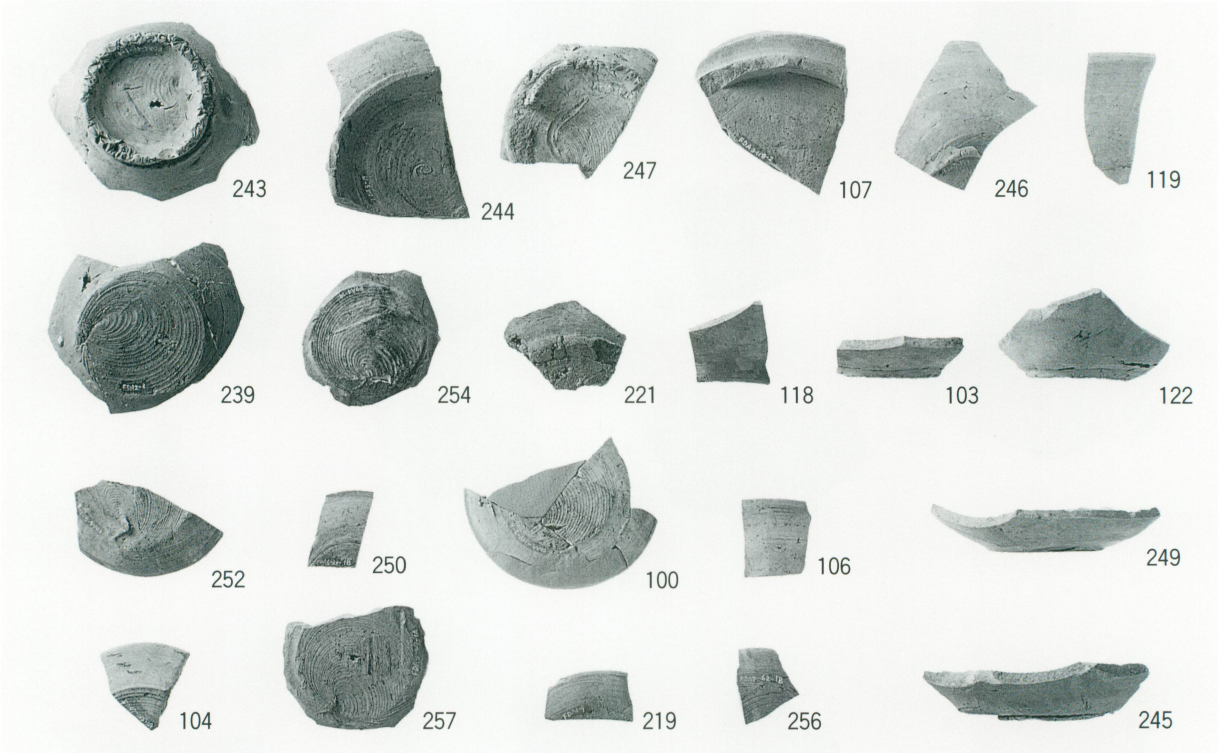
231

弥生土器・土師器・土製品

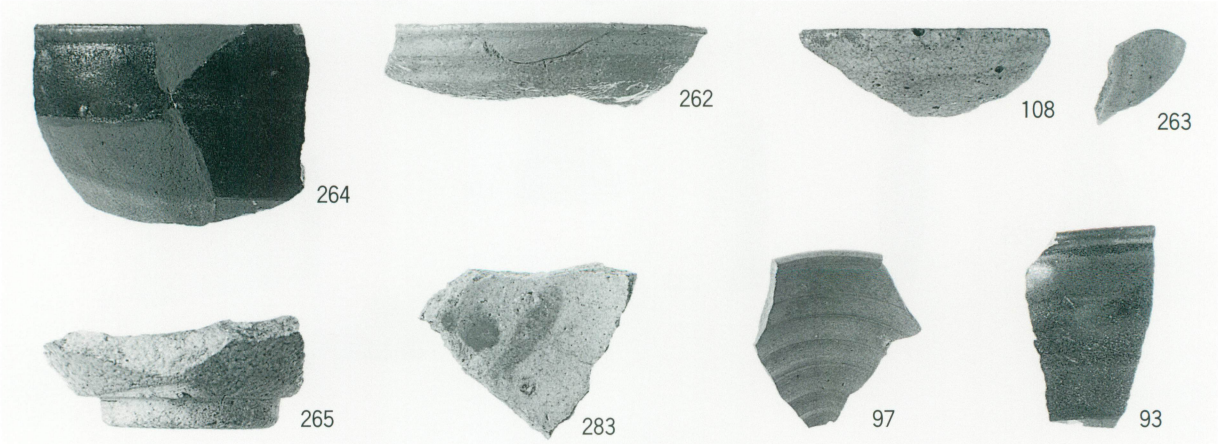
図版 12



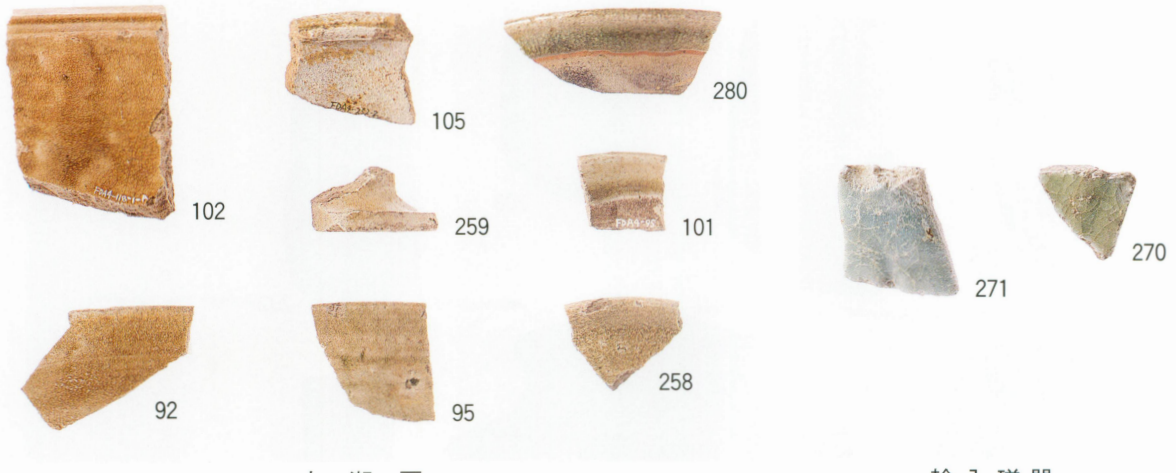
須　恵　器



山　茶　碗



瀬戸美濃（大窯）

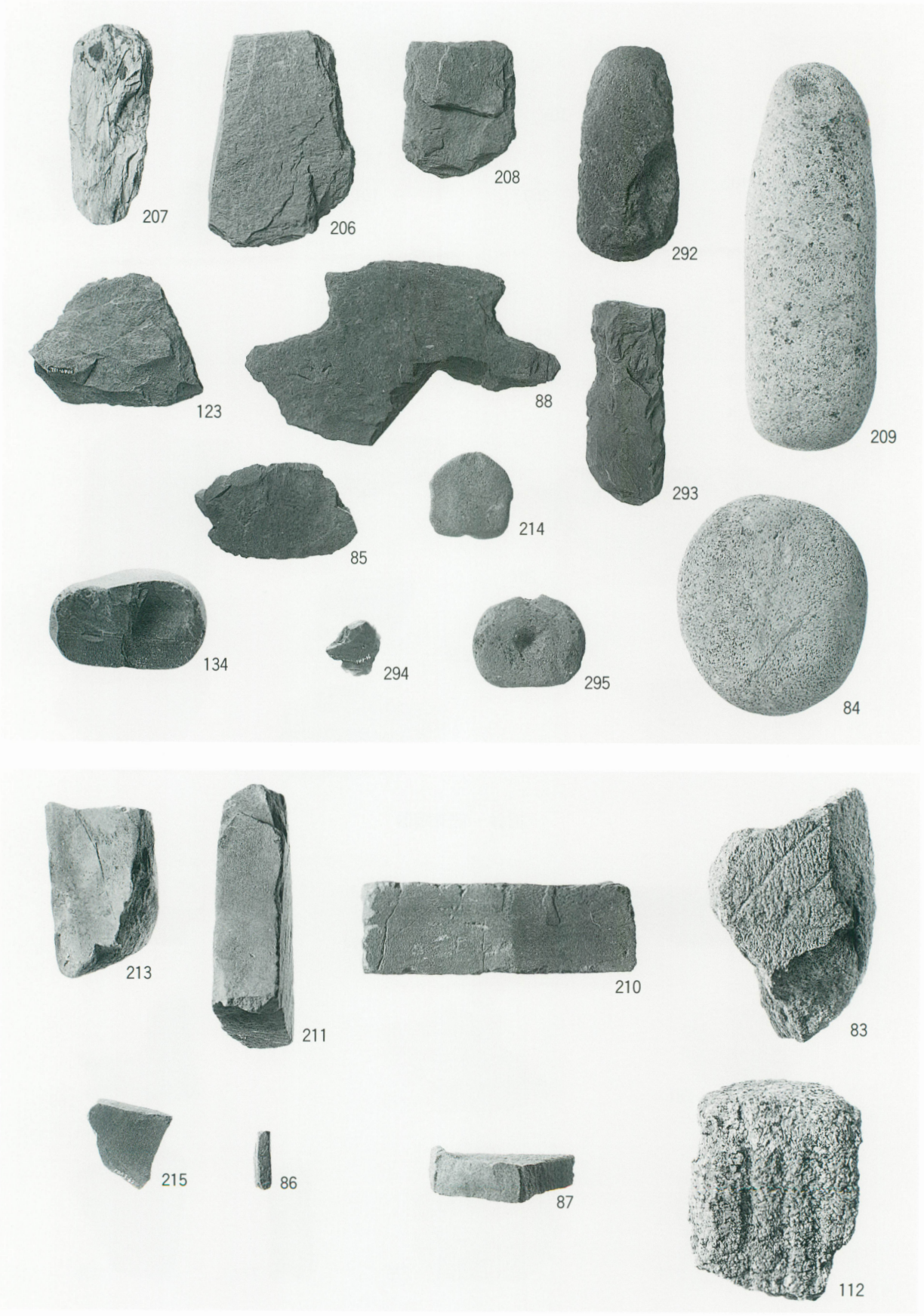


古 瀬 戸　　輸 入 磁 器

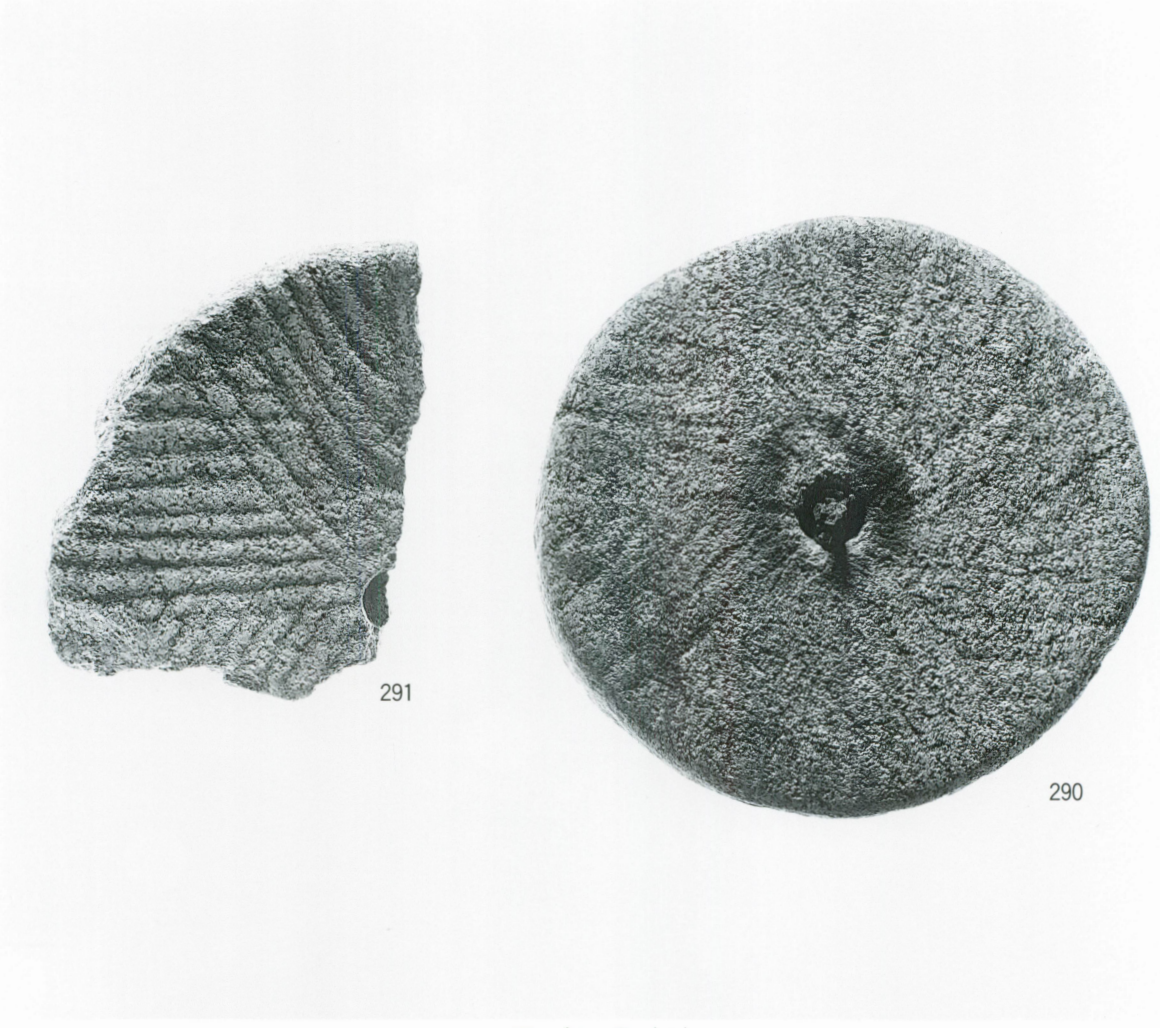
擂鉢・常滑陶器

瀬戸美濃（連房）

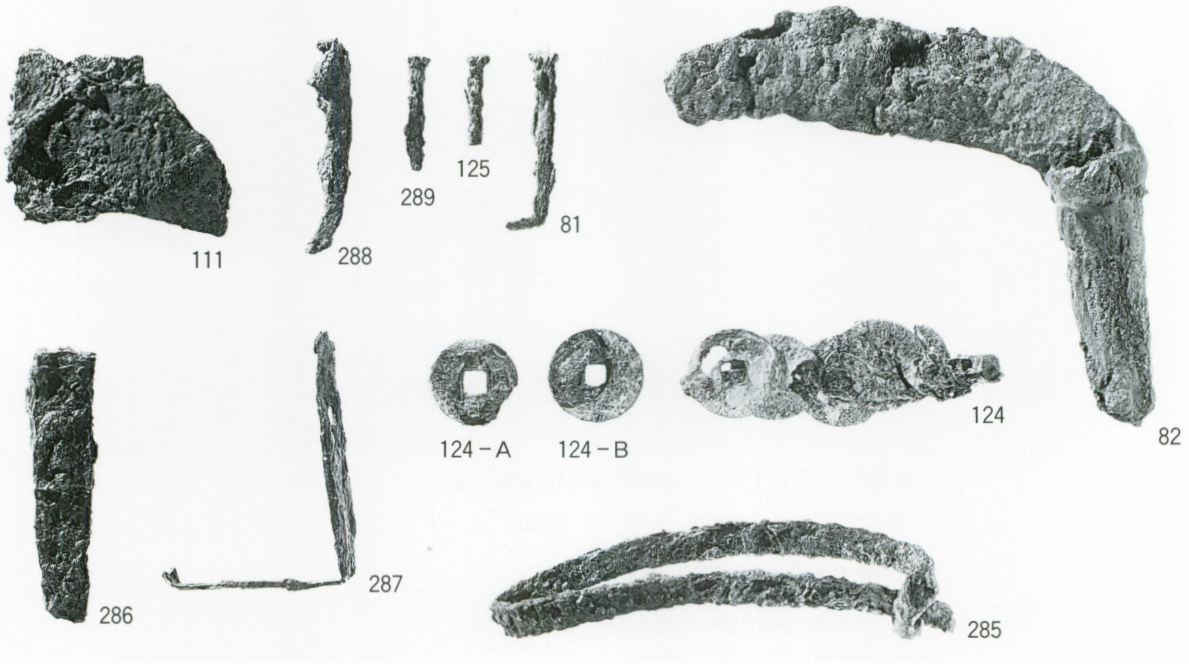
図版 14


207
206
208
292
209
123
88
293
214
85
134
294
295
84
213
211
210
83
215
86
87
112

石器・石製品（1）

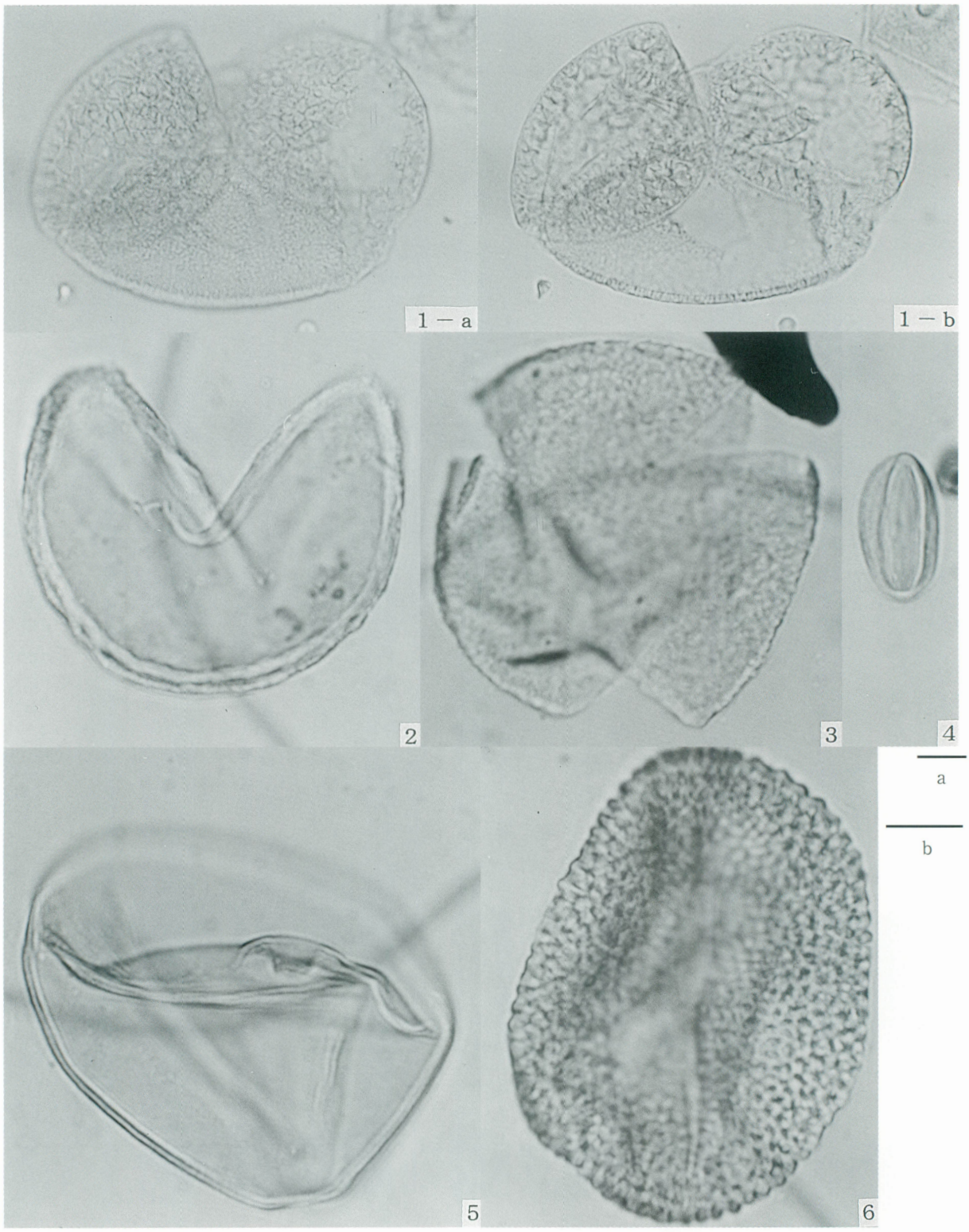


石　製　品（2）



金　属　製　品

図版 16



産出した花粉化石（scale bar：10 μm　a：1　b：2～6）

1. マツ属複維管束亜属、PAL. MN　1870
2. スギ属、PAL. MN　1871
3. コナラ属コナラ亜属、PAL. MN　1874
4. クリ属、PAL. MN　1872
5. イネ科、PAL. MN　1873
6. ソバ属、PAL. MN　1875

報告書抄録

ふりがな	ふかとえいちてんいせき
書名	**深渡A地点遺跡**
シリーズ名	岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書
シリーズ番号	第88集
編著者名	伊藤利巳
編集機関	財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター
所在地	〒 502-0003　岐阜市三田洞東1-26-1　TEL 058（237）8550
発行年月日	西暦2004年３月22日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ふかとえいちてん 深渡A地点 遺跡	ぎふけんみのかし 岐阜県美濃加 もしもよねだまち 茂市下米田町 にしわき 西脇	21211	04435	35° 27′ 40″	137° 03′ 27″	20020610 ～ 20021213	1,400m²	県営一般農道整備事業（牧野地区）に伴う

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
深渡A地点 遺跡	集落跡	縄文時代 中世～ 近代	溝跡　33 暗渠　1 土坑　87 柵列　5 竪穴状遺構　4	石器・石製品　165 縄文土器　38 土師器　279 須恵器　196 中世土師皿　313 山茶碗　1,034 中近世陶器　732 金属製品　32	中世の屋敷に伴う区画と考えられる片薬研掘りによる溝跡を検出した。

岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書　第88集

深渡A地点遺跡

2004年3月22日

編集・発行　財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター
岐阜市三田洞東1-26-1
印　　刷　西濃印刷株式会社